少年叢書
漢文學講
義第五編

增訂四書講義

全

特22-706
1200800151323

255
471

始

少年叢書 漢文學講義 第五篇

增訂 四書講義

東京 興文社編次并藏版

特22
~~546~~
706

增訂 四書講義例言

一、嘗に本社の印行せる四書講義は、久しく世間に行はれて、全國學者の參考に缺くべからざる者となりぬ。然れども、今に及びて之れを見るに、不完全なる所あるをもて、此の度之れを增訂せり。

一、舊本は、學庸の如きは、禮記の順序に從ひて、古の眞面目を存せりとあれど、全體の講義は、多く註を取れり。今本は、總べて古註を本として、其の餘の諸說を參酌せり。

一、舊本の講義は、簡明を主として、訓詁に區區とせずとあれど、往往疎漏に失したる所あり、又本文を曲解したる所あれば、是等の類は、悉く補正せり。

一、今回の講義は、新古を論せず、說の最も穩當なる者を取りたれど、異說の廣く行はれたる者は、一說として併存せり。

一、今回の講義は、本文の字句と密着して、其の義を發揮し、枝葉に涉る閑言冗語を除きたり。

一、同一の文字にして、意味の同じき者と、異なる者とあり。其の同じき者は、四書を通じて、一つに解せざるべからず。是れも今回意を用ゐたり。

一、舊本の文法中には、文法ならぬ者あり、さまで用なき文法あり。今其の不急の文字を刪り、其の足らざるを補へり。

一、引ける所の內外古今の衆說は、本文の意義を解する具に止まりて、其の出典を記憶するには及ばざることなれば、人名書名を省きたり。

一、校字は、務めて注意したれども、多くの中には誤植なしとは斷じ難ければ、他日發見することあらば、重ねて之れを訂正すべし。

編者識す

4集.1208

增訂四書講義目錄

總說……一——七
大學……一——二三
中庸……一——四一
論語
學而第一……一——八
爲政第二……八——一七
八佾第三……一七——二七
里仁第四……二七——三五
公冶長第五……三五——四五
雍也第六……四五——五六
述而第七……五六——六九
泰伯第八……六九——七七
子罕第九……七七——八八
鄉黨第十……八八——一〇一
先進第十一……一〇一——一一四
顏淵第十二……一一五——一二六
子路第十三……一二六——一三七
憲問第十四……一三七——一五四
衛靈公第十五……一五四——一六六
季氏第十六……一六六——一七五
陽貨第十七……一七五——一八七
微子第十八……一八七——一九四
子張第十九……一九四——二〇三
堯曰第二十……二〇三——二〇八
孟子
梁惠王章句上……一——二三
梁惠王章句下……二三——四九
公孫丑章句上……四九——七四
公孫丑章句下……七四——九五
滕文公章句上……九五——一一六
滕文公章句下……一一六——一三八
離婁章句上……一三八——一六〇
離婁章句下……一六〇——一八一
萬章章句上……一八一——二〇一
萬章章句下……二〇一——二一九
告子章句上……二一九——二四〇
告子章句下……二四〇——二六二
盡心章句上……二六二——二八七
盡心章句下……二八七——三〇九

增訂 四書講義總說

四書

大學、中庸、論語、孟子を四書といへるは、宋の時より始まれり。是等の諸書を經書といふ。經とは、萬世不易の常法といふことなり。何をか萬世不易の常法といふ。先王の道、卽ち是れなり。何をか先王の道といふ。堯、舜、禹、湯、文、武、周公の天下國家を平治せる道、卽ち是れなり。論語は、二帝三王の道を祖述せる者にして、其の餘の三書は、之れを敷衍せる者なり。

大學

大學は、孔子の孫の子思の作なりとも、孔子の弟子の曾子、及び其の門人の作なりともいへり。之れを曾子の作なりといへるは、孔子の學問は、曾子より子思に傳はり、子思より孟子に傳はりたる者にして、論語は、孔子の書なり、中庸は、子思の書なり、孟子は、孟軻の書なるが故に、此の篇をもて曾子の書なりと看做したるなり。然れども、大學の發端の中庸の末を承けたるより觀れば、子思又は子思の門下の手に成れる者と見るかた、宜しかるべし。

大學は、もと中庸と同じく禮記の中の一篇にして、後漢の鄭玄の註解あり、之れを古註といふ。此の篇は、天下國家を治むる道の次第を說ける者にして、之れを大學といへるは、篇の首めに大學之道とあるに由る。こは、論語の篇の名に學而、爲政などとある例と同じ。古人は質朴なるが故に、篇の名などを必ずしも殊々しくせず、只々其の見出しまでに、首出の文字を取れるなり。されば、後世之れを一書とするに至りても、猶ほ其の稱を用ゐたり。

さて、大學も、中庸も、禮記の中に在りし間は、格別人に知られざりしが、宋の司馬光、此の二篇を拔き出でて、廣義といへる註解を書きしより、單行の端を開かれき。同時に程顥、程頤の兄弟、大いに之れを尊信して、各々一書として、其の門人に授けしを、百年の後、朱熹之れに繼ぎて、論孟には集註、學庸には章句といへる註解を施して、合はせて四書と稱せしより、遂に學者の必ず讀むべき寶典となりぬ。

さりながら、程子は、大學に錯編の錯雜したる處ありとて、其の文章を入れ替へしを、朱子も、同見なるのみならず、缺脫したる處ありとて、更に補傳の一章を挿み、且つ經傳の區別を立てゝ、經の一章は、孔子の言葉を曾子の述べたる者、傳の十章は、曾子の意を其の門人の記せる者と臆斷せり。然るに、其の後三百年を經て、明の王守仁、大學は原の儘にて苦しからずとて、禮記の舊に復し、旁釋といへる註解を添へしかば、是れより、朱子の書を新本、王子の書を古本と呼べり。程朱の二經を表章せしは、儒學の上に大功あり、王子の之れを古に復せしも、亦稱すべし。但々此の諸人は、銘々の學說をもて古書を解釋せるをもて、往往古義を誤まりたるは、惜むべきことなり。

吾が邦に宋儒の註の行はれ初めたるは、後醍醐帝の朝なるが、それより百四十餘年前に、高倉帝の侍讀清原賴業、禮記の中の學庸の兩篇は、聖人の道の微妙を盡くしたる者なれば、別に寫して、帝の御覽に供せむと奏聞せしに、御嘉納ありきとのことなり。賴業は、朱子と同時の人にして、其の見る所暗合せるは、感ずべし。

中庸

中庸は、孔子の孫の子思の作なりといへり。此の書も、禮記の一篇にして、其の世に重んぜられたるは、宋より後のことなることは、前に述べたる通りなり。

書中の主意は、天下國家を治むる道の本原を說ける者にして、歸する所は、誠の一字に在り。之れに題して中庸といへるは、書中に此の文字多きが故に、取りて見出しとしたるなり。

大學に述ぶる所は、表面の事にして、中庸に述ぶる所は、裏面の事なれば、中庸は、本なり、內なり、大

學は、末なり、外なり、皆先聖の大道を發揮せる者なり。

中庸も、大學と同じく、一篇の文章なるを、朱子は、分かちて三十三章とせり。朱子の章句に據るときは、啻に古體を失ふのみならず、文脈を截斷すべき恐れもあれば、學庸共に、禮記の舊に從ひて、其の全文を一貫して講讀すべし。

論語

論語は、孔子の弟子達及び時人に應答せる語、及び弟子達の語を輯めたる者なり。或は之れを仲弓、子游、子夏等の撰定せる者なりといひ、或は有子、曾子の門人の手に成れる者なりといへるは、宜しからず。孔子の沒後に、七十弟子の共に撰錄せる者と見るべし。されば、論語と題せるは、弟子達の論撰したる語といふことなり。然るに、之れをむづかしく解釋して、論は、綸なり、輪なり、理なり、次なり、撰なり、此の書は、世務を經綸すべき者なるが故に綸といふ、圓轉窮まりなきが故に、輪といふ、萬理を纏合せるが故に理といふ、篇章序あるが故に次といふ、羣賢集定せるが故に撰といふ、此の書に載せたる者は、皆仲尼の弟子達及び時人に應答せる辭なるが故に語といふといへり。語を應答の辭といへるは、可なれども、論の定義に至りては、餘りに深く考へ過ぎたる者にして、書名の本意にあらぬなり。

論語は、漢の世になりて、三種の異本あり。其の一つは、魯人の傳へし魯論語なり。其の一つは、齊人の傳へし齊論語なり。其の一つは、漢の景帝の子なる魯の恭王の孔子の故宅の壁の中より得たりといへる古論語なり。魯論は、今の二十篇なり。齊論は、今の二十篇の外に、問王、知道の二篇ありて、通じて二十二篇なり。古論は、今の第二十篇の堯曰の下章の子張問を分かちて一篇とせる者にして、通じて二十一篇なり。されば、古論は、一部に兩つの子張の篇あり。後漢の鄭玄、魯論の篇章に就きて、之れを齊論古論に考へて、其の註釋を成したる者を古註といふ、朱子の集註も、之れに據れり。

今傳はりたる二十篇、前の十篇を上論といひ、後の十篇を下論といふ、恰も正編續編の如き體裁なり。其の梗概を揭げむに、人は必ず學問すべき者なれば、學而の篇を第一とし、政事を執るは、學問の成りたる上の事なれば、爲政の篇を第二とし、政事の要は、禮樂に在るをもて、八佾の篇を第三とし、人として仁心なければ、禮樂も其の甲斐なければ、里仁の篇を第四とし、友を擇ぶは、仁を輔くる爲めなれば、門人及び古今の人物の得失を記したる公冶長、雍也の二篇を第五、第六とし、德を成すには、漸あるをもて、聖人孔子の志行を明かにせる述而の篇を第七とし、前篇に孔子の志行を擧げたるに因りて、前古の聖賢の德を首末に載せて、中間に己れを脩め人を治むる事を論じたる泰伯の篇を第八とし、泰伯、堯、禹の至德に次ぎて、再び孔子の德行を論じたる子罕の篇を第九とし、孔子の平素の行狀を詳かにせる鄕黨の篇を第十とし、(以上上論)是れより更に弟子外人の才學德行を論じたる先進、顏淵、子路の三篇を第十一、第十二、第十三とし、三王二霸の迹、諸侯大夫の行ひを論じたる憲問の篇を第十四とし、孔子の不遇の事、及び脩身處世の法を雜記せる衞靈公、季氏、陽貨の三篇を第十五、第十六、第十七とし、古今の賢哲は、亂れたる世を避けしかど、孔子は、終始人道の爲めに力を盡くしたることを載せたる微子の篇を第十八とし、孔子の沒後の弟子達の言論を雜記せる子張の篇を第十九とし、前篇の末に、子貢の孔子を推尊せる言葉あるに因りて、孔子の嘗て語りたる二帝三王の事を記せる堯曰の篇を第二十とし、(以上下論)其の末に、不レ知レ命の章を置きて、孔子の終に天命を得ずして、先王と其の功業を同じくすること能はざりしことを示して、開卷の人不レ知而不レ慍不二亦君子一乎の語に應じたり。此の如く、每篇首出の文字(子曰の類の外の)を取りて、見出しとせる中に就きて、八佾の篇のみ、季氏の字を差し置きたるは、後の季氏第十六を避けむとて、此の篇の禮樂に緣ある二字を取れるなり。各篇の大體は、先づ此の如し。然れども、本來個個の條件を類纂したる者なれば、必ずしも每章前後の關係を結び付くべき者にてはあらぬなり。之れを要するに、論語は、孔子の言行錄にして、歸する所は、仁の一字に在り。

孟子

孟子は、鄒の孟軻の書なり。書中の主意は、王道に在り、仁義に在り、性善の說も、亦一篇の本領なり。之れに孟子と題せるは、孟軻の自作なるに由る。こは、同時の人の莊周の書を莊子といひ、其の後の人の荀卿の書を荀子といへるが如きなり。孟子は、子思の門人より孔子の道を學べりとも、直接に子思より學びたりともいへり。之れを書中に自白せる言葉に徵しても、其の年代の上より推しても、子思の直門ならずして、子思の孫弟子なるが如し。

其の七篇を概括するに、第一の梁惠王の篇は、總べて王道の要を論じたる者なり、第二の公孫丑の篇は、孟子の齊に在りし始末、及び齊を去りたる後の事を詳かに記したる者なり、第三の滕文公の篇は、孟子の滕及び宋魯の間に在りし事を記したる者にして、初めに王道の規模を論じ、次ぎに邪說の害を辯じ、末に諸人の問ひに答へし言葉を雜記せり。第四の離婁の篇は、天下を治むるは、仁政に在ることを反覆したる者にして、凡そ人倫日用に益あることをも論列せり、第五の萬章の篇は、專ら聖賢の事實を論じ、勞ら出處進退の辯に及びたる者なり、第六の告子の篇は、專ら性善の義を明かにし、勞ら禮樂王霸の事に及びたる者なり、第七の盡心の篇は、議論大抵離婁の篇と相似たり、天を知り命を立つるをもて始め、聞知を千載の後に望むをもて終はりたり、中間脩身齊家の事に及び、聖賢の蘊、王霸の辯も備はりぬ。每篇首出の字を取りて、見出しとせるは、論語の例と同じ。後漢の趙岐の各篇を章句上下に分かちて註解せるを古註といふ。章句は、篇といふに同じ、是れ句を積めば章となり、章を積めば篇となるが故なり。

孟子の一書は、漢の頃には、子類に屬して、淮南子、管子、墨子などと同等の者なりしが、唐の韓愈、大いに之れを推尊して、孔子の後に、聖人の道を得たるは、此の人なりと道破せしより、後世之れを孔孟と並べ稱することゝなりぬ、其の後、朱子の集註成りて、遂に經書の列に入れり。

結論

孔子の時は、春秋の世にして、孟子の時は、戰國の世なれば、子思の時は、其の間に在り。春秋戰國は、

周の天下の末造なり。孔子は、魯の人にして、名は丘、字は仲尼といふ。此の時周室衰微して、上下の秩序紊亂せしかば、孔子は之れを帝王の治に回復せむとて、諸國を遍歷して、忠孝を說き、禮樂を論じたれども、之れを用ゐる人なかりければ、退きて古典を修め、門人に授けて、先王の道を後世に傳ふることを任じたり。其の志の存する所を觀るべき者は、實に論語の一書なり。孔子の子の名は鯉字は伯魚は、早世せり、孫の名は伋字は子思は、孔子の弟子の曾子に學び、宋の國にて困阨せし時、中庸の書を作れりといふことなれば、大學は、之れに次ぎたる者なるべし。孟子は、名は軻、字は子車とも、子輿ともいふ、鄒の人なり。鄒は、魯の鄒國の名なりとも、魯の領分の邑の名にして、孔子と同鄉なりともいへり。其の學問は、子思の門人より受けて、孔子の主義を領得せり。此の時、天下大いに亂れて、暗黑の世となりければ、孟子齊梁諸國の間に往來して、王道を唱へて、霸說を斥け、仁義を說きて、功利を抑へたれども、其の論、時に合はざりければ、退きて萬章の徒と道を講じて、七篇の書を著はせり。其の邪說として排せし者は、楊朱、墨翟の流なり。

四書の由來は、此の如くなれば、論語の次ぎは中庸なり、中庸の次ぎは大學なり、大學の次ぎは孟子なり。そは、中庸の首章は論語の末章を承け、大學の首章は中庸の末章を承け、孟子の首章は大學の末章を承けたるを見て知らるべし。其の首尾聯牽せることは、左の如し。

○論語末章……子曰不知命無以爲君子也

○中庸首章……天命之謂性

○中庸末章……詩曰予懷明德

○大學首章……在明明德

○大學末章……好仁　此謂國不以利爲利以義爲利也

○孟子首章……王何必曰利亦有仁義而已矣

右にて四書の系統は明白ならむ。さて、前にも述べたる如く、鄭玄の論語學庸の註、趙岐の孟子の註は、古註にして、朱熹の集註、章句は、新註なり。而して、其の新舊に屬したる未書の類は、支那は更なり、本邦にても、數十百種に及びたり。漢人の註は、訓詁に長じ、宋人の註は、義理に長ず。漢より唐に至るまでは、其の學小變したれども、皆宋學なり。此の外に又清人の考證學ありて、書籍の眞僞、字句の異同を調ぶることを專一にせり。漢人の註解は、古書の時代に近き者なれば、主として之れが訓詁に據るべし。宋人の註解は、義理を見ること深しといへども、釋老を儒道に混せる者なれば、其の說信從すべからず。然れども、其の解釋の古註に勝さりたる者は、固より取るべし。清人の考證は、疑義を斷ずる裨益あれば、亦等閑にすべからず。三千年後の今日より聖賢の書を寛ふは、容易き業にあらぬなり。

增訂 大學講義

興文社編纂

大學之道、在明明德、在親民、在止於至善、

【字義】大學之道……大學は、昔の大學校なり、道は、仕方なり、昔の大學校にて、人を教ふる仕方なり、一說には、大學は、甚だ大いなる學問なりといひ、又一說には、十五歲以上の大人の學問なりといひ、又一說には、有德の大人の學問なりといへり、今は、最初の解に從ふ。●在……物事を約めていふ言葉にして、其の歸する所を指し示したるなり。●明明德……德は、仁義禮智忠信孝弟などの總名にして、人の天より受け得たるものなり、中庸にては、性といふ、此の德は、至極結構なるものなれば、明德、峻德、盛德、懿德などゝいふ、皆其の美しきことを形容せるなり、此の德を明らかにするは、身に仁義禮智忠信孝弟などの善行を脩めて、家、國、天下に光りを放つことなり、其の德、家に明らかなれば、家齊ひ、國に明らかなれば、國治まり、天下に明らかなれば、天下平らかになるなり、下文に、明二明德於天下一をもて、平二天下一の三字に代へたるにても、此の意味を悟るべし、一說には、人の天より受け得て、心の中に具はりたる德は、少しも曇りなきものなれば、之れを明德といふ、さりながら、此の德は、私欲に蔽はるゝときは、昏くなることあるが故に、其の欲を去りて、元の如くに明らかにするなりといへり、今は、前の解に從ふ。●親民……親は、愛するなり、民は、人に同じ、我が身の外の人々を親しみ愛するなり、一說には、親は、新に作るべし、人々を新にするなり、下文に、苟日新、日日新、又日新といへり、今は、前の解に從ふ。●止二於至善一……至極の善に止まり居りて、遷り動かぬなり、至極の善は、至當の道理の在る處なり、例へば、人の子となりては、親に事へて、愛敬の心を盡くすべく、人の臣となりては、君に事へて、忠厚の心を盡くすべきが如し、起居飲食の瑣事に至るまで、至當の道理の存せざることなし、是れ卽ち至善なり、一說には、人の德性は、至極善なるものなれば、眞知にて、物遷しにて物の長短を度り知るが如し、此の眞知をもて、至極の善を自覺して、其の處に止まるなりといへり、前の如くに見るときは、至善は、心の中に在り、今は、前の解に從ふ、

【解釋】昔の大學校にて、人を教ふる仕方は、三箇條あり、先づ、人は、其の身に仁義禮智忠信孝弟などの如き、あらゆる善行を脩めて、家、國、天下に光りを放ちて、遠近の耳目に感得せしむべきことなり、之れを明德を明らかにすといふ、次ぎに、父母兄弟を始めとして、內外親疎、一切の人々を總べて親しみ愛すべきことなり、之れを民を親しむといふ、さて、明德を明らかにするにも、民を親しむにも、事々物々、至極の善、卽ち至當の道理の在る處に止まり居りて、移り動かぬやうにすべきことなり、之れを至善に止まるといふ、明德を明らかにするは、己れを脩むる事なり、民を親しむは、人を治むる事なり、至善に止まるは、此の二つの事を行ふ究竟の目的なり、

【文法】大學之道の四字を冒頭に置きたるは、壁立千仞、懸崖瀑布の如し、之れに接するに、三つの在の字を用ゐたるは、三層の巖石、地中より突

起せるが如し、然れども、直下の水勢を拒ぎ止むること能はず、其の餘流を瀉らす所は、下文を引き起こすなり、是れ河となり江となる處にして、無限の風景あり、又明德よりは、親民の句重く、親民よりは、至善の句重くして、能く彼の直下の水勢を挫ぐなり、若し文章を解せざる者之れを書せば、大學之道、在レ明二明德一、與レ親レ民與レ止二於至善一、とするならむ、此の如くならば、文章劇くして、上の壓圧瀑布を抑ふること能はざらむ、さなくば、大學之道、明二明德一也、親レ民也、止二於至善一也、とするならむ、此の如くならば、光景なく、又下文を引き起こすこと能はざらむ、今、三つの在の字を用ゐたる逆句にて、井然として、條理あり、文を學ぶ者、注目せざるべかず、止二於至善一の句は、上の明德、親民の二句に比すれば、優美にして宛轉、おのづから情あり色あり、

知レ止而后有レ定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得、

字義 知レ止……至善に止まることを知り拔くなり、●后……後に同じ、●定……心の方向の定まりて、迷はぬなり、●靜……心の落ち着きて、騷ぎ亂れぬなり、●安……心の安らかになりて、天性の自然の如くになるなり、●慮……物事の分別の付くなり、●得……至善に止まることを行ひ得るなり、

解義 されば、明德を明らかにすることに就きても、民を親しむことに就きても、至善に止まることを知り拔きたる上にて、心の方向定まりて、迷はぬものなり、心落ち着きて、騷ぎ亂れぬものなり、心落ち付きて、騷ぎ亂れぬ上にて、心安らかになりて、天性の自然の如くになるものなり、心安らかになりて、天性の自然の如くになりたる上にて、物事の分別の付くものなり、物事の分別の付きたる上にて、至善に止まることを行ひ得るものなり、

文法 知レ止の字は、在レ止二於至善一の句に接する故に、於至善の三字を省略せり、此の二字は、明德、親民の意を包羅す、知レ止而后有レ定の一句は、知の字、有の字、逆用にして、其の難き場なることを文法にて示したるなり、次ぎの定而后能靜は、字々順用にして、自然にすら〳〵と出來る意ありて、其の易き場なることを示したるなり、靜而以下も、皆同じく順用なり、是れ自然の妙なり、

物有二本末一、事有二終始一、知レ所二先後一、則近レ道矣、

字義 物有二本末一……物は、實物なり、天下、國、家、身、心、意の六つの實物には、本と末との次第あるなり、例へば、身は本にして、家は末なるが如し、●事有二終始一……事は、仕事なり、平、治、齊、脩、正、誠の六つの仕事には、始めと終はりとの次第あるなり、例へば、國を治むるは始めにして、天下を平らかにするは終はりなるが如し、●近レ道矣……、大學之道の道なり、大學校にて教へらるゝ仕方を手に入れたるに近寄りたるなり、突は、しかといふ助語なり、

解義 天下、國、家、身、心、意の六つを實物といひ、平、治、齊、脩、正、誠の六つを仕事といふ、其の實物には、本と末との次第あるなり、例へば、身は本にして、家は末なるが國なり、國の本は家なり、家の本は身なり、身の本は心なり、心の本は意なり、されば、天下は、最も末の實物なり、之れに準じて、其の仕事には、平、治、齊、脩、正、誠の六つを仕事といふ、其の實物には、本と末との次第ありて、天下の本は誠なり、誠の本は意なり、意の本は心なり、心の本は身なり、身の本は脩なり、されば、天下は、最も末の實物なり、之れに準じて、其の仕事には、始めと終はりとの次第あるなり、例へば、國を治むるは始めにして、天下を平らかにするは終はりなるが如し、●近レ道矣……、大學之道の道なり、大學校にて教へらるゝ仕方を手に入れたるに近寄りたるなり、突は、しかといふ助語なり、

文法 知レ所二先後一の知は、上の知レ止の知に應ず、近レ道の道は、始めの大學之道の道に應ず、此の四句は、皆逆句にして、文氣おのづから上進の

勢ひあり、然れども、長句を用ゐず、四字の短句を用ゐたるは、之れを結ばむが爲めなり、上文の定而后能靜以下の三句は、順句なれば、之れと對照せむが爲めに、此に四つの逆句を用ゐたるは、おのづから妙なり、止二於至善一の箇條は、一寸是れにて一段として、後へ廻し、次ぎは、明德の箇條に戻りて、之れを說き出だせり、

古之欲レ明二明德一於天下者、先治二其國一、欲レ治二其國一者、先齊二其家一、欲レ齊二其家一者、先脩二其身一、欲レ脩二其身一者、先正二其心一、欲レ正二其心一者、先誠二其意一、欲レ誠二其意一者、先致二其知一、致レ知在レ格レ物、

字義 明二明德於天下一……天下は、漢土の全國を指す、我が明德の光りを天下中に放ちて、萬民を感化するなり、●治二其國一……治は、亂の反對なり、國は、天下の一部分なり、其の一國內の人を治めて、之れを善ならしむるなり、●齊二其家一……齊は、齊頓するなり、其の一家內の人を齊頓して、之れを善ならしむるなり、●脩二其身一……脩は、脩復の脩にして、新たに造ることにあらず、其の身の行ひの缺けたる處を取り繕ひて、本然の善に復するなり、●正二其心一……正は、邪の反對なり、心は、一身の主宰なり、其の心を正しくして、邪なることを思はざるなり、●誠二其意一……誠は、僞りの反對なり、意は、心の動き向ふ所なり、其の心の動き向ふ所を誠實にして、欺き僞らざるなり、●致二其知一……致は、推し極むるなり、知は、知識なり、其の知識を推し極むるなり、委しき解は、下に在り、●致レ知在レ格レ物……格は、至るなり、推し極むるなり、物は、事なり、知識を推し極むる仕方は、物事の道理を推し極むるに在るなり、一說には、致レ知は、己れの眞知を致すなり、格レ物は、事の不正を正すなり、凡そ意念の發する所には、必ず事あるものなれば、其の事の上に己れの眞知を致して、其の正しからざるを正しくし、己れの善と見留むるときは、之れを取り、惡と見留むるときは、之れを去ることなりといへり、今は、前の解に從ふ、

解義 さて、上文に、大學の道は、明德を明らかにするに在り、民を親しむに在り、至善に止まるに在りといふに、我が明德の光りを天下中に放ちて、萬民を感化せむと思ふ者は、先づ其の一國內の人を治めて、之れを善ならしむるなり、其の國を治めむと思ふ者は、先づ其の一家內の人を齊へて、之れを善ならしむるなり、其の家を齊へむと思ふ者は、先づ其の身を脩めて、行ひの缺けたる所を取り繕ひて、本然の善に復するなり、其の身を脩めむと思ふ者は、先づ其の心を正しくせむと思ふ者は、先づ其の意を誠にせむと思ふ者は、先づ其の知識を推し極むるなり、知識を推し極むる仕方は、物事の道理を推し極むるに在るなり、之れを最初の三箇條に配當すれば、格レ物、致レ知は、至善に止まることなり、誠レ意、正レ心、脩レ身は、明德を明らかにすること能はざるなり、されば、至善に止まることを知らざれば、明德を明らかにすること能はず、明德を明らかにすること能はざれば、民を親しむこと能はざるなり、

文法 此の一節は、法を初めの文に取る、古之の之の字は、大學之道の之の字に應じ、於天下の於の字は、於至善の於の字に應じ、先治の先の字は、知レ所二先後一の先の字に應じて、先後次第あることなふ、此の文は、上の在レ明二明德一といふより來れる者なれど、古之欲レ明二明德一者といへば、後の文を生ぜず、明二明德於天下一といひて、天下の二字を加へたるより、國を生じ、家を生じ、身、心、意を生じ、知と物とを生じ、幾多の文彩を生ず、是れ文章の妙といふべし、後文に天下平とありて、此の天下の二字に應ず、前節は至善に止まるをもて、明德、親民を包み、此は明德を物は、物有二本末一の物に應じ、在の字は、最初の大學之道の三つの在の字に應ず、

區として、親民、至善を包む、後世の文の知く理窟詰めにならぬ處が文法なり、總べて逆句を用ゐたるは、是れ其の難きことを示す意なり、

物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身脩、身脩而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平、

字解 物格而后知至……物事の道理の來り至りたる上にて、知識の來り至るなり、即ち物事の道理の分かりたる上にて、知識の明くるなり、上文の致知、格物、物は、勉强なり、此の處の物格、知至は、自然なり、其の餘も、總べて、上文は、勉强にして、此の處は、自然なり、

講義 前の知くに、本末終始の次第順序を逐ふときは、屹度自然の好結果を得る筈なり、先づ勉强して、物事の道理を推し極むるときは、物事の道理は、自然に來り至るなり、物事の道理の來り至りたる上にて、意とて、心の動き向ふ所は、自然に誠實になりたる上にて、知識は自然に來り至るなり、知識の來り至りたる上にて、意は自然に誠實になるなり、意の誠實になりたる上にて、心は自然に正しくなるなり、心の正しくなりたる上にて、身は自然に脩まるなり、身の脩まりたる上にて、家は自然に齊ふなり、家の齊ひたる上にて、國は自然に治まるなり、國の治まりたる上にて、天下は自然に平らかになるなり、

文法 逆に之れを修むるは、難きことなれば、前文は、皆逆句を用ゐたり、學問して、物格り、知ること至れば、自然に意が誠になり、それより、心が正しくなり、それより、身も脩まり、家も齊ひ、國も治まり、天下も平らかなるに至る、其の間に而后の后の字を用ゐたるは、前文の先の字と相照らして、知所に先後の後の字の意なり、此に順句を用ゐたるは、すら〳〵と行はるべきことを示したるなり、是れ學問を本にして、物格り知ること至るを先とすることを教へたるなり、

自天子、以至於庶人、壹是皆以脩身爲本、其本亂而末治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也、此謂知本、此謂知之至也、

字解 自天子、以至於庶人……庶人は、平民なり、天子より平民までには、種々の階級あるが故に、以の字を置きて接續す、●壹是……同じくは是れといふことにして、是は、助語なり、一說には、壹是は、一切なりといへり、●其本亂而末治者否矣……本は、身にして、末は、家、國、天下なり、否は、あるまじといふことなり、然れども、實は絶無の意を含めるが故に、矣の字を添へたり、●所厚者……家人を指す、●所薄者……國人以下を指す、●知之至……知識の至極したるなり、一說には、上文の知至と同じく、知識の來り至りたるなりといへり、

講義 之れを要するに、上は天子より、下は平民に至るまで、其の人格には、種々の階級ありといへども、同じく皆身を脩むるを本とするなり、其の大本の身の行ひの亂れたる者にして、其の末々の家、國、天下の治まる者は、世にあるまじきことなり、此の道理より推すときは、又一家内の人は、一國内の人、及び天下の人よりも、手厚くすべき者なるを、其の手厚くすべき一家内の人に手薄くしながら、之れに比すれば、手薄くしても然るべき一國内の人、及び天下の人に手厚くする者は、昔より、まだ其の例しあらぬなり、即ち近きに薄き程の者は、屹度遠きに薄き者ぞかし、されば、身を脩むるは本にして、家を齊へ、國を治め、天下を平らかにするは末なること、一家内の人に手厚くしたる上にて、一國内の人、及び天下の人にも手厚くすべきことを心得て、其の順序を誤まらざる者を、物事の本末終始を知ると謂ふなり、知識の至極したるものと謂ふなり、

文法 昔し、堯、舜の如き聖人、天子の位に在りて、明德を天下に明らかにせしによりて、前の在明明德の本分を天子の身の上に懸けて、自天子と書き出だし、上の天下平の字に應じて、前意を結びたるなり、天子より庶人に至るといへるは、至尊と至賤とを引き合はせて、中間の諸侯、卿、大夫、士を省きたるなり、是れ親民の意を文法に於て示したるなり、此の一段は、上文を括る處なれば、文の曲節、おのづから微細なるなり、其本の本は、上の本末を承け、厚薄の字は、本末治亂の字より生じたり、又之れを展して、此謂知本の本の字にて結ぶ、此謂知之至也は、此謂知本を解せるなり、此の如く、段々に重れて、上を結びたるは、上の先致其知、致知在格物といへると句法よく似たり、さて、朱子は、此の本文の末に之有也までを孔子の言葉を曾子の述べたる者なりとして、傳十章と定め、此謂知本、此謂知之至也の十字を格物、致知の義を釋ける文の殘缺したる者なりとして、傳の五章に移し置きて、其の文章を補ひたれど、今は、取らず、

所謂誠其意者、毋自欺也、如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙、故君子必愼其獨也、

字解 所謂……世に沙汰するといふ程の言葉なれど、此の處にては、前にいひたる言葉を繰り返したる言葉なり、●毋自欺……毋は、無に同じ、自ら己れを僞り欺くことなきなり、一說には、毋は、禁止の言葉なりといへり、今は、前の解に從ふ、●好色……美しき色なり、●自謙……謙は、慊に同じ、快きなり、足るなり、自欺の反對にして、自ら己れを愉快滿足にするなり、●君子必愼其獨……君子は、位ある人のことにもなり、德ある人のことにもなり、位もあり德もある人のことにもなるして、獨り居る時にも、屹度其の獨りの身に氣を付くるなり、

講義 さて、上文に、其の意を誠にすといひたるは、如何なる事ぞといふに、人を僞り欺かざるのみならず、自ら己れを僞り欺くことなきなり、自ら己れを僞り欺くことなしとは、譬へば、鼻に惡しき臭を嗅ぐときは、直ちに惡しき臭なりと感じて、之れを惡み嫌ふが如く、目に美しき色を見るときは、直ちに美しき色なりと感じて、之れを好み愛するが如し、何事も、善は善、惡は惡と、正直に判斷することをいふなり、かやうにすれば、常に氣持ちのよきものなれば、此の事を自ら己れを愉快滿足にすと謂ふ、此の如く、其の意を誠にするは、自ら己れを僞り欺くことなきことなれば、君子として、德ある人は、他人の耳目に關れずして、獨り居る時にも、屹度其の獨りの身に氣を付けて、假り初めにも、心に愧づることをせぬなり、

文法 所謂の二字をもて、文を起こす、次さ〳〵の文も、此の法を取れり、毋自欺也は、思ひに屬し、愼獨は、行ひに屬す、

小人閒居爲不善、無所不至、見君子而后厭然揜其不善、而著其善、人之視己如見其肺肝、然則何益矣、此謂誠於中形於外、故君子必愼其獨也、

字義 小人……前の君子の反對にして、德なき人なり、●閒居……何事もなく、獨り居るなり、●厭然……さまりのわろきさまなり、●揜……包み匿すなり、●著……見せびらかすなり、●視己……己れの了簡を見拔くなり、●誠於中形於外……中は、心なり、外は、外貌なり、善惡共に眞實に心の中に存在すれば、其の通り、善惡共に外貌に顯はれ見ゆるなり。

文意 然るに、小人とて、德なき人は、何事もなく、獨り居る時は、人目に觸れねば安心なりとて、己れを僞り欺きて、出來得る限り、善からぬ事をするものなれど、我れながら、よき心持ちはせぬが故に、君子とて、德ある人の前に出づるときは、厭然として、きまりわろげに、其の善からぬ事を包み匿して、其の善き事を見せびらかすなり、さりながら、人は左程に目の利かぬ者にあられば、己れは、うまく匿しおほせたりと思ひても、人の己れの了簡を見拔くことは、其の腹の中の肺の臟肝の臟を見通すやうに嚴重なるものなり、さらば、何程包み匿すとも、何等の甲斐もあらざらむ、此の事を古語にも、善惡共に眞實に心の中に存在すれば、其の通り、善惡共に外貌に顯はれ見ゆるものなりと謂へり、されば、君子は、他人の耳目に觸れずして、獨り居る時にも、屹度其の獨りの身に氣を付けて、假り初めにも、心に愧づることなせぬなり、

文意 閒居の字は、愼獨と相應ず、此の處は、君子を主とし、小人を客とし、客によりて、主を明らかにす、是れ文章の法なり、

曾子曰、十目所視、十手所指、其嚴乎、富潤屋、德潤身、心廣體胖、故君子必誠其意、

字義 曾子……孔子の弟子なり、姓は曾、名は參、字は子輿といふ、子は、男子の通稱なり、●十目所視……多くの人の視て批評するなり、●十指所指……多くの人の指さして批評するなり、●嚴……甚だ長るべきなり、●富潤屋……財寶は、人の家を潤澤して、立派にするなり、●德潤身……道德は、人の身を潤澤して、高尙にするなり、●心廣體胖……心の寬大なるときは、身體の安舒なるなり、富潤屋と、德潤身と、心廣體胖との三つは、上の誠於中形於外の證據なり、一說には、富潤屋は、客にして、德潤身は、主なり、心廣體胖は、德潤身の形容なりといへり、

文意 孔子の弟子の曾子の言葉に、「十人以上の目をつけ、指をさして、彼の者は、善人なりとか、惡人なりとか、批評する言葉は、間違はぬものにして、甚だ長るべし」とあり、實に此の言葉の通り、財寶は、人の家を潤澤して、立派にし、道德は、人の身を潤澤して、高尙にし、心の寬大なるときは、身體の安舒なるものなり、此の如く、內に誠あれば、外に形はるゝものなれば、君子とて、德ある人は、屹度其の意を誠にするなり、

詩云、瞻彼淇澳、菉竹猗猗、有斐君子、如切如磋、如琢如磨、瑟兮僩兮、赫兮喧兮、有斐君子、終不可諠兮、如切如磋者、道學也、如琢如磨者、自脩也、瑟兮僩兮者、恂慄也、赫兮喧兮者、威儀也、有斐君子、終不可諠兮、盛德至善、民之不能忘也、

字義 詩……詩經の衞風の部の淇澳の篇にして、衞の武公の德を譽めたるものなり、●瞻彼淇澳……瞻は、見渡すなり、淇は、水の名なり、澳は、隈なり、彼の淇水の流れの岸に入り込みたる處を見渡すなり、●菉竹……綠の竹なり、●猗猗……生ひ茂るさまなり、●有斐君子……斐然として文章ある君子なり、武公を指す、此の君子は、位と德とを兼ぬ、●如切如磋、如琢如磨……骨の細工を切るといひ、象牙の細工を磋ぐといひ、玉の細工を琢つといひ、石の細工を磨くといふ、四つの如の字は、學問をして德を脩むることに譬へたるなり、●瑟兮僩兮……油斷なく心を配りて、容儀を習ふさまなり、兮は、言葉のゆとりを取る爲めに置く字なり、●赫兮喧兮……內に充實したる德の容貌威儀の外に盛んに顯はるゝさまなり、兮は、言葉のゆとりを取る爲めに置く字なり、●終不可諠……忘に同じ、詩經には、諼に作れり、●道學……道は、言に同じ、學問をして物事の道理を推し窮むることをいふ、●自脩……自ら德を脩むるなり、●恂慄……懼れ愼むなり、●威儀……威ありて長るべく、儀ありて象るべきなり、

文意 さて、德は身を潤すといふ德は、學問の力に依りて成就するものなり、其の證據には、詩經の衞の武公の德を譽めたる淇澳の篇に、「我が衞の地の彼の淇水の流れの岸に入り込みたる處を見渡せば、綠の竹は、猗猗として、生ひ茂れり、是れは、淇水の餘潤にて、斯く美しくなれるなり、それに就きても、思ひ出だすは、我が衞國の御先祖の康叔の君の餘德を承けて、斐然として文章ある君子となりたまへる今代の君公は、學問をして、御身の德を脩めたまへること、切るが如く、磋ぐが如く、琢つが如く、磨くが如く、骨細工人、象牙細工人、玉細工人、石細工人の切磋琢磨の功を積みて、其の器を成すが如くにて、瑟たり側たりとて、油斷なく心を配りて、容儀を習ひたまひて、少しも怠慢放逸なることなければ、僩たり喧たりとて、其の內に充實したる御德は、容貌威儀の外に盛んに顯はれたり、斯く斐たることある君子なれば、こそ、終に諠るべからずして、いつまでも思ひ慕はるゝなれ」とあり、今、此の詩を味ふに、切るが如く、磋ぐが如しとは、學問をして物事の道理を推し窮むることを言へるなり、琢ぐが如く、磨くが如しとは、自ら德を脩むることなり、瑟たり側たりとは、心に懼れ愼むことなり、僩たり喧たりとは、心の德の外に顯はれて、威ありて長るべく、儀ありて象るべきことを言へるなり、からずとは、國民其の盛大なる德、至極の善に感じて、子々孫々まで、忘るゝことのならぬことを言へるなり、

文意 總じて、詩書の類を引くときは、斷章取義とて、入用の字句だけ切り取りて、作者の趣意に引き付けて、其の義を成すこと多ければ、其の積もりにて見るべし、此に引きたる詩の如きも、明德、至善に引き付けたるなり、四つの也の字は、後へ送る文法にして、上に引きたる詩に取り付けて、次ぎの詩云を呼び出だすなり、

詩云、於戲前王不忘、君子賢其賢、而親其親、小人樂其樂、而利其利、此以沒世不忘也、

字義 詩……詩經の周頌の部の烈文の篇にして、周の文王、武王の德を譽めたるものなり、●於戲……感歎して發する聲なり、●前王不忘……前代の文王、武王を忘れぬなり、●君子……後の世の位ある人を指す、●其賢……文王、武王の賢者なりとて優待せし人なり、賢は、德あり能ある人をいふ、●其親……文王、武王の親戚なりとて厚遇せし人なり、●小人……後の世の位なき人を指す、●其樂……文王、武王の人民と

共にせし快樂なり、●其利……文王、武王の人民の爲めに營みし利益なり、●沒世……身を終ふるなり、

大意 又人民の忘るゝこと能はざる一例を擧むに、詩經の周の文王、武王の御德を譽めたる烈文の篇に、「あゝ、さても、前代の文王、武王の御德は、今日までも忘れずよ」とあり、何をもて、斯く人々は思ひ慕ふかといふに、文王、武王は、賢人を賢人として、優待したまひ、親戚を親戚として、厚遇したまひしによりて、君子とて、後の世の位ある人は、二王の尊び重んじたまひし賢人を相變はらず尊び重んじ、二王の親しみ愛したまひし親戚を相變はらず親しみ愛するなり、又文王、武王は、人民と快樂を共にしたまひ、人民の爲めに利益を營みたまひければ、小人とて、後の世の位なき人は、二王の人民と共にしたまひし快樂を相變はらず樂しみ、二王の人民の爲めに營みたまひし利益を相變はらず利益と思ひて、其の恩澤に浴するなり、此の如く、上下各々其の所を得て、少しも不平なきが故に、皆前王を愛戴して、身を終ふるまで忘れざるなり、

康誥曰、克明德、太甲曰、顧諟天之明命、帝典曰、克明峻德、皆自明也、

字釋 康誥……今の書經の周書の部の篇の名なり、康は、周の文王の子、武王の弟の康叔なり、誥は、告ぐるなり、武王の康叔を衞の國に封ぜし時に、告げ諭したるものなり、●克明德……克は、能に同じ、此の文の單に德とあるにても、上の明德の明は、德を形容せるまでにて、深き意味なきことを知るべし、●太甲……今の書經の商書の部の篇の名なり、太甲は、殷の湯王の孫なり、此の人、位に卽きて、不明なりしかば、宰相の伊尹、之れを刪戒したるもの是れなり、●顧諟……顧ぼ、常に目を付くるなり、諟は、審らかにするなり、一說には、諟は、此のといはむが如しといへれど、顧諟の二字を熟字と見るかた宜し、●天之明命　天より我れに與へられたる命令なり、●帝典……今の書經の虞書の部の堯典なり、帝堯の時に帝堯の德を述べたるものにして、其の事柄は、常法とすべきものなるが故に、典といふ、〳〵ち法典、經典の典なり、●峻德……今の書經には、俊德に作れり、峻も、俊も、大いなることにて、明德と同じく、其の美しきことを形容せるなり、

大意 德の忘られざる證據は、上に見えたる如くなるが、さて、其の德を明らかにせし例は、古書に其の例少なからず、書經の康誥とて、周の武王の弟康叔を衞に封ぜられし時に、告げ諭したまへるものゝ中に、「我が父君の文王は、能く其の德を明らかにしたまひき、されば、御身も、父君を手本として、能く其の德を明らかにせよ」とあり、又書經の太甲とて、殷の名臣伊尹の其の君太甲を訓戒したるものゝ中に、「大王の祖父君の湯王は、天の明命、卽ち己れの受け得たる德に御目を付けたまひて、其の德の何者なるか審らかにしたまひき、されば、大王も、湯王を手本としたまひて、御身の德を等閑にしたまふな」とあり、又書經の帝典とて、帝堯の御時に、帝堯の御德を述べられたるものゝ中に、「帝堯は、能く峻德を明らかにしたまひき」とあり、此の如く、帝堯といひ、湯王といひ、文王といひ、歷代の明君聖主は、能く其の德を明らかにしたまひしが、此の方々は、皆人の力に依らずして、御自身に明らかにしたまへるなり、

文法 上の詩云より、書曰に接し來る、古書を引用せる中に、自然と意を轉じて、明德のことに引き寄せたるなり、司馬遷の史記に此の法多し、

湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新、康誥曰、作新民、詩曰、周雖舊邦、其命維新、是故君子無所不用其極、

字釋 湯……殷の湯王なり、●盤……沐浴の盤なり、一說には、宗廟の祭器なりといへり、●銘　器具に刻み付けて、自ら警むる文言なり、

荀 ……誠になり、【作新民】……作は、爲に同じ、人民を改め新たにすることをせよといふことなり、一說には、作は、鼓舞作興するなり、新民は、自ら改め新たにする人民なり、自ら改め新たにする人民を鼓舞作興せよといふことなりといひ、又一說には、作新の二字を連れて、人民を引き立て改めしむることなりといへり、今は、最初の解に從ふ【詩】……詩經の大雅の部の文王の篇にして、文王の德を譽めたるものなり【其命維新】……新たに天の命令を受けて、天子となることにて、前の明命の命とは同じからず、維は、助語なり、【無所不用其極】……君となりては仁、臣となりては敬、子となりては孝、父となりては慈の如き、至極の善を用ゐ行はぬことなきなり、

大意 上文の末に、皆自ら明らかにするなりといひたるが、其の自ら明らかにして、家、國、天下に推し及ぼすべき工夫はといふに、殷の湯王の、毎朝顏を洗ひ手を洗ひたまふ盤に刻み付けて、自ら警めたまひたる文言に、「誠に日々に新たにして、日々日々に新たにして、又日々に新たにすし」とあり、是れは、毎朝、顏を洗ひ、手を洗ひて、身の垢を拭ひ去るやうに、昨日の惡を去りて、今日の善に遷りたまはむとの御工夫なり、又前に見えたる康誥の中に、「人民を改め新たにすることをせよ」とあり、是れは、周の武王の弟康叔を衞に封ぜられし時、衞の地は、もと殷の都にて、其の人民は、紂王の惡風に染まりたれば、己れの德を推し及ぼして、之れを改め新たにすべしと敎へたまへるなり、又詩經の武王の弟周公旦の、文王の德を譽めて、姪の成王に告げたまひたる文王の篇に、「周は、后稷以來の舊き諸侯の國柄なれど、新たに天の命令を受けて、王となりしは、文王の御時に在り」とあり、周は、武王に至りて、始めて殷に代はりたれど、文王の聖德をもて、既に天下を三分して、其の二を有ちたまふ程に、人心歸服せしことなれば、斯くは稱讚せられたるなり、此の譯けなれば、君子とて、位あり德ある人は、己れを脩むるにも、人を治むるにも、至極の善を用ゐ行ひて、萬民の手本とならぬことなし、

文法 日新より、新民に移り、又維新に移り、新の字をもて、之れを貫く、此に於て、至善を結ぶ、

詩云、邦畿千里、惟民所止、詩云、緡蠻黃鳥、止于丘隅、子曰、於止、知其所止、可以人而不如鳥乎、

字釋 【詩】……詩經の商頌の部の玄鳥の篇なり【邦畿千里】……邦畿は、天子の直轄の地なり、千里は、千里四方なり、但し、一里は、凡そ我が六町なり、【所止】……止まり居りて、他に遷らぬなり、【詩】……詩經の小雅の部の綿蠻の篇なり、【緡蠻】……詩經には、綿蠻に作れり、鳥の緩やかに長引きて囀るさまなり、一說には、小鳥の貌なりといへり、【黃鳥】……小鳥の名なり、【丘隅】……樹木の茂りたる小山なり、【子】……孔子なり、孔子を單に子と書けるは、論語の例なり、

大意 上文に、君子は其の極を用ゐざる所なしといひたるが、何事にも、至極の善といふことはあるものにて、詩經の玄鳥の篇に、「天子の直轄の千里四方の土地は、御膝元にて、繁昌なる處なれば、人民は、皆此の地に止まり居りて、他に遷ることを欲せざるなり」とあり、是れは、住居の上に於て、至極の善といふものにて、人々の此に一生落ち着かむと思ふは、自然の情なり、啻に人のみ然るにあらず、苟も生ある物は、必ず安堵の地を擇ぶなり、されば、又詩經の綿蠻の篇に、「緡蠻として、緩やかに長引きて、いと樂しげに鳴き囀る、黃鳥といふ小鳥は、物驚がしき村里を離れて、樹木の茂き小山に止まり棲めり」とあり、孔子此の詩を讀みて、感じて、いはれけるは、「心なき小鳥すら、止まるべき處に於て、其の止まるべきことを知りて、妄りに遷らざるを、萬物の靈たる人にして、其の止まるべき至善の場處を失ひて、善からぬ道に踏み迷ひて、小鳥にだにも及ばざるやうにては、申し譯けなきことならずや」となり、

詩云、穆穆文王、於緝熙敬止、爲人君止於仁、爲人臣止於敬、爲人子止於孝、爲人父止於慈、與國人交止於信、

【詩】……詩經の大雅の部の文王の篇なり、【穆穆】……奥ゆかしきさまなり、【於】……感歎して發する聲なり、【緝熙】……緝は、續ぐなり、熙は、明なり、日々に引き續きて、其の德を明らかにするなり、一說には、視出に續きて、其の德が明らかにするなりといへり、【敬止】……敬慎して至善に止まるなり、敬慎は、怠慢せざるなり、一說には、止まる所を敬慎するなりといへり、其の意は、大差なかるべし、止の字は、詩經の本文にては、意味なき助語なれども、此には之れを活用して、至善に止まることゝせり、【仁】……廣く衆人を親愛することなり、【敬】……君を尊ぶなり、【孝】……親を大切にするなり、【慈】……子を憐むなり、【信】……信實にして、虛言を吐かぬことなり、

【講義】さて、至善に止まるといふことを事實の上に證せむに、詩經の文王の篇に、「穆穆として奥ゆかしき周の文王は、あゝ、さても感心なることとには、日々に引き續きて、其の德を明らかにしたまひ、敬慎して至善に止まりたまへり」とあり、其の至善に止まりたまひし事柄はといふに、人の君となりては、仁に止まりて、民を愛したまひ、人の臣となりては、敬に止まりて、君を尊びまたひ、人の子となりては、孝に止まりて、親を大切にしたまふことなかりき、文王の仕方は、此の如し、子を憐みたまひ、一國の人と交はりては、信に止まりて、假り初めにも、言葉を違へて、人を欺きたまふことなかりき、文王の仕方は、此の如し、

【文法】止の字をもて、上に接して、聯脈とす、詩を引きたるは、止の字の爲めにして、仁、敬、孝、慈、信の至德を述ぶる枕詞ともいふべきものなり、

子曰、聽訟、吾猶人也、必也使無訟乎、無情者、不得盡其辭、大畏民志、此謂知本、

【聽訟】……人民の訴訟を裁判するなり、【猶人】……人と同じやうなるなり、【必也使無訟乎】……屹度訴訟を起こすことなからしめむかといふことなり、上に必とありながら、下に乎の字を置きて、不定の意味を含めるは、謙遜したる言葉にて、實は起こさせざることを斷言せるなり、【無情者、不得盡其辭、大畏民志】……情は、實なり、訴人の情實なり、情實を包み匿して、虛言を申し立つる者は、何程細かに吟味しても、其の口供の奥底を窮め盡くして、其の情實を捕へ得ること能はざるものなり、而して、人民の良心缺乏すれば、其の惡至らざる所なくして、世の亂れともなるものなれば、大に人民の意志を長れ氣遣ひて、政治の本の教化を務めて、健訟の風なからしむるに如かずといふことなり、一說には、聖人は、人民の情實なき者をして、詐僞の言葉を述べ盡くすことを得ざらしめて、大に其の心志を畏服せしむるなりといふことなりといひ、又一說には、情實なくして法律にのみ依る法官は、訴人の言葉を述べ盡くさせぬが故に、大に人民の心志を恐怖せしめて、上を怨ましむるやうになるなりといふことなりといへり、今は、最初の解に從ふ、

【講義】さて、上文に、國人と交はりては、信に止まるといひたるが、上に立つ者信なくしては、下にも信の行はるべきやうなし、されば、孔子の言葉にも、「人民の訴訟を聽きて、其の曲直を裁判するは、吾れといへども、人の如くに、十人並みの仕事をするまでにて、變はりたる手段はなけれども、吾れ若し民を治むる地位に立たば、己れの誠を衆人に推し及ぼして、屹度訴訟を起こすことなからしめむことあり、今、此の言葉の意味を推すに、情實を包み匿して、虛言を申し立つる者は、何程細かに吟味しても、其の口供の奥底を極め盡くして、其の情實を捕へ得ること能はざるものなり、而して、上に立つ者信なくして、世の亂れともなるものなれば、大に人民の意志を長れ氣遣ひて、政治の本の教化を務めて、健訟の風なからしむるに如かず」とあり、今、此の言葉の意味を推すに、情實を包み匿して、虛言を申し立つる者は、何程細かに吟味しても、其の口供の奥底を極め盡くして、其の情實を捕へ得ること能はざるものなり、而して、上に立つ者信なくして、世の亂れともなるものなれば、大に人民の意志を長れ氣遣ひて、政治の本の教化を務めて、健訟の風なからしむるに如かずといふことなり、一說には、聖人は、人民の情實なき者をして、詐僞の言葉を述べ盡くすことを得ざらしめて、大に其の心志を畏服せしむるなりといふことなりといひ、又一說には、情實なくして法律にのみ依る法官は、訴人の言葉を述べ盡くさせぬが故に、大に人民の心志を恐怖せしめて、上を怨ましむるやうになるなりといふことなりといへり、今は、最初の解に從ふ、

【文法】此謂知本は、始めの文に照らし結ぶなり、本の字の下に矣の助字なきは、文を切らずして、後へ續けむが爲めなり、

所謂脩身在正其心者、身有所忿懥、則不得其正、有所恐懼、則不得其正、有所好樂、則不得其正、有所憂患、則不得其正、心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味、此謂脩身在正其心、

【身有所忿懥】……恐れ憚るなり、【好樂】……而白く思ふなり、【憂患】……心配苦勞するなり、【視而不見】……視は、我れより視るなり、見は、彼れより見ゆるなり、【聽而不聞】……聽は、我れより聽くなり、聞は、彼れより聞こゆるなり、【心不在焉】……心の身に添はぬなり、卽ち放心することなり、

【講義】さて、上文に、身が脩むるは、心を正しくするに在りといひたるは、如何なる事ぞといふに、人は、心に物事を怒り腹立つことあれば、我れ知らず、腹立たしといふ方へ片寄りて、其の正しきことを得ざるなり、又物事を恐れ憚ることあれば、我れ知らず、恐ろしといふ方へ片寄りて、其の正しきことを得ざるなり、又物事を面白しと思ふことあれば、我れ知らず、面白しといふ方へ片寄りて、其の正しきことを得ざるなり、又物事を心配苦勞することあれば、我れ知らず、氣遣はしといふ方へ片寄りて、其の正しきことを得ざるなり、喜怒哀樂は、人の免れ難きことなれば、此の感情の動くに連れて、兎角心の中正を失ふなり、若し其の心、身に添はぬときは、目に物を視ても、能く見えず、耳に物を聽きても、能く聞こえず、口に物を食ひても、其の味はひの分からぬものなれば、心は實に大切なり、此の事を、身を脩むるは、其の心を正しくするに在りと謂ふなり、

所謂齊其家、在脩其身者、人之其所親愛而辟焉、之其所賤惡而辟焉、之其所畏敬而辟焉、之其所哀矜而辟焉、之其所敖惰而辟焉、故好而知其惡、惡而知其美者、天下鮮矣、故諺有之曰、人莫知其子之惡、莫知其苗之碩、此謂身不脩不可以齊其家、

【人】……世の常の人なり、【之】……於てなり、一說には、適さてなり、其の場合ひに適き至るなりといへり、【辟】……僻に同じ、片寄るなり、一說に、譬喩の譬なりといへるは、通じ難し、【賤惡】……賤しみ輕んじ憎み嫌ふなり、【哀矜】……氣の毒に思ふなり、【敖惰】……高ぶりて、

疎略にするなり、【鮮】……少に同じ、多からぬなり、【諺】……古くよりのいひならはしなり、【苗之碩】……穀物の苗の大いに育ちたるなり、

字解 さて、上文に、其の家を齊ふるは、其の身を脩むるに在りといひたるは、如何なる事ぞといふに、世の常の人は、家族と居るときは、手前勝手になるものにて、父母妻子の如き、親しみ愛する者に於ては、親しみ愛する方へ片寄り、孤兒寡婦の如き、氣の毒に思ふ者に於ては、憎しみ惡む方へ片寄り、伯叔父母の如き、長れ敬ふ者に於ては、長れ敬ふ方へ片寄り、孤兒寡婦の如き、氣の毒に思ふ者に於ては、高ぶりて、疎略にする者に於ては、高ぶりて、疎略にする方へ片寄りて、皆其の程を失ふなり、されば、好み愛しながらも、其の人の惡しき處を知りて取らず、惡み嫌ひながらも、其の人の善き處を知りて取る程に、公平なる者は、世の中に多からぬなり、されば、世俗の諺に、「世の常の人は、其の子の惡しきに心付かず、自慢をいひ、其の作りたる穀物の苗の大いなるに心付かず、其の苗の大いに育ちたるに心付かずして、不足をいふものなり」といへり、其の子の惡しきに心付かぬは、愛に溺るればなり、其の苗の大いなるに心付かぬは、欲に慾へばなり、かやうに手前勝手にては、家を齊へ難ければ、先づ我儘を直さざるべからず、此の事を、身の脩まらざるときは、其の家を齊へられぬなりと謂ふなり、

文法 所の字、而辭焉の字を語脈とし、次ぎに好惡の字を分布す、

所謂治國必先齊其家者、其家不可教、而能教人者無之、故君子不出家、而成教於國、孝者所以事君也、弟者所以事長也、慈者所以使衆也、

字解 【教人】……人は、國人を指す、【弟】……善く兄に事ふることなり、【長】……官長なり、【使衆】……衆人を召し使ふなり、臣民を兼ね、

句解 他く、上文に、國を治むるには、必ず先づ其の家を齊ふといひたるは、如何なる事ぞといふに、其の人の一家の者すら教へ導かれずして、徳ある人は、家に居て、外に出でざれども、一家を教へ導きたる餘徳にて、一國の人を教へ導くことを成し遂ぐるなり、何とならば、家に居て、親に孝なるは、外に出でて、君に事ふる譯けと同じ、家に居て、兄に弟なるは、外に出でて、官長に事ふる譯けと同じ、家に居て、子弟に慈愛を施すは、外に出でて、一國の衆人を召し使ふ譯けと同じ、內外の差別はあれど、其の理は同じければなり、

文法 孝者所二以事一君也云々は、下文の者を省とし、長を長とすの伏本なり、

康誥曰、如保赤子、心誠求之、雖不中不遠矣、未有學養子而后嫁者也、

字解 【求之】……赤子の思ふ所を察し求むることなり、【中】……的中するなり、【嫁】……嫁に行くなり、

句解 國を治むるは、むづかしきやうにて、左程にむづかしからず、我れより眞實に仕向くれば、民の心を得らるゝなり、されば、書經の康誥に

「民を安んずることは、慈母の赤子を保護するが如し」とあり、赤子は、言語を解せざれば、痛痒飢寒を知るに由しなけれども、我が心より眞實に其の思ふ所を察し求むれば、的中せざることもあれど、遠く外るゝことはなし、昔より、未だ子を養育することを學びたる上にて、嫁に行きたる者はあられども、子を持てば、皆兎も角も育て上ぐるなり、是れ此の方の眞實の自然に彼れに通ずるが故なり、國を治むるも、亦此の如し、

文法 上の慈者所二以使一衆也を承け、下の一家仁を起す、心誠の誠は、眞實の意なれども、上文の誠意を結びたるなり、

一家仁、一國興仁、一家讓、一國興讓、一人貪戾、一國作亂、其機如此、此謂一言僨事、一人定國、

字解 【一家】……人君の家を指す、【興】……慕ひ倣ふなり、【讓】……利を貪り、善に戻るなり、【機】……はづみなり、發動の由る所なり、【僨事】……大事を破壞するなり、【定國】……國を安んじ定むるなり、

句解 善惡共に、其の影響は、爭はれぬものにて、人君の家に仁愛の風行はれて、親族に厚くするなり、人君の家に禮讓の風行はれて、物事を爭はざるなり、之れに反して、一人の君、利を貪り、善に戻りて、仁愛禮讓なきときは、一國の人、皆其の不仁無禮を眞似て、相害ひ、相爭ひて、國の亂れを引き起こすなり、善惡共に、其の發動の由る所、此の如し、此の事を、古語にも、只〻一言の過失にて、大事を破壞し、只〻一人の君の德にて、國を安んじ定むと謂へり、

文法 仁讓を說くこと四句、貪戾を說くこと二句、仁讓は、長くして、寬大の氣見はれ、貪戾は、短くして、切迫の氣見はる、是れ文をもて意を示すなり、僨事は、貪戾を結び、定國は、仁讓を結ぶ、一人は、一人有慶の一人に通じて、萬乘至尊のことゝなるが故に、次ぎに堯、舜を引く、堯、舜は明君なれば、次ぎに又桀、紂の暴君を引きて、善惡の機を示す、是れ即ち文脈の妙處なり、

堯舜帥天下以仁、而民從之、桀紂帥天下以暴、而民從之、其所令反其所好、而民不從、

字解 【堯】……帝堯なり、【帥】……帝姓なり、【帥二天下一】……天下の人を引き廻すなり、【桀】……夏の桀王なり、【紂】……殷の紂王なり、【其所令反二其所一好、而民不從】……其の字は、桀、紂を指す、而は、則の意なり、而は、則と通ず、

句解 上文にいひたる通り、國の治まるも亂るゝも、上一人の心掛け次第なり、古の堯、舜二帝は、仁愛の行ひをもて、天下の人を引き廻したまひたれば、人民之れに從ひて、皆仁愛を行ひき、夏の桀王、殷の紂王は、暴虐の行ひをもて、天下の人を引き廻したまひたれば、人民之れに從ひて、皆暴虐を行ひき、桀王、紂王の如く、其の命令する所、其の好む所に反對して、己れは惡を行ふことを好みながら、人には善を行へといふときは、人民は、其の命令に從はぬものなり、

文法 天下の字は、上の天下平に應じ、以仁は、上の興仁に接し、以暴は、上の貪戾に接す、

是故君子有諸己、而后求諸人、無諸己、而后非諸人、所藏乎身不恕、而能喻諸人者、未之有也、故治國在齊其家、

【字解】【諸】……於に同じくして、意味なし、【求】……責め望むなり、【非】……咎め正すなり、【所藏乎身】……我が身に存する所なり、【恕】……思ひ遣りなり、己れを推して人に及ぼすことなり、【喻】……教へ諭すなり、

【解】此の譯けなれば、君子とて、德ある人は、己れに善のある上にて、人にも善のあらむことを責め望み、己れに惡のなき上にて、人の惡を咎め正すなり、かやうにすれば、人は必ず心服するなり、然るを、之れと反對に、我が身に存する所は、他人の上を思ひ遣らずして、己れは己れ、人は人と區別して、自ら惡事を行ひながら、能く人を教へ諭して、善事を行はしめたる者は、昔より、まだ其の例しあらぬなり、即ち家風の惡しき者にして、國風を善くせし例しは、聞き及ばざる所なり、されば、國を治むるは、先づ其の家を齊ふるに在るなり、

【文法】上に喻の字あり、此に君子をもて承く、

詩云、桃之夭夭、其葉蓁蓁、之子于歸、宜其家人、宜其家人、而后可以教國人、

【字解】【詩】……詩經の周南の部の桃夭の篇なり、【夭夭】……水の若やかなるさまなり、【蓁蓁】……葉の美しく盛んなるさまなり、【之子】……此の娘子なり、【于歸】……此の好時節に嫁に行くなり、【宜其家人】……嫁に行きたる先の家族と善く居り合ふなり、

【解】國を治むるには、先づ其の家を齊ふべきことの證據は、詩經の中にも、少なからず、先づ桃夭の篇に、「桃の木の夭夭として若やかに、其の葉の蓁蓁として美しく盛んなるを見るに、就けても、年若くして美しき此の娘子の、此の好時節に嫁入りして、其の家族達と善く居り合ひたるは、誠に芽出度ことなり」とあり、如何にも、夫婦は、人倫の始めにして、一家の平和の基なれば、其の家族達と善く居り合ひたる上にてこそ、一國の人にも、夫婦和合の肝要なることを教へらるゝなれ、

【文法】此に詩四句を引きて、後に又詩四句を引く代本とす、次ぎは、詩二句を兩度に引き、後段に二句四句と引きて、前後法を合はす、常に詩の語と作者の語と錯夾せり、

詩云、宜兄宜弟、宜兄宜弟、而后可以教國人、詩云、其儀不忒、正是四國、其爲父子兄弟、足法而后民法之也、此謂治國在齊其家、

【字解】【詩】……詩經の小雅の部の蓼蕭の篇なり、【宜兄宜弟】……弟となりては、兄と善く居り合ひ、兄となりては、弟と善く居り合ふなり、【其儀不忒】……人君の一家の行儀の違はぬなり、【正是四國】……此の國内の隅々までの人民の不正を正しくするなり、

【解】次ぎに、蓼蕭の篇に、「弟となりては、兄と善く居り合ひ、兄となりては、弟と善く居り合ふ」とあり、如何にも、兄弟善く居り合ひたる上にてこそ、一國の人にも、友愛の肝要なることを教へらるゝなれ、次ぎに、鳲鳩の篇に、「人君の一家の行儀違はずして、此の國内の隅々までの人民の不正を正しくす」とあり、如何にも、人君の、父子の親睦、兄弟の友愛など、衆人の儀範となるべき行狀の申し分なき上にてこそ、其の國内の人民は、之れを手本とするものなれ、此の事を、國を治むるは、其の家を齊ふるに在りと謂ふなり、

所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民不倍、是以君子有絜矩之道也、

【字解】【老老】……老人を老人として尊敬するなり、【興】……上の興仁の興に同じ、【長長】……長者を長者として尊敬するなり、【恤孤】……幼くして父なき者を憐むなり、【不倍】……上の意に背かぬなり、【絜矩之道】……絜は、執り持つなり、矩は、曲尺なり、曲尺を執り持ちて、物の四角を見るやうに、我が心の物差しをもて、人の心を推し量る仕方にて、恕のことなり、一說に、絜は、度るなり、矩は、曲尺なり、曲尺をもて度るなりといへるも、其の意は同じ、

【解】さて、上文に、天下を平らかにするは、其の國を治むるに在りといひたるは、如何なる譯けぞといふに、上に立ちたる人、老人を老人として尊敬すれば、人民も、孝行を慕ひ倣ふなり、上に立ちたる人、長者を長者として尊敬すれば、人民も、弟道を慕ひ倣ふなり、上に立ちたる人、幼くして父なき者を憐めば、人民も、之れを見習ひて、上の意に背くことなく、其の憐むべき者を憐むなり、此の譯けなれば、君子とて、位あり德ある人は、絜矩の道とて、曲尺を執り持ちて、物の四角を見るやうに、我が心の物差しをもて、人の心を推し量る仕方を行ひて、己れを正しくして、人を率ゐるなり、

【文法】天下は、天子の主る所にして、國は、諸侯の主る所なり、平二天下一在二治其國一とは、他の條目と法を合はせたるなり、然れども、此に至りては、結句に平二天下一在二治其國一の語なくして、下に又明德、親民、至善のことに及べり、此に絜矩之道とある故に、後に至りて、君子有二大道一の句を生ず、

所惡於上、毋以使下、所惡於下、毋以事上、所惡於前、毋以先後、所惡於後、毋以從前、所惡於右、毋以交於左、所惡於左、毋以交於右、此之謂絜矩之道、

【字解】【惡】……己れに仕向けらるゝことを惡み嫌ふなり、【上】……主君なり、【下】……臣下なり、【前】……先輩なり、【先】……先んじ加ふるなり、先輩の仕向けなるが故に、先んずといふ、【後】……後輩なり、【從】……從ひ施すなり、後輩の仕向けなるが故に、從ふといふ、【右】……右鄰りの類なり、【左】……左鄰りの類なり、

【解】絜矩の道とは、如何なる仕方なるぞといふに、上たる人、即ち主君の仕向けにて、己れの惡み嫌ふべきことは、不仁無禮の類なれば、人も

左樣に思ふちむと推し量りて、不仁無禮の如き仕向けをもて、下たる者、即ち臣下を使ふまじきなり、下たる者の仕向けにて、己れの惡み嫌ふべきことは、不忠不敬の類なれば、人も左樣に思ふちむと推し量りて、不忠不敬の如き仕向けをもて、上たる人に事ふまじきなり、前なる人、即ち先聖の仕向けにて、己れの惡み嫌ふべきことは、傲倨壓制の類なれば、人も左樣に思ふちむもて、後なる人、即ち後輩に先んじ加ふまじきなり、後なる人の仕向けにて、惡み嫌ふべきことは、强情不通の類なれば、人も左樣に思ふちむと推し量りて、强情不通の如き仕向けをもて、前なる人に從ひ施すまじきなり、右なる人、即ち右鄰りの人の仕向けにて、己れの惡み嫌ふべきことは、刻薄無情の類なれば、人も左樣に思ふちむと推し量りて、刻薄無情の如き仕向けをもて、左なる人、即ち左鄰りの人に交はるまじきなり、左なる人の仕向けにて、己れの惡み嫌ふべきことは、同じく刻薄無情の類なれば、人も左樣に思ふちむと推し量りて、同じく刻薄無情の如き仕向けをもて、右なる人に交はるまじきなり、總べて、かやうに、己れの欲し望まざることを、人に施し行ふべきことなり、

文法 惡の字を六たび使ひて、上の好惡に照らす、因りて又次ぎの文に、好惡の字を出だす、

詩云、樂只君子、民之父母、民之所好好之、民之所惡惡之、此之謂民之父母、

字釋 【詩】……詩經の小雅の部の南山有臺の篇なり、【樂只】……安らかに樂しきなり、只は、助語なり、

解義 上に立つ人、絜矩の道を行へば、必ず下の心を得て、國の治まるものぞかし、されば、詩經の南山有臺の篇に、「安らかに樂しき君子は、人民の父母も同樣なり」とあり、其の譯けは、人民の愛し好むことは、己れも愛し好み、人民の惡み嫌ふことは、己れも惡み嫌ひて、人民を視ること、我が子の如くなるが故に、人民も、亦親の如くに慕ふなり、此の事を、人民の父母と謂ふ、其の安らかに樂しきは、常に善事を行ひて、心の愉快なることなり、

文法 民之父母は、親民に應ず、

詩云、節彼南山、維石巖巖、赫赫師尹、民具爾瞻、有國者不可以不愼、辟則爲天下僇矣、

字釋 【詩】……詩經の小雅の部の節南山の篇なり、【節】……截と通ず、截然として、高く聳ゆるさまなり、【南山】……周の都の南に在る終南山なり、【巖巖】……山の石の人の目に付くさまなり、【赫赫】……世に時めくさまなり、【師尹】……天子の執政大臣なり、一說には、師は、官の名にして、三公の一つなり、尹は、其の官に在る人の姓なりといへり、【具】……俱に同じ、【爾】……汝なり、師尹を指す、一說には、此の如くの義にて、山の石の目に付くやうにとの意なりといへり、【瞻】……師尹の所爲の善惡を仰ぎ見るなり、【有國者】……國を持つ人なり、【辟】……僻に同じ、片寄りて、正しからぬなり、【僇】……戮に同じ、恥辱なり、

解義 又詩經の節南山の篇に、「截然として、高く聳えたる、周の都の南なる、終南山は、其の石巖巖として、人の目に付くなり、之れと同じく、赫赫として、世に時めける、天子の執政大臣は、人民の俱々に汝の所爲の善惡を仰ぎ見るものなり」とあり、上に立つ人は、此の如く、諸人に目差さるゝものなれば、國を持ち、世を治むる人は、氣を付ければならぬなり、其の好むこと、惡むこと、片寄りて、正しからざれば、天下の人の戮辱を被りて、身をも國をも失ふなり、

文法 是れは、政事の當を得べきことをいひたるにて、親民に屬するなり、愼の字は、上の愼獨に應じ、辟の字は、上の辟爲に應ず、終はりに突の助字を加へて、文段を切りたるは、是れにて、平天下の解を終はれるなり、次篇には、又治國平天下を重れて說く、文の餘波なり、

詩云、殷之未喪師、克配上帝、儀監于殷、峻命不易、道得衆則得國、失衆則失國、

字釋 【詩】……詩經の大雅の部の文王の篇なり、【殷】……周より前の世なり、【未喪師】……喪は、失ふなり、師は、衆なり、まだ天下の民心を失はざるなり、帝乙の時までを指す、【配上帝】……配は、配合するなり、其の德の天と並び立つなり、上帝は、天なり、天は萬物を主宰するものなれば、假りに名づけて、上帝といふ、【儀】……宜に同じ、詩經には、宜に作れり、【監】……監み戒むるなり、【峻命】……大命に同じ、天下を有つべき命令なり、詩經には、駿命に作れり、【不易】……保ち易からぬなり、何時にても、取り消さるゝことなり、【道】……言に同じ、【得衆】……衆人の心を得るなり、【失衆】……衆人の心を失ふなり、喪師に同じ、

解義 上に引きたる二つの詩にて、絜矩の道を行へば、人民の父母と仰がれ、絜矩の道を行はざれば、天下の人の戮辱を被ることを示したれば、次ぎには、此の二つの意味を兼ねたるものを證すべし、詩經の文王の篇に、「昔し、殷の天子の、まだ天下の民心を失はざりし、帝乙の時までは、能く上帝に配合して、其の德、天と並び立たれしが、紂王に至りて、暴虐を行ひて、遂に天下を失はれけり、されば、我が周室は、宜しく殷の滅亡を監み戒めて、懼れ愼むべきことなり、上帝より下し置かるゝ大命、即ち天下を有つべき命令は、保ち易からぬものにて、其の政惡しければ、何時にても取り消さるゝものなり」とあり、是れは、絜矩の道を行ひて、衆人の心を得れば、國、天下を得、絜矩の道を行はずして、衆人の心を失へば、國、天下を失ふことをいへるなり、

文法 詩の四句を引けるは、上の桃夭の章と同法なり、

是故君子先愼乎德、有德此有人、有人此有土、有土此有財、有財此有用、德者本也、財者末也、外本內末、爭民施奪、

字釋 【有人】……人民を得るなり、一說に、人は、賢人なりといへるは、從ひ難し、【有土】……土地を得るなり、【有財】……貨財を得るなり、【有用】……國用の供給を得るなり、【爭民施奪】……人民をして、利を爭はしめて、上より物を奪ふべき敎へを施すなり、

解義 此の譯けなれば、君子とて、位ある人は、先づ我が德に氣を付けて、衆と好惡を同じくするなり、身に德ありて、衆と好惡を同じくすれば、衆皆心を寄するが故に、人民を得るなり、既に人民あれば、水陸に萬寶を藏する土地を得るなり、既に人民あり、又土地あれば、天產人工の貨財を得るなり、既に貨財あれば、國用の供給を得るなり、されば、德は本にして、財は末なり、其の本たるべき德を外にし輕んじて、其の末

たるべき財を內にし重んずれば、人民も亦其の眞似をするが故に、取りも直さず、人民をして、利を爭はしめて、上より物を奪ふべき敎へを施すことになるなり、

文法 愼乎德こは、上文の不可不以愼より承け來る、

是故財聚則民散、財散則民聚、是故言悖而出者、亦悖而入、貨悖而入者、亦悖而出、康誥曰、惟命不于常、道善則得之、不善則失之矣、

字解 【悖】……逆ふなり、無理非道なるなり、【惟命不于常】……天命は常に一人の身に存在せざるなり、卽ち天下は持ち廻りなるなり、前の峻命不易と同樣の意味なり、

大意 此の譯けなれば、貨財の上に寄り聚まるときは、人民上を怨みて、他の國へ離れ散るなり、之れに反して、貨財の下に散り布くときは、人民上を愛して、其の國へ寄り聚まるなり、此の譯けなれば、言葉の道理に逆ひて口より出づるときは、亦道理に逆ひたる言葉の耳に入るものなり、卽ち君より無理なる命令をすれば、人民之れと同じく、貨財の道理に逆ひて藏に入るときは、亦道理に逆ひたる貨財の藏より出づるものなり、卽ち君より非道の取り立てをすれば、人民之れを零ひ返すなり、されば、書經の康誥の篇に、「天命は、常に一人の身に存在せず」とあり、是れは、己れ善なれば、天命を得て、其の位を保たれ、己れ不善なれば、天命を失ひて、其の位を保たれぬことをいへるなり、

文法 此の處にて、財利を語る、德と善とに歸して、之れを雜言する所以は、財利は、もと小人の道なればなり、二つの是故は、上の是故君子を承く、二つの則は、財利を接續し、二つの亦は、言貨出入を接續す、

楚書曰、楚國無以爲寶、惟善以爲寶、舅犯曰、亡人無以爲寶、仁親以爲寶、

字解 【楚書】……楚の昭王の時の記錄なりといへり、國語の楚語に似寄りたる事あれど、慥かにそれとは定め難し、或は別に楚の國の事を書きたるものありて、今は傳はらざるならむ、【舅犯】……晉の文公の舅の姓は狐、名は偃、字は子犯といふ人なり、【亡人】……國を逃亡したる人なり、晉の公子の重耳、卽ち文公をいふ、此の語は、禮記の檀弓の篇に見えて、亡人を喪人に作れり、亡も、喪も、同じことなり、【仁親】……仁人と親戚となり、或は、仁惠、親愛と見るも通ずべし、一說には、仁道を親愛するなりといひ、又一說には、親を愛するなりといへり、此の兩說は、孰れも非なり、但し、檀弓にては、父を愛することなれども、此の處にては、其の義を轉じたるなり、

大意 前に述べたる善といふことは、實に大切なるものなり、されば、楚の國の記錄にも、「我が楚の國は、遙土にて、寶とすべき物とてはなけれども、唯、善人を寶として、此の上もなく珍重せり」とあり、又晉の公子の重耳の、國の亂を避けて、狄の地に在りて、父獻公の喪に籠もられし時、秦の穆公、使ひを遣はして、歸國を勸めさせられしに、重耳の舅の子犯、之れを辭退せしめて、「國を逃亡したる者は、何の寶もなけれども、仁人と親戚とを、此の上もなき寶とせり、此の餘に望むことなし」といはしめき、是れ皆德を本にし財を末にせるなり、

文法 楚書の語、及び舅犯の言を引きて、善、仁、親を寶とし、財を寶とせざることを證す、

秦誓曰、若有一个臣、斷斷兮無他技、其心休休焉、其如有容焉、人之有技、若己有之、人之彥聖、其心好之、不啻若自其口出、寔能容之、以能保我子孫、黎民尙亦有利哉、人之有技、媢疾以惡之、人之彥聖、而違之俾不通、寔不能容、以不能保我子孫、黎民亦曰殆哉、

字解 【秦誓】……今の書經の周書の篇の名なり、秦の穆公の羣臣に誓ひたるものなり、【一个】……个は、箇に同じ、一人なり、書經には、一介に作れり、【斷斷】……專一なるさまなり、【休休焉】……寬大なるさまなり、【容】……人を容るゝなり、【彥聖】……彥は、人品の美しきなり、聖は、物事の道理に行き渡りたるなり、二字にて、德ある者のことゝなるなり、【啻】……多分、大方の意なり、衆民も亦多分利益を被るならむといふことなり、書經には、尙の字なくして、……黎民は、衆民なり、尙は、庶幾に同じ、亦の下に、職の字あり、【媢疾】……妬み忌むなり、疾は、嫉に同じ、【違】之俾不通】……俾は、使に同じ、其の志しに違ひ戾りて、上に通達せざらしむるなり、【曰殆哉】……危からむといふことなり、曰は、越に同じ、助語なり、

大意 さて、上文に、人民の父母たる者は、人民の愛し好むことは、己れも愛し好み、人民の惡み嫌ふことは、己れも惡み嫌ふといひたるが、人君は、能く人を容るゝ士を愛し好みて、之れを用ゐ、人を容るゝこと能はざる士を惡み嫌ひて、之れを捨つべし、書經の秦誓の篇に「若し此に一人の臣あらむに、斷斷として專一にして、外の技藝はなけれども、其の心休休焉として寬大にして、能く人を容るゝが如くなりとせむ、然れども、其の實は、能く人を容るゝ者あり、人を容るゝこと能はざる者あり、若し其の人にして、他人の技藝あるを見て、己れの身に其の技藝あるやうに思ひて悅び、他人の彥聖にして德ある を見て、會に其の口より出だして譽むるのみならず、其の心より之れを愛し好む者ならむには、是れ實に能く人を容るゝなり、此の如き者、事に任ぜば、才德並び逆まむ程に、能く我が秦の子孫を保ち安んじて、衆民も、亦多分利益を被るならむ、之れに反して、其の人にして、他人の技藝あるを見て、妬み忌み、他人の彥聖にして德あるを見て、其の志しに違ひ戾りて、上に通達せざらしめむには、是れ實に人を容るゝこと能はざるなり、此の如き者、事に任ぜば、才德共に退かむ程に、我が秦の子孫を保ち安んずること能はずして、衆民も、亦危からむ」とあり、僅かに一人の臣にても、國家の利害休戚に關すること、此の如きものなれば、人を擇ぶは、大切なることなり、

文法 秦誓の文を引けるは、上の淇澳の文の長さに應じたるなり、

唯仁人放流之、迸諸四夷、不與同中國、此謂唯仁人爲能愛人、能惡人、

惡人、

【放流之】……放は、置くなり、一つ處に逐ひ込めて、出ださぬなり、流は、水の流れて返らぬやうに、遠方へ逐ひ遣るなり、之の字は、前の人を容るゝこと能はざる者を指す、【進諸四夷】……進は、屏に同じ、退くるなり、諸は、之乎の二義を兼ぬ、進之乎四夷に同じ、四夷は、東夷、南蠻、北狄、西戎なり、其の惡人を四方の夷狄に退くるなり、【中國】……四夷に對する稱にして、漢土の內地をいふ、

人を容るゝこと能はずして、才德の進路を妨ぐる者は、惡むべき小人なれど、大抵の人は、之れを用ゐて、國家の害を招くものなるが、唯獨り公平にして私なき仁人は、或は之れを一つ處に逐ひ込めて出ださぬか、或は水の流れて返らぬやうに遠方へ逐ひ遣るか、孰れにしても、之れを四方の夷狄に退けて、內地に同居せしめぬなり、此の事を、古語に、「唯一獨り仁人は、能く愛すべき人を愛し、能く惡むべき人を惡むことをなす」と謂へるなり、

見賢而不能舉、舉而不能先、命也、見不善而不能退、退而不能遠、過也、

【先】……己れの地位より先きにし薦むるなり、一說には、他の臣よりも先きに用ゐるなりといへり、前の如くに解すれば、人臣の事となり、後の如くに解すれば、人君の事となる、孰れにしても、通ずれども、今は、前の解に從ふ、【命也】……命は、慢に作るべしとも、怠に作るべしとも、一說には、命也と過也とは、互文にて、命は、天命、過は、過失なり、人より觀れば過失なれども、天より觀れば天命なり、天より觀れば天命なれども、人より觀れば過失なりと、雙方を兼ね合はせたる言葉なりといへり、

才あり德ある賢人を見知りながら、之れを擧げ用ゐること能はざるか、之れを擧げ用ゐても、己れの地位より先きにし薦むること能はざるは、己れの怠慢なり、又善からぬ者を見知りながら、之れを逐ひ退くること能はざるか、之れを逐ひ退けても、遠ざけて近寄せぬこと能はざるは、己れの過失なり、怠慢と過失とは、均しく國家に不忠なることにて、仁人のせざる所なり、

賞罰のことを上に論じたるより、擧退に及べり、

好人之所惡、惡人之所好、是謂拂人之性、菑必逮夫身、

【拂人之性】……拂は、逆ふなり、善を好みて不善を惡む人の常性に逆ひ戾るなり、【菑必逮夫身】……菑は、災なり、逮は、及ぶなり、災難の屹度其の身に來り及ぶなり、

善を好み、不善を惡むは、人の常性なれど、小人は、之れに反して、人の惡むことを好み、人の好むことを惡むなり、此の事を古語に、「人の常性に逆ひ戾れば、子孫の代を待たずして、災難の屹度其の身に來り及ぶものなり」と謂へり、

是故君子有大道、必忠信以得之、驕泰以失之、

【大道】……大いなる仕方なり、己れを脩め、人を治むる仕方をいふ、【忠】……己れの誠を推して、人に深切を盡くすことなり、【信】……信實にして、虛言を吐かぬことなり、【得之】……大道を手に入るゝなり、【驕】……人に高ぶることなり、【泰】……身持ちの放蕩なることなり、【失之】……大道を取り失ふなり、

此の譯けなれば、君子とて、位ある人には、己れを脩め、人を治むる、大いなる仕方あり、忠とて、己れの誠を推して、人に深切を盡くすことゝ、信とて、信實にして、虛言を吐かぬことゝの二つをもて、此の大いなる仕方を手に入るゝなり、驕とて、人に高ぶることゝ、泰とて、身持ちの放蕩なることゝの二つをもて、此の大いなる仕方を取り失ふなり、されば、君子は、忠信なるべくして、驕泰なるべからず、

得失の字は、上に再び之れをいへり、今又之れをいひて結ぶ、

生財有大道、生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒、則財恆足矣、

【生財】……國用に供する貨財を生み出だすなり、【生之者衆】……之の字は、財を指す、下の三つの之も同じ、者は、人を指す、次の者も同じ、衆は、多きなり、農工商を指す、【食之者寡】……食むといひても、口に食ふのみにあらず、衣食住一切の供給を待つことなり、昔は、農業を主とせしが故に、五穀の如き農產物に就きて、斯くいへるなり、寡は、少なきなり、官吏を指す、【爲之者疾】……爲は、作に同じ、者は、事を指す、次の者も同じ、疾は、速に同じ、【舒】……疾の反對にして、緩に同じ、

上たる人の國用に供する貨財を生み出だすにも、大いなる仕方あり、其の仕方は、國に遊民なければ、貨財を生み出だす者多し、朝廷に素餐の官吏なければ、之れを衣食する者少なし、民業を妨げざれば、之れを作り出だすこと速やかなり、節儉なれば、之れを用ゐること緩やかなり、かやうにすれば、貨財は常に足りて餘りあるなり、是れ財政の原則なり、

生財は、上の有土此有財、有財此有用に接す、有大道は、上の君子有大道に接す、

仁者以財發身、不仁者以身發財、未有上好仁而下不好義者也、未有好義其事不終者也、未有府庫財非其財者也、

【以財發身】……貨財に昌へて、身を起こすなり、即ち金錢よりも身を大切にするなり、【義】……義は、事を行ひて、其の宜しきに叶ふことなれど、此の處にては、上を敬ひ、君に忠なることゝ見るべし、【其事】……君の事業なり、【不終】……成就せぬなり、【府庫】……府は、金錢の置き處なり、庫は、道具の置き處なり、【其財】……君の貨財なり、

國用に供する貨財を生み出だす仕方は、上の如くなるが、仁君ならでは、貨財を得ること能はざるなり、其の譯けは、總べて、仁心ある者は、貨財をもて、身を起こし、仁心なき者は、身をもて、貨財を起こすなり、即ち仁心ある者は、貨財を散して、人を惠むが故に、自然に人に歸服せられて、眞に其の身を起こすなり、之れに反して、仁心なき者は、貨財を聚めて、人を虐ぐるが故に、自然に人に離叛せられて、實は其の身を亡ぼすなり、昔より、まだ上たる者、仁を好みながら、下たる者、義を好まざるはなく、又昔より、まだ下たる者、義を好みながら、君の事

業の成就せざるはなく、又昔より、まだ上仁を好み、下義を好みながら、君の御蔵の金銭道具の君の貨財とならざるはなし、

文法 身の字は、脩身より轉じ來る、仁の字より義の字を生じ、終はりにかりて、義をもて結ぶ、

孟獻子曰、畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣、與其有聚斂之臣、寧有盜臣、此謂國不以利爲利、以義爲利也、

字解 【孟獻子】……魯の國の大夫の仲孫蔑といふ人のことなり、【畜馬乘】……馬車に用ゐる四頭立ちの馬を飼ふなり、士の、初めて試みられて、大夫となりたる場合ひをいふ、【不察於雞豚】……雞又は豚などの飼ひ方に目を付けぬなり、【伐冰之家】……冰を伐り取る家なり、卿大夫以上を指す、昔は、卿大夫以上になれば、冰室より冰を伐り取りて、喪の時には、死骸を冷やし、祭りの時には、魚肉禽獸を冷やして、腐敗を防ぐことを得るなり、【百乘之家】……乘は、車の數にして、輛に同じ、百乘は、兵車百輛なり、事あるときには、兵車百輛を出だす家なり、領地を有する上卿上大夫を指す、昔は、上卿上大夫になれば、君より領地を賜はりて、是だけの準備をせしなり、【聚斂之臣】……租税を多く取り立てゝ、主人の腹を肥やす家來なり、【寧】……不十分なる甲乙を比較して、其の稍〻勝さりたる方を取るときの言葉なり、【盜臣】……主人の財を盜み取る家來なり、

説明 昔し、魯の國の大夫の孟獻子のいひたる言葉に、「士の、初めて試みられて、大夫となりて、馬車に用ゐる四頭立ちの馬を飼ふやうになれば、君より相當の祿を賜はるが故に、雞又は豚などの飼ひ方に目を付けて、人民と利益を爭はぬなり、又冰を伐り取りて、葬式又は先祖祭りの用に供する、卿大夫以上になれば、更に手厚き祿を賜はるが故に、雞又は豚よりも大いなる、牛又は羊を飼ひ立てゝ、人民の利益を妨げぬなり、又君より領地を賜はりて、事ある時には、兵車百輛を出だす、上卿上大夫になれば、其の定式の收入にて、立派に暮らさるゝが故に、租税を多く取り立てゝ、主人の腹を肥やす家來を養はぬなり、其の家に、租税を多く取り立てゝ、主人の腹を肥やす家來のあらむよりは、寧ろ主人の財を盜み取る家來あれかしとあり、主人の財を盜む家來は、其の害、主人に止まれども、租税を多く取り立つる家來は、諸人の怨みを上に歸すればなり、此の事を、國を有つ者は、利といふことを利とせずして、義といふことを利とすとは謂ふなり、

文法 聚斂、盜臣は、上の發ゝ財に應す、

長國家而務財用者、必自小人矣、彼爲善之、小人之使爲國家、菑害並至、雖有善者、亦無如之何矣、此謂國不以利爲利、以義爲利也、

字解 【務】……先務とするなり、【自小人】……自は、由に同じ、小人の利をもて君を誘ふに由るなり、【彼爲善之、小人之使爲國家】……彼は、君を指す、使ゝ爲の爲は、治に同じ、彼の君、財政を上手にする者なりと思ひて、小人をして、國家を治めしむるなり、一説には、彼爲ゝ善之の上下に闕文誤字あらむといへり、【菑害】……菑は、天災なり、害は、人害なり、【善者】……小人なり、一説には、善人君子なりとあれど、上の爲ゝ善之の善の字を直ちに承くるかたなるべし、

説明 國家に君長となりて、財用を聚むることを先務とする者は、屹度之れに事ふる小人の利をもて君を誘ふに由るなり、然るに、彼の君、財政を上手にする者なりと思ひて、小人をして、國家を治めしむれば、小人は、得意になりて、上に媚び、下を虐ぐるが故に、神怒り、民怨みて、水旱飢饉の天災、盜賊叛亂の人害、相並びて到來するなり、さて、此のやうになりたる時は、財政を上手にする者なりと思はれたる小人の罪ありといへども、亦之れを如何樣にすることもならずして、只、手を束ねて、滅亡を待つばかりなり、されば、人君たる者の、財用を聚むることを先務として、小人を信任するは、大いなる心得違ひなり、德は本なり、財は末なり、本を外にし、末を内にすべからず、此の事を、前にもいひたる通り、國を有つ者は、利といふことを利とせずして、義といふことを利とすとは謂ふなり、

文法 國家の字は、平天下、治國、齊家を綜合せるなり、不以利爲利、以義爲利の結句を再び用ゐたるは、丁寧反復して、戒めたるなり、又之れを再言せるは、文氣を諧かに收めたるなり、

増訂 大學講義 終

増訂 中庸講義

興文社編纂

天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教、

【天命之謂性】……天は、萬物の主宰なり、凡そ人爲に迷らずして、自然に然るものを、皆天といふ、命は、命令なり、性は、仁義禮智忠信孝悌などの總名にして、大學にては、德といふ、此の性は、人の天より命令的に授けられたるものなれば、天の命令を性と謂ふなり、【率性之謂道】……率は、循ふなり、其の性の儘に循ひ由りて、蹈み行ふべき筋道を、人たる者の道と謂ふなり、道は、道路の道の如く、己れも由り、人も由るべき筋道のことなり、【脩道之謂教】……其の筋道の分からぬ所に手を入れて、能く分かるやうに教へ示すことを、人たる者の教へと謂ふなり、脩は、脩復の脩にして、新たに造ることにあらず、大學の脩身の脩に同じ、

【考説】人たる者の道は如何にと尋ぬるに、人には性といふものあり、親の慈なるは、卽ち性なり、子の孝なるは、卽ち性なり、無慈悲なる親、不孝なる子に同情を寄せざるも、卽ち性の然らしむる所なり、趨じて、人に仁義禮智忠信孝悌などの如き、いと美しき持ち前あるは、天より人の持つべきものとして、命令的に授けられたるものなれば、天よりいへば命にして、人よりいへば性なり、德なり、卽ち天の命令を性と謂ふなり、さて、人は、此の如く、天の命令を身の持ち前の性として、生まれ出でたる者なれば、日用萬事、其の性の儘に循ひ由りて、蹈み行ふべき筋道を、人たる者の道と謂ふなり、卽ち道路の道の如く、己れも由り、人も由るべき筋道にして、此の筋道に由らざれば、世を渡ること叶はざるなり、人たる道は、此の如し、さりながら、其の筋道には、相當の標準あり、制裁ありて、其の程々に叶はずしては、之れを全くすることを得ざるが故に、其の筋道の分からぬ所に手を入れて、此の事は、斯くすべし、此の事は、斯くすべからずと、能く分かるやうに教へ示すを、人たる者の教へと謂ふなり、是れ恰も道路の所々に目印を立てゝ、其の左右を示すにも均しかるべし、以上の三つを約めていへば、教へは、道に本づき、道は、性に本づくなり、性の外には道なく、道の外には教へなし、人たる道は、性より出でゝ、教へとなるなり、

【文法】命の字、性の字、道の字、教の字は、中庸の通篇を貫けり、論語の公冶長の篇に、夫子之性與二天道一不可二得而聞一也と子貢のいへりし如く、孔子は、常に性を語られざりけるが、子思に至りて、始めて之れを登揮して、道の根據を指し示されたり、

道也者不可須臾離也、可離非道也、是故君子戒愼乎其所不睹、恐懼乎其所不聞、莫見乎隱、莫顯乎微、故君子愼其獨也、

【字釋】【道也者】……也者は、者に同じ、也を添へたるは、道を慥かにしたるなり、後の中也者、和也者も同じ、【須臾】……暫時なり、【君子】……位ある人のことにもなり、德ある人のことにもなり、位もあり、德もある人のことにもなる、此の處は、德の上にていふ、【戒二愼乎其所一不レ睹】……戒愼は、氣を付くるなり、其の字は、己れを指す、睹は、見るなり、己れの人に見られぬ所にも氣を付くるなり、【恐二懼乎其所一不レ聞】……己れの人に聞かれぬ所にも氣を付くるなり、戒愼と恐懼とは、互文にして、愼しむこと、卽ち氣を付くることなり、下の愼獨は、此の戒愼と恐懼との二句を約言せるなり、【莫レ見二乎隱一】……隱は、薄暗きなり、薄暗き場合ひ程、見られ易きことはなきなり、【莫レ顯二乎微一】……微は、細事なり、微細なる事程、顯はれ易きことはなきなり、【獨】……人に見られず聞かれずして、獨り居る時なり、一說に、他人の有無に拘はらず、己れの獨り知る場合ひなりといへるは、非なり、

【文法】愼の字は、戒愼、恐懼に應じ、獨の字は、所レ不レ睹、所レ不レ聞に應ず、愼獨の二字は、子思の創語なり、大學にも之れを用ゐたり、知るべし學庸は連絡ある書なることを、

【解釋】人たる道は、此の如く、我が持ち前の性より出づるものなれば、暫時も之れを離るゝことはならぬなり、若し離れても苦しからぬものならば、それは道にはあらぬなり、此の譯けなれば、君子とて、德ある人ほ、人に見られぬ所にも氣を付けて、道を離れぬやうにするなり、薄暗き場合ひ程、見られ易きことはなく、微細なる事程、顯はれ易きことはなし、されば、君子は、人に見られず聞かれずして、獨り居る時にも、其の獨りの身に氣を付けて、假り初めにも、道を離るゝことをせぬなり、

喜怒哀樂之未發、謂之中、發而皆中節、謂之和、中也者天下之大本也、和也者天下之達道也、致中和、天地位焉、萬物育焉、

【字釋】【未レ發】……まだ發動せざるなり、【中】……過不及なきなり、【中レ節】……其の程々に當たるなり、【和】……加減の善きなり、【達道】……通じ行はるゝ道なり、【致二中和一】……中と和とを極め盡くすなり、中を極め盡くすは、事を處し、物に接して、本心の中を失はざるなり、和を極め盡くすは、喜怒哀樂の發動する時に、其の程々を失はざるなり、【天地位焉】……天地も其の所に安んずるなり、【萬物育焉】……人獸草木、一切の物も生育を遂ぐるなり、

【解釋】さて、人たる道を離れぬやうにするには、性情を持する工夫を肝要とす、人の心には、喜ぶことあり、怒ることあり、哀しむことあり、樂しむことあり、是れは、己れの持ち前の性の、物に觸れ、事に感じて、發動することにて、卽ち情といふものなり、此の情の、まだ發動せざる間は、卽ち性にして、少しも過不及なきものなれば、之れを名づけて、中といふなり、中は、中央の中の如し、さて、其の性の、物に觸れ、事に感じて、發動して、情となりて、或は喜び、或は怒り、或は哀しみ、或は樂しむ場合ひにも、喜ぶべき事を相當に喜び、怒るべき事を相當に怒り、哀しむべき事を相當に哀しみ、樂しむべき事を相當に樂しみて、悉く皆其の程々に當たるときは、之れを名づけて、和といふなり、和は、加減の善きことなり、中は、道の本體にして、天下の萬理の出づる所なれば、天下の大本なり、和は、應接する物事と善く居り合ひて、背き戾らぬことなれば、天下に通じ行はるゝなり、されば、人たる者は、事を處し、物に接して、本心の中を失はず、喜怒哀樂の發動する時に、其の程々を失はずして、中と和とを極め盡くせば、天地も感應して、其の所に安んじ、人獸草木、一切の物も、其の生育を遂ぐるなり、

仲尼曰、君子中庸、小人反二中庸一、君子之中庸也、君子而時中、小人之中庸也、小人而無二忌憚一也、

【字釋】【仲尼】……孔子の字なり、孔子といはずして、仲尼といひたるは、子思も孔氏なればなり、後は、論語の例に依りて、皆子曰と書けり、【中庸】……卽ち表題の中庸にして、中は、過不及なきなり、庸は、恆久にして變はらざるなり、【君子而時中】……君子の君子たる所以にして、其の時々の宜しきに從ひて、皆中道に叶ふなり、【小人之中庸也】……小人は、君子の反對にして、德なき人を指す、小人の中庸なりと心得てする中庸はといふことなり、但し、是れは、鄭玄の本に據りての解なり、王肅の本には、小人之反二中庸一也とありて、小人の中庸に反對することゝせり、此の方、穩かなるべし、【小人而無二忌憚一也】……忌は、天命を畏るゝなり、憚は、民心を憚るなり、小人の小人たる所以にして、天にも、人にも、少しも遠慮することなきなり、

【解釋】さて、本題の中庸に入らむに、先づ吾が孔子のいはれたる言葉に、「君子とて、德ある人ほ、中とて、過不及なく、庸とて、恆久にして變はらざる中庸を行ひて、之れを內にしてほ、喜怒哀樂の發動すること、之れを外にしてほ、君父に事へ、朋友に交はること、皆其の程々に當たり、皆其の宜しきを得て、今日行ふ所、昨日に異ならず、固く其の一つを守りて、少しも移り變はることなけれども、小人とて、德なき人は、中庸に反對せり」とあり、君子の中庸を行ふは、君子の君子たる所以にして、其の時々の宜しきに從ひて、皆中道に叶ふなり、小人の中庸に反對するは、小人の小人たる所以にして、自ら其の非を知らぬが故に、我が意に任せ行ひて、天にも人にも少しも遠慮することなし、

【文法】上に中和をいひたれば、此に轉じて中庸をいふ、始めて題意に入る、無二忌憚一は、君子の戒愼恐懼と相反す、是れ卽ち小人は中庸に反するなり、

子曰、中庸其至矣乎、民鮮能久矣、

【字釋】【至】……至極結構なるなり、【民鮮能久矣】……世間の人の之れを能く行ふことの少なきは、久しき以前よりなりといふことなり、一說に、暫時の間ほ行ふ者もあれど、久しく行ふ者ほ罕なりといふことなりといへるほ、非なり、

【解釋】又孔子の中庸の德の貴ぶべくして、世に行はれざることを歎かれたる言葉に、「中庸の德は、至極結構なるものよ、さりながら、世間の人の之れを能く行ふことの少なきほ、昨今の事にてはなく、久しき以前よりなり」とあり、

【文法】其至矣乎は、天地位焉、萬物育焉に應ず、民鮮能久矣は、小人反二中庸一に應ず、

子曰、道之不行也、我知之矣、知者過之、愚者不及也、道之不明也、我知之矣、賢者過之、不肖者不及也、人莫不飲食也、鮮能知味也、子曰、道其不行矣夫、

【字釋】【知者】……智者に同じ、【不肖者】……肖は、似るなり、賢きことの父に似ざるを不肖といふ、やはり愚者のことなり、【道其不行矣夫】……夫ほ、嗟歎の中に疑ふ意を含みたる言葉なり、

解説 又孔子の中庸の道の行はれず明らかならざることを歎かれたる言葉に、「中庸の道の世に行はれぬは、我れ其の譯けを知れり、生得智慧ある者は、喜みて人の知り難き所を知らむとするが故に、反りて日用平常の知らで叶はぬ中庸の道を通り過ぎ、生得愚昧なる者は、其の知る所淺くして、そこまで及び屆かぬに由るなり、中庸の道の世に明らかならぬは、我れ其の譯けを知れり、生得賢明なる者は、喜みて人の行ひ難き所を行はむとするが故に、反りて日用平常の行はずしては叶はぬ中庸の道を通り過ぎ、生得不肖なる者は、其の行ふ所卑くして、そこまで及び屆かぬに由るなり、人は、毎日飲食せざることなけれども、只々飲み、只々食ふばかりにて、能く其の風味の正しき所を嚼み分くる者は、多からぬなり、人の知ること行ふことも、之れと同じく、日々に知りもし行ひもしつれども、皆中庸に外れたることを心付かぬなり、されば其の中庸ならぬ點に於ては、智愚賢不肖同一なり」とあり、又孔子の言葉に、「今日の有樣は、此の如くなれば、中庸の道は、到底世に行はれざるにや、さても覺束なきことよ」とあり、

文法 知者過之、愚者不及、故に民鮮能久矣なり、鮮能の二字は、上文の鮮能に應ず、

子曰、舜其大知也與、舜好問而好察邇言、隱惡而揚善、執其兩端、用其中於民、其斯以爲舜乎、

字釋 【舜】……帝舜なり、【大知】……大智に同じ、【察二邇言一】……手近き假り初めの言葉にも氣を付くるなり、【隱二惡而揚一善】……人の惡しき事を掩ひ匿して、人の善き事を譽め立つるなり、【執二其兩端一用二其中於民一】……過ぎたると及ばざると、兩方の極端を手に取りて、其の眞中の程よき所を、人民の受け取り易きやうにして、施し用ゐたるなり、

解説 又孔子の帝舜を譽められたる言葉に、「昔の帝舜は、大いなる智慧ある人と申すべきか、帝舜は、己れの才智を恃みたまはず、人に向ひて、物事を尋ね問ふことを好みたまひて、世間の人の心にも留めぬ手近き假り初めの言葉にも氣を付けたまひて、其の得失を考ふることを好みたまひ、人の惡しき事を掩ひ匿して、其の者に罪を付けたまはず、人の善き事を譽め立てゝ、其の者を勸め勵ましたまひ、何事によらず、過ぎたると及ばざるとの兩方の極端を手に取りたまひて、其の眞中の程よき所を、人民の受け取り易きやうにして、施し用ゐたまひき、是れぞ帝舜の帝舜たる所以なるべき」とあり、

文法 舜の中庸、斯の如し、道は行はれざる者にあらず、大知の大を加へたるは、上文の知者過之と別かてるなり、

子曰、人皆曰予知、驅而納諸罟擭陷阱之中、莫之知辟也、人皆曰予知、擇乎中庸、而不能期月守也、

字釋 【驅】……逐ひ立つるなり、【罟擭陷阱】……罟は、鳥を捕るひろてんなり、擭は、獸を捕る落とし箱なり、陷阱は、獸を捕る落とし穴なり、【期月】……朝年に同じ、滿一年のことなり、一説に、滿一月なりといへるは、非なり、

解説 又孔子の世間の人の輕み甲斐なきことを歎かれたる言葉に、「世間の人は、皆予れは智慧ありといへり、さりながら、其のうしろより逐ひ立てゝ、鳥を捕るひろてん、又は獸を捕る落とし穴に入れむとすれば、之れを避け外すことを知らずして、其の中に落ち入るなり、世間の人は、皆予れは智慧ありといへり、さりながら、中庸の道を自ら擇び求むれども、僅かに一箇年間も、之れを守りて、行ひ續くることはならぬなり」とあり、己れの小智を恃みて、人に道路を尋ぬることをせず、身を危險の地に投ずるをも知らぬが如く、己れの小智を恃みて、人に道理を問ふことなく、幸ひに自ら之れを擇び求めて得る所ありても、暫時にして廢するは、帝舜の大智に及ばざること遠し、實に淺ましき人情なり、

文法 知の字は、舜の大知に應ず、是れは自ら知とするものにして、愚不肖者の類なり、

子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺、而弗失之矣、

字釋 【回】……孔子の弟子なり、姓は顏、名は回、字は子淵といふ、【爲人】……人柄なり、【拳拳】……大事の品物を兩手に捧げ持つさまなり、【服膺】……胸の間に引き付けて放さぬなり、

解説 常人は、中庸の道を擇び求めても、長持ちのせぬが、通例なれど、孔子の弟子の顏回は、格別なり、されば、又孔子の顏回を譽められたる言葉に、「顏回の人柄は、殊勝なるものなり、彼れは、平生中庸の道を擇び求めて、一つの善言を手に入れ、一つの善行を手に入るれば、恰も大事の品物を兩手に捧げ持つやうに、胸の間に引き付けて、其の善きことを失はず、生涯之れを守りたり」とあり、斯くありてこそ、中庸の道を擇び求むる甲斐もあれ、

文法 擇乎中庸の字、上に接す、

子曰、天下國家可均也、爵祿可辭也、白刃可蹈也、中庸不可能也、

字釋 【均】……平均に治むるなり、【爵祿】……爵は、公、侯、伯、子、男の五等の爵なり、祿は、食祿なり、

解説 中庸の道は、行ひ易きやうにて、實は行ひ難きものなれば、又孔子の言葉に、「人に才智あれば、天下をも、國をも、家をも、平均に治むることは、出來るなり、人に廉恥あれば、公、侯、伯、子、男の五等の爵をも、食祿をも、辭退することは、出來るなり、人に勇氣あれば、白刃をも、蹈み越ゆることは、出來るなり、以上の三つは、難事なるには相違なけれども、奮發すれば、出來ぬことはなし、唯々能く行ひ難きことは、日用平常の中庸の道なり」とあり、

文法 民鮮能久矣に接す、

子路問强、子曰、南方之强與、北方之强與、抑而强與、

字釋 【子路】……孔子の弟子なり、姓は、仲、名は由といふ、子路は、其の字なり、勇を好みて、衛の國の難に死せり、【抑】……反語の言葉なり、但しといはむが如し、【而】……汝に同じ、

解説 前に見えたる孔子の言葉に、白刃をも蹈むべしとありたるが、それに就きて、强きことにも差別あることを示さむ、昔し孔子の弟子の子路、孔子に向ひて、强きことを尋ねしに、孔子のいはれけるは、强きことといひて、一概にはいひ難し、我が中國の教化の行はれたる南の地方にて賞美する强きことか、教化の未だ行はれざる北の地方にて賞美する强きことか、但し、汝が自身に賞美する强きことか、今詳かに强きことの次第を語らむ、

文法 上の白刃可蹈也の句に接して、子路問强を引き起こしたるなり、

寛柔以教、不報無道、南方之強也、君子居之、衽金革、死而不厭、北方之強也、而強者居之、

【字釈】【寛柔以教】……寛廣温柔の德をもて、人を教へ導くなり、【不報無道】……無理なる事を仕向けられても、其の返報をせぬなり、【居之】……此の仕方に身を据ゑ置くなり、【衽金革】……衽は、敷き物なり、金は、刀劍の類なり、革は、甲冑の類なり、刀劍甲冑を敷き物同様にして、其の間に起き臥しするなり、

【内容】寛廣温柔の德をもて、人を教へ導きて、人より無理を仕向けられても、其の返報をせず、飽くまで穏和の手段を取りて、人を心服せしむるは、南の地方の人々の持ち前とする強きことなり、君子とて、德ある人は、此の仕方に身を据ゑ置きて、事を處するなり、又刀劍甲冑を敷き物同様にして、其の間に起き臥しして、平素武を練り、膽を鍛へて、命を棄つることをさへ厭はぬは、北の地方の人々の持ち前とする強きことなり、強者即ち勇者は、此の仕方に身を据ゑ置きて、事を處するなり、南北の氣風の相違せること此の如し、

故君子和而不流、強哉矯、中立而不倚、強哉矯、國有道、不變塞焉、強哉矯、國無道、至死不變、強哉矯、

【字釈】【和而不流】……人と和らぎ親しみながら、邪なる路に流れ移らぬなり、【強哉矯】……矯は、強きさまなり、強きことかな、強きことよと感歎せるなり、【中立而不倚】……中正なる處に立ちて、片寄らぬなり、【國有道】……國に道の行はれて、世の治まるなり、【不變塞】……塞は、實なり、直きを守りて、德行の充實せるを變へぬなり、一説には、塞は、塞がりて通ぜざるなり、富貴になりても、未だ發達せざりし時の心を變へぬなりといひ、又一説には、塞は、邊塞の塞にて、境界の固めなり、それより轉じて、守る所を變へぬなりといへり、【國無道】……國に道の行はれずして、世の亂るゝなり、

【内容】されば、今日、強きことを學ばむと思はゞ、北方よりも、南方を取るべし、南方の仕方は、君子の行ふ所なればなり、君子は、人と和らぎ親しめども其の情實に溺まりて、邪なる路に流れ移ることなし、強きことかな、強きことよ、又君子は、何事によらず、道理の中正なる處に立ちて、右へも左へも片寄ることなし、強きことかな、強きことよ、又君子は、國に道の行はれて、世の治まる時は、直きを守りて、德行の充實せるを變へぬなり、強きことかな、強きことよ、又君子は、國に道の行はれずして、世の亂るゝ時は、貧賤艱難に死する場合ひに至るまで、やはり直きを守りて、德行の充實せるを變へぬなり、強きことかな、強きことよ」と、孔子の斯くまで南方の君子の強を感歎せられたるは、子路の血氣の勇を抑へて、德義の勇に進まむことを敎へられたるなり、

【文法】君子南方の強は、寛柔にして、強ならざるに似たり、是を以て、孔子は、強哉矯の贊辭を四たび反復して、其の強を示して、前文の意を明らかにせり、北方の強は、中庸に過ぐ、南方の強は、則ち君子の中庸なり、和而不流の和は、天下の途道なり、中立而不倚の中は、天下の大本なり、是れにて、南方の強は致中和の意を含めり、

子曰、素隱行怪、後世有述焉、吾弗爲之矣、君子遵道而行、半塗而廢、吾弗能已矣、

【字釈】【素隱】……素は、索に作るべし、隱は、隱僻の理なり、常人に分からぬ一僻ある理窟を探し索むるなり、此の二字に就きては、種々の説あれども、今は、此の解に從ふ、【行怪】……風變りなる奇怪の事を行ふなり、【述】……其の言行を取り次ぎて、語り傳ふるなり、【君子】……此の君子は、篤行の人を指す、前後の君子よりは、稍々劣りたる者なり、【遵道】……中庸の道を遵守するなり、【半塗而廢】……中途にて止むるなり、止むなり、

【内容】人たる道は、中庸に限るなり、然るに、之れを行ひ遂ぐる者は稀なり、されば、又孔子の言葉に、「世間には、人並みの仕事をつまらぬことのやうに思ひて、常人に分からぬ一僻ある理窟を探し索めて、眞理は此に在りなど、吹聽し、風變りなる奇怪の事を行ひて、人の耳目を驚かす者あり、かやうなる言論擧動をするときは、人情は、常を厭ひて、奇を好むが故に、之れを見聞する者、物珍しく思ひて、後の世までも、其の言行を取り次ぎて、語り傳ふることあらむ、されども、吾れは、さる事をせずして、中庸の道を遵守すれども、其の力足らずして、中途にて止むるなり、吾れは、中庸の道を行ふなり、又篤行の君子は、前者の如くならむとすれども、止むること能はざるなり、

【文法】素隱行怪は、賢者過之に應ず、

君子依乎中庸、遯世不見知而不悔、唯聖者能之、

【字釈】【依】……合體するなり、前には、遵道とあり、此には、依乎中庸とあり、遵ふは、我れをもて道に遵ふことなれば、我れと、道と二つなり、依るは、相依りて遂はざることなれば、我れと道と一つなり、【遯世】……世の中を逃れ避くるなり、【不見知】……人に知られぬなり、【聖者】……聖人なり、漢土にては、生知安行とて、生まれながらに物事の道理を知り、骨折らずして、安らかに人たる道を行ふ人を、聖人といふ、人間の最上に位する人なり、

【内容】君子とて、德ある人は、奇怪異常の言行をせず、其の一身は、中庸の道と合體して、片時も之れを離るゝことなし、それが爲めに、志しを得ずして、世の中を逃れ避けて、生涯人に知られずしても、少しも恨み悔ゆることなきは、唯々聖人のみ之れを能くするなり、吾れの如きは、企て及ぶべくもあらず」とあり、

君子之道、費而隱、夫婦之愚、可以與知焉、及其至也、雖聖人、亦有所不知焉、夫婦之不肖、可以能行焉、及其至也、雖聖人、亦有所不能焉、

【字釈】【費而隱】……費は、顕著にして、知り易く、行ひ易きなり、隱は、隱微にして、知り難く、行ひ難きなり、一説に、費は、費用の費にて、用の廣きことなりといへるは、從ひ難し、【夫婦之愚】……匹夫匹婦の愚人といふことにて、愚夫愚婦といふも同じ、無智の賤民を指す、【與知】……

其の事柄に關係して、承知するなり、

解義 前に孔子のいはれたる通り、君子として、德ある人は、中庸の道と合體するものなれば、中庸の外には君子の道なし、さて、其の君子の行ふべき中庸の道は、顯著にして、知り易く、行ひ易くして、又隱微にして、知り難く、行ひ難きものなり、親は子を育て、子は親を養ふといふが如きは、人並みよりも劣りたる匹夫匹婦の愚人にても、其の事柄に關係して、知ることを得れども、博く施して、衆を濟ふといふが如き、其の至極なる所に及びては、聖人といへども、知り難き所あり、兄は弟を愛し、弟は兄を敬ふといふが如きは、人並みよりも劣りたる匹夫匹婦の不肖者にても、能く行ふことを得れども、己れを脩めて、百姓を安んずといふが如き、其の至極なる所に及びては、聖人といへども行ひ難き所あり、君子の道は、殊の外やさしくもあり、又殊の外むづかしくもあるなり、

文法 夫婦と聖人とを擧げて、費隱の別を說く、上に君子遵道而行といひ、君子依乎中庸といひたる口調を受けて、此に君子之道といへるなり、是れ突然ならず、自然に出でたる文勢なり、

天地之大也、人猶有所憾、故君子語大、天下莫能載焉、語小、天下莫能破焉、詩云、鳶飛戾天、魚躍于淵、言其上下察也、

字釋 【有所憾】……恨みかこつことあるなり、【天下莫能載焉】……天下の人の背負ひ切れぬ程に廣大なるなり、【天下莫能破焉】……天下の人の針の先にて突き破れぬ程に細微なるなり、【詩】……詩經の大雅の部の旱麓の篇なり、【戾】……至に同じ、【淵】……水の深き處なり、【言其上下察也】……其の字は、君子の道を指す、上下は、天地なり、察は、明らかなるなり、君子の道の天地に明らかなることを言へるなりといふことなり、

解義 天地は萬物を生育する大いなる德あるものなれど、人はそれすら不足に思ひて、風雨寒暑の折り〳〵に、恨みかこつことあれば、況して聖人の德に對して、不滿を抱くは、無理もなきことなり、其の聖人に不滿を抱くことあるは、聖人といへども、知り難く、行ひ難き所あればなり、されば、君子は、道の極めて大いなることを語り出づるときは、天下の人の背負ひ切れぬ程に廣大なり、又其の極めて小さきことを語り出づるときは、天下の人の針の先にて突き破れぬ程に微細なり、されば、詩經の旱麓の篇に、「鳶は飛びて天に至り、魚は淵に躍る」とあり、是れは、君子の道の天地に明らかにして、廣大無量なることを言へるなり、

文法 鳶飛戾天、魚躍于淵は、中和を致して、天地位し、萬物育するなり、是れ圓文の妙なり、

君子之道、造端乎夫婦、及其至也、察乎天地、

字釋 【造端乎夫婦】……造は、始むるなり、端は、端緒なり、端緒を匹夫匹婦の知ること行ふことより始むるなり、【察乎天地】……卽ち前の上下察なり、

解義 されば、君子の道といふものは、其の端緒を匹夫匹婦の知りもし行ひもする近小なる處より始むるものなるが、其の道大なる至極の處に至りては、天地に明らかにして、廣大無量なるものなり、卽ち天地の其の所に安んずるも、萬物の發育するも、皆此の道の中に在るなり、

文法 造端乎夫婦は、上の夫婦に應じ、察乎天地は、上の上下察に應ず、是れにて上文の意を結べり、

子曰、道不遠人、人之爲道、而遠人、不可以爲道、

解義 最初に示したる如く、人たる道は、其の持ち前の性の儘に循ひ由るべきものなれば、道に大小遠近の次第あれども、畢竟人の當然に行ふべきことなり、されば、又孔子の言葉に、「人たる道は、人の性情に遠く離るゝものにあらず、人の奇異なる道を行ひて、人の性情に遠く離れたるものは、人たる道といひ難し」とあり、

文法 上の道也者不可須臾離也、可離非道也に應ず、

詩云、伐柯伐柯、其則不遠、執柯以伐柯、睨而視之、猶以爲遠、故君子以人治人、改而止、

字釋 【詩】……詩經の豳風の部の伐柯の篇なり、【伐柯伐柯】……柯は、斧の柄なり、斧の柄を伐り取るといふことを繰り返していへるなり、【其則不遠】……則は、寸法なり、其の寸法の遠はぬなり、【睨而視之】……睨は、横目を使ふなり、横目を使ひて、其の寸法を見つむるなり、【以人治人】……人たる道をもて、人の心を治め正すなり、【改而止】……其の人過ちを改むれば、それまでにして、跡を貴めぬなり、

解義 孔子は、又、人たる道は人と離れぬものなることを明かさむとて、詩の句を解釋せられたり、詩經の伐柯の篇に、「山に入りて、斧の柄を伐り取るには、我が手に持ちたる斧を手本とするが故に、其の寸法は遠はぬなり」とあり、孔子の之れを解釋せられたる言葉に、「詩人は遠はぬといへれど、斧の柄を手に執りて、斧の柄を伐るが故に、横目を使ひて其の寸法を見つめても、彼れと此れとは別物なれば、まだ遠ふなり、されば、君子とて、德ある人は、人たる道をもて、人の心を治め正し、其の人過ちを改むれば、それまでにして、跡を貴めぬなり、人たる道は、人の性より出づるものなれば、全く人と同一なり、斧の柄の彼れと此れとの別物なるが如きにはあらず」とあり、

文法 道不遠人の一章、詩云の一章、皆孔子の言葉なり、初めに子曰を加へ、次ぎは之れを省けり、一時の語なりとすることなかれ、次ぎ〳〵の章も亦同じ、

忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人、

字釋 【忠】……己れの誠を推して、人に深切を盡くすことなり、【恕】……我が身に引き比べて、人の上を思ひ遣ることなり、【違】……去に同じ、懸け離るゝなり、【施諸己】……之れを己れに仕向くるなり、諸は、之乎の二義を兼ぬ、施諸之乎己に同じ、

解義 孔子は、又、人の道をもて人の心を治め正す仕方を示されたり、其の言葉に「忠とて、心の誠を推して、人に深切を盡くすこと、恕とて、我が身に引き比べて、人の上を思ひ遣ることは、君子の道を懸け離るゝこと遠からずして、甚だ近きものなり、其の仕方は、己れの身に樂しき事は、人も樂しかるべく、己れの身に苦しき事は、人も苦しかるべき筈なれば、人より之れを己れに仕向けられて、願はざらむ事は、人に仕向くることをすな、是れぞ忠恕の仕方なる」とあり、

文法 違道不遠は、上の其則不遠に接す、

君子之道四、丘未能一焉、所求乎子、以事父、未能也、所求乎臣、以事君、未能也、所求乎弟、以事兄、未能也、所求乎朋友、先施之、未能也、庸德之行、庸言之謹、有所不足、不敢不勉、有餘不敢盡、言顧行、行顧言、君子胡不慥慥爾、

字解【丘】……孔子の名なり、自ら名乘るは、己れといはむが如し、【庸德】……平常の行ひなり、【庸言】……平常の言葉なり、【不敢不勉】……押して勉め行はればならぬなり、【不敢盡】……押して言ひ盡くさぬなり、【胡】……何に同じ、【慥慥爾】……確實なるさまなり、

案内　忠恕は實に肝要なることなれば、孔子も常に此の事を心配せられたり、されば、又孔子の言葉に、「君子の道は、四箇條あり、己れは、まだ其の一箇條をだにも行ふこと能はざるなり、君の心となりて、臣に斯くあれかしと望み求むることは忠なるが、其の忠をもて君に事ふることは、まだとは、まだ行ふこと能はざるなり、父の心となりて、子に斯くあれかしと望み求むることは孝なるが、其の孝をもて父に事ふることは、まだ行ふこと能はざるなり、兄の心となりて、弟に斯くあれかしと望み求むることは弟なるが、其の弟をもて兄に事ふることは、まだ行ふこと能はざるなり、朋友の心となりて、傍輩に斯くあれかしと望み求むることは信なるが、其の信を先づ此方より仕向くることは、まだ行ふこと能はざるなり、總じて、人は、平常の言葉に氣を付けて、若し行ひの足らざることあらば、押して勉め行はずばならじと心掛け、若し言葉の行ひよりも餘りたることあらば、押して言ひ盡くさじと心掛け、言ふこと、行ふこと、を照り合はせて、物をいはむとするときは、身の行ひを顧みて、それに相當するやうに言ひ、事を行はむとするときは、己れの言葉を顧みて、それに相當するやうに行ふべし、君子たる者は、何とて慥慥爾として言行の確實ならぬことあらむ、屹度確實なるべきなり」とあり、

又注　君子の道は五つなり、然るに、之れを四つとせるは、上章已に君子之道、造端乎夫婦、とあるをもて、其の一つを省けるなり、是れ後に至りて、天下の達道をいふ張本なり、

君子素其位而行、不願乎其外、素富貴行乎富貴、素貧賤行乎貧賤、素夷狄行乎夷狄、素患難行乎患難、君子無入而不自得焉、

字解【素其位】……其の居る所の地位に安んじて、素より然るが如くに思ふことなり、此の素の字にも數說あれど、今は、此の解に從ふ、【無入而不自得焉】……自得は、得意に同じ、如何なる境遇に立ち入りても、滿足せざることなきなり、

案内　人の不斷の心掛けは、孔子の言葉の通りなるが、さて又、人は、一生の中には、樣々の場合ひに出逢ひても、其の居る所の地位に安んじて、素より然るが如くに思ひて、其の時々に相應じたる中庸の道を行ひて、我が分外の事を望み願ふことなし、されば、富貴になりたる時は、素より富貴なるやうに思ひて、少しも驕り高ぶらず、富貴の儘に中庸の道を行ふなり、又貧賤になりたる時は、素より貧賤なるやうに思ひて、少しも阿り諛はず、貧賤の儘に中庸の道を行ふなり、又身を夷狄に投じたる時は、素より夷狄に生まれたるやうに思ひて、少しも輕んじ侮らず、夷狄の儘に中庸の道を行ふなり、又身を患難に投じたる時は、素より患難に慣れたるやうに思ひて、少しも憂へ悲まず、患難の儘に中庸の道を行ふなり、されば、君子は、如何なる境遇に立ち入りても、滿足せぬといふことなく、いつも愉快に身を處するなり、

在上位不陵下、在下位不援上、正己而不求於人、則無怨、上不怨天、下不尤人、

字解【不陵下】……目下の者を蹈みつけぬなり、【不援上】……目上の人に依りすがらぬなり、【不尤人】……人を責め咎めぬなり、

案内　我が身、目上の地位に在る時は、目下の者を蹈みつけず、目下の地位に在る時は、目上の人に依りすがらず、目上の時も、目下の時も、己れの行ひを正しくして、富貴利達を他人に望み求めざれば、少しも世間を怨むべきことなし、我が身の程を顧みずして、樣々の忘想を起こせばこそ、自ら悶え苦みて、天の無情を怨み憤り、人の無情を責め咎むるなれ、其の本分に安んじて、自得滿足するときは、之れを上にしては、天に對して怨み憤ることもなく、之れを下にしては、人に對して責め咎むることもなく、世の中に腹の立つべきことはなし、

又注　上位は、上の富貴に接し、下位は、上の貧賤に接す、

故君子居易以俟命、小人行險以徼幸、

字解【居易】……平易なる中庸の道に身を據ゑ置くなり、【俟命】……自然の天命を待ち受くるなり、【行險】……中庸の道にあらざる危險の事を行ふなり、【徼幸】……萬一の僥倖を求むるなり、

案内　されば、君子とて、德ある人は、平易なる中庸の道に身を據ゑ置きて、自然に來る天命を待ち受くるなり、之れに反して、小人とて、德なき人は、中庸の道にあらざる危險の事を行ひて、萬一の僥倖を求むるなり、

子曰、射有似乎君子、失諸正鵠、反求諸其身、

字解【射】……六藝の一つにて、弓を射ることなり、【正鵠】……的なり、布にて張りたるを正といひ、皮にて張りたるを鵠といふ、【反求諸其身】……己れの身を振り返り見て、再び的を射外すまじき仕方を考へ求むるなり、

案内　孔子の言葉に、「弓を射る術は、君子とて、德ある人の心掛けに似寄りたることあり、矢を放ちて、之れを的より射外したるときは、自分の射やうの惡しかりし故ならむと思ひて、己れを振り返り見て、再び的を射外すまじき仕方を其の身に考へ求むるなり、是れ君子の己れを正しくして、人に求めずして、天を怨まず、人を咎めざるに似寄りたることなり」とあり、

又注　射は人々の力の多少に由りて、正鵠の遠近高卑あり、故に次ぎに遠邇高卑の字を生ず、

君子之道、辟如行遠必自邇、辟如登高必自卑、

【字釋】【辟】……譬に同じ、【邇】……近きなり、【卑】……低きなり、

【解義】さて、上文に、君子の道といふことを述べ續けたるが、君子の道に進むには、次第順序のあることにて、譬へていはゞ、遠き處に行くには、屹度近き處より歩み出だして、道ひ〳〵に遠き處に至るが如し、又譬へていはゞ、高き處に登るには、屹度低き處より登り始めて、段〻に高き處に至るが如し、されば、廣大なる君子の道を行ひ遂げむとならば、日用眼前の事より心を用ゐざるべからず、

【文義】上の君子之道、遠二端乎夫婦一、及二其至一也、察二乎天地一、に應ず、

詩曰、妻子好合、如鼓瑟琴、兄弟既翕、和樂且耽、宜爾室家、樂爾妻帑、子曰、父母其順矣乎、

【字釋】【詩】……詩經の小雅の部の棠棣の篇なり、【好合】……善く和合するなり、【如鼓瑟琴】……瑟と琴との鳴り物を調子よく合奏するに似たるなり、【翕】……合ふなり、【和樂且耽】……和らぎ樂しみたる上にも、深く樂しむなり、耽は、詩經には、湛に作れり、樂しむことの深きなり、【宜二爾室家一】……汝の夫婦中は居り合ひてといふことなり、室は、妻の居る所なり、家は、夫の居る所なり、【妻帑】……妻子に同じ、【父母其順矣乎】……父母は悦ぶならむといふことなり、順は、逆の反對にて、心に叶ふことなり、一說には、父母の家内を和順せしむることなりといひ、又一說には、順は、子の孝順なるなりといへるは、皆非なり、

【解義】君子の道の先づ近く一家の内に行はれたるさまを觀よ、詩經の棠棣の篇に、「妻子の間の善く和合せることは、瑟と琴との鳴り物を調子よく合奏せるにさも似たり、兄弟の間も、はや既に合協して、和らぎ樂しみたる上にも、深く樂しめり、汝の夫婦中は居り合ひて、汝の妻子を樂しましむ」とあり、孔子の此の詩を賛美せられたる言葉に、「かやうに一家和合せば、父母は、嘸かし悦ばるゝならむ」とあり、

【文義】詩の辭は、嘗〻妻子兄弟の和樂することをいひたるまでなるが、孔子は、之れを推演して、父母の悦樂することに及ぼせり、然るに、子思は、此の二つを引きて、遠きに行くには近きよりし、高きに登るには低きよりする意を明らかにせり、

子曰、鬼神之爲德、其盛矣乎、視之而弗見、聽之而弗聞、體物而不可遺、使天下之人齊明盛服以承祭祀、洋洋乎如在其上、如在其左右、詩曰、神之格思、不可度思、矧可射思、夫微之顯、誠之不可揜、如此夫、

【字釋】【鬼神】……鬼は、人の死して神となりたるものなり、神は、天地山川の神なり、【體物而不可遺】……如何なる物にも鬼神ありて、遺し棄てられぬなり、卽ち物として鬼神の寓せざることなきなり、【齊明】齊は、齋に同じ、明は、潔なり、物忌みをして、身を清むるなり、【盛服】……汚れざる衣冠を着用することにて、華美なることにはあらず、【承二祭祀一】……祭祀に奉承するなり、卽ち祭りに從事するなり、【洋洋乎】……流動充滿するさまなり、【詩】……詩經の大雅の部の抑の篇なり、【神之格思】……神の來り至るなり、思は、助語なり、下の二つの思も同じ、【不可度思】……推し測られぬなり、【矧可射思】……況して厭ひ嫌ふべきことかはといふことなり、射は、詩經には、斁に作れり、厭に同じ、【夫微之顯】……鬼神の德の如くなるかといふことなり、

【解義】一家の平和は、君子の道の第一歩なるが、心の誠を肝要とす、心の誠は、鬼神卽ち天神地祇人鬼の德にも均しき程に靈妙なるものなり、孔子の言葉に、「鬼神の德は、何とも言葉に盡くされぬ程に盛んなるものなるか」とあるが、如何にも、鬼神といふものは、形もなく、聲もなければ、之れを視れども見えず、之れを聽けども聞こえざるなり、然れども、鬼神は決してなきものにあらずして、如何なる物にも、鬼神の寓せざることなし、其の體德には、貴賤上下の差別なく、天下中の人〻をして、物忌みをして、身を清めて、汚れざる衣冠を着用して、神の祭りに從事せしむれば、神は、洋洋乎として、流動充滿して、其の頭の上に宿り在すが如く、又其の左右に現はれ在すが如くに思はるゝものなり、されば、詩經の抑の篇にも、「神の來り至ることは、凡慮にて推し測られぬものなれば、畏れ敬はざるべからず、況して厭ひ嫌ふべきことかは」とあり、微細なる事の顯はれ易く、心の誠の掩ひ匿すべからざることは、目に見えず耳に聞こえぬ鬼神の德の冥〻の間に慥かに存在して、人に感應するが如きものなるか、さても、誠は貴ぶべきものよ、誠なくては、最も手近き一家の平和も、叶はざるなり、

【文義】上は、父母の順を承け、下は、舜の大孝を起こす、中庸は、誠を說くを主とし、誠を立つるは、獨りを愼むを主とす、故に首章に莫二顯二乎微一、故君子愼二其獨一也とあり、末章に知二微之顯一、可二與入一德矣とあり、此の章に微之顯、誠之不可揜、如此夫とあり、微顯の二字、一篇を貫穿す、

子曰、舜其大孝也與、德爲聖人、尊爲天子、富有四海之內、宗廟饗之、子孫保之、

【字釋】【四海之內】……漢土の全國を指す、天下といふに同じ、國の四方は、海なるが故に、天下のことを、四海之內とも、海內ともいふ、【宗廟饗之】……宗廟は、先祖代〻の靈を祀る所なり、饗は、享くるなり、先祖代〻の神靈の、舜の祭りの供物を享けて、滿足するなり、【子孫保之】……舜の子孫の其の宗廟を保護するなり、

【解義】さて、是れよりは、世〻の天子の孝道を讚すべし、先づ孔子の帝舜を稱讚せられたる言葉に、「帝舜は、大なる孝行の御方ならむか、何とならば、御身の德は、生知安行の聖人たり、御身の尊きことは、萬乘の天子たり、御身の富みは、四海の內を有ちたまへり、現世に於ては、先祖代〻の御廟に歲時の祭りを行ひたまへば、其の神靈は、供物を享けて、滿足せられ、後世に至りては、虞の思、陳の胡公などの人〻、帝舜の遺業を承け繼ぎて、其の宗廟を保護せられたり」とあり、實に斯くありてこそ、申し分なき孝行といふべけれ、子〻孫〻まで祖先の祭りを絶たざるは、此の上もなき果報なり、

【文義】孝は聖人德敎の始めなり、故に舜を大孝と稱す、孝をもて德の始めとするは、登高自卑の意なり、次ぎの三章、皆孝德を推ぜり、舜其大孝

也與は、上章の舜其大知也與に應ず、

故大德必得其位、必得其祿、必得其名、必得其壽、故天之生物、必因其材而篤焉、故栽者培之、傾者覆之、

【字義】【因其材而篤】……其の物の性質次第にて、善き者には、福を厚くし、惡しき者には、禍を厚くするなり、一說には、篤の字は、福分の上に、敦きてのみ厚くすることなりとあれど、今は、禍福の兩義を兼ぬるかたに從ふ、【栽者培之】……根本の固くして、眞直に立ちたる樹木は、雨露の惠みをもて、之れを培ひ養ふなり、【傾者覆之】……根本の翳りて、横さまに傾きたる樹木は、雨風の威をもて、之れを推し倒すなり、

【大意】されば、獨り帝舜のみならず、總べて、大いなる德ある人は、屹度其の位を得て、天子となり、屹度其の祿を得て、四海の富みを有ち、屹度其の名を得て、後世までも、萬人に稱讚せられ、屹度其の壽を得て、無病長命なるものなり、されば、天の物を生ずることは、屹度其の物の性質次第にて、善き者には、福を厚くし、惡しき者には、禍を厚くするなり、されば、樹木に譬へていへば、根本の固くして、眞直に立ちたる者は、雨露の惠みをもて、之れを培ひ養ひて、長ぜしめ、根本の翳りて、横さまに傾きたる者は、雨風の威をもて、之れを推し倒して、枯らすが如し、天は公平無私にして、殊更に愛憎をせず、只々其の物の善惡に因りて、吉凶禍福を降さるゝなり、

【文法】三つの故の字をもて、文意を約す、

詩曰、嘉樂君子、憲憲、令德、宜民宜人、受祿于天、保佑命之、自天申之、

【字義】【詩】……詩經の大雅の部の假樂の篇なり、【嘉樂】……稱美して嘉みすべく、親愛して樂しむべきなり、詩經には、假樂に作れり、是れ聲音の誤まりなり、【憲憲】……詩經には、顯顯に作れり、從ふべし、顯顯は、著明なるさまなり、【令德】……善き德なり、【宜民宜人】……民は、人民なり、人は、役人なり、人民にも、役人にも、善く居り合ふなり、【保佑命之】……天より保護輔助せられて、國土を治めよと命ぜらるゝなり、【自天申之】……天より色々の幸福を重れ降さるゝなり、

【大意】大いなる德ある人の幸福なることは、詩經の假樂の篇にても知られたり、其の辭に、「稱美して嘉みすべく、親愛して樂しむべき在上の君子は、顯顯として、著明なる善き德ありて、人民にも、役人にも、善く居り合ひて、一同に悅ばれ、福祿を天より受けて、位を得、祿を得、天より保護輔助せられて、國土を治めよと命ぜられ、天より色々の幸福を重れ降されて、名を得、壽を得、子孫の祭りを享くることを得るなり」とあり、

【文法】受祿于天は、上文の得位、得祿に應じ、自天申之は、上文の得名、得壽に應じ、且つ子孫の享享を得て、百世絶えざる意をも含めり、

故大德者必受命、

【大意】されば、大いなる德ある人は、屹度天の命令を受けて、天子となりて、一切の幸福を受くるものなり、

【文法】上文の大德必得其位云々を結ぶ、

子曰、無憂者、其惟文王乎、以王季爲父、以武王爲子、父作之、子述之、

【字義】【王季】……季歷なり、追尊して王季といふ、【父作之、子述之】……父の王季は、文王の王業を創作し、子の武王は、文王の王業を繼述せるなり、

【大意】次ぎに、孔子の周の文王を稱讚せられたる言葉に、「世の中に、心配のなき御方は、獨り文王ばかりならむ、其の譯けは、文王は、賢人の王季を父に持ちたまひ、聖人の武王を子に持ちたまひたれば、父の王季は、文王の王業を創作したまひ、子の武王は、文王の王業を繼述したまへり」とあり、蓋し、舜の子は不肖、舜、禹の父は頑凶にして、父子の間の心配を免れたまはざりしかど、文王のみは、善き父より受けて、善き子に傳へたまへり、是れ圓滿の幸福にして、且つ孝道の完全なる御方なり、祖先の業を受け傳ふるは、此の上もなき孝行なればなり、

【文法】父作之は、父祖作之にて、大王、王季を兼ね合はせたるなり、

武王纘大王王季文王之緒、壹戎衣而有天下、身不失天下之顯名、尊爲天子、富有四海之內、宗廟饗之、子孫保之、

【字義】【纘】……編ぐなり、【大王】……王季の父の古公なり、追尊して大王といふ、【緒】……業なり、【壹戎衣】……一たび甲冑を着用するなり、

【大意】文王に次ぎての大孝は、武王なり、武王は、曾祖父の大王、祖父の王季、父の文王の緒業を承け繼ぎたまひて、一たび甲冑を着用して、殷の亂を平らげて、天下を有ちたまひて、臣として君に抗せし惡名を受くることなく、御身は天下の輿論として、顯著なる命名を失はず、其の尊きことは、萬乘の天子たり、其の富みは、四海の內を有ちたまへり、現世に於ては、先祖代々の御廟に歲時の祭りを行ひたまへば、其の神靈は、供物を享けて、滿足せられ、後世に至りては、今日までも、御子孫繁昌したまひて、其の宗廟を保護せられたり、

【文法】是れ舜の法と合す、但し、舜に於ては、必得其名とあり、武王に於ては、不失天下之顯名とあり、舜は堯の讓りを受け、武王は紂を伐つ、是れ其の差ある所以なり、

武王末受命、周公成文武之德、追王大王王季、上祀先公、以天子之禮、斯禮也、達乎諸侯大夫及士庶人、父爲大夫、子爲士、葬以大夫、祭以士、父爲士、子爲大夫、葬以士、祭以大夫、期之喪、達乎大夫、

三年之喪、達乎天子、父母之喪、無貴賤一也、

字釋【末受命】……末は、老いてといはむが如し、年老いて、天命を受けて、天子となりたるなり、【周公】……武王の弟の周公旦なり、【道王】……跡より王號を附るなり、【先公】……大王の父より、始祖の后稷までを指す、【達】……行き渡るなり、【庶人】……平民なり、【期之喪】……一年の喪にして、諸父昆弟の喪なり、【三年之喪】……父母の喪なり、一說には、妻と嫡子との喪なりといへり、是れは、下文に、父母之喪とあるに對しての說なれど、之れも父母の喪と解して、下文は之れが理由を示したるものと見るも、妨げなかるべし、

講義　さて、武王は、八十五歲の老年になりて、殷の亂を平らげて、天命を受けて、天子となりたまひしが、其の後、七年にして、崩じたまひしかば、武王の弟の周公旦、幼君の成王を輔佐して、禮樂を制作し、文王、武王の厚德を成就せられて、先代の大王、王季に王號を追贈し、それより以上、大王の父より、始祖の后稷までを祀るにも、天子の禮を用ゐられたり、此の禮は、喪は死者に從ひ、祭りは生者に從ふといふ原則にして、特に王室の爲めに設けられたるものにてはなく、諸侯、大夫及び士、平民にまで行き渡りて、之れに準ずることゝせられたるなり、されば、父は大夫の身分にて、子は士の身分なるときは、父の死したる時、之れを葬るには、父の身分に應じたる大夫の禮を用ゐ、之れを葬るには、父の身分に應じたる士の禮を用ゐるなり、若し父は士の身分にて、子は大夫の身分なるときは、父の死したる時、之れを葬るには、父の身分の士の禮を用ゐ、之れを祭るには、子の身分の大夫の禮を用ゐるなり、又期の喪とて、諸父昆弟の一年の喪は、士、平民より大夫にまで行き渡りて、同樣に行き渡り、父母の喪は、平民より天子にまで行き渡りて、同樣に行ふなり、總して、人の子たる者は、三歲になるまで父母の懷を離れぬものなれば、其の恩返しとして、三年間の父母の喪は、貴人賤者の差別なく、皆一樣に勤むるなり、周公は、此の如くに喪祭の禮を定めて、文、武二王の孝德を成就せられたり、

文法　武王に次ぐに周公の禮を制せしことをいふ、故に下文は武王、周公をもて之れを承く、

子曰、武王周公、其達孝矣乎、

字釋【達孝】……下文の達道、達德と同じく、上下古今に通じたる大孝なり、一說に、天下の人の通じて孝といふことなりといへるは、非なり、

講義　武王、周公の孝道は、上に擧げたる通りなれば、孔子の之れを譽められたる言葉にも、「武王、周公は、上下古今に通じて、人の手本となるべき程の大孝なる御方ならむか」とあり、

文法　達孝の字は、舜の大孝と似たり、

夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也、

字釋【繼】……承け繼ぎて果たすなり、【述】……取り次ぎて廣むるなり、

講義　何故に武王、周公は上下古今に通じたる大孝なるかといはむに、孝行といふものは、善く先代の人の意志を承け繼ぎて、之れを果たし、先代の人の事業を取り次ぎて、之れを廣むるものなればなり、

春秋脩其祖廟、陳其宗器、設其裳衣、薦其時食、

字釋【春秋】……夏冬を兼ぬ、卽ち四季の祭りなり、【脩其祖廟】……先祖代々の廟を掃除して、整頓するなり、【陳】……陳列するなり、【宗器】……先代の人々の祕藏せし寶物なり、一說には、宗廟の祭りに用ゐる道具なりといへり、【設】……飾り立つるなり、【裳衣】……先代の人々の著用せし衣類なり、【薦其時食】……四季折り〳〵の食物を供ふるなり、

講義　さて、追孝の仕方といふは、春夏秋冬に、其の先祖代々の廟を掃除して、整頓し、先代の人々の祕藏せられし寶物を陳列し、先代の人々の著用せられし衣類を飾り立て、四季折り〳〵の食物を供へて、心を盡くして祭るべきことなり、

文法　春秋の二字、時食の二字と相應ず、

宗廟之禮、所以序昭穆也、序爵所以辨貴賤也、序事所以辨賢也、旅酬下爲上、所以逮賤也、燕毛所以序齒也、

字釋【序昭穆】……昭と穆とを次第するなり、天子は七廟、諸侯は五廟、卿は三廟、士は二廟とて、先祖代々の神靈を安置する廟の數に一定の制限あり、正面に在りて、東に向ふを先祖の廟とし、右側に在りて、南に向ひて陽明なるを昭といひ、左側に在りて、北に向ひて陰幽なるを穆といふ、卽ち天子の廟は、太祖を正面に、二代目を右に、三代目を左に、四代目を右に、五代目を左に、六代目を右に、七代目を左に置くなり、而して太祖の廟は、永代保存するものなれば、それより後の天子の崩じたるときは、二代目の分より順々に取り除けて、七つの數に合はするなり、其の取り除け方は、八代目の神靈を新たに安置する場合には、二代目の分を取り除けて、四代目、六代目を順々に繰り上げて、其の跡の明きたる處に八代目を入るゝなり、又九代目の神靈を新たに安置する場合には、三代目の分を取り除けて、五代目、七代目を順々に繰り上げて、其の跡の明きたる處に、九代目を入るゝなり、諸侯の廟も、卿の廟も、此のやうにして、其の數を遞減するのみなり、士は二廟なれば、先祖と父母とを限りとす、平民に至りては、廟を設けず、家の內にて祭るなり、昭穆の譯は、此の如きものなれば、宗廟の祭りの時は、子孫兄弟一門親族も、之れに準じて、其の式場にて、昭穆の席次を定めて、遠近親疎を差別するなり、【序爵】……公、卿、大夫、士の爵を次第して、其の席順を定むるなり、【序事】……祭禮の役割りも次第するなり、【辨賢】……役に立つ賢き者を辨別するなり、【旅酬】……旅は、衆人なり、酬は、己れ先づ飲みて、後に人に飲ますなり、祭りの濟まむとする時に、大勢の人の神酒の杯を差すことなり、【逮賤】……目下の賤しき者にまで、大切の祭りに與かる榮譽を推し及ぼすなり、【燕毛】……燕は、宴なり、毛は、老人の者に杯を差すなり、【下爲上】……目下の者より目上なり、祭りの跡にて催す一門の人の酒宴に、白髮の老人を上座に置くことなり、【序齒】……齒は、齡なり、年齡の高下を次第するなり、

講義　宗廟の祭りの禮式に、子孫兄弟一門親族をして、宗廟の制に準じて、其の式場にて、昭の座に居るべき者は、穆の座に著かしめ、穆の座に居るべき者は、昭の座に著かしめ、穆と昭とを次第して、遠近親疎を差別する譯なり、又其の式場に參列する公、卿、大夫、士の爵を次第して、其の席順を定むるは、身分の貴賤を辨別する譯なり、又祭禮の役割りを次第して、人々に相應したる役目を授くるは、役に立つ賢き者を辨別する譯なり、又祭禮の濟まむとする時、大勢の人の神酒の杯を差すに、目下の者より目上の者に之れを差すは、目下の賤しき者にまで、大切の祭りに與かる榮譽を推し及ぼす譯なり、又祭禮の跡にて催す一門の人の酒宴に、白髮の老人を上座に置くは、年齡の高下を次第する譯なり、宗廟の祭りは、政敎の出づる源なれば、斯く嚴格なる禮儀を定められたるなり、是れ周公の定めし所なるをもて、此に述ぶ、

踐其位、行其禮、奏其樂、敬其所尊、愛其所親、事死如事生、事亡如事存、孝之至也、

【踐其位】……先王の位を履むなり、其の字は、先王を指す、下の四つの其も、皆同じ、【死】……始めて死せしなり、【亡】……既に葬りたるなり、

【解】跡繼ぎの天子の、先王の位を履みたまひ、先王の禮儀を行ひたまひ、先王の音樂を奏したまひ、先王の尊敬したまひし賢者を尊敬したまひ、先王の親愛したまひし親族を親愛したまひ、始めて死せし先王に事へたまふこと、生きたる御方に事へたまふが如くなるは、孝道の至極せるものなり、

【文注】此れ上文の兩節を結ぶ、皆志を繼ぎ、事を述ぶる意なり、

郊社之禮、所以事上帝也、宗廟之禮、所以祀乎其先也、明乎郊社之禮禘嘗之義、治國其如示諸掌乎、

【郊社之禮】……郊は、天を祀ることなり、社は、地を祀ることなり、冬至の日に、王城の南の郊外に圓き壇を築きて、天の神を祀り、夏至の日に、北の郊外に四角なる壇を築きて、地の神を祀るなり、是れ、昔は、天は圓きもの、地は四角なるものと思ひて、其の形に象りて、祭壇を造りたるなり、【上帝】……天の神を上帝といひ、地の神を后土といふ、上帝とのみいひて、后土をいはざるは、文を省けるなり、【禘嘗之義】……禘は、天子の宗廟の大祭なり、嘗は、新穀を神に供ふる秋の祭りなり、義は、禮と同じ、郊社には禮といひ、禘嘗には義といへるは、互文なり、【如示諸掌】……示は、置と通じて、置くなり、或る物を手のひらに置くやうならむといふことなり、一說には、手のひらの中の物を指し示すやうならむといふことなりといひ、又一說には、示は、視と同じ、己れの手のひらを視るやうならむといふことなりといへり、孰れにしても、見易き、知り易きことなれど、今は、最初の解に從ふ、

【解】毎年冬至の日に、天を南郊に祀る郊の禮式と、夏至の日に、地を北郊に祀る社の禮式とを擧げ行ふは、天地の神に敬ひ事ふる譯なり、又前に述べたる宗廟の禮式を擧げ行ふは、其の祖先を祀る譯なり、此の如く、天地を祀る郊社の禮式と、宗廟の大祭なる禘と、新穀を神に供ふる嘗との禮式とを明かにして、上下一般に知らしめむには、臣民も皆天地祖宗を尊崇して、純眞の風を成すべきが故に、國を治むることは、或る物を手のひらに置くやうに、何の難作もなかるべし、

哀公問政、子曰、文武之政、布在方策、其人存則其政擧、其人亡則其政息、

【哀公】……魯の君なり、名は蔣といふ、哀は、其の謚なり、【文武】……文王、武王なり、【布】……布き列ぬるなり、【方策】……方は、木版なり、策は、竹簡なり、昔は、紙といふものなければ、文字を木版竹簡に書けり、○擧……行はるゝなり、○息……行はれぬなり、

【解】文王、武王の孝道は、前に見えたる通りなれば、是れよりは、其の政道に及ぶべし、或る時、魯の君の哀公、孔子に向ひて、政事の仕方を尋ねられしに、孔子のいはれけるは、「政事の仕方は、文王、武王に及ぶものなく候ふ、其の條目は、今も猶ほ布き列ねて、方策の記錄の上に在ることに候ふ、さりながら、文王、武王の如き德ある御方存在すれば、其の善き政事は行はれ候へども、文王、武王の如き德ある御方死亡すれば、其の善き政事は行はれず候ふ、されば、君にも、善き政事を行ひたまはむとならば、文王、武王の如く、御身の德を修めたまふべし、さらば、御國は治まり候はむ」となり、

【文注】問政は、上の治國を承く、其政擧は、上の示諸掌の意なり、孔子の言葉は、是れまでにして、以下は、其の意を子思の敷衍せられたるなり、一說には、下文の脩道以仁まで、孔子の言葉なり、それより以下は、子思の敷衍なりといひ、又一說には、下文の及其成功一也まで、殘らず孔子の言葉なり、其の次ぎの子曰は、衍文なりといへり、されども、今は、此の處までを、孔子の言葉と看做したり、

人道敏政、地道敏樹、夫政也者、蒲盧也、

【人道】……人間の常道なり、【敏政】……政令を發布すれば、速に變化するなり、【地道】……土地の常道なり、【敏樹】……草木を樹藝すれば、速に化生するなり、【蒲盧】……土蜂にして、螟蛉といふ蟲は、螟蛉のことなり、此の螟蛉といふ蟲は、桑の蟲の子を取りて、己れの子に變化するものなりといふ、政事の力も、此の如く、民情風俗を變化するものなりとの意なり、一說には、蒲盧は、水草にして、繁茂し易きものなるが故に、政事の速に行はるゝことに譬へたるなりといへり、然れども、人爲もて變化せしむる政令の功を、自然に繁茂するものに比するは、當たらぬことなれば、今は、螟蛉の說に從ふ、

【解】實に孔子の言葉の通り、其の人あれば、其の政の行はれざる筈はなし、何となれば、人間の常道は、政令を發布すれば、速に變化すること、土地の常道の、草木を樹藝すれば、速に化生するが如し、全體政事といふものは、蒲盧といふ土蜂の、螟蛉といふ桑の蟲の子を取りて、己れの子に變化するが如く、民情風俗を變化する力あるものなればなり、

故爲政在人、取人以身、脩身以道、脩道以仁、

【在人】……賢人を得るに在るなり、

【解】されば、政事を行ふは、賢人を得るに在り、賢人を取り用ゐるには、人君の身の行ひをもて先務とすべし、身を脩むるには、人たる道をもて標準とすべし、人たる道を脩むるには、仁をもて根本とすべし、

仁者人也、親親爲大、義者宜也、尊賢爲大、親親之殺、尊賢之等、禮所生也、

【殺】……等殺なり、段々に減殺するなり、【等】……等差なり、

【解】仁とは、如何なることぞといふに、人といふことなり、卽ち廣く衆人を親愛することなり、中に就きて、己れの親を親愛するを仁の最も大

なるものとするなり、又仁と並びて缺くべからざる德は、義なり、義とは、如何なることぞといふに、宜しといふことなり、即ち事を行ひて、其の宜しきに叶ふことなり、中に就きて、賢人を尊敬するを、義の最も大なるものとするなり、己れの親を親愛するを本として、其の系統の遠近に隨ひて、段々に其の親愛を減殺するは、人情の自然なり、又賢人を尊敬するにも、其の人品の高下に隨ひて、相當の等差を立つるは、人情の自然なり、此の程々を斟酌するは、禮の生ずる所なり、是れにて仁と義と禮との譯を會得すべし、

文法　仁人、義宜は、音を假りて、義を發す、易の彖卦に、乾健也、離麗也といへる類なり、

在下位不獲乎上民不可得而治矣、

講義　此の句は、下にあるべきを、誤まりて重ねて此に出だせりといふ、諸註同說なり、故に今之れを講ぜず、下章に至りて講ずべし、

故君子不可以不脩身思脩身不可以不事親思事親不可以不知人思知人不可以不知天、

字解　【君子】……人君を指す、【知人】……人の賢不肖を知るなり、

講義　上に述べたる如く、人君の身脩まらざれば、賢人を得られぬものなれば、君子として、上たる人は、身を脩めねばならぬなり、身を脩むるには、孝行を第一にすべきことなれば、身を脩めむと思はゞ、己れの親に孝行を盡くすには、賢人の指南を受くべきことなれば、己れの親に事へむと思はゞ、人の賢不肖を知らねばならぬなり、さて、親愛の減殺も、尊敬の等差も、皆天理より出づることなれば、人の賢不肖を知らむと思はゞ、天理を知らねばならぬなり、

文法　知人、知天の字は、下文の人道、天道を起こす、

天下之達道五所以行之者三曰君臣也父子也夫婦也昆弟也朋友之交也五者天下之達道也知仁勇三者天下之達德也所以行之者一也、

字解　【昆弟】……兄弟と同じ、【知】……智と同じ、

講義　天下萬世に通じ達して、人の同じく由る所の道は五つありて、之れを行ふ仕方は三つあり、其の五つとは、君と臣との關係、父と子との關係、夫と妻との關係、兄と弟との關係、朋友の交際上の關係なり、此の五つは、天下萬世に通じ達して、人の同じく由る所の道なり、此の道を知るは、清明にして曇りなき智なり、此の道を行ふは、公平にして私なき仁なり、此の道を勉むるは、果斷にして堅固なる勇なり、此の三つは、天下萬世に通じ達して、人の同じく得る所の德なり、而して、之れを行ふ結局の仕方は、唯だ一つの眞實にして僞りなき誠なり、

文法　或は五つに分かち、或は三つに分かち、遂に一つに歸す、孔子の所謂、吾道一以貫之なり、

或生而知之或學而知之或困而知之及其知之一也或安而行之或利而行之或勉強而行之及其成功一也、

字解　【知之】……之は、上の達道を指す、下の六つの之も、皆同じ、【困】……困苦するなり、單に學ぶといふよりは、一層骨を折ることなり、【安】……安らかにして、骨を折らざるなり、【利】……其の利益なることを信ずるなり、

講義　人々は、皆智仁勇の達德を持ちて、君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友間の達道を行ふものなれども、人品の高下に因りて、其の有樣は一樣ならず、或は父母の胎内より生まれ出でたる儘に、達道を知る者あり、或は學問をして、物事の道理を辨へて、之れを知る者あり、或は人苦の骨折にては理會せず、一層多く困苦して、始めて之れを知る者あり、然れども、之れを知りたる以上は、同じことなり、此の如く、其の知ることに難めあれば、之れを行ふにも、難易あり、或は安らかに骨を折らずして、之れを行ふ者あり、或は利益なることを信じて、之れを行ふ者あり、然れども、其の功用を成就する上に於ては、變はることなし、

文法　二つの一也は、上に接ず、入る所は異なりと雖も、至る所は同し、故に一也と云ふ、

子曰好學近乎知力行近乎仁知恥近乎勇、

字解　【力行】……勉め行ふなり、

講義　孔子の言葉に、學問を好めば、知識日々に明かなるが故に、聖人の自然の智には及ばざれども、智に近きものなり、其の知りたる事を勉め行へば、善行日々に成るが故に、聖人の自然の仁には及ばざれども、仁に近きものなり、人に及ばぬことを恥づることを知れば、勵精奮發するが故に、聖人の自然の勇には及ばざれども、勇に近きものなり、人は悉く聖人にあらざれば、此の三つの近き處より進まざるべからず、

知斯三者則知所以修身知所以修身則知所以治人知所以治人則知所以治天下國家矣、

講義　此の智に近く仁に近く勇に近しといふ三箇條を合點すれば、身を脩むる仕方を合點せらるゝなり、身を脩むる仕方を合點すれば、人を治むる仕方を合點せらるゝなり、人を治むる仕方を合點すれば、一人を治むるも、十人を治むるも、千萬人を治むるも、同じ道理なれば、天下國家を治むる仕方を合點せらるゝなり、

文法　是れ上文の脩身の意を結び、下文の九經の端を起こす、

凡爲天下國家有九經曰修身也尊賢也親親也敬大臣也體羣

臣也、子庶民也、來百工也、柔遠人也、懷諸侯也、

【註釋】【爲】……治と同じ、【九經】……九通りの常法なり、【體羣臣】……體は、四體なり、四體は、兩手兩足なり、大勢の臣下を、吾が手足のやうに頼もしく思ふなり、【子庶民】……衆民を吾が子のやうに取り扱ふなり、【來百工】……諸職人を國内に招き寄するなり、【柔遠人】……遠國他鄉の賓客旅人を物和らかに取り扱ふなり、【懷諸侯】……諸侯を撫で安んずるなり、

【講義】總じて天下國家を治むるには、九通りの常法あり、第一に、人君自身を修むることなり、第二に、賢人を尊禮して、助言を聽くことなり、第三に、己れの親を親愛して、一門親族に推し及ぼすことなり、第四に、大臣を敬重して、政事を委任することなり、第五に、大勢の臣下を、吾が手足のやうに頼もしく思ふことなり、第六に、衆民を吾が子のやうに痛はしく思ふことなり、第七に、諸職人を國内に招き寄せて、其の職業を奬勵することなり、第八に、遠國他鄉の賓客旅人を物和らかに取り扱ふことなり、第九に、諸侯を撫で安んずることなり、

【文義】天下國家の本は、身に在り、故に修身を九經の本とす、然れども、必ず師を親み、友を取りて、然して後に、身を修むる道は進むなり、故に尊賢を之れに次ぐ、道の進む所は、其の家より先なるはなし、故に親親を之れに次ぐ、朝廷よりして、其の國に及ぼす、故に子庶民、來百工を之れに次ぐ、其の國よりして、天下に及ぼす、故に柔遠人、懷諸侯を之れに次ぐ、是れ九經の順序なり、

修身則道立、尊賢則不惑、親親則諸父昆弟不怨、敬大臣則不眩、體羣臣則士之報禮重、子庶民則百姓勸、來百工則財用足、柔遠人則四方歸之、懷諸侯則天下畏之、

【註釋】【道立】……道德の根本の成り立つなり、【不惑】……道理に惑はぬなり、【諸父】……伯叔父母なり、【不眩】……國家の機務に迷はぬなり、【報禮重】……君に返禮することの手厚さなり、【百姓勸】……百姓の農業を骨折ること、百姓は、人民なり、天下の民は、皆族姓あるが故に、百姓といふ、百は、大數なり、

【講義】人君にして、九通りの常法を行へば、其の結果は、下の如し、第一に、人君自身を修むれば、道德の根本成り立つなり、第二に、賢人を尊禮して、一門親族に推し及ぼせば、伯叔父母も兄弟も皆滿足して、怨みかこたぬなり、第四に、大臣を敬重して、政事を委任すれば、國家の機務に迷はぬなり、第五に、大勢の臣下を吾が手足のやうに頼もしく思へば、諸士恩に感じて、手厚く君に返禮するなり、第六に、衆民を吾が子のやうに痛はしく思へば、百姓は農業を骨折りて、能く租稅を納むるなり、第七に、諸職人を國内に招き寄せて、其の職業を奬勵すれば、それ〴〵の器具滿足するなり、第八に、遠國他鄉の賓客旅人を物和らかに取り扱へば、東西南北の人、之れに歸服するなり、第九に、諸侯を撫で安んずれば、天下中の者、之れを畏れて、侮らぬなり、

齊明盛服、非禮不動、所以脩身也、去讒遠色、賤貨而貴德、所以勸賢也、尊其位、重其祿、同其好惡、所以勸親親也、官盛任使、所以勸大臣也、忠信重祿、所以勸士也、時使薄斂、所以勸百姓也、日省月試、既稟稱事、所以勸百工也、送往迎來、嘉善而矜不能、所以柔遠人也、繼絶世、舉廢國、治亂持危、朝聘以時、厚往而薄來、所以懷諸侯也、

【註釋】【齊明盛服】……齊は、上の鬼神之爲德の條に見えたり、但し、彼の條にては、宗廟の祭りなり、此の條にては、宗廟朝廷に大禮を行ふ場合なり、【非禮不動】……禮に叶はざれば、何事をもせざるなり、動の字は、視聽言動を兼ぬ、【賤貨而貴德】……金錢よりも、道德を重んずるなり、【勸賢】……賢人を勸め勵ますなり、下の五つの勸も、皆同じ、【同其好惡】……愛憎の心を一樣にするなり、【官盛任使】……高官を授けて優待し、政事を委任して、召し使ふなり、一說に、大勢の屬官を附けて、使令に任ぜしむるなりといへるは、非なり、【忠信重祿】……士の忠信なる者に、食祿を澤山に充て行ふなり、一說に、忠信は、人君の羣臣に對する仕向けなりといへるは、非なり、【時使薄斂】……農業の季節に妨げなき時に課役を命じ、租稅を輕くするなり、【既稟稱事】……毎日仕事の勤惰を省察し、毎月仕事の成績を試驗するなり、【既稟稱事】……既は、隙と通ず、既稟は、月々の給米なり、其の給米の仕事に釣り合ふなり、【送往迎來】……他國へ歸り往く者には、道中の手形を渡して、通行の故障なからしめ、他國より入り來る者には、宿泊などの不便なからしむるなり、【嘉善而矜不能】……都會の風に慣れて、言語作法の善き者は、之れを譽めて、引き立て、其の能くせざる者は、之れを憐みて、教ふるなり、【繼絶世】……國はあれども、子孫の絶えたる者は、其の子孫を捜し求めて、其の家を繼がするなり、【舉廢國】……子孫はあれども、其の國亡びたる者は、其の子孫を保護して、其の國を舉げ興さするなり、【治亂持危】……政事の亂れたる者を立て直して遣り、社稷の危くなりたる者を持ち直して遣るなり、【朝聘以時】……朝は、諸侯の天子に見ゆることなり、聘は、諸侯の大夫をして天子に物を獻ぜしむることなり、禮記の王制の篇に、毎年一度小聘し、三年目に一度大聘し、五年目に一度參朝すとあり、是れ其の時を以てするなり、【厚往而薄來】……天子より諸侯に物を賜ふには、手厚くして、諸侯より天子に物を上るには、手薄くせしむるなり、

【講義】さて、此の九通りの常法の實際上の仕方はといふに、第一に、物忌みをして、身を清めて、汗れざる衣冠を著用して、宗廟朝廷の大禮を行ひ、一擧一動、何事も禮儀に叶はざることをせざるは、身を脩むる仕方なり、第二に、讒言を去りて、聽き納れず、女色を遠ざけて、近づけず、金錢よりも、道德を重んずるは、賢人を勸め勵ます仕方なり、小人進み、女子寵せられ、財を重んじ、德を輕んずれば、君子は退くものなれば、左樣にせぬが、賢路を開くに當たるなり、第三に、親族は、大切なるものなれば、其の位階を尊くし、其の食祿を澤山に充て行ひ、親族の好む所は、己れも好み、親族の惡む所は、己れも惡み、其の愛憎を一樣にするは、己れの親を親愛して、親族に推し及ぼすべきことをもて、天下の人を勸め勵ます仕方なり、但し、親族は、大切なるには相違なけれども、只々其の位階を尊くして、官職を授けざるは、公私の別を明かにする

なり、又其の好惡を同じくすといひても、是非善惡を擇ばざるにはあらず、是を好み、非を惡み、善を愛し、惡を惡む心を一致せしむることなり、第四に、高官を授けて優待し、政事を委任して召し使ふは、大臣を勸め勵ます仕方なり、第五に、士の忠信なる者に食祿を澤山に充て、行ふは、諸士を勸め勵ます仕方なり、第六に、農業の季節に妨げなき時に課役を命じ、租稅を輕くするは、百姓を勸め勵ます仕方なり、第七に、工業の監督ありて、毎日仕事の勤惰を省察し、毎月仕事の成績を試驗して、月々の給米を仕事の多少巧拙に釣り合はするは、諸職人を勸め勵ます仕方なり、第八に、他國へ歸り往く者には、道中の手形を渡して、通行の故障なからしめ、他國より入り來る者には、宿泊などの不便なからしめ、都會の風に慣れて、言語作法の善き者は、之れを譽めて、引き立て、其の能くせざる者は、之れを憐みて、教ふるは、遠國他鄉の賓客旅人を物和らかに取り扱ふ仕方なり、第九に、國はあれども、子孫の絶えたる者は、其の旁系の親族を搜し求めて、其の家を繼がしめ、子孫はあれども、其の國の亡びたる者は、其の子孫を保護して、其の國を擧げ興こさしめ、政事の亂れたる者は、立て直して遣り、財稅の危くなりたる者は、持ち直して遣り、諸侯の朝參、大夫の來聘を規則通りの時節に行はしめ、天子より諸侯に物を賜ふには、手厚くして、諸侯より天子に物を上るには、手薄くせしむるは、諸侯を撫で安んずる仕方なり、

凡爲天下國家有九經、所以行之者一也、

【講義】此の如く、總じて、天下國家を治むるには、九通りの常法あり、而して、之れを行ふ結局の仕方は、唯一つの眞實にして僞りなき誠なり」と、以上孔子の言葉なり、

【文法】上に達道、達德を結ぶに所以行之者一也を用ゐ、今又九經を結ぶに此の語を用ゐたり、是れにて、次章の誠を起こす、

凡事豫則立、不豫則廢、言前定則不跲、事前定則不困、行前定則不疚、道前定則不窮、

【字釋】【凡事豫則立】……總じて、何事も、前方に能く考へて、取り極め置けば、其の事は、成り立つものなりといふことなり、凡事の二字は、況く天下の萬事を指す、一說に、達道、達德、九經の類を指すといへるは、非なり、【廢】……成り立たぬなり、【不跲】……躓かぬなり、【不困】……難儀せぬなり、【不疚】……氣に懸からぬなり、【不窮】……行き詰まらぬなり、

【講義】總じて、何事も、前方に能く考へて、取り極め置けば、其の事は、成り立つものなり、之れに反して、前方に能く考へて、取り極め置かねば、其の事は成り立たぬものなり、之れを委しくいふときは、物をいはむとするときに、言葉の順序、前方より極まりて居れば、事に臨みて、言葉の躓かぬものなり、事を行はむとするときに、仕事の順序、前方より極まりて居れば、事に臨みて、難儀せぬものなり、行ひの方針、前方より極まりて居れば、事に臨みて、人の批難の氣に懸からぬものなり、道の標準、前方より極まりて居れば、事に臨みて、行き詰まらぬものなり、

【文法】事豫則立は、綱にして、言、事、行、道は、目なり、前定は、即ち豫なり、不跲、不困、不疚、不窮は、卽ち立なり、

在下位不獲乎上、民不可得而治矣、獲乎上有道、不信乎朋友、不獲乎上矣、信乎朋友有道、不順乎親、不信乎朋友矣、順乎親有道、反諸身不誠、不順乎親矣、誠身有道、不明乎善、不誠乎身矣、

【字釋】【下位】……臣下の地位なり、【不獲乎上】……君上の心に叶はぬなり、【不順乎親】……親の心に悅ばれぬなり、上の父母其順矣乎の順と同じ、【反諸身】……己れの身を振り返り見るなり、

【講義】何事も、前方より取り極まらねば、成り立たぬ譬は、臣下の地位に在りて、君上の心に叶ひて、其の信任を蒙らざれば、己れの位に安んじて、人民を治むることを得られぬものなれば、成り立たぬ譬は、臣下は、必ず上の心に叶ひて、其の信任を蒙るには、之れに要する仕方あり、そは、先づ己れの朋友に信用せられて、其の推薦を待つべきことなり、朋友に信用せられずして、疑念を受くるやうにては、君上の心に叶ひて、其の信任を蒙ることはならぬなり、朋友に信用せらるゝには、之れに要する仕方あり、そは、先づ己れの親に孝行をして、親の心に悅ばるべきことなり、親の心に悅ばれずして、不孝の者よといはるゝやうにては、朋友に信用せられぬなり、親の心に悅ばるゝには、之れに要する仕方あり、そは、先づ己れの身を振り返り見て、愛敬の誠なければ、うはべばかりの孝行となるが故に、親の心に悅ばれぬなり、其の身を誠實にするには、之れに要する仕方あり、そは、先づ學問をして、至善の道理を明かに會得すべきことなり、至善の道理を明かに會得せざれば、誰らず知らず虛僞に陷りて、身を誠實にすることはならぬなり、されば、萬事の根本は、至善の道理を明かに會得するに在り、

【文法】明乎善には、上文の譬なり、前定なり、

誠者、天之道也、誠之者、人之道也、誠者、不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也、誠之者、擇善而固執之者也、

【字釋】【誠之】……之の字は、道を指す、下の誠之の之も同じ、【不勉而中】……殊更に骨折らずして、道に合ふなり、行ひに屬す、【不思而得】……殊更に思ひ索めずして、道を手に入るゝなり、知に屬す、【從容中道】……緩やかに落ち著きて、自然に道に合ふなり、知行を兼ぬ、【固執之】……堅固に善を執り守るなり、之の字は、善を指す、

【講義】誠とは、眞實にして、僞りなきことにして、天の自然の道なり、之れを誠にすとて、其の道を身に體して、眞實にして、僞らざるは、人たる者の當然の道なり、此の如く、單に誠といふときは、天の自然の道なれど、之れを人の上にていふときは、又單に誠なる人と、之れを誠にする人との等差あり、卽ち單に誠といひて、行ふことは、殊更に骨折らずして、道に合ひ、知ることは、殊更に思ひ索めずして、道を手に入れ、從容として、緩やかに落ち著きて、知ることも、行ふことも、何の苦もなく、道に合ふは、聖人の事なり、是れ聖人は自然の道と一體なるなり、又之れを誠にすといひて、學問をして、善惡を辨へて、其の善き所を擇び取りて、堅固に之れを執り守りて失はざるは、まだ聖人に至らざる者の事なり、知ることゝ、行ふことゝに、離易の相違あることは、此の如くなれど、誠の域に達するに及びては、變はることなし、

博學之、審問之、愼思之、明辨之、篤行之、有弗學、學之弗能、弗措也、有弗問、問之弗知、弗措也、有弗思、思之弗得、弗措也、有弗辨、辨之弗明、弗措也、有弗行、行之弗篤、弗措也、人一能之己百之、人十能之己千之、果能此道矣、雖愚必明、雖柔必强、

【博學之】……人たる道を手廣く學ぶなり、之の字は、道を指す、下の之も、皆同じ、【弗措】……棄て置かぬなり、

人は、必ずしも聖人にあらざれば、學びて道を知り、勉めて道を行はざるべからず、其の疑はしき事を委しく審かに師友に尋ね問ひ、其の聞き得たる事を氣を附けて考へ思ひ、其の考へ思ひたる事に就きて、道の善處を明白に辨別し、其の辨別したる事を、篤實に行ふなり、學問事業は、必成を期するに在り、學ばざることあれば、それまでなれど、一旦之れを學びたる上は、能くせざれば、棄て置かぬなり、問はざることあれば、それまでなれど、一旦之れを問ひたる上は、知り拔かざれば、棄て置かぬなり、思はざることあれば、それまでなれど、一旦之れを思ひたる上は、手に入れざれば、棄て置かぬなり、行はざることあれば、それまでなれど、一旦之れを辨別せむとしたる上は、明白にせざれば、棄て置かぬなり、辨別せざることあれば、それまでなれど、一旦之れを行ひたる上は、篤實にせざれば、棄て置かぬなり、他人の一度して之れを能くするなり、我れは之れを百度して能くするなり、他人の十度して之れを能くしたる事は、己れは之れを千度して能くするなり、果たして實に以上の仕方を能くせむには、如何に愚昧の者なりとも、屹度知識は明かになるべし、如何に柔弱なる者なりとも、屹度其の身の行ひは强く堅固になるべし、

【文注】博學、審問、愼思、明辨は、知に屬す、上文の擇善なり、篤行は、行ひに屬す、上文の固執之なり、

自誠明、謂之性、自明誠、謂之教、誠則明矣、明則誠矣、

【本注】心の誠なるに由りて、善に明かなるは、生まれながらに知ることにして、聖人の之れを性の德にすることなり、故に之れを性といふ、善に明かなるに由りて、能く誠なるは、學びて之れを知ることにして、賢人の學問なり、故に之れを教へといふ、誠なれば善に明かなり、善に明かなれば誠なり、生知、學知の相違はあれど、歸する所は一つなり、

【文注】性教の二字、首章の天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教に應ず、自誠明は、上章の誠者なり、自明誠は、上章の誠之者なり、

唯天下至誠、爲能盡其性、能盡人之性、能盡人之性、則能盡物之性、能盡物之性、則可以贊天地之化育、可以贊天地之化育、則可以與天地參矣、

【贊天地之化育】……贊は、助くるなり、天地の萬物を變化生育する仕事を助くるなり、【與天地參】……參は、三なり、天地と並び立ちて、三才の一つに數へらるゝなり、

【本注】唯と獨り天下を通じて之れに增したるものなき程に至極なる誠を持てる聖人のみは、知ることも、行ふことも、能く天性の善を盡くして、少しも缺けたる所なし、能く天性の善を盡くせば、能く人々を感化して、我れと同じく天性の善を盡くさしめらるゝなり、能く人々をして天性の善を盡くさしむれば、禽獸草木、一切の物をして、其の生を遂げ、其の用を極めしめらるゝなり、能く萬物の天性を盡くさしむれば、天地の萬物を變化生育する仕事を助けて、之れを成就せしめらるべし、天地の萬物を變化生育する仕事を助くれば、其の貴きこと、天地と並び立ちて、三才の一つに數へらるべし、是れ聖人の事にして、卽ち至誠の盡きなり、

【文注】是れ上文の自誠明の事なり、誠明の事なり、首章の天地位焉、萬物育焉に應じ、末章の知三天地之化育を起こす、

其次致曲、曲能有誠、誠則形、形則著、著則明、明則動、動則變、變則化、唯天下至誠爲能化、

【其次】……天下の至誠に次ぐ人にして、賢人を指す、【致曲】……一箇條づつの道理を極め盡くすなり、曲は、ひとつ〳〵と別ず、曲禮の曲と同じく、細目に涉ることなり、【形】……誠の實の身の外に顯はるゝなり、【著】……一家鄉黨の人の目に留まるなり、【明】……國、天下の人の目に留まるなり、【動】……人の心の動きて善に向ふなり、【變】……惡しき心を改め變ふるなり、【化】……本然の善に化するなり、

【本注】天下の至誠は、生知安行の聖人の事なるが、さて、其の次ぎの賢人は、學問をして、至誠の域に達すべきものなれば、何事によらず、一箇條づつ、當然の道理を極め盡くすときは、自然に善に明かになりて、心の內に誠あるなり、心の誠なるときは、誠の實は、身の外に顯はるゝなり、身の外に顯はるれば、一家鄉黨の人の目に留まるなり、一家鄉黨の人の目に留まれば、國、天下の人の目に留まるなり、國、天下の人の目に留まれば、人々の心は動きて、善に向ふなり、善に向へば、惡しき心を改め變ふるなり、惡しき心を改め變ふれば、其の本然の善に化するなり、能く人々をして其の本然の善に化せしむるは、唯と獨り天下の至誠、卽ち聖人のみなるが、賢人も、學びて至誠の域に達すれば、此の如く、人々を化するに至るなり、

【文注】是れ上文の自誠明の事なり、此れより以下、交互に誠者と誠之者とを說く、

至誠之道、可以前知、國家將興、必有禎祥、國家將亡、必有妖孽、見乎蓍龜、動乎四體、禍福將至、善必先知之、不善必先知之、故至誠

如神、

【字釋】【禎祥】……吉事の前兆なり、【妖孽】……凶事の前兆なり、但し、孽は、蘖に作るべし、蘖は、災餘なり、孽は、妾腹の子なり、【蓍龜】……蓍は、草の名にして、めどぎなり、昔は、之れを用ゐて筮せしが、今は、竹を用ゐるなり、龜は、龜の甲なり、昔は、龜の甲を燒きて、其の割れ方によりて、吉凶を卜せしなり、【四體】……兩手兩足なり、

【講義】世に至極なる誠の道ばかり靈妙なるものはなし、何事も、我が本心の至誠より出づるときは、其の前方より物事を知らるゝなり、たとへば、國家の興こり榮えむとするときは、屹度禎祥とて、吉事の前兆あり、其の人の手足の上にも顯はれ、又其の人の身の亡ぶる本なるが如し、總べて、禍福は、善惡に因るものなれば、國家の衰へ亡びむとするときは、屹度妖孽とて、凶事の前兆あり、其の身の上にも顯はれ、又其の人の手足の上にも動き顯はるゝなり、たとへの吉凶の前兆は、天地間　事物の上に顯はるゝのみならず、著蓍、龜卜のうちなひの上にも顯はれ、又其の人の身の亡ぶる本なるが如し、總べて、禍福は、善惡に因るものなれば、福の來り至らむとするときは、其の行ひの善なるによりて、屹度先づ分かるなり、かやうの事は、誰れにも分かり易きやうなれど、實は甚だむづかしきことなり、心の誠ならぬ者は、私欲に蔽はるゝが故に、目の前の利害をだにも見分けられぬものなれば、未來の事は、猶ほ更なり、唯だ聖人の如き一毫の私心なき者にして、始めて之れを能くすべし、されば、至誠の靈妙なるは、殆ど神の如くなるものなり、

【文法】是れ上文の自誠明の事なり、

誠者自成也、而道自道也、誠者物之終始、不誠無物、是故君子誠之爲貴、

【字釋】【自成】……自ら己れの德を成就するなり、下文の非二自成一己而已也に對照して、自成の下に己の字を省略したることを知るべし、一說には、萬物の自然に出來ることなりといへり、【自道】……自ら己れの行ひを導くなり、【物之終始】……物事の始めより終はりまでを一貫するなり、物は、君臣父子の類、事は、忠孝仁義の類なり、物の一字にて、此の二義を兼ぬ、【誠之爲貴】……上文の誠之者、人之道也と同じく、之の字は、道を指す、一說には、誠を以て貴しとするなりといへり、然るときは、誠之の二字を眞直に讀み下すなり、

【講義】眞實にして僞りなき誠は、自ら己れの德を成就するに必要なるものにして、人たる道は、自ら己れの行ひを導きて僞り行はしむるに必要なるものなれば、心を誠にするも、道を行ふも、人の指圖を待たずして、自ら之れをすべきことなり、又眞實にして僞りなき誠は、物事の始めより終はりまでを一貫して、首尾を全くせしむるに必要なるものにして、若し物事に誠なきときは、君には君の實なく、臣には臣の實なく、父には父の實なく、子には子の實なく、忠孝仁義も、悉く有名無實になりて、凡そ天下の物事は、あれどもなきが如くになるなり、此の譯なれば、君子たる、德ある人は、人たる道を誠實に行ひて、少しも僞り飾ることなきを貴び重んずるなり、

【文法】以下、時措之宜也までは、上文の自明誠の事なり、誠成、猶導は、上文の仁人、義宜の例と同じ、

誠者非二自成一己而已也、所以成物也、成己仁也、成物知也、性之德也、合二內外一之道也、故時措之宜也、

【字釋】【內外】……內は、己れを指し、外は、物を指す、【時措之宜也】……何事にても、誠をもて、自他の二つを處置すれば、皆宜しきを得るなり、

【講義】眞實にして僞りなき誠は、自ら己れの德を成就するに必要なるものなり、己れの德を成就するは、上に見えたる仁の事なり、廣く天下の物事を成就するのみならず、廣く天下の物事を成就するは、上に見えたる智の事なり、通じていへば、天性として、人の天より受け得たる自然の德なり、己れと天下の物事とを合はせて、之れを成就する仕方なり、されば、如何なる時にても、誠をもて、自他の二つを處置すれば、皆宜しきを得るものなり、

故至誠無息、不息則久、久則徵、徵則悠遠、悠遠則博厚、博厚則高明、博厚所以載物也、高明所以覆物也、悠久所以成物也、博厚配地、高明配天、悠久無疆、如此者不見而章、不動而變、無爲而成、

【字釋】【無息】……間斷なきなり、【徵】……效驗なり、【悠遠】……遙に遠きなり、【博厚】……博くして狹からず、厚くして薄からぬなり、【高明】……高くして卑からず、明かにして暗からぬなり、【悠久】……悠遠の悠と不息則久の久とを兼ね合はせたるなり、一說には、悠久は、卽ち悠遠なりといへり、【無疆】……際限なきなり、【不見而章】……人に示さずしても、德の光の輝くなり、【不動而變】……人を動かし導かずしても、自然に變じ改まるなり、

【講義】されば、至極の誠を持てる聖人は、天性の德に誠の道を盡くすこと、片時も間斷ゐることなし、片時も間斷なきときは、長く久しく續くなり、長く久しく續くときは、其の效驗の著はるゝなり、其の效驗の著はるゝときは、遙に遠く及ぼすなり、遙に遠く及ぼすときは、博くして狹からず、厚くして薄からぬなり、博くして狹からず、厚くして薄からぬときは、高くして卑からず、明かにして暗からぬなり、博くして厚きは、地の萬物を載する譬なり、高くして明かなるは、天の萬物を覆ふ譬なり、されば、博くして厚きは、地の德に配當し、高くして明かなるは、天の德に配當し、遙に遠く及ぼし、永く久しく續くは、天地の際限なきに比するなり、此の如くなれば、此方より人に向ひて示さずしても、自然に德の光は輝き、此方より人を動かし導かずしても、自然に彼れの行ひは變じ改まり、何等の作爲することもなくて、自然に天下の物事は成就するなり、帝堯、帝舜の治は、卽ち是れなり、

【文法】以下、純亦不已までは、自誠明の事なり、此に天地の字を出だし、次ぎに天地山川の字を起こす、

天地之道、可一言而盡也、其爲物不貳、則其生物不測、

【字釋】【爲物不貳】……物は、事なり、不貳は、一つなり、一つは、卽ち誠なり、【生物不測】……物は、萬物なり、不測は、神妙にして、推し測り難きなり、

【講義】天地の道は、廣大無邊なりといへども、之れを約めていふときは、唯だ誠といふ一言にて盡くさるゝなり、天地の天地たる事は、二つ以上

の道理あるにあらず、唯だ一つの誠なり、即ち天地の現象は、毛頭僞り飾ることなく、一切自然の約束に從ふなり、唯だ專一に誠なればこそ、其の萬物を生育する働きは、神妙にして、推し測り難きなれ、聖人の誠は、之れに異なることなし、

【文法】天地之道の句、上を收め、下を起こす、

天地之道、博也、厚也、高也、明也、悠也、久也、

【講義】天地の道は、博く、厚く、高く、明かに、遠に、久しきものなれば、前にも申し述べたる通り、聖人は之れを手本とするものなり、

【文法】上文の意を重ねていふ、

今夫天斯昭昭之多、及其無窮也、日月星辰繫焉、萬物覆焉、今夫地一撮土之多、及其廣厚、載華嶽而不重、振河海而不洩、萬物載焉、今夫山一卷石之多、及其廣大、草木生之、禽獸居之、寶藏興焉、今夫水一勺之多、及其不測、黿鼉蛟龍魚鼈生焉、貨財殖焉、

【訓讀】【斯昭】……小さく明かなるさまなり、たとへば、管の中より天を窺ひたるが如し、【無窮】……際限なきなり、【星辰】……星は、字の如し、辰は、星の宿り場所なり、【繫】……繫屬するなり、【一撮】……一摘みなり、【華嶽】……河南に在る華山と、河西に在る嶽山となり、並びに漢土の大なる山なり、【振】……收め貯ふるなり、【河海】……河は、黃河なり、海は、大海なり、【一卷】……一握りなり、【寶藏】……金銀玉石の如き重寶として祕藏すべき物なり、【興】……出づるなり、【一勺】……一掬ひなり、【黿】……うみがめなり、【殖】……繁殖するなり、のなり、【蛟】……龍に似て、角なきものなり、【龍】……鱗ある虫の長なり、【鼈】……魚に似て、足あるものなり、

【講義】今天の德を證せむに、天は原來小さく明かなる虛空の積み累なりて多くなりたるものなれど、其の際限なきに及びては、日も月も星も星の宿り場所も、皆其の中に繫屬し、萬物も、皆其の下に經はるゝなり、今地の德を證せむに、地は原來一摘みの土の積み累なりて多くなりたるものなれど、其の廣く厚きに及びては、華山、嶽山などの如き大なる山を載せて重しとせず、黃河、大海の水を收め貯へて、外に洩らさぬなり、天地の德は、此の如し、更に今、地の一部分なる山の德を證せむに、山は原來一握りの石の積み累なりて多くなりたるものなれど、其の廣く大なるに及びては、草も木もこれに生じ、鳥も獸もこれに居り、金銀玉石の如き重寶として祕藏すべき物も、其の中より出づるなり、更に今、地の一部分なる水の德を證せむに、水は原來一掬ひの水の積み累なりて多くなりたるものなれど、其の深淺の測られざるに及びては、黿も鼉も蛟も龍も魚も鼈も生じ、眞珠、珊瑚の如き貨財も、其の中に繁殖するなり、誠より外に物なき天地の德は、實に此の如し、

【文法】是れ天地の德を、上文の聖人の德に應じ、又山川の物を生ずることをいひて、上文の生物不測を承け、

詩云、維天之命、於穆不已、蓋曰天之所以爲天也、於乎不顯、文王之德之純、蓋曰文王之所以爲文也、純亦不已、

【訓讀】【詩】……詩經の周頌の部の維天之命の篇なり、【維】……發語の言葉にして、指す所あり、即ち下の天之命を呼び起こすなり、○天之命……天の道なり、【於】……感歎して發する聲なり、【穆】……深遠なるさまなり、【不已】……間斷なきなり、【蓋】……推し測りていふ言葉にして、思ふにといはむが如し、【於乎】……上の於と同じ、【不顯】……顯はるゝなり、【純】……純一にして、雜はらざるなり、

【講義】聖人の德は、天地と一體なり、されば、詩經の維天之命の篇に、「あゝ、感心なることよ、天道の運行は、穆として深遠にして、一刻の間斷あることなし」とあるは、思ふに、天の天たる譯をいへるならむ、又「あゝ、感心なることよ、何として天下後世に顯はれざるべき、其の顯はれたるは當然なり、即ち天と文王との常に至誠なることは一つなり、

【文法】天と聖人との至誠を說きて、發端の至誠無息を結ぶ、

大哉聖人之道、洋洋乎發育萬物、峻極于天、優優大哉、禮儀三百、威儀三千、待其人而後行、故曰、苟不至德、至道不凝焉、

【訓讀】【洋洋乎】……前に見えたる如く、流動充滿するさまなり、【峻極于天】……峻は、高きなり、極は、至るなり、其の道の高きこと、天の德に比すべき程に至るなり、【優優】……充ち足りて、餘りあるさまなり、【禮儀】……禮の大綱なり、【威儀】……禮の細目なり、【其人】……聖人を指す、【苟】……若しなり、【不凝】……聚まらぬなり、成らぬなり、

【講義】さて、大なることかな、聖人の道は、洋洋乎として、流動充滿して、萬物を發生長育す、其の道の高きことは、天の德にも比すべき程に至るなり、優優として、充ち足りて、餘りありて、大なることかな、禮の大綱は、三百箇條にも及べり、其の細目は、三千箇條にも及べり、此の如く盛んなる文物は、聖人の出づるを待ちて、始めて世間に行はるゝなり、されば、古語にも「若し至極の德ある聖人ならざむには、至極の道は、散じて聚まらず、缺けて成らざるべし」とあり、

【文法】以下、其此之謂與までは、自明誠の事なり、

故君子尊德性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸、溫故而知新、敦厚以崇禮、

【訓讀】【道問學】……道は、由るなり、學問に由るなり、【溫故】……溫は、尋ぬるなり、故は、其の身の前々より能くする所の行ひなり、其の前々より能くする所の行ひを尋ね求めて、失はざらむやうにするなり、【敦厚】……溫厚なる德を愈々手厚くするなり、【崇禮】……大小の禮儀を崇び重んずるなり、昔の學問は、禮を學ぶを第一とせるが故に、斯くいへるなり、

【講義】されば、君子とて、德ある人は、已れの德性を尊び重んじて、之れを養成擴充するには、學問に由るなり、德は廣く大なる處まで致し窮め

て、學問は精密微妙の處まで調べ盡くすなり、德は高く明かなる處まで推し極めて、學問は過不及なく恆久にして變はらざる中庸に由るなり、德に其の身の前々より能くする所の行ひを尋ね求めて失はざらむやうにして、學問は日々に己れの知らぬ所の新しき事を知り覺ゆるなり、德は溫厚なることを愈々手厚くして、學問は大小の禮儀を尊び重んずるなり、此の如く、君子は德を修むることゝ、學を講ずることゝを、同時に勉め勵むなり、

文法 君子の學問の方を論ず、則ち誠之の道なり、

是故居上不驕、爲下不倍、國有道、其言足以興、國無道、其默足以容、詩曰、既明且哲、以保其身、其此之謂與、

字解 【不倍】……上の人に背かぬなり、【興】……身を起こすなり、【默】……物をいはぬなり、【容】……身を容るゝなり、【詩】……詩經の大雅の篇の烝民の篇なり、【既明且哲】……道理に明かなるが上に、事情に通ずるなり、

講義 此の譯なれば、德ある人は、人の上に居るときは、下に對して、驕り高ぶらず、人の下となりては、上に背かず、國に道の行はれて、世の治まるときは、其の發言は、身を起こすに足り、國に道の行はれずして、世の亂るゝときは、其の沈默は、身を當世に容れ置きて、刑戮を免るゝに足るなり、詩經の烝民の篇に「道理に明かなるが上に、事情に通じたるをもて、其の身を保んじ全くして、不慮の難儀に遇はぬなり」とあるは、此の事をいへるなるべし、

文法 君子の躬行の效をいふ、則ち中庸の道なり、居上不驕は、崇禮の效なり、爲下不倍は、敦厚の效なり、此の二句、上の結句を承く、故に是故の二字をもて、之れを接ず、以上は、多く子思の言葉なり、以下は多く孔子の言葉を引きて、子思之れを解せり、是れ中庸の始めの體裁に合はせて、首尾の法を同じくせるなり、

子曰、愚而好自用、賤而好自專、生乎今之世、反古之道、如此者、烖及其身者也、

字解 【反古之道】……昔の仕方に立ち戻るなり、【烖】……災と同じ、

講義 孔子の言葉に「位ありても、才なくして敢かなれば、控へ目にして、其の身を守るべきを、反りて人のいふことを聽かずして、自分の意見を用ゐることを好む者あり、又才ありても、位なくして賤しければ、己れの分を守るべきを、反りて人を推し除けて、自ら事を專らにすることを好む者あり、又今の世に生まれたれば、今の法度に從ふべきを、反りて昔の仕方に立ち戻りて、强ひて時勢に逆らふ者あり、此の如き者は、皆中庸の道に叶はぬが故、世間の批難攻擊を受けて、子孫の代を待たずして、其の身に災難の及ぶ者なり」とあり、

文法 愚の字は、上文の既明且哲に反對し、烖及其身は、上文の以保其身に反對す、愚而好自用は、上に居て驕るなり、賤而好自專は、下となりて倍くなり、是れ亦上文に承接す、

非天子、不議禮、不制度、不考文、

講義 孔子の言葉を續て、下たる者は、上に背かぬものなることを悟るべし、天子にあれざれば、書賜與謚吉凶喪弔等の禮儀を議定せず、宮室車輿衣服旗幟等の法度を制定せず、文字の點畫形象等を考へ定めぬなり、是れ皆天下に共通すべき事なれば、人臣の私にすべきことにあらず、

文法 賤しくして自ら專らにすべからざることをいへるなり、

今天下車同軌、書同文、行同倫、

字解 【軌】……車の輪と輪との間の寸法なり、【倫】……人倫の次第なり、父子、君臣、夫婦、朋友、長幼の關係を指す、

講義 今日、天下中の車は、輪と輪との間の寸法を同一にし、文書は、文字を同一にし、日常の行營は、人倫の次第を同一にせるは、文王、武王の定めたまへるものなれば、夏、殷の頃とは、多少の相違なきにしもあらざれど、今日の臣民は、之れに循ひ由るべきことなり、

文法 今の世に生まれて古の道に反るべからざることをいへるなり、

雖有其位、苟無其德、不敢作禮樂焉、雖有其德、苟無其位、亦不敢作禮樂焉、

字解 【苟】……若しなり、

講義 天子の位ありといふとも、若し聖人の德なくば、決して禮義音樂を新たに作り出だすまじきなり、又聖人の德ありといふとも、若し天子の位なくば、やはり決して禮儀音樂を新たに作り出だすまじきなり、禮儀音樂は、天子の位と聖人の德とを兼ねたる人にして、始めて之れを作ることを得べし、

文法 前の句は、愚にして自ら用ゐるべからざることをいへるなり、後の句は、賤しくして自ら專らにすべからざることをいへるなり、以上は、子思の孔子の意を敷衍せるなり、

子曰、吾說夏禮、杞不足徵也、吾學殷禮、有宋存焉、吾學周禮、今用之、吾從周、

字解 【杞】……國の名にして、夏の後なり、【不足徵】……證據とするに足らぬなり、一說に、徵は、成すなり、其の國君の禮を成すに足らぬなりといへるは、非なり、【宋】……國の名にして、殷の後なり、

講義 孔子の言葉に「吾れは、周の世の禮を設けども、馬王の末孫の封ぜられたる杞の國の制度文物散失して、證據とするに足るものなし、又吾れは、殷の世の禮を學べども、湯王の末孫の封ぜられたる宋の國の存在せるのみにて、證據とするに足るものなし、夏も、殷も、此のやうなれば、又吾れは、周の禮を學べるが、此の禮は、今日之れを一般に用ゐて、分明なるが上に、臣民として遵奉すべきものなれば、吾れは、周に從

はむ」とあり、

又注 今の世に生まれて古の道に反るべからざることをいへるなり、是れ時を知る者なり、

王天下有三重焉、其寡過矣乎、上焉者雖善無徵、無徵不信、不信民不從、下焉者雖善不尊、不尊不信、不信民弗從、

字釈 【三重】……三つの重んずべき事にして、德と位と時とを指す、一說には、夏、殷、周の三王の禮なりといひ、又一說には、禮を議し、度を制し、文を考ふることなりといへり、今は、最初の解に從ふ、【上焉者】……文、武、周公より上のことにして、暗に夏、殷の禮を指す、一說には、上は、君のことなりといひ、又一說には、上は、三王以上、遠き三皇までのことなりといへり、今は、最初の解に從ふ、【下焉者】……文、武、周公より下のことにして、暗に孔子の聖を指す、一說には、下は、臣のことなりといひ、又一說には、下は、三王の道にあらざる侯伯のことなりといへり、今は、最初の解に從ふ、

其意 孔子の言葉によりて考ふるに、天下に王となりて、禮樂を施行するには、德と位と時との三つの重んずべき事あり、此の三箇條を具足せば、天下の目耳を新たにすとも、過失あること少なかるべし、文王、武王、周公より上の者、卽ち夏、殷の禮の如きは、禹王、湯王の制したまひしものなれば、善きには相違なけれども、世遠く、人亡びて、證據とすべきものなきなり、證據とすべきものなければ、世間に信仰せられぬなり、世間に信仰せられねば、人民は之れに從はぬなり、是れ其の德と位とはあれども、其の時を失へるなり、又文王、武王、周公より下の者、卽ち孔子の聖の如きは、其の言葉は、善きには相違なけれども、身分尊からねば、世間に信仰せられぬなり、身分尊からねば、世間に信仰せられねば、人民は之れに從はぬなり、是れ其の德はあれども、其の位なくして、其の時を得ざるなり、されば、孔子は、自ら禮を作られしことなく、夏、殷の禮をも取られずして、德と位と時との三つに叶ひたる文王、武王、周公の定めたまひし周の禮に從はれたり、

故君子之道、本諸身、徵諸庶民、考諸三王而不繆、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑、

字釈 【君子】……天下に王たる人を指す、【三王】……夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王なり、【不繆】……差ひ誤まらぬなり、【建諸天地】……天地の間に立つるなり、【不悖】……違ひ背かぬなり、【質諸鬼神】……卜筮をもて鬼神に質し問ふなり、【俟聖人】……聖人の出づるを待つなり、

其意 されば、天下に王たる君子の仕方は、之れを其の身に本づきて、己れの德を脩め、之れを衆民に施し行ひて、時に叶ひて、治安の證據あることゝ見届め、之れを禹、湯、文、武の三王の仕方に考へ合はせて、差ひ誤まらず、之れも天地の間に立てゝ、天の道にも地の道にも違ひ背かず、之れを卜筮をもて鬼神に質し問ひて、其の得失を疑ひ怪むべきことなく、百世の後に至りて、聖人の出づるを待ちて、其の判斷を求むとも、決して批難あるまじきことを信じて惑はざるなり、

質諸鬼神而無疑、知天也、百世以俟聖人而不惑、知人也、

其意 鬼神に物をいはれねど、卜筮の上に吉凶禍福を示さるゝものなれば、之れを鬼神に質し問ひて、其の得失を疑ひ怪むべきことなきは、天の道理を知るといふものなり、百世の後に至りて、聖人の出づるを待ちて、其の判斷を求むとも、決して批難あるまじきことを信じて惑はざるは、人の道理を知るといふものなり、

是故君子動而世爲天下道、行而世爲天下法、言而世爲天下則、遠之則有望、近之則不厭、詩曰、在彼無惡、在此無射、庶幾夙夜、以永終譽、君子未有不如此、而蚤有譽於天下者也、

字釈 【動而世爲天下道】……一たび身を動かせば、後の世までも、天下の共に由る所の仕方となるなり、動の字は、下句の言、行を兼ね、道の字は、下句の法、則を兼ぬ、【法】……法度なり、【則】……準則なり、【有望】……仰ぎ望みて愛敬するなり、【不厭】……厭ひ惡まぬなり、【詩】……詩經の周頌の部の振鷺の篇なり、【無射】……厭はゝることなきなり、【庶幾】……何卒と願ふ言葉なり、【夙夜】……旦暮なり、【永終譽】……身の終はりまで、名譽を全くするなり、【蚤】……早くなり、

其意 此の譯なれば、天下に王たる君子は、一たび身を動かせば、後の世までも、天下の共に由る所の仕方となるなり、卽ち之れを言行の二つに分かちていへば、一たび事を行へば、後の世までも、天下の準則となるなり、其の德の盛んなること、此の如くなれば、御膝元を離れて、此の君に遠ざかれる人民は、遠に之れを仰ぎ望みて愛敬し、御膝元に居て、此の君に近づける人民は、目の前に之れを拜して、厭ひ惡まぬなり、通例の人情は、其の人の樣子を聞けば、欣び慕ふ心を生ずれども、其の人の樣子を見れば、厭ひ惡む心を生ずるものなるが、此の如き君子に對しては、厭ひ惡む心を生ずることなし、されば、詩經の振鷺の篇にも、「彼の處に在りても、惡まるゝことなく、此の處に在りても、厭はるゝことなく、何卒日暮に勤勉して、身の終はりまで、名譽を全くしたきものなり」とあり、天下に王たる君子にして、此の如くならずして、人に惡まれ厭はれながら、早く天下に名譽を得たる者は、昔より、まだ其の例あらぬなり、

又注 以上、聖人君子の道を說く、

仲尼祖述堯舜、憲章文武、上律天時、下襲水土、

字釈 【祖述】……遠く其の道を祖として、之れを述べ傳ふるなり、【憲章】……其の法度に遵ひて、其の義理を明かにするなり、【律】……法るなり、【襲】……因るなり、

其意 昔の天下に帝たる道は、帝堯、帝舜より盛んなるはなし、されば、孔子は、遠く帝堯、帝舜の道を祖として、之れを述べ傳へられたり、昔より、天下に王たる法は、文王、武王より備はりたるはなし、されば、孔子は、近く文王、武王の法度に遵ひて、其の義理を明かにせられたり、しかのみならず、春夏秋冬の運行して滯らぬは、天の時なり、されば、孔子は、之れに法りて、天と其の化を同じくせられたり、東西南北に水土

土質の異同あるは、地の理なり、されば、孔子は、之れに因りて、地と其の力を齊しくせられたり、

【文注】以下、仲尼の道を敍きて、前章に應ず、

辟如天地之無不持載、無不覆幬、辟如四時之錯行、如日月之代明、萬物竝育而不相害、道竝行而不相悖、小德川流、大德敦化、此天地之所以爲大也、

【註】……譬と同じ、【持載】……物を載するなり、【覆幬】……物を覆ふなり、【錯行】……互に行はるゝなり、【代明】……代はりく〳〵に照らすなり、【道】……四時之錯行、日月之代明を指す、【悖】……戻と同じ、【小德川流】……德の一部分は、川の流るゝが如く、先より先へと、物を潤澤するなり、【大德敦化】……德の全體は、圓滿に物を化成するなり、

【本文】孔子の德は、譬へば、天地の萬物を載せざることなく、覆はざることなき如し、又譬へば、春夏秋冬の四時の年々歲々互に行はるゝが如く、日月の晝と夜とに代はるく〳〵照らすが如し、萬物は其の間に相竝びて生育せられて、相互に侵し害ふことなく、四時も、晝夜も、相竝びて順序正しく行はれて、相互に戻り違ふことなし、此の四時の互に行はれ、日月の代はるく〳〵照らして、相互に戻り違ふことなきは、天地の德の一部分にして、此の一部分は、川の流るゝが如く、先より先へと、物を潤澤するなり、又此の天の覆ひ、地の載せて、萬物の其の間に相竝びて生育せられて、相互に侵し害ふことなきは、天地の德の全體にして、此の全體は、圓滿に物を化成するなり、此れ天地の大なる譯にして、孔子の德も、亦此の如し、卽ち孔子は、帝王天地の德を集めて、數多の弟子を教育し、其の人物に隨ひて、皆それ〴〵に材器を養成せられたり、

【文注】上文の博厚所二以載一物也、高明所二以覆一物也、博厚配レ地、高明配レ天に應ず、

唯天下至聖爲能聰明睿知、足以有臨也、寬裕溫柔、足以有容也、發强剛毅、足以有執也、齊莊中正、足以有敬也、文理密察、足以有別也、

【註】【聰明睿知】……聰明は、物事の道理を聽き分け視分くるなり、睿知は、物事の道理に通じ、物事の道理を悟るなり、【臨】……上に居て下に臨むなり、上より下を見ることを臨むといふ、【寬裕溫柔】……寬裕は、度量の弘く緩やかなるなり、溫柔は、容貌の溫和にして、氣質の柔和なるなり、【容】……衆を容るゝなり、【發强剛毅】……發强は、快活にして、物事に撓まぬなり、剛毅は、利慾に屈せずして、決斷あるなり、【執】……道を執り守りて移らぬなり、【齊莊中正】……齊莊は、威儀の整ひて重々しきなり、中正は、禮法の片寄らず曲らざるなり、【敬】……人に敬はるゝなり、【文理密察】……文理は、文章あり、條理あるなり、密察は、精密にして、明察なるなり、【別】……物事を辨別するなり、

【本文】唯々獨り天下中に及ぶ者なき至極の聖人のみは、能く聰明とて、物事の道理を聽き分け視分け、睿知とて、物事の道理に通じ、物事の道理

を悟ることは、上に居て下に臨むに餘りある程なり、又寬裕とて、度量の弘く緩やかに、溫柔とて、容貌の溫和にして、氣質の柔和なることは、衆を容るゝに餘りある程なり、又發强とて、快活にして、物事に撓まず、剛毅とて、利慾に屈せずして、決斷あることは、道を執り守りて移らぬに餘りある程なり、又齊莊とて、威儀の整ひて重々しく、中正とて、禮法の片寄らず、曲らぬことは、人に敬はるゝに餘りある程なり、又文理とて、文章あり、條理あり、密察とて、精密にして、明察なることは、物事の大小、輕重、方圓、黑白を辨別するに餘りある程なり、以上の五德を具へたるは、眞に至極の聖人にして、孔子の如きは、卽ち是れなり、

溥博淵泉、而時出之、溥博如天、淵泉如淵、見而民莫不敬、言而民莫不信、行而民莫不說、

【註】【溥博淵泉】……溥は、普と同じ、溥博は、普く行き渡り、廣く兼ぬるなり、淵泉は、深くして測られず、本ありて竭くることなきなり、前の五德を身の中に積み蓄へたるさまをいふ、【時出之】……行ふべき時に臨みて、身の外に五德を出だし行ふなり、【見】……容貌の上に顯はるゝなり、一說には、政事の上に顯はるゝなりといひ、又一說には、上文の動而世爲二天下道一、行而世爲二天下法一、言而世爲二天下則一の動、行、言の動の字の如く、此の見の字も、下の言行を兼ねたるなりといへり、【說】……悅と同じ、

【本文】至極の聖人は、以上の五德を、溥博とて、普く行き渡り、廣く兼ね、淵泉とて、深くして測られず、本ありて竭くることなく、身の中に積み蓄へて、之れを行ふべき時に臨みて、身の外に出だし行ふなり、其の普く行き渡り、廣く兼ねたることは、天の如く、深くして測られず、本ありて竭くることなきことは、淵の如くなれば、一たび容貌の上に顯はるゝときは、人民信仰せざることなく、一たび事を行ふときは、人民喜悅せざることなく、一たび物を言ふときは、人民信用せざることなく、

是以聲名洋溢乎中國、施及蠻貊、舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、日月所照、霜露所隊、凡有血氣者、莫不尊親、故曰配天、

【註】【聲名洋溢乎中國】……善き評判の漢土全國に充滿するなり、【施及二蠻貊一】……四方の未だ開けざる土地にまで廣まるなり、蠻は、南蠻なり、貊は、北狄なり、南北の二方を擧げて、東夷、西戎を兼ぬ、【隊】……墜と同じ、落つるなり、【凡有二血氣一者】……總べての人類をいふ、

【本文】かやうなる譯なれば、聖人の善き評判は、漢土全國に充滿し、東夷、南蠻、北狄、西戎の四方の未だ開けざる土地にまで廣まりて、舟車の至り屆く所、人の手足の力にて行き通ふことの出來る所、天の覆ふ所、地の載する所、日月の照らす所、霜露の落つる所は、遠近を問はず、總べて、血液あり生氣ある人類は、其の德を仰ぎ慕ひて、尊敬愛慕せざることなし、されば、こそ、聖人の德は、廣大なる天の德に配當すべきものなりといへるなり、

【文注】上章の高明配レ天に應ず、

唯天下至誠、爲能經綸天下之大經、立天下之大本、知天地之化

育、夫焉有所倚、

【語釋】【經綸天下之大經】……經は、機を織る時に、縦絲の小口を揃ふることなり、綸は、横絲を疏べて、縦絲に繰り合はすることなり、之れより轉じて、政事を仕組むことゝなるなり、天下之大經は、上章の凡爲天下國家有九經の九經なり、【立天下之大本】……大中至正の道を立て定むるなり、天下之大本は、首章の中也者天下之大本也の天下之大本と同じ、【知天地之化育】……知は、主るといふが如し、上章の贊天地之化育と同じ、【夫焉有所倚】……何とて依賴する所ありて然るならむといふことなり、

【大意】唯々獨り天下中に及ぶ者なき至極の誠を持てる聖人のみは、能く天下の大經を經綸すとて、上に見えたる天下國家を治むるに必要なる九通りの常法を仕組み、天下の大本を立つとて、大中至正の道を立て定め、天地の化育を知るとて、天地の萬物を變化生育する什事を助け主りて、之れを成就せしむるなり、是れは、何とて依賴する所ありて然るならむ、全く己れの天性に得たる至誠の自然に出づるなり、

【大意】以下、其孰知之までは、純者天之道也をいへるなり、

肫肫其仁、淵淵其淵、浩浩其天、

【語釋】【肫肫】……懇切なるさまなり、一說には、敦厚なるさまなりといへり、【淵淵】……靜かに深きさまなり、【浩浩】……廣大なるさまなり、

【大意】此の如く、聖人の天下の大經を經綸し、天下の大本を立て、天地の化育を知るは、皆自然より出づることなれば、其の德の盛んなること、實に廣大無量なり、其の經綸よりしていへば、肫肫として、懇切なるは、聖人自身の仁の德なり、其の本を立つるよりしていへば、淵淵として、靜かに深きは、聖人自身の淵の德なり、其の化を知るよりしていへば、浩浩として、廣大なるは、聖人自身の天の德なり、仁は、人なり、淵は、地なり、天は、字の如し、聖人は天地人の三方の德を一身に具足せり、是れ卽ち至誠の功なり、

苟不固聰明聖知達天德者、其孰能知之、

【語釋】【苟】……若しなり、【固】……實になり、【達天德】……天の德に達し屆きて、天の德と合體するなり、【知之】……預かり知るなり、之の字は、上文の經綸天下之大經、立天下之大本、知天地之化育の三事を指す、一說には、此の全文は、唯々聖人のみ聖人を知ることなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【大意】若し實に物事の道理を聽き分け視分くる非凡の知識ありて、其の身の德は、天の德に達し屆きて、天の德と合體したる者にあらざるに、何人か經綸し、本を立て、化を知るといふ三事を預かり知りて、之れを能く行ふことも得べき、聖人以外の者には決して成し遂げられぬことなり、

【大意】至誠聖人の德をいふこと、此に至りて極まれり、故に下文は、更に下學して上達する事をいひて、此の篇を終ふ、

詩曰、衣錦尙絅、惡其文之著也、故君子之道、闇然而日章、小人之道、的然而日亡、君子之道、淡而不厭、簡而文、溫而理、知遠之近、知風之自、知微之顯、可與入德焉、

【語釋】【詩】……詩經の國風の部の衞の碩人の篇と、鄭の丰の篇となり、【衣錦尙絅】……錦の著物を著たる上に、麻にて織りたる單物を加へ重ねて著るなり、詩經には、衣錦褧衣に作れり、【文】……錦の模樣なり、【闇然】……目立たぬさまなり、【章】……明かなり、【的然】……目立つさまなり、【淡而不厭】……淡泊にして、味ひなきやうなれど、人に厭ひ嫌はれぬなり、【簡而文】……簡易にして、取り繕はぬやうなれど、立派なる文彩あるなり、【溫而理】……溫和にして、四角張らぬやうなれど、嚴格なる條理あるなり、【知遠之近】……遠き國、天下に及ぼすには、近き家より始むべきことを知るなり、【知風之自】……自は、由るなり、風化の本づき由る所は、我が身の上に在ることを知るなり、【知微之顯】……微細なる事理、顯はれ易きことなきことを知りて、獨りを愼むなり、

【大意】聖人の德の盛んなることは、以上の如くなるが、其の本づく所は、獨りを愼むに在り、詩經の衞の碩人の篇、及び鄭の丰の篇に、「美しき錦の著物を著たる上に、粗末なる麻織りの單物を加へ重ねて著る」とあり、是れは、錦の模樣の花々しく著はれ見ゆるを惡み厭ひて、掩ひ隱すかになるなり、之れに反して、小人とて、德なき人の仕方は、的然として、目立たざれども、內に其の實あるが故に、一日增しに其の身の光は明亡ぶるなり、君子の仕方は、淡泊にして、味ひなきやうなれど、人に厭ひ嫌はるゝことなく、簡易にして、取り繕はぬやうなれど、立派なる文彩あり、溫和にして、四角張らぬやうなれど、嚴格なる條理あり、君子の仕方は、此の如くなるが上に、遠き國、天下に及ぼすには、近き家より始むべきことを知り、風化の本づき由る所は、我が身の上に在ることを知りて、獨りを愼むなり、何人も能く此の如くなるときは、共に至誠の德に進み入ることを得べし、

【大意】知遠之近までは、上章の詩如行遠必自邇に應じ、微之顯は、上章の微之顯、誠之不可掩に應ず、

詩云、潛雖伏矣、亦孔之昭、故君子內省不疚、無惡於志、君子之所不可及者、其唯人之所不見乎、

【語釋】【詩】……詩經の小雅の部の正月の篇なり、【潛】……物陰に潛み隱るゝなり、【伏】……伏して屈むなり、【孔】……甚だなり、【昭】……明かなり、【內省不疚】……內に自ら振り返り見て、氣に懸かることなきなり、內は、外に對していふ、【無惡於性】……心に愧づることなしといふ程のことなり、一說には、世に過はずして、己れの志に損害なきなりといへり、

【大意】詩經の正月の篇に「物陰に潛み隱れて、伏し屈むといへども、亦甚だ明かに見ゆるなり」とあり、此の如く、人は知らじと思ひても、人に知らるゝものなれば、物事を包み匿すは、益なきことなり、されば、君子たる人は、內に自ら省み察して、氣に懸かることなきときは、心に愧づることなきなり、君子の仕業の真似の出來ぬ所は、唯々人の見ぬ所にて獨りを愼むに在るべし、人の見て居る所にて身の行ひを善くするは、誰れにも出來ることなればなり、

【大意】是れ愼獨の效をいへるなり、

詩云、相在爾室、尙不愧于屋漏、故君子不動而敬、不言而信、

詩曰、奏假無言、時靡有爭、是故君子不賞而民勸、不怒而民威於鈇鉞、

【詩】……詩經の商頌の部の烈祖の篇なり、【奏假】……奏は、進むなり、假は、格るなり、進みて神明に感格するなり、祭りを主る者、廟の前に進み出でて、神を感應せしめて、其の處に來り至らしむるなり、【靡】……無と同じ、【勸】……善を勸め合ふなり、【威】……畏るゝなり、【鈇鉞】……鈇は、斧なり、鉞は、大斧なり、皆刑罰の道具なり、

【解】詩經の烈祖の篇に、「祭りを主る者、廟の前に進み出でて、神を感應せしめて、其の處に來り至らしむるには、一心の誠を縮めて祈念して、物をいふことなければ、其の時は、竝み居る人も、其の人に化せられて、爭論などして、禮を失ふことなし」とあり、此の譯なれば、君子として、德ある人は、己れの誠の德に依りて、人を感ぜしむるに足りて、殊更に譽め賞せずしても、人民は互に善を勸め合ひ、殊更に怒りを加ふることなくしても、人民は鈇鉞の如き刑罰の道具よりも憚り畏れて、惡をせぬなり、

詩曰、不顯惟德、百辟其刑之、是故君子篤恭而天下平、

【詩】……詩經の周頌の部の烈文の篇なり、【不顯惟德】……天子の至誠の德は、いかで顯はれぬことあるべき、屹度天下に顯はるゝなりといふことなり、一說には、天子の德は、深遠にして、顯はれぬなりといへり、今は、前の解に從ふ、【百辟】……辟は、君なり、天下の諸侯をいふ、【刑之】……其の德を手本とするなり、【篤恭】……篤實恭敬なり、

【解】詩經の烈文の篇に、「天子の至誠の德は、いかで顯はれぬことあるべき、屹度天下に顯はれて、諸侯は之れを手本とするなり」とあり、此の譯なれば、君子として、德ある人は、篤實恭敬をもて、人の上に立ちて、天下は自然に平かになるなり、されば、君子の貴ぶ所は、德に在りて、賞罰に在らざるなり、

【文法】不顯惟德は、下文の明德を起こす、

詩曰、予懷明德、不大聲以色、子曰、聲色之於以化民、末也、詩曰、德輶如毛、毛猶有倫、上天之載、無聲無臭、至矣、

【詩】……詩經の大雅の部の皇矣の篇なり、【予】……上帝の自稱を假り設けたるなり、【懷】……昏み念ふなり、【明德】……文王の德をいふ、【聲以色】……聲與色なり、聲は、言語命令なり、色は、顏色容貌なり、【詩】……詩經の大雅の部の烝民の篇なり、【輶】……輕きなり、【倫】……比なり、【上天之載、無聲無臭】……詩經の大雅の部の文王の篇の辭なり、載は、事なり、臭は、香氣なり、

【解】詩經の皇矣の篇に、「上帝の文王に仰せらるゝには、予れ今汝の德を昏み念ふに、言語命令と顏色容貌とを張大にせず」とあり、是れは、詩人の、上帝の言葉を借りて、文王の德を譽めたるなり、孔子此の詩の意味を解きて、「人民を感化するには、至誠を本とすべし、辭令威儀にて感化するは、末の事なり」といはれたり、然らば、至誠の民を化する妙は、何をもて譬ふべき、詩經の烝民の篇に、「德は極めて微妙なるものにて、其の輕きこと、一筋の髮の毛の如し」とあり、是れ一應は尤なるが如くなれど、毛は形あれば、輕しといへども、猶ほ他に比ぶべき物ありて、未だ譬へを取るに足らず、然らば、何に譬へむか、詩經の文王の篇に、「人々の頭に戴く上天の事は、聲もなく、香氣もなく、何の譬へなれども、萬物其の化を被らざるはなし、上文に、篤恭にして、天下平かなりといへるは、卽ち是れなり、至誠の民を化する妙を譬ふることは、是れにて至れり盡くせりと思ふなり、

【文法】明德は、上文の不顯惟德を承く、此の書は、開卷第一に、天命之謂性といひ、卷末に至りて、配天といひ、述天といひ、上天之載といひ、天をもて起こし、天をもて結びたり、然して、誠者、天之道也より以下、後の半篇、皆誠をいひて、天をいふことも、亦多きに居れり、論語は、仁を說きたる書なれば、人をもて起結し、中庸は、誠を說きたる書なれば、天をもて起結せり、

増訂

中庸講義

終

增訂 論語講義

興文社編纂

學而第一

子曰學而時習之不亦說乎、有朋自遠方來不亦樂乎、人不知而不慍不亦君子乎、

【字解】子……孔子を指す、子は、男子の通稱にして、又美稱なり、有子、曾子の子の如き是れなり、孔子に限りて、單に子といへるは、弟子の書きたるものなればなり、昔は、師匠を子といへり、○學……覺るなり、學びて未だ知らざることを覺るなり、其の學ぶ所は、詩書禮樂の如き古人の道なり、○時習之……時々に其の學びたる事を復習するなり、習ふは、雛鳥の幾度も羽ばたきをして飛び習ふやうに、同じ事を繰り返すことなり、○不亦說乎……說は、悅と同じ、外にも悅ばしき事はあるべけれども、此の一事も亦悅ばしからざらむや、悅ばしからむといふことなり、總べて、かやうなる句調を反語といふ、反語とは、裏よりいひて、表をあらはす言葉なり、下の不亦樂乎、不亦君子乎も、推して知るべし、○朋……相弟子なり、○人不知……世間の人が己れの役に立つことを知らぬなり、○不慍……不平の念を抱かぬなり、○君子……位ある人のことにもなり、德ある人のことにもなる、此の處は、德の上にていふ、

【大意】孔子のいはれけるは、「人の心に悅ばしき事は、外にも色々あるべけれども、詩書禮樂の如き古人の道を師に就きて學びて、時々に其の學びたる事を復習することも、亦悅ばしからざらむや、悅ばしからむ、又人の心に樂しき事は、外にも色々あるべけれども、道を學びて、追ひ追ひに上達するに隨ひて、近所に住める相弟子は更なり、遠方の相弟子までも尋ね來りて、共々に其の學業を講究することも、亦樂しからざらむや、樂しからむ、又世の中に、君子として、德ある人と稱すべき人は、外にも色々あるべけれども、其の學業成就して、身を立て道を行はむとする時に、世間の人々、己れの役に立つことを知らずして、擧げ用ゐることなくして、己れの分に安んじて、不平の念を抱かざる者も、亦君子と稱すべき人ならざらむや、君子と稱すべき人ならむ」となり、

【要旨】此の章は、先づ學問の大切なることを示されたるなり、不亦說乎は、學者の幼少の時を明かし、不亦樂乎は、學業の稍〻成りたる時を明かし、不亦君子乎は、學業の已に成りたる時を明かす、

有子曰、其爲人也孝弟、而好犯上者、鮮矣、不好犯上、而好作亂者、未之有也、君子務本、本立而道生、孝弟也者、其爲仁之本與、

【語釋】有子……孔子の弟子なり、名は若、字は子有といふ、魯の人なり、○爲人……人柄なり、○孝弟……孝は、善く父母に事ふることなり、弟は、善く兄に事ふることなり、○犯上……己れの上に在る人に逆らひ戻るなり、○鮮……少なきなり、多からぬなり、○作亂……一揆徒黨を起こすなり、○務本……專ら力を根本に用ゐるなり、○道……人たる道なり、○孝弟也者……也者は、者と同じ、也を添へたるは、孝弟を個にしたるなり、中庸の道也者、中也者の也と同じ、○爲仁……仁を行ふなり、仁は、廣く衆人を親愛することなり、○與……疑ふ言葉なり、謙遜して斷言せざるなり、

【要旨】弟子の有子のいひけるは、「凡そ世の中の人にして、其の人柄は、孝とて、父母に善く事へ、弟とて、兄に善く事へながら、己れの上に在る人に逆らひ戻ることを欲し好む者は、決して多くあらぬなり、己れの上に在る人に逆らひ戻ることを欲し好まぬ者にてありながら、一揆徒黨を起こすことを欲し好む者は、昔より、まだ其の例あらぬなり、一揆徒黨を起こすことを欲し好むは、父兄に孝弟ならぬに由るなり、されば、君子として、德ある人は、專ら力を物事の根本に用ゐるなり、物事の根本立ち定まれば、人たる道は、自然に生じ來るなり、孝と弟とは、廣く衆人を親愛する仁といふ最上の德を行ふ根本ならむか」となり、

【要旨】此の章は、孝弟の大切なることを擧げて、學問の仕方を示されたるなり、

子曰、巧言令色、鮮矣仁、

【語釋】巧言……口の先にて上手をいふなり、○令色……令は、善くするなり、色は、顏色なり、顏色を善くして、人の機嫌を取るなり、○鮮矣仁……仁心あること少なきなり、

【要旨】孔子のいはれけるは、「口の先にて上手をいひ、顏色を善くして、人の機嫌を取る者は、仁心あること少なし」となり、

【要旨】此の章は、前章の仁を承けて、仁を害する事を擧げて、人を戒められたるなり、

曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎、

【語釋】曾子……孔子の弟子なり、名は參、字は子輿といふ、魯の人なり、○三省……幾度となく振り返りて、氣を付けて見るなり、三度と限りたるにはあらず、一說に、三の字は、不忠、不信、不習の三つを指すなりといへるは、非なり、○爲人謀……他人の爲めに物事を思慮分別して遣るなり、○忠……己れの誠を推して、人に深切を盡くすことなり、○朋友……朋は、前にも見えたる如く、相弟子のことなり、友は、己れと志を同じくする者をいふ、二字を合はせて、日頃親しく交はる人々のことゝなるなり、○信……信實にして、虛言を吐かぬことなり、○傳不習乎……己れの習ひ覺えぬ事を人に傳へ授けはせぬかといふことなり、一說には、師より受け傳はりたる事を復習せずして、怠りて居りはせぬかといふことなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【要旨】弟子の曾子のいひけるは、「吾れは、毎日、幾度となく、吾が身の上を振り返りて、氣を付けて見るなり、其の心掛けは、他人の爲めに物事を思慮分別して遣るには、自分の事を心配するやうに、己れの誠を推して、人に深切を盡くすべきことなるが、若しそれまでに至らずして、不深切なることはなきか、相弟子又は志の合ひたる人々と交はるには、信實にして、虛言を吐かぬやうにせざれば、先方に迷惑を掛くることあるものなるが、若し此の注意を怠りて、信實ならぬことはなきか、己れの習ひ覺えたる事ならでは、人に傳へ授けたることはなきかと、一日の中に、幾度となく、思ひ出しては、氣を付けて、萬が一にも、さる事あれば、速に改め直すやうにするなり」となり、

【要旨】此の章は、前の巧言令色の戒めを承けて、人に對する心掛けを示されたるなり、

子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時、

【語釋】道……治むるなり、道は、本來導と同じく、政教をもて民を導くことゝなるが故に、國を治むることゝなるなり、○千乘之國……大諸侯の國なり、乘は、車の數にして、輛と同じ、千乘は、兵車千輛なり、百里四方の領地を持つて大諸侯は、事ある時に、兵車千輛を出だすなり、○敬事……敬は、愼むなり、事を輕卒に擧げ行はぬなり、○節用……國家の費用を節儉にして、益もなき散財をせぬなり、○使民以時……農業に妨げなき時に、人民を使役するなり、

【要旨】孔子のいはれけるは、「事ある時に、兵車千輛を出だすべき、大諸侯の國を治むるには、事を敬愼して、輕卒に擧げ行はずして、號令を信實にし、國家の費用を節儉にして、益もなき散財をせずして、人民を愛憐し、農業に妨げなき時に、人民を使役して、春夏秋の忙しき間は、妄に親役を命ずまじきことなり」となり、

【要旨】此の章は、前章の人に對する心掛けを推し廣めて、國を治むる心得に及ぼしたるなり、敬、信、節、愛、時の五つは、政事の根源にして、有子の君子は本を務むる意なり、蓋し天下を治むるも、亦此の外に出でざるべし、

子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文、

【語釋】弟子……門人なり、一說に、子弟といはむが如しといへるは、非なり、○入則孝……家に入りては、善く父母に事ふるなり、○出則弟……外に出でては、弟の兄に善く事ふるやうに、目上の人に善く事ふるなり、○汎愛衆……廣く衆人を愛するなり、○親仁……仁德ある人に親み近づくなり、○餘力……餘暇なり、○以學文……其の餘暇を用ゐて、詩書六藝の文を學べといふことなり、

【大意】孔子のいはれけるは、「吾が門人達は、家に入りては、善く父母に事へ、外に出でては、弟の兄に善く事へ、身の行ひを謹みて、物いふことを信實にし、廣く衆人を愛して、仁德ある人に親み近づくべし、仁德ある人に親み近づくこと大なればなり、さて、此のやうに、人たる道を實行して、尙ほ餘暇あらば、其の餘暇を用ゐて、詩書六藝の文を學びて、益々智德を修め養ふべし」となり、

要義 此の章は、學問は、躬行を先にすべきことを示されたるなり、

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣、

字義 子夏……孔子の弟子なり、姓は卜、名は商といふ、子夏は、其の字なり、衛の人なり、○賢賢易色……上の賢は、尊び重んずるなり、下の賢は、德の高き人なり、色は、女色なり、賢者を賢者として尊び重んずること、女色を好む心に取り易ふる程に熱誠なるなり、一說には、賢者を見るときは、顏色を改め變へて尊敬するなりといひ、又一說には、賢者を重んじて、女色を輕んずるなりといへり、今は、最初の解に從ふ、○竭其力……竭は、盡くすなり、其の身の力のありたけを盡くすなり、○致其身……致は、差し出だすなり、其の一命を差し出だすなり、

要義 弟子の子夏のいひけるは、「賢者を賢者として尊び重んずることは、女色を好む心に取り易ふる程に熱誠にして、己れもそれに倣むことを希ひ、父母に事へては、其の身の力のありたけを盡くし、君に事へては、其の一命を差し出だすべき覺悟あり、朋友と交はるには、信實ありて、虛言を吐くことなからむには、其の人自身は謙遜して、己れは未だ學問をせずといふとも、吾れは屹度其の人を學問したる者なりといはむ」となり、

要義 此の章は、前章に行ひて餘力あらば文を學べとあるを承けて、實行の貴ぶべきことを示されたるなり、

子曰、君子不重則不威、學則不固、主忠信、無友不如己者、過則勿憚改、

字義 君子……聖人の道に志ある者を指す、卽ち德の上にていふ、○重……重々しきなり、○威……威嚴なり、○學則不固……固は、蔽はるゝなり、學問をすれば、物事の道理に通じて、蔽固不通の病ひなきなり、一說には、上文の不重則不威を承けて、既に威嚴なきが上に、又學問も堅固ならぬなりといへり、

要義 孔子のいはれけるは、「君子として、聖人の道に志ある者は、落ち着きて、重々しかるべし、さもなきときは、威嚴なくして、人に侮らるゝなり、又學問をすれば、物事の道理に通じて、蔽固不通の病ひなきものなれば、君子は、必ず學問をすべし、又平生の心掛けは、忠と信との二つを主眼として、己れの誠を推して、人に深切を盡くし、信實にして、虛言を吐かざるべし、又朋友と交はるは、己れの智德を助け長ぜむが爲めなれば、己れに及ばぬ者を友とし慕ふまじきなり、勿論我れより劣りたる者を誘導するは、然るべきことなれど、此方より友とし慕ふべき人物は、我れに勝される者ならざるべからず、又過ちは、其の惡しき事を知らずして犯したる手落ちなれば、其の惡しき事に心付かば、速に之れを改むべし、人の批難を掛念して、之れを改むることを畏れ憚るまじきなり」となり、

要義 此の章は、前章の實行を承けて、君子の學を爲し身を修むる要を示されたるなり、

曾子曰、愼終追遠、民德歸厚矣、

字義 愼終……父母の一生の終はりの喪の禮を大切にするなり、○追遠……遠き祖先の年々の祭りをするなり、○歸……趨き從ふなり、

要義 弟子の曾子のいひけるは、「人は、父母の存生中に、善く事ふべきのみならず、其の一生の終はりの喪の禮を大切にして、懇ろに營むべし、月日の立つに隨ひて、追慕の念の薄らぐは、人情の常なれば、父母は更なり、先祖代々に至るまで、遠くなれば遠くなる程、追ひ慕ひて、年々の祭りを忽せにすべからず、此の如くすれば、之れを見聞する人民の德義も、自然に手厚さかたに趨き從ひて、善き風俗になるなり」となり、

要義 此の章は、君子の人を導くには、自ら率先すべきことを示されたるなり、

子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政、求之與、抑與之與、子貢曰、夫子溫良恭儉讓以得之、夫子之求之也、其諸異乎人之求之與、

字義 子禽……孔子の弟子なり、一說には、子貢の弟子なりといへり、姓は陳、名は亢といふ、子禽は、其の字なり、陳の人なり○子貢……孔子の弟子なり、姓は端木、名は賜といふ、子貢は、其の字なり、衛の人なり、○夫子……孔子を指す、孔子は、魯の大夫なるをもて、斯く呼べるなり、先生といはむが如し、○是邦……行く先々の國を指す、一國に限りたるにはあらず、○抑……反語の言葉なり、但しといはむが如し、○溫……物和らかなるなり、○良……素直なるなり、○恭……丁寧なるなり、○儉……儉約なるなり、○讓……人に物事を推し讓るなり、

要義 弟子の子禽、兄弟子の子貢に向ひて、「吾が孔夫子は、行く先々の國にて、屹度其の國の政事を與かり聞きたまへるが、是れは、孔夫子の方より進みて政事を執りたしと願ひ求めたまへるにや、但し、其の國々の主君の方より望まれて、政事を授け與へられたるにや」と尋ねしに、子貢のいひけるは、「吾が孔夫子は、溫として、物和らかに、良として、素直に、恭として、丁寧に、儉として、儉約に、讓として、人に物事を推し讓る五つの德をもて、政事を自然に手に入れたまへるなり、孔夫子の諸國を廻はりたまへるは、政事を執りて、天下國家を安んぜむが爲めなれば、固より之れを願ひ求めたまふには相違なけれども、其の願ひ求めたまふ仕方は、世間の人の願ひ求むる手段とは同じからざるべし、世間の人は、己れの器量を振り廻はして、其の地位を手に入れむことを願ひ求むれども、孔夫子のは、さにあらず、行く先々の主君より其の德を慕はれて、政事を相談せられたるなり」となり、

要義 此の章は、孔子の德の盛んなることを示されたるなり、

子曰、父在觀其志、父沒觀其行、三年無改於父之道、可謂孝矣、

字義 父在觀其志、父沒觀其行……二つの其の字は、子に屬する說と、父に屬する說とあり、子に屬する說は、父親の存生中は、子の專斷にゆかぬ事もあれば、只、其の新くありたしと思ふ志を觀察して、其の人物の如何を知るべし、父親の死去せし後は、何事も子の一存にて實行せらるゝものなれば、其の行ひを觀察して、其の人物の如何を知るべしといふことなり、されども、文法の上よりしても、其の字は、父の代名詞と看るかた穩ならむやうなれば、今は、父に屬する說に從ふ、其の解は、下の如し、○三年……月日の遠くなることなり、三箇年と限りたるにはあらず、○父之道……父の仕方なり、

【概説】孔子のいはれけるは、「人の子たる者は、父親の存生中は、父親の斯くありたしと思はるゝ志を觀察して、其の志の屈かまやうに、我が身の力を盡くすべし、父親の死去せし後は、父親のし置かれたる行ひを觀察して、其の儘之れを繼續すべし、其の死去せしより三年五年の後までも、父親の仕方を改め變ふることなきことを孝行といふなり」となり、但し、父親の仕方といへども、善からぬ事は、沒後に之れを改むべきのみならず、生前とても、諫めて止むべきことなれば、此にいふ仕方は、事に害なき範圍内と知るべし、其の善き事を繼續するは、勿論のことなり、

【説義】此の章は、孝行の本意を示されたるなり、

有子曰、禮之用、和爲貴、先王之道斯爲美、小大由之、有所不行、知和而和、不以禮節之、亦不可行也、

【字解】禮之用、和爲貴……禮は、禮儀なり、用、和は、以、和と同じ、和は、和順なり、睦み合ふことなり、禮儀といふものは、和順すること、即ち睦み合ふことをもて、貴重なりとするなりといふことなり、一說には、禮之用、和爲貴と讀みて、禮之用を禮の働きと解したれども、從ひ難し、○先王之道斯爲美……堯、舜、禹、湯、文、武の如き昔の帝王の天下國家を治むる仕方も、此の禮儀に和順を加味することを善美なりとせりといふことなり、○小大由之、有所不行……之の字は、禮を指す、小事も、大事も、專ら禮儀にのみ由れば、角張り過ぎて、圓滑に行はれぬことあり、一說には、小大由之を上の句に屬して、意味を中斷したれども、從ひ難し、○不以禮節之……之の字は、和を指す、禮儀をもて、和順を程よくせざればといふことなり、

【概説】弟子の有子のいひけるは、「人と人との間に必要なる禮儀といふものは、和順することを、即ち睦み合ふことをもて、貴重なりとするなり、帝堯、帝舜、夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王の如き、昔の帝王の、天下國家を治めたまひし仕方も、此の禮儀に和順を加味することを善美なりとせられたり、實に禮儀と和順とは、孰れを缺きても叶はざるものにて、小事も、大事も、專ら禮儀にのみ由れば、角張り過ぎて、圓滑に行はれぬことあり、されば、とて、又和順の肝要なることを知りて、和順すれども、禮儀をもて、其の和順を程よくせざれば、亦取り締まらずして、行はれぬものなり」となり、

【説義】此の章は、禮儀と和順との相離るべからざることを示されたるなり、

有子曰、信近於義、言可復也、恭近於禮、遠恥辱也、因不失其親、亦可宗也、

【字解】信近於義、言可復也……信の解は、前に見えたり、義は、事を行ひて、其の宜しきに叶ふことなり、復は、言葉を踐み行ふことなりとも、我が口上を繰り返すことなりともいへり、其の意は、竟に同じかるべし、信と義とは別物なれど、信は、言行の一致することなれば、義を守るに似寄りたるものにて、其の口上に僞りなければ、前にいひたる通りに踐み行ふことを得べしといふことなり、一說には、信は、約束なり、約束義に違ざかれば、成り立たぬものなれど、義に近づけば、成り立ちて、其の口上を踐み行ふことを得べしといふことなりといへり、今は、前の解に從ふ、○恭近於禮、遠於恥辱……恭と禮とは別物なれど、恭は、己れを恭しくして、人に讓ることなれば、禮を行ふに似寄りたるものにて、其の容態は、人に侮らるゝことなければ、恥辱を受くることに離れ遠ざかるなりといふことなり、一說には、己れを恭しくすること、其の度に過ぎれば、人に侮られて、恥ぢをかくことあれど、其の度に叶ひて、禮に近づけば、人に侮られて恥ぢをかくことなしといふことなりといへり、今は、前の解に從ふ、○因不失其親、亦可宗也……因は、親むなり、宗は、敬なり、人に親むことの、其の親むべき道を失はぬは、善行の一つにて、是れも亦宗敬すべきことなりといふことなり、一說には、因は、依なり、人と交はるゝ始めなり、宗は、主なり、生涯たよりとなり、此の外にも、二三の異說あれど、今は、最初の解に從ふ、

【概説】弟子の有子のいひけるは、「信と義とは別物にして、信を直ちに義とはいはれねど、信は、言行の一致することなれば、義を守るに似寄りたるものにて、其の口上に僞りなければ、前にいひたる通りに踐み行ふことを得べし、若し信ならずば、其の口上は反故となるべし、又恭と禮とは、人に侮らるゝことなければ、恭を直ちに禮とはいはれねど、恭は、己れを恭くして、人に讓ることなれば、禮を行ふに似寄りたるものにて、其の容態は、人に侮らるゝことなければ、恥辱を受くることに離れ遠ざかるなり、若し恭ならずば、恥辱を受くることあるべし、又人に親むことの、其の親むべき道を失はぬは、人に深切なることにて、善行の一つなれば、外にも宗敬すべき善行は色々あれど、此の一事も亦宗敬すべきことなり、即ち結構なることゝして、貴重すべきことなり」となり、

【説義】此の章は、信と、恭と、人に親むことの要とを示されたるなり、恭は、即ち前の溫、良、恭、儉、讓の恭なり、

子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事、而慎於言、就有道而正焉、可謂好學也已、

【字解】君子……聖人の道に志ある者を指す、○飽……腹一杯に食ふなり、○居……居宅なり、○敏於事……仕事を手早くするなり、○慎於言……言葉を控へ目にするなり、○就有道而正焉……道德ある人に就き從ひて、分かちぬ事を質し問ふなり、

【概説】孔子のいはれけるは、「君子とて、聖人の道に志ある者は、うまき物を腹一杯に食はむことを願ひ求めもせず、安樂なる居宅に起き臥しせむことを願ひ求めもせず、日々の仕事を手早くして、言葉を控へ目にし、口の先にて辯ずるよりも、身の行ひにて物事を片付け、道德ある人に就き從ひて、分かちぬ事を質し問ひて、己れの知識を磨き上ぐるなり、斯くありてこそ、眞に學問を好む人といふべけれ」となり、

【説義】此の章は、學者の心掛けを示されたるなり、

子貢曰、貧而無諂、富而無驕、何如、子曰、可也、未若貧而樂、富而好禮者也、

【字解】諂……媚び諂ふなり、○驕……驕り高ぶるなり、○可也……先づ宜しといふことにて、まだ十分にはあらぬなり、○樂……道を樂むなり、

【概説】弟子の子貢、孔子に向ひて、「人は、貧しくして物足らぬときは、鬼角卑屈になり、富みて事足るときは、鬼角押柄になるものに候へば、貧

しくしても、人に媚び諂ふことなく、富みても、人に驕り高ぶることなく候はゞ、善き人ならむと存ぜられ候ふが、如何のものに候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「先づ、それにても宜しけれども、まだ貧しくしても、人たる道を學ぶことを樂みて、身の貧しきを忘れ、富みても、禮儀を行ふことを好みて、己れの富みに心付かざる者には及ばぬなり」となり、子貢の問ひは、貧富の差別を脱せざるが故に、孔子は更に一歩を進めて、人は貧富を念頭に置かざるやうにならざればならぬものぞと教へられたるなり、

子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨、其斯之謂與、子曰、賜也始可與言詩已矣、告諸往而知來者、

字釋 詩……詩經の衛風の部の淇澳の篇なり、○如切如磋、如琢如磨……骨の細工を切るといひ、象牙の細工を磋くといひ、玉の細工を琢つといひ、石の細工を磨くといふ、四つの如の字は、學問をして德を修むることに譬へたるなり、○賜……子貢の名なり、○告諸往而知來者……之れに既往の事を告げれば、自ら將來の事を知る者なりといふことなり、既往の事は、貧富に處する心得を指し、將來の事は、學問は切磋琢磨の功を積むべきことを指す、

講義 子貢大に感心して、「學問は、實に際限なきものに候ふ、詩經の淇澳の篇に、學問は、切るが如く、磋くが如く、琢つが如く、磨くが如く、骨細工人、象牙細工人、玉細工人、石細工人の切磋琢磨の功を積みて、其の器を成すが如くすべしとあり候ふが、かやうの事を申したるにて候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「今まで、詩經のことを話さざりしが、今よりは、始めて、汝と一所に詩經のことを話すことを得べし、汝に向ひて、既往の事、即ち貧富に處する心得を告げ聞かすれば、汝は自ら將來の事、即ち詩の句を應用して、學問の際限なきことを知り悟りたり、如何にも敏轉のよき者のよ」となり、

要義 此の章は、貧富に處する最上の心得を示し、且つ學問の際限なきことを示されたるなり、

子曰、不患人之不己知、患不知人也、

字釋 患……掛念するなり、

講義 孔子のいはれけるは、「道に志ある者は、他人の己れを知らぬことを掛念せずして、己れの他人を知らぬことを掛念すれども、是れは甚だ間違ひなり、他人は己れを知らずとも、己れに智あり德あらば、何の苦勞もなかるべし、他人の賢愚を辨へずして、妄に人を是非するは、罪深きことなり」となり、

要義 此の章は、學問は、己れの爲めにすべきことを示されたるなり、

爲政第二

子曰、爲政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之、

字釋 爲政……政事を行ふなり、○德……人の天より受け得たるものにして、仁義禮智の總名なり、○北辰……北極星なり、此の星は、常に一つ處に在りて、天文の標準となるなり、○共之……北極星に向ひて廻はることなり、

講義 孔子のいはれけるは、「政事を行ふには、種々の施設を要すれども、其の根本は、人の天より受け得たる仁義禮智の德に在り、德なくして、譬へば、北極星の其の居所に常住して動かざるに、多くの星の之れに向ひて運行旋轉するが如く、君主は常に上に在りて、萬民之れに歸服するなり」となり、

要義 此の章は、政事の要は、德に在ることを示されたるなり、

子曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪、

字釋 詩三百……古詩三千を孔子削りて三百十一篇とせり、其の中に、篇の名のみのもの六篇あれば、實に三百五篇なり、是れ世に傳はりたる詩經なり、此に三百といへるは、其の大數を擧げたるなり、○蔽之……總體を概括するなり、○思無邪……詩經の魯頌の部の駉の篇の辭にして、心に思ふことの私なきなり、

講義 孔子のいはれけるは、「詩經の中に收めたる詩の數は、三百篇もありて、種々樣々の事を述べたるものなれど、只々一言をもて、其の總體を概括すれば、駉の篇の辭の如く、心に思ふことの私なきなり」となり、實に孔子の言葉の如く、三百餘篇の作は、其の時々の詩人の眞實なる觀察をもて、善を善とし、惡を惡として、少しも私意を挾まざるものなれば、詩を學ぶ者も、其の心して、善き詩を讀まば、善心を興し、惡しき詩を讀まば、惡念を抑へざるべからず、

要義 此の章は、詩經の歸旨を示されたるなり、

子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、道之以德、齊之以禮、有恥且格、

字釋 道之以政……法制禁令をもて、人民を導くなり、○齊之以刑……刑罰をもて、人民を一樣にするなり、○民免而無恥……人民種々の手段を行ひて、刑罰を免れ逃れて、心に恥づることなきなり、○有恥且格……格は、正しきなり、心に恥づることありて、又正しくなるなり、

講義 孔子のいはれけるは、「法制禁令をもて、人民を導きて、甲の件は斯くすべし、乙の件は斯くすべからずと指し示し、刑罰をもて、人民を一樣にして、誰れ彼れの別なく、相當に處分するときは、法令愈々密にして、刑罰愈々嚴なりとても、人民は種々の手段を行ひて、刑罰を免れ逃れて、心に恥づることなきものなり、之れに反して、道德をもて、人民を導き、禮儀をもて、人民を一樣にして、何人も不德義無作法の事なからしむるやうにすれば、人民は心に恥づることありて、惡事をせざるのみならず、又其の心も行ひも、自然に正しくなるものなり」となり、

要義 此の章は、國を治むる大本を示されたるなり、政刑は末なり、德禮は本なり、而して、德は又禮の本なり、

子曰、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、

六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩、

【字解】十有五……有は、又と通ず、十の上に又五つを加へたるなり、○立……德業の成り立つなり、○不惑……是非の分別に惑はぬなり、○知天命……身の窮達は天の命令なることを知り明らむるなり、○耳順……耳の素直になるなり、人のいふことの耳に逆らはぬことなり、○不踰矩……法度を越えぬなり、

【講義】孔子自ら平生の學問履歷を人に語りて、いはれけるは、「吾れは、十五歲になりて、學問に心を寄せるが、それより日夜勉强して、三十歲になりて、德業の成り立つことを得たり、さりながら、まだ色々の疑ひもありて、自ら決し兼ねたるが、四十歲になりて、是非の分別に惑はぬやうになりぬ、さりながら、まだ一身の窮達の上には、天命といふものありて、人の力に及ばぬことには心付かざりしが、五十歲になりて、之れを知り明らむることを得たり、さりながら、まだ人々のいふことを聞きて、折りに觸れては、面白からぬ感じを起こしたることもありしが、六十歲になりて、世間の毀譽も、褒貶も、皆一理あることゝ悟りて、少しも耳に逆らはぬやうになりぬ、さて、是れまでにはなりたれど、まだ時々に心の儘に振舞ひて、跡にて悔ゆることなきにしもあらざりしが、七十歲の老境になりて、始めて心に思ふ通りに行ひて、何事も法度を越えず、其の程々に叶ふことを得たり」となり、但し、此の年齡は、大凡のことなりと知るべし、

【章意】此の章は、孔子自身の經歷に就きて、學問の容易ならぬことを示されたるなり、

孟懿子問孝、子曰、無違、樊遲御、子告之曰、孟孫問孝於我、我對曰、無違、樊遲曰、何謂也、子曰、生事之以禮、死事之以禮、祭之以禮、

【字解】孟懿子……魯の大夫の仲孫氏、名は何忌といふ者なり、仲孫、後に孟孫と改む、懿は、其の諡なり、○無違……禮に違ふことなきなり、一說には、理に違はぬなりといひ、又一說には、親の心に違はぬなりといへり、されども、下文に三つの禮の字あれば、最初の解に從ふ、○樊遲……孔子の弟子なり、姓は樊、名は須、字は子遲といふ、魯の人なり、○御……車に乘りて、馬を使ふことなり、○對……目上の人に挨拶する時に用ゐる字にて、答の字よりは重し、後々も、其の心して看るべし、

【講義】魯の大夫の孟懿子、孔子に向ひて、孝行の仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「孝行の仕方は、違ふことなきなり」となり、其の意を推せば、禮に違ふことなきなり、孟懿子は、別に仔細を問ひ返しもせで、退きければ、孔子は、弟子の樊遲を御者として、馬車にて他出せられしが、車の中にて、樊遲に告げて、いはれけるは、「只今、孟孫氏は、孝行の仕方を我れに尋ねられたれば、我れ違ふことなしと對へたり」となり、樊遲其の意を解し兼ねて、「如何なる譯に候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「父母の存生中は、相當の禮をもて、之れに事へ、死去せし時は、相當の禮をもて、之れを葬り、年々の祭日には、相當の禮をもて、之れを祭るなり、此の如く、總べて禮に違はぬが、孝行の仕方なり」となり、孔子のかやうに樊遲に語られたるは、他日其の意を孟懿子に通ぜしめむとてなり、

【章意】此の章は、孝行には、禮の肝要なることを示されたるなり、但し、此の頃、魯には、孟孫氏、叔孫氏、季孫氏といふ三軒の家老ありて、皆其の君を蔑にしたれば、孔子は特に孝行の問ひに對へて、身分相當の禮を守るべきことを諭されたるなり、

孟武伯問孝、子曰、父母唯其疾之憂、

【字解】孟武伯……孟懿子の子なり、名は彘といふ、武は、其の諡なり、○父母唯其疾之憂……己れの病氣の時ばかりは、父母に心配を懸くるは、是非もなけれども、其の餘の事には、心配を懸くまじきなりといふことなり、一說には、父母は、只管其の子の病氣になりむことを心配するものなれば、能く其の心を酌み取りて、常に身持ちを大切にすべしといふことなりといひ、又一說には、父母は、日增しに老衰するものなれば、只管父母の病氣にならむことを心配して、一日も孝養を怠るまじきなりといふことなりといへり、今は、最初の解に從ふ、

【講義】孟懿子の子の孟武伯、孔子に向ひて、孝行の仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「親といふものは、何事によらず、子の身の上を案じ煩ふものなれば、己れの病氣の時ばかりは、父母に心配を懸くるは、是非もなけれども、其の餘の事には、心配を懸けぬやうに、身の行ひを慎むべきことなり」となり、人は、平生養生を善くしても、不時の病ひに罹かりぬことなしとは定め難ければ、此の時ばかりは、親の心を勞するも、餘儀なきことなりといふべし、

【章意】此の章は、孝行の仕方は、親の心を安んずるに在ることを示されたるなり、

子游問孝、子曰、今之孝者、是謂能養、至於犬馬、皆能有養、不敬何以別乎、

【字解】子游……孔子の弟子なり、姓は言、名は偃といふ、子游は、其の字なり、魯の人なりとも、吳の人なりともいへり、○至於犬馬……皆能有養……家に飼ひたるものは、犬馬までも皆能く養ふことありといふことなり、一說には、犬は夜を守り、馬は人を載せ物を運びなどして、皆能く人を養ふことありといふことなりといひ、又一說には、犬馬までも、皆能く其の親を養ふことありといふことなりといへり、今は、最初の解に從ふ、

【講義】弟子の子游、孔子に向ひて、孝行の仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「昔は、さることもなかりしが、今の世の人々は、孝行といへば、一口に親を能く養ふことなりといふなり、されども、單に養ふといへば、子弟僕隸は、いふも更なり、家に飼ひたる者は、犬馬までも、皆能く養ふことあれば、親を尊敬せざらむには、何をて區別せらるべき、されば、孝行の仕方は、親を能く養ふ上に、又能く尊敬すべきなり」となり、

【章意】此の章は、孝行の仕方は、親を尊敬するに在ることを示されたるなり、

子夏問孝、子曰、色難、有事、弟子服其勞、有酒食、先生饌、曾是以爲孝乎、

【字解】色難……己れの顏色を和らげて、父母の心に逆らはぬやうにするは、むづかしきものなりといふことなり、一說には、父母の顏色を窺ひて、其の意を酌み取ることは、むづかしきものなりといふことなりといへり、○有事……用事のあるなり、○弟子……門人なり、○服其勞……其の勞役を執るなり、○酒食……酒と飯となり、○先生……我れより先に生まれたる人といふことにて、師匠のことなり、己れの父兄にはあらず、○饌……飲み食ふなり、○曾……乃と同じ、反りての意なり、

【講義】弟子の子夏、孔子に向ひて、孝行の仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「己れの顏色を和らげて、父母の心に逆らはぬやうにするは、むづ

ゴかしきものなり、師匠の家に用事あれば、門人遣其の勞役を執り、酒又は飯の馳走あれば、師匠先づ杯を把り、箸を取りて、飲み食ふは、門人の師匠に事ふる仕方なるが、汝は反りて、是れをもて、孝行の仕方なりと思へるか、人の子たる者は、勞役を自ら執り、飲食物を先づ歳に進むるのみにてはなく、常に己れの顏色を和らげて、父母の心に逆ちはぬやうにせねばならぬなり」となり、

子曰、吾與回言、終日不違如愚、退而省其私、亦足以發回也不愚、

字解 此の章は、孝行の仕方は、親を親愛するに在ることを示されたるなり、但し、孟懿子、孟武伯、子游、子夏の問へる所は一つなれども、孔子は、其の人々の身分に應じ、又其の人々の短處に就きて、之れを教訓せられたるなり、

字解 回……孔子の弟子なり、姓は顏、名は回、字は子淵といふ、魯の人なり、○不違……孔子の言葉に背き違はぬなり、○退……顏回の孔子の前を退きたるなり、一說には、孔子の其の座を退きたるなりといへり、○省其私……顏回の他の弟子達と談論する樣子を孔子の察したるなり、一說には、顏回の一身上の樣子を孔子の察したるなりといへり、○亦足以發……外にも場合はあるべけれども、此の場合にも、道理の大體を其の問答の上にて發明するに十分なりといふことなり、一說には、孔子の語りたる道理を其の行狀の上にて發見するに十分なりといふことなりといへり、

講義 弟子の顏回、常に孔子の教訓を謹聽せしかば、孔子のいはれけるは、「吾れ回と物語りするに、朝より夕に至るまで、一言も背き違ふことなく、只々はいくといふのみにて、譯の分からぬ愚人のやうなれど、吾が前を退きて、他の弟子達と談論する樣子を察するに、外にも場合はあるべけれども、此の場合にも、道理の大體を其の問答の上にて發明するに十分なり、されば、回は愚人にあらず」となり、

子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉、

字解 視其所以……其の人の眼前に爲る事に氣を付けて見るなり、以は、用ゐるなりとも、爲るなりとも解せり、用ゐるは、用ゐ行ふことなれば、つまり爲ることゝなるなり、○觀其所由……其の人の今まで經歷せし事を見過すなり、觀は、視よりも重し、一說には、由は、其の意の由りて來る所なりといへり、今は、前の解に從ふ、○察其所安……其の人の心持ちの安んじ定まる所を見拔くなり、察は、觀よりも又重し、此の如く、視、觀、察の三字を用ゐたるは、其の節一は、現在の行爲に屬し、第二は、過去の經歷に屬し、第三は、人心の內部に屬するによりて、注意の仕方に難易ふればなり、○廋……匿すなり、

講義 孔子のいはれけるは、「人の善惡邪正を知らむと思はば、先づ其の人の眼前に爲る事に氣を付けて見るべし、次ぎに其の人の今まで經歷せし事を見過すべし、次ぎに其の人の心持ちの安んじ定まる所を見拔くべし、此の如く、三段に目を着くるときは、善惡共に、鏡に懸けて見る如く、人は何とて其の情實を包み匿すことを得べき、人は何とて其の情實を包み匿すことを得べき、其の情實は、屹度慥に分かるなり」となり、

子曰、溫故而知新、可以爲師矣、

字解 溫故……溫は、尋ぬるなり、研究するなり、故は、先王の政敎の記錄に傳はりたる者なり、古代の典故を研究するなり、

講義 孔子のいはれけるは、「今日の事は、今日に始まりたるにあらざれば、古代の典故を研究して、今日の新しき事を知り覺ゆべし、此の如く、古今の事に通徹せば、人の師匠となるゝならむ」となり、

講義 此の章は、學問の仕方を示されたるなり、

子曰、君子不器、

字解 君子……位ある人を指す、君主又は卿相の類なり、○不器……一方の道具にならぬなり、

講義 孔子のいはれけるは、「君子とて、君主又は卿相の如き民を治むる地位に在る人は、天下國家の全體を支配する者なれば、一技一能をもて事に任ずる下級官吏のやうに、一方の道具になることなく、人を用ゐる仕方を知りて、それ〴〵に其の職分を盡くさしむべきものなり」となり、

講義 此の章は、君主又は卿相たるべき人の心得を示されたるなり、

子貢問君子、子曰、先行其言而後從之、

字解 君子……德ある人を指す、○先行其言而後從之……先づ其の事を身に行ひて、而して後に、其の口上の其の行ひに附き從ふものなりといふことにて、先行、而後其言從之といふに同じ、一說には、先行、其言を一句とし、而後從之を一句として、上の句は、未だ言はざる前に行ふことなり、下の句は、既に行ひたる後に言ふことなりといへり、其の意は異なることなけれども、今は、前の句法に從ふ、

講義 弟子の子貢、孔子に向ひて、君子とて、德ある人の仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「君子といふものは、何事によらず、先づ其の事を身に行ひて、而して後に、其の口上の其の行ひに附き從ふものなり、其の言行の一致するは、此の心掛けあるに由るなり」となり、

講義 此の章は、君子は、行ひを先にすべきことを示して、能辯なる子貢を戒められたるなり、

子曰、君子周而不比、小人比而不周、

字解 周……滿遍なく公平に深切を盡くすことなり、○比……私情を用ゐて、人の肩を持つことなり、○小人……德なき人を指す、

講義 孔子のいはれけるは、「君子とて、德ある人は、人に對して、滿遍なく、公平に深切を盡くせども、私情を用ゐて、人の肩を持つことなし、之れに反して、小人とて、德なき人は、私情を用ゐて、人の肩を持てども、人に對して、滿遍なく、公平に深切を盡くすことなし、君子と小人とは、此の如く違ふものなり」となり、

講義 此の章は、君子と小人とを對照して、世の爲め、人の爲めに盡くすべき心得を示されたるなり、

子曰、學而不思則罔、思而不學則殆、

字解 學而不思則罔……昔の仕方を學び習ひても、其の譯柄を考へ思はねば、臨機應變の働きを缺きて、聖人の道を無理にこじつくるやうになるなり、一說には、罔は、昏さなり、學問をしても、其の譯柄を考へ思はねば、昏くして得ることなきなりといへり、今は、前の解に從ふ、○

思而不學則殆……今の仕方を考へ思ふばかりにて、昔の仕方を學び習はねば、其の成り行きを見合はすべきものなきが故に、心の中に危みて、斷行せられぬなり、一說には、殆は、怠の借字なり、心に思ふばかりにて、學問せねば、得ることなくして、倦み怠るなりといひ、又一說には、殆は、危きなり、心に思ふばかりにて、其の事を習はねば、危くして安からぬなりといへり、今は、最初の解に從ふ、

【解】孔子のいはれけるは、「昔の仕方を學び習ひても、其の譯柄を考へ思はねば、臨機應變の勵きを缺きて、聖人の道を無理にこじつくるやうになるなり、之れに反して、今の仕方を考へ思ふばかりにて、昔の仕方を學び習はねば、其の成り行きを見合はすべきものなきが故に、心の中に危みて、斷行せられぬものなり、されば、學ぶと思ふとの二つは、相待ちて離るべからざることを示されたるなり、

【章】此の章は、學ぶと思ふとの二つは、相待ちて離るべからざることを示されたるなり、

子曰、攻乎異端、斯害也已、

【字】攻……治むるなり、昔は學ぶことを治むといへり、諸子百家の書の如き、各〻端緒を異にする小道を治め學ぶなり、一說には、攻は、攻擊するなり、異端は、聖人の道と端緒を異にする學派なり、其の學派を攻擊するは、孟子の楊朱、墨翟を距ぐやうなることなりといへり、されども、孔子の時代には、まだ、楊、墨の如き外道を唱ふるものなく、論語の中にも、さるものを排斥したる形迹なければ、今は、前の解に從ひて、詩書禮樂の書にのらざる雜書を治め學ぶことゝ看るなり、○斯害也已……害ありて、益なきなり、一說には、已は、止むなり、上の攻擊の意を承けて、此の害毒の止むことなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【解】孔子のいはれけるは、「異端とて、諸子百家の書の如き、各〻端緒を異にする小道を治め學びて、彼れにも此れにも手を出だすときは、肝腎の聖人君子の大道を等閑にするやうになりて、害ありて、益なし」となり、

【章】此の章は、雜學の弊を示されたるなり、

子曰、由、誨女知之乎、知之爲知之、不知爲不知、是知也、

【字】由……孔子の弟子なり、姓は仲、名は由、字は子路といふ、魯の人なり、○誨……敎ふるなり、○女……汝なり、

【解】孔子弟子の仲由に物語りして、いはれけるは、「由よ、汝に物事を知るといふことを敎へむか、知りたる事を知れりとし、知らざる事を知らずとするが、知るといふものなり」となり、知らざる事を知らずといふは、少しも恥ぢになることなし、知らざる事を知れりといふは、已れを欺き、人を欺くものなり、敎訓の意は、此に在るべし、

【章】此の章は、子路の强ひて知れりとする弊を戒められたるなり、

子張學干祿、子曰、多聞闕疑、愼言其餘、則寡尤、多見闕殆、愼行其餘、則寡悔、言寡尤、行寡悔、祿在其中矣、

【字】子張……孔子の弟子なり、姓は顓孫、名は師といふ、子張は、其の字なり、陳の人なり、○學干祿……學は、問ふといはむが如し、史記には、問に作れり、干は、求むるなり、祿は、祿位なり、祿位を求むる仕方を問ふなり、○闕疑……能く分からぬ事を取り除くるなり、○寡尤……人より咎めらるゝことの少なきなり、○闕殆……不安心なる事を取り除くるなり、

【解】弟子の子張、孔子に向ひて、祿位を求むる仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「多くの事を耳に聞きて、其の中の分からぬ事を取り除けたる上にも、猶ほ氣を付けて、其の餘の穩なる事をいへば、人より咎めらるゝことの少なきものなり、多くの事を目に見て、其の中の不安心なる事を取り除けたる上にも、猶ほ氣を付けて、其の餘の大丈夫なる事を行へば、自ら後悔することの少なきものなり、言葉は人に咎められることの少なく、行ひは自ら後悔すること少なければ、此方より求めずしても、人々に引き立てらるゝが故に、祿位は自然に其の中に在るなり」となり、

【章】此の章は、學者は、實を務むべきことを示して、子張の祿位を求むるに念なることを戒められたるなり、

哀公問曰、何爲則民服、孔子對曰、擧直錯諸枉、則民服、擧枉錯諸直、則民不服、

【字】哀公……魯の君なり、名は蔣といふ、哀は、其の謚なり、○孔子對曰……主君に對ふる禮をもて書けるが故に、子曰とはせざるなり、以下に此の例多し、○擧直錯諸枉……直は、正直なり、錯は、加へ置くなり、諸は、之乎の二義を兼ぬ、錯之乎枉と同じ、枉は、直の反對にして、不正直なり、正直なる人を擧げ用ゐて、之れを不正直なる人の上に加へ置くなり、一說には、錯は、廢め置くなり、諸は、衆なり、正直なる人を擧げ用ゐて、多くの不正直なる人を廢め置くなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【解】魯の哀公、孔子に向ひて、「如何樣にせば、人民歸服するならむ」と尋ねられしに、孔子對へて、いはれけるは、「正直なる人を擧げ用ゐて、之れを不正直なる人の上に加へ置けば、其の壓力にて、不正直なる人も、いつとなく、正直になるが故に、人民の歸服するものに候ふ、之れに反して、不正直なる人を擧げ用ゐて、之れを正直なる人の上に加へ置けば、其の壓力にて、正直なる人も、いつとなく、不正直になるが故に、人民の歸服せぬものに候ふ、されば、人民を歸服せしめむとならば、正直なる人を任用したまふべし」となり、

【章】此の章は、國を治むるは、賢を擧ぐるに在ることを示されたるなり、

季康子問、使民敬忠以勸、如之何、子曰、臨之以莊、則敬、孝慈、則忠、擧善而敎不能、則勸、

【字】季康子……魯の大夫の季孫氏、名は肥といふ者なり、康は、其の謚なり、○敬忠……上を尊敬して、忠義を盡くすなり、○勸……自ら勉め勵みて、善に趨くなり、○臨之……人民に臨み對するなり、○不能……未だ善事を能くせざる者なり、上より下を見ることを臨むといふ、○莊……容貌威儀の莊嚴なるなり、○慈……人民を慈愛するなり、

【解】魯の大夫の季康子、孔子に向ひて、「人民をして上を尊敬せしめ、上に忠義を盡くさしめ、且つは、自ら勉め勵みて、善に趨かしめむには、如何樣にせば宜しからむ」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「上たる者、人民に臨み對するときは、容貌威儀を莊嚴にするときは、人民は上を尊敬するものなり、上たる者、親に孝行を盡くし、人民に慈愛を施すときは、人民は上に忠義を盡くすものなり、善人を擧げ用ゐて、未だ善事を

能くせざる者を教へ導くときは、人民自ら勉め勵みて、善に趨くものなり、上たる者の仕向け次第にて、何事も、我が思ふやうになるなり」となり、

[章義] 此の章は、人民を賢服せしむる仕方を示されたるなり、

或謂孔子曰、子奚不爲政、子曰、書云、孝乎惟孝、友于兄弟、施於有政、是亦爲政、奚其爲爲政、

[字釋] 子……孔子を指す、御身といはむが如し、○奚……何ぞなり、○書云、孝乎惟孝……書は、今の書經の周書の部の君陳の篇なり、孝乎惟孝は、孝行の德を譽めたる言葉にして、孝行は至極結構なることなりといふ程のことなり、但し今の書經には、孝乎の二字なきをもて、一說には書云孝乎をもて句として、書經に孝行の事を此のやうに云ひてあるにあらずやといふことなりといひ、惟孝の二字を下文に屬して、孝行は云々とせり、今は、前の解に從ふ、○友于兄弟……兄弟の中を善くすることなり、○施於有政……一家の政事にまで施し及ぼすなり、

[章義] 或る人、孔子に物語りして「御身は、何として官途に就きて、國の政事を行ひたまはぬか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「書經の中に、孝行は至極結構なることなり、孝行は善く父母に事ふるのみにてはなく、兄弟の中を善くし、一家の政事にまで施し及ぼして、子弟婢僕の末をも和合せしむるものなりとあり、人たる者は、孝行の一事にても、此の如く、家事を治むる任務あるものなれば、己れも常に此の事に從へり、是れも政事を行ふといふものなり、何として出でて仕へたる後に、始めて政事を行ふことゝすべけむや」となり、

[章義] 此の章は、家事を治むるは、政事を行ふに異ならざることを示されたるなり、

子曰、人而無信、不知其可也、大車無輗、小車無軏、其何以行之哉、

[字釋] 可……嘉みすべきなり、○大車……牛車なり、○輗……轅(ながえ)の端の上の曲がりたる處に衡(よこぎ)を懸けて、馬を着くるものなり、○小車……四頭立ちの馬車なり、○軏……轅の端の上の曲がりたる處に衡(よこぎ)を懸けて、馬を着くるものなり、

[章義] 孔子のいはれけるは、「人たる者は、信實を本とすべし、若し人として信實なることなからむには、一切虛僞となるが故に、其の餘の事は、嘉みすべきことを知らぬなり、人に信實なきことを、物に譬へていはゞ、牛車に牛を着くる輗の設けなく、馬車に馬を着くる軏の設けなきが如くなるべし、牛車に輗なく、馬車に軏なくば、何をもて之れを運行せらるべき、人に信實なからむには、之れと同じく、世渡りは叶はざるべし」となり、

[章義] 此の章は、信實の缺くべからざることを示されたるなり、

子張問十世可知也、子曰、殷因於夏禮、所損益可知也、周因於殷禮、所損益可知也、其或繼周者、雖百世亦可知也、

[字釋] 十世……父子相繼ぐを一世といふ、十世は、數百年といはむが如し、一說に、王者の姓を易へ命を受くるを一世とすといへるは、非なり、○因……因り本づくなり、

[章義] 孔子の頃には、周室既に衰へて、諸侯天子の命令を奉ぜざりければ、子張は才氣ある人なれば、新たに一代の禮法を制作して、天下を平治せむとの下心あり、それには現今のみならず、後來までの都合をも考へたる上ならでは叶はざるべしと思ひたれば、それとなく、孔子に向ひて、「父子の相繼ぐを十世の後までも、其の成り行きを豫め知ることは、出來るものに候ふか」と尋ねしに、孔子其の意を酌み取りて、いはれけるは、「殷の禮法は、夏の禮法に因り本づきて、制作せられたるものなれば、夏の聖人は、後々までも、其の禮法の大體は、動かすべからざれど、其の細目は、時宜に應じて、或は損減し、或は增益せらるべきことを、豫め知られたるに相違なし、又吾が周の禮法は、殷の禮法に因り本づきて、制作せられたるものなれば、殷の聖人は、後々までも、其の禮法の大體は、動かすべからざれど、其の細目は、時宜に應じて、或は損減し、或は增益せらるべきことを、豫め知られたるに相違なし、之れを既往に徵するに、禮法は、皆前代の仕來りを斟酌せるなり、されば、萬一、吾が周室の後を繼ぎて、天下に王たる人あらば、十世の後は、いふまでもなく、百世の後といふとも、其の成り行きを豫め知らるべし、かやうに遠く後々の事を見極めらるゝ人ならでは、一代の禮法を制作すべきものにあらず」となり、

[章義] 此の章は、天下國家を治むるには、往を推し、來を知らざるべからざることを說きて、子張の見の淺近なることを戒められたるなり、

子曰、非其鬼而祭之、諂也、見義不爲、無勇也、

[字釋] 其鬼……鬼は、人の神靈なり、其鬼は、先祖代々の神靈なり、

[章義] 孔子のいはれけるは、人々の當然に祭るべき先祖代々の神靈ならぬものを祭るは、媚び諂ひて福を求むる仕業にて、賤むべきことなり、又人々の當然に盡くさねばならぬ義といふことを眼前に控へながら、利害の爲めに膝を折りて、其の盡くすべきことを盡くさぬは、勇氣なきなり」となり、

[章義] 此の章は、人は鬼神に惑ふことなく、惟ゝ人道を盡くすべきことを示されたるなり、

八佾第三

孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也、

[字釋] 八佾舞於庭……佾は、列なり、天子は八佾、諸侯は六佾、卿、大夫は四佾、士は二佾なり、八人を一列とすれば、八八六十四人となる、魯は周公の子孫なれば、特別に八佾の舞ひを用ゐることを許されたるなり、庭は、家廟の前の廣場なり、○是可忍也、孰不可忍也……かゝる無禮の所業をも、知らぬ顏して、堪へ忍びてあちむには、何人の不埒なる所爲をも、堪へ忍ばれぬことやあらむといふことなり、一說には、かゝる無禮の所業をも、堪へ忍びて行はぬことやあらむといふことなりといへり、

[章義] 孔子魯の大夫の季孫氏の暇をして、いはれけるは、「八佾の舞ひは、天子の樂なり、吾が魯の御先祖周公は、王室の御連枝なれば、特別に之れを用ゐることを許されたり、然るを、近頃、三家老の一人の季孫氏は、家廟の前の廣場にて、之れを舞はせて、己れの祖先を祭れりと聞きつ、かゝる無禮の所業をも、知らぬ顏して、堪へ忍びてあちむには、何人の不埒なる所爲をも、堪へ忍ばれぬことやあらむ、此の儘に聞き棄て

難き次第なり」となり、

意義 此の章は、季氏の僭越を咎めて、名分を正すべき意を寓せられたるなり、

三家者以雍徹、子曰、相維辟公、天子穆穆、奚取於三家之堂、

字釈 三家……魯の大夫の孟孫氏、叔孫氏、季孫氏なり、○以雍徹……詩經の周頌の部の雍の篇の辭を歌ひて、祭禮の供物を下ぐるなり、○相維辟公、天子穆穆……相は、助くるなり、辟公は、諸侯なり、穆穆は、奥床しきさまなり、是れは、雍の篇の辭にして、天子の御祭りには、之れを助け奉る諸侯ありて、各〻御用を勤むるなり、其の時、天子の御樣子は、穆穆として、奥床しく見えさせたまふといふことなり、○堂……廟堂なり、

説明 魯の三家老の孟孫氏、叔孫氏、季孫氏は、皆其の身分を乘り越えて、家廟の祭りに、天子の宗廟の祭りに用ゐる雍の篇の辭を歌ひて、祭禮の供物を下げしかば、孔子のいはれけるは「天子の御祭りには、之れを助け奉る諸侯ありて、各〻御用を勤むるなり、其の時、天子の御樣子は、穆穆として、奥床しく見えさせたまふとは、是れ詩經の雍の篇の辭なり、何とてかゝる尊嚴なる詩句を三家の如き陪臣の廟堂に取り用ゐるべき、誠に恐れ多きことなり」となり、

意義 此の章は、前章と同じく、三家の僭越を咎められたるなり、

子曰、人而不仁、如禮何、人而不仁、如樂何、

説明 孔子のいはれけるは、「人として、仁心なくば、禮儀ありとも、何の用をか成すべき、人として、仁心なくば、音樂ありとも、何の用をか成すべき、禮儀は、讓ることを主とし、音樂は、和らぐことを主とするものにして、讓るも、和らぐも、仁心に本づくものなれば、不仁の人の禮樂は、虚飾となりて、其の用を成さぬなり」となり、

意義 此の章は、禮樂の本は、仁に在ることを示されたるものなれば、三家の僭亂、其の不仁なること甚しきが故に、編者の意にて、前の二章の次ぎに置けるなり、

林放問禮之本、子曰、大哉問、禮與其奢也、寧儉、喪與其易也、寧戚、

字釈 林放……魯の人なり、○寧……不十分なる甲乙を比較して、其の稍〻勝さりたる方を取るときの言葉なり、○易……葬式の支度の行き届くことなり、○戚……愁歎するなり、

説明 魯の林放といふ人、孔子に向ひて、禮儀の根本を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「そは如何にも大なる質問なるが、總べて禮儀といふものは、相互に敬意を保つが主意なれば、相當の準備をするは、然るべきことなれど、餘りに儀式張りて、奢侈に流れむよりは、寧ろ物事を控へ目にして、儉約にすべきことなり、殊に父母兄弟などの喪の時には、葬式の支度の行き届きて、外見の立派ならむよりは、寧ろ眞實に愁歎すべきことなり」となり、

意義 此の章は、禮儀は、見えを飾るものにあらざることを示されたるなり、

子曰、夷狄之有君、不如諸夏之亡也、

字釈 夷狄……夷は、東夷なり、狄は、北狄なり、東北の二方を擧げて、南蠻、西戎を兼ぬ、中國以外の未開の地を指す、○不如諸夏之亡也……夏は、大なり、自尊の稱なり、諸夏は、中國の諸侯をいふ、此の時天下大に亂れて、周の天子は、あれども、なきが如くなれば、中國を稱して、諸夏といへるなり、亡は、無と同じ、夷狄にも、君主あれども、禮儀なければ、中國の諸侯の君主なきには及ばぬなりといふことなり、一説には、夷狄にだにも、君主ありて、中國の諸侯の僭亂して、上下の分を失ひたるが如きにはあらずといふことなりといへり、

説明 孔子のいはれけるは、「夷狄の如き未開の地には、君主あれども、禮樂なければ、中國の諸侯の、時として君主なきには及ばぬなり、中國の諸侯は、時として君主なきこともあれど、禮樂は、まだ殘りたれば、夷狄程には下落せざるなり」となり、

意義 此の章は、中國を重んじて、夷狄を賤まれたるなり、

季氏旅於泰山、子謂冉有曰、女弗能救與、對曰、不能、子曰、嗚呼、曾謂泰山不如林放乎、

字釈 旅於泰山……旅は、祭りの名なり、泰山は、五嶽の一つにて、魯の領分に在り、○冉有……孔子の弟子なり、姓は冉、名は求、字は子有といふ、魯の人なり、○嗚呼……歎息して發する聲なり、○曾……乃と同じ、反りての意なり、

説明 魯の大夫の季孫氏、魯の領分の泰山を祭れり、領分の山川を祭るは、諸侯の行ふことなるを、季孫氏自ら諸侯を氣取りて、之れをせしかば、孔子は、己れの弟子にして、季孫氏の執事をしたる冉有に物語りして、「汝の主人の過失を諫め救ふこと能はざるか」といはれしに、冉有答へて、「私の力には及び難く候ふ」といひしかば、孔子大に歎息して、「あゝ、さても淺ましきことかな、彼の林放の如き者すら、禮儀の本を尋ねしを、今、季孫氏は、反りて、泰山の神は、林放にだにも及ばぬ輩に、禮儀を知らぬものなりと思へるか、神は非禮を享けたまはぬものなるを、斯くまで輕蔑したるにや」となり、

意義 此の章は、季孫氏の非禮を冉求の止むること能はざるを咎めて、季孫氏を諷せられたるなり、

子曰、君子無所爭、必也射乎、揖讓而升下、而飲、其爭也君子、

字釈 射……六藝の一つにて、弓を射ることなり、○揖讓……揖は、手を拱き、頭を垂れて、會釋することなり、讓は、互に讓り合ふなり、

説明 孔子のいはれけるは、「君子として、德ある人は、人と物事を爭ふことなけれども、只〻一つ屹度勝負を爭はねばならぬことは、大射の禮の時ならむ、此の禮式は、二人づつ堂に升りて、庭前の的を射ること三度にして、皆射中つるか、二度まで射中てたる方を勝ちとし、負けたる方に罰杯を差す例なるが、此の場合には、堂に升るときも、堂より下るときも、手を拱き、頭を垂れて、會釋して、互に前後を讓り合ひ、負けたる者は、勝ちたる者より差されたる杯を受けて、規則通りの酒を飲むなり、此の時ばかりは、君子たりとも、爭はざれば叶はざることなれど、其の爭ひは、作法正しき君子の爭ひにして、禮儀を知らぬ小人の酒を飲むなり、此の時ばかりは、君子たりとも、爭はざれば叶はざることなれど、

意義 此の章は、君子は妄に人と爭はざることを示されたるなり、

子夏問曰、巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮、何謂也、子曰、繪事後素、

字義　巧笑倩兮……上手に笑ひて、口元のゑくぼの愛らしきなり、兮は、言葉のゆとりを取る爲めに置く字なり、○美目盼兮……美しき目づかひをして、目元のすゞしきなり、盼は、白目と黑目との鮮明に分かるゝことなり、俗に吟に作れり、○素以爲絢……素は、下地なり、絢は、文采なり、下地のある上を飾るなり、以上の三句は、逸詩として、今の詩經に漏れたる詩の句なり、但し、上の二句は、詩經の衛風の部の碩人の篇に見えたれば、一說には、下の一句だけを逸詩なりといへり、○繪事後素……繪の具を塗るは、下地のありたる上の事なりといふことなり、一說には、畫の仕事は、一番跡にて、胡粉を用ゐて、塗り潰すものなりといへり、

解義　美人の事を詠じたる詩に、上手に笑ひて、口元のゑくぼ愛らしく、美しき目づかひをして、目元すゞやかなり、かゝる下地のある上に、紅おしろいをつけて飾るといふことあり、然るに、弟子の子夏は、此の三句目の素以爲絢を、下地を直ちに飾りとすることかと疑ひて、孔子に向ひて、下地と飾りとは、本來別なる筈なるに、是れは如何の譯に候ふか」と尋ねしかば、孔子は、之れを畫のことに移して、いはれけるは、「それは、汝の問遲ひなり、素以爲絢とは、下地のある上に又飾るといふことにて、譬へば、畫工の繪の具を塗るは、下地のありたる上の事なるが如し」となり、

曰、禮後乎、子曰、起予者、商也、始可與言詩已矣、

字義　起予……予れを引き立つるなり、○商……子夏の名なり、

解義　子夏は、忽ち合點して、人の行ひも、忠信の下地なければ、禮儀は虛文なることに心付きて、「さらば禮儀は、後の仕事に候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「予れも、さまでは心付かざりしが、如何にも、汝のいふ通りなり、予れを引き立つる者は、汝商なり、吾れは、今まで詩經のことを話さゞりしが、今よりは、始めて、汝と一所に詩經のことを話すことを得べし」となり、

解義　此の章は、教ふる者も、學ぶ者も、互に利益あることを示されたるなり、

子曰、夏禮吾能言之、杞不足徵也、殷禮吾能言之、宋不足徵也、文獻不足故也、足則吾能徵之矣、

字義　杞……國の名にして、夏の後なり、○不足徵……證據とするに足らぬなり、一說に、徵は、成すなり、其の國君の禮を成すに足らぬなりといへるは、非なり、○宋……國の名にして、殷の後なり、○文獻不足……文は、記錄なり、獻は、賢人なり、其の國の記錄も足らず、其の國の物知る人も足らぬなり、一說に、二國の君の文章賢才の足らぬなりといへるは、非なり、

解義　孔子のいはれけるは、「夏の世の禮は、吾れ能く之れを話せども、禹王の末孫の封ぜられたる杞の國に證據とするに足るものなし、又殷の世の禮は、吾れ能く之れを話せども、湯王の末孫の封ぜられたる宋の國に證據とするに足るものなし、それは、年數の久しくなりて、其の國の記錄も足らず、其の國の物知る人も存在せざるが故なり、若し記錄も傳はり、物知る人も存在せば、吾れは能く證據を取りて、人々に教へもせむ、返すがへすも惜むべきことなり」となり、

解義　此の章は、夏、殷の古禮の殘缺せしことを歎かれたるなり、

子曰、禘自既灌而往者、吾不欲觀之矣、

字義　禘……天子の宗廟の大祭なり、魯は周公旦の封ぜられたる國なれば、其の父の文王に周公旦を配祀して、此の祭りを行ふことを許されたるなり、但し禘に就きては、樣々の說あれど、今は、姑く此の解に從ふ、○灌……鬱鬯の酒とて、秬黍（くろきび）を釀して、酒に造り、鬱金香といふ香氣の高き草を煮て交ぜたるものを地に灌ぎて、神おろしをすることなり、

解義　孔子のいはれけるは、「魯に於て、禘の祭りを行はるゝ時、鬱鬯の酒を地に灌ぎて、神おろしをするまでは、君臣共に、靜肅に敬意を表すれども、其の酒を灌ぎ畢はれば、漸く懈怠するが故に、それより跡は、吾れは拜見した〳〵思はぬなり」となり、禘は、王者の大祭なれば、上より特に許されたればとて、本來なれば、遠慮すべきことなり、されども之れを行はるゝ以上は、拜見するも、已むことを得ざれども、其の君臣の懈怠するに至りては、愈〻失禮なるが故に、拜見するに堪へ難しとの意なり、

解義　此の章は、魯の君臣の非禮怠慢なることを歎かれたるなり、

或問禘之說、子曰、不知也、知其說者之於天下也、其如示諸斯乎、指其掌、

字義　如示諸斯乎……示は、眞と通じて、置くなり、或る物を此の處に置くやうならむといふことなり、一說には、手のひらの中の物を指し示すやうならむといふことなりといひ、又一說には、示は、視と同じ、己れの手のひらを視るやうならむといふことなりといへり、孰れにしても、見易く、知り易きことなれど、今は、最初の解に從ふ、○掌……手のひらなり、

解義　或る人孔子に向ひて、禘の祭りの譯を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「それは、甚だむづかしき事にて、吾れも心得ぬなり、若し其の譯を心得たる者あらむには、世の中の事を理會することは、或る物を此の處に置くやうに、何の難作もなかるべし」といはれて、自身に其の手のひらを指し示されけり、

解義　此の章は、禘の祭りの譯を說きて、魯の失禮を惡そることを避けられたるなり、

祭如在、祭神如神在、子曰、吾不與祭、如不祭、

字義　祭如在……父母先祖の靈を祭るときは、父母先祖の其の處に現に居らるゝやうに思ふなり、○祭神如神在……山川の神々などを祭るときは、其の神々の其の處に現に居らるゝやうに思ふなり、○不與祭……事故ありて、自ら祭らぬなり、

解義　古語に、父母先祖の靈を祭るときは、父母先祖の其の處に現に居らるゝやうに思ひ、山川の神々などを祭るときは、其の神々の其の處に

現に居らるゝやうに思ふといふことなり、神は誠を享けたまふものなれば、心を籠めて祭らむには、宜しく此の如くなるべし、孔子此の語を感心して、いはれけるは、「吾れは、餘儀なき用事あるか、或は病氣などの爲めに、自ら祭ることを得ず、人を代はりに立てたるときは、祭らぬ同じやうなる心地せり、祭りは自ら行ひて、心の誠を盡くすべきことなり」となり、

王孫賈問曰、與其媚於奧、寧媚於竈、何謂也、子曰、不然、獲罪於天、無所禱也、

王孫賈……衛の大夫なり、○奧……室の西南の隅なり、奧の神は、室内の神なり、君に譬ふ、一說には、近臣に譬ふといへり、○竈……火を焚きて、物の煮燒きをする所なり、竈の神は、火を司る神なり、執政に譬ふ、○天……上帝なり、一說には、君に譬ふといへり、

孔子の衛に往かれし時、其の國の大夫の王孫賈、孔子に向ひて、「世の諺に、其の家の室内の神に媚び諂ひて、幸ひを求めむよりは、寧ろ飲食に緣ある竈の神に媚び諂ひて、幸ひを求めよといふことあり、是れは如何なる譯なるか」と尋ねたり、其の意は、室内の神は、貴けれども、利益なきこと、君の深宮に在るが如し、竈の神は、賤しけれども、利益あること、執政の朝廷に於けるが如し、されば、仕へを求めむとならば、君の機嫌を取らむよりも、己れの機嫌を取れかしとの自負心をほのめかしたるなり、孔子其の意を酌み取りて、いはれけるは、「そは、理に合はぬことなり、人は、正しき道を行ひて、天の心に叶へばよし、正しき道を行はずして、天の咎めを蒙れば、餘の神々に禱りて、救ひを求めても、益なし」となり、是れ其の己れを正しくして、君に大夫に媚び諂はぬことを示されたるなり、

此の章は、人は、正しき道を守るべきことを示されたるなり、

子曰、周監於二代、郁郁乎文哉、吾從周、

監……視るなり、手本とするなり、○二代……夏と殷となり、○郁郁乎……華やかなるさまなり、

孔子のいはれけるは、「吾が周の禮文は、夏と殷との二代の制度を手本として、更に斟酌せられたるが故に、郁郁乎として、華やかにして、文采あり、吾れは、周の禮文に從はむとなり、

此の章は、周の禮文を賛美せられたるなり、

子入大廟、每事問、或曰、孰謂鄹人之子知禮乎、入大廟、每事問、子聞之曰、是禮也、

大廟……周公の廟なり、○鄹人之子……鄹は、魯の邑の名なり、孔子の父の叔梁紇といふ人、此の邑を支配せしかば、孔子を指して、斯くいへるなり、

孔子の魯に仕へられし時、魯に周公の祭りありければ、孔子は、之れを手傳ひて、其の廟内に入りて、それ〴〵の掛かりの人に、其の禮式を一箇條毎に尋ね問ひては、行はれしに、或る人、之れを聽りて、いひけるは、「何者か鄹人の子は禮儀を知れりと噂せしならむ、彼れは、周公の御廟に入りて、其の禮式を一々人に尋ねたり」となり、孔子之れを聞き及びて、いはれけるは、「大切の御祭りには、念の上にも念を入れて承るが、卽ち禮儀といふものなり」となり、

此の章は、儀式作法は、鄭重にすべきことを示されたるなり、

子曰、射不主皮、爲力不同科、古之道也、

射不主皮……大射の禮、鄕射の禮とて、弓を射る禮式あり、此の禮式の時の射方は、的の皮を射抜くことを目的とせず、只々的に射中つることを目的とするとあるを引用せるなり、○爲力不同科……科は、品等なり、人の力には、强きと弱きとありて、品等を同じくせぬに由るといふことなり、

孔子のいはれけるは、「儀禮の鄕射禮の篇に、禮式の弓の射方は、的の皮を射抜くことを目的とせず、只々的に射中つることを目的とするものなりとあるは、人の力には、强弱の差別ありて、其の品等を同じくせぬに由るなり、射禮は、禮を講ぜむが爲めなれば、昔の仕方は、此の如くなりき、然るに、今は、武の一方に傾きて、射禮の趣意を失ひて、皮を射抜くを其の道の達者と心得たり、是れにても、世に禮法の廢たれたることを知るべし」となり、

此の章は、古禮の廢たれたるを歎かれたるなり、

子貢欲去告朔之餼羊、子曰、賜也、爾愛其羊、我愛其禮、

欲去告朔餼羊……昔は、天子より、每年の十二箇月分の曆を諸侯に頒かたるゝなり、諸侯は、之れを祖先の廟に藏め置きて、每月の朔月に、一匹の羊を供へて、月の朔日なることを告げて、其の月の曆を受けて、國内に示すなり、是れを告朔之餼羊といふ、餼は、殺して未だ煮ざる牲なり、魯は、文公の時より、此の式を行はずして、只々其の羊を供ふるのみなりければ、子貢は、無益なりとして、之れを止めたく思ひたるなり、○賜……汝なり、○愛……惜むなり、

魯は、文公の時より、每月の朔日に、祖先の廟に一匹の殺したての羊を供へて、月の朔日なることを告げて、其の月の曆を受けて、國内に示すことを廢して、只々其の羊を供ふるのみなりければ、子貢は、無益なりとして、之れを止めたく思ひしに、孔子のいはれけるは、「賜よ、汝は、其の羊一匹を殺すことを惜めども、羊を供ふるだけにても、まだ其の禮の形式は殘りたり、若しそれまでも止めたらむには、禮は全く跡形もなくなるべし、我れは、其の禮のなくなることを惜むが故に、貴めては、之れを存し置きたく思ふなり」となり、

此の章は、形ばかりなる古禮なりとも、保存せむ意を示されたるなり、

子曰、事君盡禮、人以爲諂也、

孔子のいはれけるは、「君に事ふるには、臣たる者の盡くすべき當然の禮儀あり、然るに、吾れ當然の禮儀を盡くして君に事ふれば、世間の人は、君に媚び諂へりと思へり、合點のゆかぬことなり」となり、

此の章は、當時の人心の上を蔑にすることを歎かれたるなり、

定公問、君使臣、臣事君、如之何、孔子對曰、君使臣以禮、臣事君以忠、

【字義】定公……魯の君なり、名は宋といふ、定は、其の謚なり、

【講義】魯の定公、臣下の使ひにくきことを心配して、孔子に向ひて、「主君の臣下を使ひ、臣下の主君に事ふるには、如何樣にせば、宜しからむ」と尋ねられしに、孔子對へて、いはれけるは、「主君は、禮儀をもて臣下を使ひ、臣下は、忠義をもて、主君に事ふべきことに候ふ」となり、

【講義】此の章は、君も、臣も、各〻道を盡くすべきことを示されたるなり、

子曰、關雎樂而不淫、哀而不傷、

【字義】關雎……詩經の國風の部の周南の首篇なり、○淫……樂み過ぎて、其の正しきを失ふなり、○傷……哀み過ぎて、其の和を害ふなり、

【講義】詩經の開卷第一の關雎の篇は、周の文王の宮女の詠じたるものにして、文王のまだ世子たりし時、御附きの女官、文王の聖德に釣り合ひたる姫君を迎へ參らせたく思ひて、之れを見出だし得ぬ間は、夜の眠りも安からぬ程に憂へ哀みしが、遂に淑德無二の大姉といへる姫君を得たるによりて、樂を奏して、喜び樂みけるなり、其の哀むも、樂むも、御夫婦の御爲めを思ふ眞心より出でて、少しも私なきものなれば、孔子此の詩を讀みて、感じて、いはれけるは、「關雎の詩は、樂みても、樂み過ぎて、其の正しきを失はず、哀みても、哀み過ぎて、其の和を害はず、此の上もなき善き作なり」となり、

【講義】此の章は、關雎の詩の美しきことを褒められたるなり、

哀公問社於宰我、宰我對曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗、曰使民戰栗、

【字義】社……土地の守護神なり、昔は、國を建つるには、必ず土地の守護神を祭りて、其の土地に相應したる神木を植ゑたり、○宰我……孔子の弟子なり、姓は宰、名は予、字は子我といふ、魯の人なり、○夏后氏……夏の禹王、舜の禪りを受けて、天子となりしが故に、夏后氏といふ、后は、君なり、○柏……かやの木なり、○戰栗……震ひ恐るゝなり、

【講義】魯の哀公、土地の守護神の神木の由來を孔子の弟子の宰我に尋ねられしに、宰我は、辯者なりければ、口に任せて對へけるは、「夏の世には、松を植ゑ、殷の世には、柏を植ゑ、周の世には、栗を植ゑ候ふ、此の三木は、堵强くして、能く成長するが故に、其の時々の神木とせられしが、周になりて、栗の木を擇ばれたるは、人民に刑罰を長れしめむとてのことにて候ふ、栗は、卽ち戰栗の栗にて、震ひ恐るゝことに候ふ」となり、

子聞之曰、成事不說、遂事不諫、既往不咎、

【字義】成事……已に成りたる事なり、○說……其の譯を說くなり、○遂事……已に遂げたる事なり、○諫……諫め止むるなり、○既往……已に過ぎ去りたる事なり、○咎……責め咎むるなり、

【講義】孔子、宰我の對へを聞きて、宰我に向ひて、いはれけるは、「已に成りたる事は、是非もなければ、其の譯を說かぬなり、已に遂げたる事は、跡の祭りなれば、諫め止めぬなり、已に過ぎ去りたる事は、追ひ付かねば、責め咎めぬなり、只〻此の後は、屹度言葉を謹むべし」となり、是れは、宰我の間に合はせの答辯は、何の理由もなきのみならず、哀公をして、民を愛する心を失はしむるものなれば、其の失言を深く戒められたるなり、

【講義】此の章は、言語の謹むべきことを示されたるなり、

子曰、管仲之器小哉、

【字義】管仲……名は夷吾といふ、齊の桓公の輔相なり、○器……器量なり、

【講義】孔子のいはれけるは、「管仲は、齊の桓公を相けて、諸侯に覇たらしめて、大なる仕事をしたれども、道德の缺けたる所少なかりざれば、君子の眼より觀るときは、彼れの器量は、小さきものよ」となり、

或曰、管仲儉乎、曰、管氏有三歸、官事不攝、焉得儉、

【字義】三歸……女の嫁に行くことを歸ぐといふ、三歸は、三姓卽ち三箇國の女を娶ることなり、禮に、諸侯は、三姓の女を娶り、大夫は、一姓の女を娶るとあり、勿論、諸侯とても、本妻は、一人に限るなり、一說には、三歸は、臺の名なりといへり、今は、前の解に從ふ、○官事不攝……攝は、兼ぬるなり、家政を執らする役人を別々に置きて、職事を兼帶せしめざるなり、

【講義】或る人、孔子の管仲の器量を小さしといはれたるを聞きて、器量の小さきやうに見ゆるは、儉約なるが故ならむと思ひて、孔子に向ひて、「管仲は、儉約なる人なりや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「管氏は、大夫の身分にてありながら、諸侯のやうに、三姓の女を娶り、家政を執らする役人を別々に置きて、職事を兼帶せしめざりき、かやうに贅澤なる者なれば、何とて儉約なることを得む」となり、

然則管仲知禮乎、曰、邦君樹塞門、管氏亦樹塞門、邦君爲兩君之好、有反坫、管氏亦有反坫、管氏而知禮、孰不知禮、

【字義】邦君……一國の君にして、諸侯のことなり、○樹塞門……門の內に屏を立てゝ、內外の見通せぬやうにするなり、○爲兩君之好……鄰國の君と懇親會をするなり、○反坫……坫は、堂の中央に土を築きて造りたる臺なり、酒盛りの時、先づ主人より杯を差して、此の臺に置けば、客は、之れを飲みて、杯を洗ひて、又此の臺に置きて、主人に差すなり、斯くして、互に遣り取りの濟みたる後に、其の杯を臺の上に反し置くなり、之れを反坫といふ、

【講義】或る人、管仲は、儉約の人にあらずと聞きて、儉約ならぬやうに見ゆるは、禮儀を知れるに由るならむと思ひて、「然らば、管仲は、禮儀を知れる人なりや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「一國の君は、門の內に屏を立てゝ、內外の見通せぬやうに構ふるものなるが、管氏も、亦

君と同じく、己れの門の内に屏を立てゝ、内外の見通せぬやうにせり、又一國の君は、彩國の君と懇親會をする時に、其の會堂に反坫といふ杯臺の設けありて、杯の遺り取りをするものなるが、管氏も亦君と同じく、己れの宅に反坫を設けて、諸侯の會のやうにせり、管氏の如き身の分限を忘れたる者にても、禮儀を知れりといはむには、世に何人か禮儀を知らぬ者あらむ、殘らず禮儀を知れるなり」となり、

【講義】此の章は、王道を貴び、霸功を賤まれたるなり、

子語魯大師樂曰、樂其可知也、始作翕如也、從之純如也、皦如也、繹如也、以成、

【子註】大師……樂人の長なり、○始作……音樂を奏し始むるなり、○翕如……音色の引き緻まるさまなり、○從之……從は、縱と同じ、放つなり、盛んに奏し出だすなり、○純如……音色の善く合ふさまなり、○皦如……音色の明かに分かるゝさまなり、○繹如……餘音の續きて絶えぬさまなり、○成……一段の終はることなり、

【講義】此の頃は、世も末になりて、音樂を講ずる者なく、音樂を掌る役人までも、其の道を忘るゝ程になりたれば、孔子は之れを歎かはしきことに思ひて、魯の樂人の長に音樂の事を語りて、いはれけるは「音樂の事は、心得置かねばならぬなり、先づ音樂を奏し始むるときは、翕如として、音色の引き緻まるものなり、それより盛んに奏し出だすときは、純如として、音色の善く合ふものなり、それより次ざには、皦如として、音色の明かに分かるゝものなり、それより後には、繹如として、餘音の續きて絶えぬものなり、此の調子にて、一段の終はるものなり」となり、

【講義】此の章は、音樂の必要なることを示されたるなり、

儀封人請見曰、君子之至於斯也、吾未嘗不得見也、從者見之、出曰、二三子何患於喪乎、天下之無道也久矣、天將以夫子爲木鐸、

【子註】儀……衛の邑の名なり、○封人……國と國との界目に土を小高く盛りたるを封といふ、封人は、國界を守る役人なり、○二三子……孔子の弟子達を指す、各方といはむが如し、○喪……魯の大夫の位を失ひたることなり、○木鐸……銅又は鐵にて鈴のやうなるものを造りて、其の中の舌を木にて拵へたるを、木鐸といひ、文事に關する政教を人民に觸れ示すときは、木鐸を振り鳴らし、武事に關する政教を觸れ示すときは、金鐸を振り鳴らすなり、されば、孔子の文教を施すことに譬へたるなり、

【講義】孔子魯の大夫の役目を退きて、衛の國へ往かれし時、衛の國界の儀といふ邑を守る役人、孔子に面會せむことを請ひて、「德ある君子の此の地を通らるゝときは、吾れは、今まで、一度も面會することを得ざることなく、屹度面會す　ことを得たれば、此の度も、是非御目通りを願ひたし」といひければ、孔子に從ひ來りたる弟子達、其の口上を取り次ぎて、孔子に面會せしめしに、其の人、孔子に面談を遂げたる後に、其の前を退き出でて、弟子達に向ひて、いひけるは「各方は、孔夫子の位を失はれたることを心配せらるゝには及ばざるなり、天下に道の行はれざること久しければ、天は、今より、孔夫子を文事に關する政教を觸れ示す木鐸の代はりとして、世の中に文教を施さしめらるゝならむ、誠に賀すべきことなり」となり、

【講義】此の章は、孔子の德の盛んなることを示されたるなり、

子謂韶、盡美矣、又盡善也、謂武、盡美矣、未盡善也、

【子註】韶……帝舜の音樂の名なり、○武……周の武王の音樂の名なり、

【講義】或る時、孔子は、韶といふ帝舜の音樂を評して、いはれけるは「音聲の調子といひ、舞ひの手振りといひ、其の美しさを極め盡くしたる上に、又其の德の善きことをも極め盡くしたり」となり、又武といふ周の武王の音樂を評して、いはれけるは「音聲の調子と、舞ひの手振りとは、其の美しさを極め盡くしたれども、まだ其の德の善きことは、極め盡くさぬなり」となり、帝舜は、帝堯の禪りを受けて、天子となり、武王は、殷の紂王を伐ちて、天下を得たることなれば、其の音樂にも、自然に德の隱坊の見はれたるは、是非もなきことなり、されども、孔子は、周の世の人なれば、只々音樂の上にて、其の優劣をいはれたるのみなり、

【講義】此の章は、舜の樂と武王の樂との得失を批判せられたるなり、

子曰、居上不寬、爲禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉、

【子註】臨喪……人の凶事を弔ふなり、此の臨むは、上より下を見ることにてはなく、其の場所に踏み掛かることなり、臨事、臨時などと同じ、○吾何以觀之哉……其の人を觀ることを欲せざるなり、一說には、其行ひの得失を觀察するに足らぬなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【講義】孔子のいはれけるは「人の上に居る者は、寬大にして、衆を容るべし、人に對して、禮儀を行ふには、心の中より、先方を敬ふべし、人の凶事を弔ふには、眞實に悼み哀むべし、若し然らずして、人の上に居ながら、寬大ならず、人に禮儀を行ふに、先方を敬ふ心なく、人の凶事を弔ふに、悼み哀まざらむには、吾れは、其の人を觀ることを欲せざるなり」となり、

【講義】此の章は、不德の人を賤まれたるなり、

里仁第四

子曰、里仁爲美、擇不處仁、焉得知、

【子註】里仁爲美……里は、居るなり、仁の德に居るを何より結構なることゝするなり、一說には、仁の風俗ある土地に居るを、何より結構なることゝするなりといい、又一說には、我が住むべき里は、仁の風俗あるを何より結構なることゝするなりといへり、今は、最初の解に從ふ、○擇……居處を擇ぶなり、但し、第一の解を承くれば、無形の居處となり、第二、第三の解を承くれば、有形の居處となる、○處……里と同じく、居るなり、○知……智と同じ、

【講義】孔子のいはれけるは「人は、仁の德に居るを、何より結構なることゝす、能く其の心の居處を擇びて、仁の德に居らざらむには、何とて智者といふことを得べき、智者は、必ず心の居處を擇びて、最も貴重大切なる仁の德に居るなり」となり、

【講義】此の章は、仁の大切なることを示されたるなり、

子曰、不仁者不可以久處約、不可以長處樂、仁者安仁、知者利仁、

【字義】處約……貧賤困窮の境界に居るなり、○處樂……富貴安樂の境界に居るなり、○安仁……仁の上に落ち着くなり、○利仁……仁を利用するなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「不仁者は、零落すれば、必ず惡しき字節を起こすが故に、長く貧賤困窮の境界に居られぬなり、不仁者は、貧賤困窮にも耐へられず、富貴安樂をも保たれねども、仁者は、仁の上に落ち着きて、善を行ふことを樂み、智者は、仁の必要なることを知りて、之れを利用して、同じく善を行ふが故に、貧賤富貴に拘はらず、其の守る所を失はぬなり」となり、

【評義】此の章は、仁、知を不仁に對すれば、總べて一つの仁となることを示されたるなり、

子曰、惟仁者能好人、能惡人、

【字義】好……愛するなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「大抵の人は、心に私あるが故に、愛すべからざる人を愛し、愛すべき人を愛せず、惡むべからざる人を惡み、惡むべき人を惡まぬものなれど、惟だ仁者のみは、心に私なきが故に、能く愛すべき人を愛し、能く惡むべき人を惡みて、愛すべからざる人を愛せず、惡むべからざる人を惡まぬものなり」となり、

【評義】此の章は、仁者の心は、公平なることを示されたるなり、

子曰、苟志於仁矣、無惡也、

【字義】苟……假り初めにもなり、一說には、誠になりといへり、

【講義】孔子のいはれけるは、「人たる者は、假り初めにも、仁といふことに心を振り向くれば、我が身の爲めにも、人の爲めにもなりて、必ず惡しきことなし」となり、

【評義】此の章は、仁を心に掛けむことを世の人々に勸められたるなり、

子曰、富與貴、是人之所欲也、不以其道得之、不處也、貧與賤、是人之所惡也、不以其道得之、不去也、君子去仁、惡乎成名、君子無終食之間違仁、造次必於是、顚沛必於是、

【字義】不以其道得之、不處也……富貴を得べき當然の仕方によりて、之れを得るにあらざれば、君子は、之れを得べからざるものと覺悟して、其の場に立たぬなり、其の當然の仕方は、仁を行ふに在ることなれば、仁を行はずして、之れを得らるゝ場合をいふなり、○不以其道得之、不去也……貧賤を得べき當然の仕方によりて、之れを得たるにあらざれば、君子は、之れを天命なりと諦らめて、強ひて其の場を去らぬなり、其の當然の仕方は、不仁を行ふに在ることなれば、仁を行ひても、猶ほ貧賤を免れぬ場合をいふなり、但し、此の句に就きては、他に異なる說もあれど、今は、此の解に從ふ、○終食之間……飯を食ふ間なり、○造次……火急の場合なり、○顚沛……轉び倒るゝ際なり、一說には、破滅の場合なりといへり、

【講義】孔子のいはれけるは、「身代の豐かになることゝ、身分の高くなることゝは、何人も望むことなれども、之れを得るには、當然の仕方あり、其の仕方とは、仁を行ふことなり、仁を行ひて、之れを得るは、當然の事なれば、君子とて、德ある人は、之れを辭退せざれども、仁を行はずして之れを得らるゝ場合には、君子は、之れを得べからざるものと覺悟して、其の場に立たぬなり、身代の乏しくなることゝ、身分の卑しくなることゝは、何人も嫌ふことなれど、之れを得るには、當然の仕方あり、其の仕方とは、不仁を行ふことなり、不仁を行ひて、之れを得るは、當然の事なれど、仁を行ひても、猶ほ之れを得ることを免れぬ場合あり、かやうの時に出逢ふことあれば、君子は、之れを天命なりと諦らめて、強ひて其の場を去らぬなり、唯だ君子は、如何なる場合にも、仁の德を失ひ去ることなし、若し此の德を失ひ去るむには、何とて君子の名を成さるべき、されば、君子は、飯を食ふ間も、仁の德に違ひ背くことなく、如何なる火急の場合にも、屹度仁の上にて事を行ふなり」となり、

【評義】此の章は、君子は、時と場合とに拘はらず、仁を離るゝことなきことを示されたるなり、

子曰、我未見好仁者、惡不仁者、好仁者、無以尙之、惡不仁者、其爲仁矣、不使不仁者加乎其身、有能一日用其力於仁矣乎、我未見其力不足者、蓋有之矣、我未之見也、

【字義】無以尙之……尙は、加ふるなり、之れに增したる善行なきなり、○不使不仁者加乎其身……不仁者をして、非道の事を此方の身に持ち掛けさせぬなり、○有能一日用其力於仁矣乎……能く一日なりとも其の身の力を仁に用ゐる者あらむかといふことなり、矣乎は、然りと思ひながら、決定せざる言葉なり、一說には、今まで、世間に仁者なきは、能く一日にても、其の身の力を仁に用ゐる者なきが故なりといふことなりといへり、○蓋有之矣……世間は廣きことなれば、或は力の足らぬ者もあらむといふことなり、一說には、世間は廣きことなれば、或は一日にても其の身の力を仁に用ゐる者もあらむといふことなりといへり、

【講義】孔子のいはれけるは、「我れは、今まで、まだ仁を好む者と、不仁を惡む者とを見受けぬなり、仁を好む者は、最上の人にして、之れに增したる善行はなし、不仁を惡む者は、仁を好む者程には至らざれども、其の性質として、やはり仁を行ふなり、而して、他の不仁者をして、非道の事を此方の身に持ち掛けさせぬものなり、能く一日なりとも其の身の力を仁に用ゐる者あらむか、若しあらむには、必ず仁を行ふことを得べし、我れは、まだ仁を行ふ力の足らぬ者を見受けぬなり、世間は廣きことなれば、或は力の足らぬ者もあらむ、されども、我れは、まだ、其の人を見受けぬなり、只だ其の力を用ゐぬが故に、仁を好む者もなく、不仁を惡む者もなきなり」となり、

【評義】此の章は、己れの力を用ゐれば、何人も、仁者となるものなることを示されたるなり、

子曰、人之過也、各於其黨、觀過斯知仁矣、

字解 黨……黨類なり、人物の種類をいふ、君子、小人、賢者、愚者の如し、○觀過斯知仁矣……人の過失を觀察しても、其の過失をしたる人の仁者たることを知らるゝものなれば、一概に不仁者なりと擯斥すべからずといふことなり、一說には、人の過失を觀察する上に於ても、其の觀察する人の仁者たることを知らるゝなりといふことなりといへり、此の說にては、人の過失を一概に咎めぬ人は仁者なりとの意なれども、今は、前の解に從ふ、

講義 孔子のいはれけるは、「人の過失といふものは、それ〴〵に、其の人物の種類によりて、同じからず、君子の過失は、人を愛するに因りて生じ、小人の過失は、人を惡むに因りて生ずるが如し、されば、過失は、不仁者にのみあることゝは限らず、仁者にも亦あることあり、故に人の過失を觀察しても、其の事柄に因りて、彼れは仁者なりといふことを知らるゝなり、一概に不仁者なりと擯斥すべきものにあらず」となり、

講義 此の章は、過失の上にも、怨すべきものゝあることを示されたるなり、

子曰、朝聞道、夕死可矣、

字解 道……先王の道なり、一般に、事物當然の理なりといへるは、宜しからず、

講義 孔子のいはれけるは、「人たる者は、先王の道を知らざるべからず、朝に先王の道を聞き及びて、之れを知ることを得ば、其の夕方に死すとも、遺憾なかるべし、いつまで長命したりとも、先王の道を聞き知らぬ者は、世に在る甲斐はなかちむ」となり、

講義 此の章は、道の大切なることを示されたるなり、

子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也、

字解 士……學者を指す、○與議……一所に相談するなり、

講義 孔子のいはれけるは、「學者は、道を手に入れむことを志さば、餘事に心を移さゞるべし、學問に從事しながら、人に對して、衣類の粗末なるを恥ぢ、食物の粗末なるを恥ぢるが如き、不見識なる者は、まだ一所に學業を相談するに足らぬなり」となり、

講義 此の章は、學者は、志を專一にすべきことを示されたるなり、

子曰、君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比、

字解 於天下……天下の事に於けるなり、天下の人に對すること、見るは、宜しからず、○無適也、無莫也……適は、主となるなり、莫は、定まるなり、主となることもなく、定まることもなきは、己れの去就の片寄らぬことなり、人に對して偏頗厚薄なきことゝ見るは、宜しからず、○義之與比……比は、親むなり、唯義ある者と相親むなり、一般には、比は、從ふなり、義の在る所に從ふなりといへり、

講義 孔子のいはれけるは、君子として、德ある人の天下の事に於けるは、主とすることもなく、定まることもなく、唯義ありて道を守る者と相親みて、去就するまでなり」となり、

字解 此の章は、君子の去就の仕方を示されたるなり、

子曰、君子懷德、小人懷土、君子懷刑、小人懷惠、

字解 君子……位ある人を指す、○懷……思ふなり、絶えず念頭に置くことなり、一說には、安んずるなりといへり、○小人……位なき人を指す、○土……故鄕なり、○刑……刑罰なり、○惠……恩惠なり、

講義 孔子のいはれけるは、「君子として、身分ある人と、小人として、身分なき人とは、心掛けの違ふものにて、君子は、言行を重んじて、身に具はりたる道德を全くせむことを絶えず念頭に置けども、小人は、田宅を重んじて、住み慣れたる故鄕を離れざらむことを絶えず念頭に置くなり、君子は、名譽を重んじて、國の刑罰に觸れざらむことを絶えず念頭に置けども、小人は、利益を重んじて、君の恩惠に浴せむことを絶えず念頭に置くなり」となり、

講義 此の章は、高貴の人と下賤の者との思想の違ふ所を擧げて、人は高尙なる心を持つべく、野鄙なる心を持つべからざることを示されたるなり、

子曰、放於利而行、多怨、

字解 放……依るなり、

講義 孔子のいはれけるは、「利益は、衆の好むものなれば、我が身はかりのものにあらず、されば、事每に利益に依りて行ひて、己れを利せむと欲すれば、必ず人を害するが故に、人の怨みを受くること多きものなり」となり、

講義 此の章は、利欲は、反りて身の害となることを示されたるなり、

子曰、能以禮讓爲國乎、何有、不能以禮讓爲國、如禮何、

字解 禮讓……人を先にし、己れを後にし、人に物事を推し讓るは、禮儀の實なり、故に禮讓といふ、○爲國……國を治むるなり、○何有……雜作もなきなり、○如禮何……禮儀の用を成さぬなり、

講義 孔子のいはれけるは、「人の上たる者は、禮儀を重んじて、人に物事を推し讓ることを肝要とするなり、能く禮儀を重んじて、人に物事を推し讓ることもて、國を治めむには、下たる者も、皆之れに倣ふが故に、其の國を治むることは、何の雜作もなかるべし、若し能く禮儀を重んじて、人に物事を推し讓ることもて、國を治めざらむには、禮儀は徒らに虛文となりて、其の用を成さゞらむ、然らば、國に爭論絶えずして、平和を望み難かるべし」となり、

講義 此の章は、禮儀の實の推讓の肝要なることを示されたるなり、

子曰、不患無位、患所以立、不患莫己知、求爲可知也、

字解 立……官位ある地位に立つなり、

講義 孔子のいはれけるは、「世俗の人は、己れの官位なきことを心配すれども、君子は、己れの官位なきことを心配せずして、官位ある地位に立つべき道德學術のありやなしやを心配するなり、我が身に道德學術あれば、官位は望まずしても得らるればなり、世俗の人は、己れの名の

人に知られぬことを心配すれども、君子は、己れの名の人に知られぬことを心配せずして、己れの名を人に知らるべき事實を行はむことを勵み求むるなり、我が身に人に知らるべき事實あれば、名は求めずしても得らるればなり」となり、

子曰、參乎、吾道一以貫之、曾子曰、唯、

子曰 參……曾子の名なり、○一以貫之……唯ゞ一筋の道理をもて、萬事を貫き通すなり、○唯……はいと返辭をすることなり、

門人 孔子、或る時、弟子の曾子の許に往かれて、道の大要を語らむとて、先づ「參よ」と其の名を呼び掛けて、さて、「日頃吾が行ふ道は、時と事とに隨ひて、千差萬別なるやうに見ゆるならむが、其の實は、唯ゞ一筋の道理を以て、萬事を貫き通すなり」といはれしに、曾子は、直ちに其の意を悟りて、「はい」と返辭せり、

子出、門人問曰、何謂也、曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣、

子出 ……孔子の曾子の許を出で去りたるなり、一說には、此の話は、孔子の自宅にての事にて、出は、他出のことなりといへり、○門人……曾子の弟子なり、一說には、孔子の弟子なりといへり、○思恕……忠の解は、前に見えたり、恕は、我が身に引き比べて、人の上を思ひ遣ることなり、

門人 斯くて、孔子は、曾子の許を出で去られしに、此の問答を聞き居たる、曾子の弟子達は、孔子の言葉を悟り兼ねて、曾子に向ひて、「只今の御物語りは、如何なる譯に候ふか」と尋ねしに、曾子のいひけるは、「孔夫子の行ひたまへる道といふは、むづかしき事にあらず、忠とて、心の誠を推して、人に深切を盡くすこと、恕とて、我が身に引き比べて、人の上を思ひ遣ること、此の二つを合はせて、一つの主義として、萬事に應接したまふばかりなり」となり、

門人 此の章は、聖學の大要を示されたるなり、

子曰、君子喻於義、小人喻於利、

君子 ……德ある人を指す、一說には、君子懷德の君子と同じく、位ある人なりといへり、○喻……曉るなり、心付くなり、○小人……德なき人を指す、一說には、小人懷土の小人と同じく、位なき人なりといへり、

小人 孔子のいはれけるは、「君子として、德ある人は、何事に就けても、義といふことに心付きて、義に背かざるやうにするなり、之れに反して、小人として、德なき人は、何事に就けても、利といふことに心付きて、利を失はぬやうにするなり」となり、

義利 此の章は、義と利とは、君子と小人との分かるゝ所なることを示されたるなり、

子曰、見賢思齊焉、見不賢而內自省也、

思齊 ……同樣になりたしと思ふことなり、○內自省……內に自ら振り返り見るなり、內は、外に對していふ、

內自省 孔子のいはれけるは、「善に遷り、惡を去るは、學問の道なれば、賢き人の所業を見ては、其の人と同樣に賢くなりたしと思ひて、其の言行を手本とし、賢からぬ人の所業を見ては、我が身にもかゝる賢からぬことありやなしやと、內に自ら振り返り見て、若し似寄りたることあらば、早く改むべきことなり」となり、

子曰、事父母、幾諫、見志不從、又敬不違、勞而不怨、

幾諫 此の章は、人のふりを見て、我がふりを直すべきことを示されたるなり、

幾諫 ……幾は、微なり、物和らかに異見をいふなり、○勞……父母の爲めに我が心身を勞するなり、

見志 孔子のいはれけるは、「人の子たる者は、若し父母に過ちあらば、其の心持ちを損ねぬやうに、物和らかに異見をいふべきことなり、手厚く異見をいふは、孝行の仕方にあらず、さて、父にても、母にても、其の異見を快く聽き納れらるれば、何よりの事なれど、さはなくて、其の志の己れの異見に從はれぬことを見受けたらば、物和らかにしたる上に、又恭敬の心を起こして、其の意に違ひ背くことなく、父母の爲めに、我が心身を勞したればとて、怨みかこたぬやうにすべきことなり」となり、

勞而不怨 此の章は、父母の過失を諫むる仕方を示されたるなり、

子曰、父母在、不遠遊、遊必有方、

有方 ……極まりたる方角あるなり、

遠遊 孔子のいはれけるは、「父母の存生中は、遠き所に遊ぶまじきことなり、近き所に遊ぶにも、極まりたる方角のあるやうにすべし、遠き所は、いふも更なり、近き所に遊びても、其の往き先の分からぬときは、父母の心を煩はすことあり、父母存生の日は、長からざれば、かやうの事にも、益なき苦勞を掛くまじきことなり」となり、

必有方 此の章は、父母の心を安んずべき一端を示されたるなり、

子曰、三年無改於父之道、可謂孝矣、

三年 此の章は、學而の篇に出でたれど、前章に次ぎて、父母の殘後の心得を示さむが爲めに、再び揭げられたるなり、

子曰、父母之年、不可不知也、一則以喜、一則以懼、

知也 孔子のいはれけるは、「人の子たる者は、父母の年齡を知らねばならぬなり、其の譯は、一つには、其の命長きを見て、今日の健康を喜び、一つには、其の年々に衰へ行くを見て、萬一の事あらむことを懼れ氣遣かひ、鬼にも角にも孝養を忘らざらむが爲めなり」となり、

一則以喜 此の章は、父母の存生中に孝養を盡くすべきことを示されたるなり、

子曰、古者言之不出、恥身之不逮也、

不逮 ……及び屆かぬなり、

解釈 孔子のいはれけるは、「何事も、言ふことは易く、行ふことは難ければ、言葉は実に慎すべきものにあらず、昔の人の、言葉を慎みて、軽々しく口より出ださぬは、躬の行ひの言葉に及び屆かずして、言行の一致せぬことあらむことを、己れの恥ぢと思ひたるに由りてなり」となり、

説明 此の章は、言葉を慎むべきことを示されたるなり、

子曰、以約失之者鮮矣、

字句 約……上章の不仁者不可以久處約の約と同じく、貧困にして、物足らぬことなり、一説には、倹約なりといひ、又一説には、言葉の約やかなるなりといへり、今は、最初の解に従ふ、

解釈 孔子のいはれけるは、「人は、安楽にして、事足るときは、失敗し易きものなれど、貧困にして、物足らぬ身分にて、失敗する者は、今日までに、其の例多からぬなり」となり、但し、前に長く貧賤困窮の境界に居られぬものといはれたるは、不仁者なるが故にして、普通の人は、此の本文の如くなるなり、

説明 此の章は、貧困は安楽よりも難なることを示されたるなり、

子曰、君子欲訥於言、而敏於行、

字句 訥……言葉を控へ目にするなり、○敏……手早くするなり、

解釈 孔子のいはれけるは、「君子とて、徳ある人は、言葉を控へ目にして、身の行ひを手早くしたしと思ふものなり」となり、是れは、古人の躬の行ひの及ばざることを恥ぢて、軽々しく物をいはぬと、同様の譯なれど、彼れは、言葉の上よりいひ、此れは言葉と行ひとを並べていへるなり、

説明 此の章は、言葉を慎み、行ひを勉むべきことを示されたるなり、

子曰、德不孤、必有鄰、

字句 孤……早く父に離れたる者の稱より轉じて、一本立ちのことゝなるなり、○鄰……郷里の鄰より轉じて、仲間のことゝなるなり、

解釈 孔子のいはれけるは、「道徳といふものは、人々の身に具はりたるものなれば、身に道徳を行ふ者は、一本立ちになることなく、屹度世間に同じ仲間ありて、之れを助くるものなり」となり、

説明 此の章は、道徳の人を動かす力あることを示されたるなり、

子游曰、事君數、斯辱矣、朋友數、斯疏矣、

字句 數……度々謁見面會するなり、一説には、度々諫むるなりといへり、今は、前の解に従ふ、○疏……厭はれ疎まるゝなり、

解釈 弟子の子游のいひけるは、「君に事ふるに、餘り度々謁見すれば、遂には君に卿れ過ぎて、禮儀を失ふことありて、君に嫌はれ辱めらるゝことあり、朋友に交はるに、餘り度々面會すれば、遂には朋友に卿れ過ぎて、禮儀を失ふことありて、朋友に厭はれ疎まるゝことあり、されば君に謁見することも、朋友に面會することも、程よくすべきことなり」となり、

説明 此の章は、君に事へ、友に交はる心得を示されたるなり、

公冶長第五

子謂公冶長、可妻也、雖在縲絏之中、非其罪也、以其子妻之、

字句 公冶長……孔子の弟子なり、姓は公冶、名は長なりとも、姓は公、名は冶長なりとも、姓は公冶、名は芝、字は子長なりともいひ、魯の人なりとも、齊の人なりともいへり、○妻……嫁に遣るなり、○縲絏……縲は、黒き繩なり、絏は、繩を腰に附くるなり、昔は、罪人を縛るに、黒き繩を用ゐたり、○子……娘なり、

解釈 孔子弟子の公冶長の譯をして、「彼の男は、行儀正しきものなれば、吾が娘を嫁に遣りても、苦しからぬなり、彼の男は、先頃、官の嫌疑を受けて、繩目の辱ぢを被りしことあれど、全く他人の巻き添へにして、自分の罪にあらざれば、少しも恥づべきことなし」といはれて、己れの娘を嫁に遣られけり、

説明 此の章は、孔子の人を觀ることの明かなることを示されたるなり、

子謂南容、邦有道、不廢、邦無道、免於刑戮、以其兄之子妻之、

字句 南容……孔子の弟子なり、姓は南、名は适、又の名は适、字は子容といふ、前に見えたる魯の大夫の孟懿子の兄なり、○不廢……棄てられぬなり、用ゐらるゝなり、○刑戮……刑罰戮辱なり、

解釈 孔子弟子の南容の譯をして、「彼の男は、慎み深きものなれば、國に道の行はるゝ時に出逢ひたらば、棄てられずして、用ゐらるべく、國に道の行はれぬ時に出逢ひたらば、刑罰戮辱を被ることも免れて、其の身を全くするならむ、孰れにしても、安心なるものなり」といはれて、己れの兄の娘を嫁に遣られけり、但し、己れの娘は、一旦嫌疑を受けたる公冶長に遣られ、兄の娘は、好人物の南容に遣られたるは、己れの娘に薄くして、兄の娘に厚きやうなれど、孔子の心は、厚薄あるにあらず、其の年齢の相應せるに由れるなり、

説明 此の章は、前章の意と同じ、

子謂子賤、君子哉若人、魯無君子者、斯焉取斯、

字句 子賤……孔子の弟子なり、姓は宓、名は不齊といふ、子賤は、其の字なり、魯の人なり、○若人……此の如き人なり、○斯焉取斯……此の人如何に賢しとも、何とて人に善を取りて、此の德を成さるべきといふことなり、

解釈 孔子弟子の子賤の譯をして、「實に德ある君子なるかな、此の如き人は、さりながら、若し魯の國に先輩の諸君子あらざらむには、此の人如何に賢しとも、何とて人に善を取りて、此の德を成さるべき、是れは全く諸君子の御陽ならむ」といはれけり、思ふに、子賤は、善き人々を師友として、其の德を成せるものなるべし、

説明 此の章は、善き人々を師友とすれば、大に我れに益あることを示されたるなり、

子貢問曰、賜也何如、子曰、女器也、曰、何器也、曰、瑚璉也、

【字義】女器也……汝は物の用に立つ道具の如き人物なりといふことなり、○瑚璉……黍稷を盛りて、宗廟に供ふる道具なり、夏には瑚といひ、殷には璉といひ、周には簋簋といふ、玉にて飾りたる貴重なる道具にして、常に用ゐるものにあらず、子貢は、周の人なるに、簋簋といはずして、瑚璉といひたるは、字音の呼びよき故にして、別に譯あることにはあらず、

【本義】前の如くに、孔子の子賤を君子なりと譽められたるを見て、弟子の子貢、孔子に向ひて、「さらば、私は、如何樣なる人物に候ふか」と尋ねしに、孔子答へて、「汝は、物の用に立つ道具の如き人物なり」といはれしかば、子貢は又、「何の道具に當たり候ふか」と尋ねしに、孔子答へて、「黍稷を盛りて、宗廟に供ふる、瑚璉の如き道具に當たれり」といはれけり、瑚璉は、貴重なれども、一つの道具たることを免れず、且つ日用のものにあらざれば、子貢の材は、廟堂の重器なれども、實用に足らざることに譬へられたるなり、一說には、前章に關連するは、宜しからず、別項として看るべしといへり、

【字義】此の章は、子貢の器量を譽め且つ戒められたるなり、

或曰、雍也仁而不佞、子曰、焉用佞、禦人以口給、屢憎於人、不知其仁、焉用佞、

【字義】雍……孔子の弟子なり、姓は冉、名は雍、字は仲弓といふ、魯の人なり、○佞……上手に物をいひ廻はすことなり、○禦人以口給……禦は、應對するなり、口給は、口まめなり、人に向ひて口まめに應對するなり、○屢……毎々なり、

【本義】或る人、孔子の弟子の冉雍の事を、「雍は、仁德あれども、上手に物をいひ廻はすことの出來ぬ男なり」と批評せしに、孔子のいはれけるは、「何として上手に物をいひ廻はす必要あらむ、上手に物をいひ廻はす者は、人に向ひて、口まめに應對すれども、心の中に實なきが故に、毎々人に憎まるゝものなり、吾れは、雍の仁德ありや否やは知らねども、言語の巧みならざるは、少しも缺にならぬなり、何として上手に物をいひ廻はす必要あらむ」となり、

【字義】此の章は、口前のよきは、譽むべきことにあらざることを示されたるなり、

子使漆雕開仕、對曰、吾斯之未能信、子說、

【字義】漆雕開……孔子の弟子なり、姓は、漆雕、名は開なりとも、開は、其の字の子開の開なりともいへり、魯の人なり、一說に、字は、子若、蔡の人なりといへるは、信じ難し、○斯之未能信……斯は、仕の字を承く、仕へてよきか、よからぬか、まだ自ら信ずることの出來ぬなり、一說には、まだ人民に信用せらるゝことの出來ぬなりと云ひ、又一說には、まだ君に信用せらるゝことの出來ぬなりといひ、又一說には、まだ自ら道理を信ずることの出來ぬなりといへり、今は、最初の解に從ふ、

【本義】弟子の漆雕開は、學問も成就しければ、最早官途に就かせても宜しからむとて、孔子之れに出仕の事を勸められしに、「私は、道を究むること淺くして、仕へてよきか、よからぬか、まだ自ら信ずること能はざれば、是れまで通り、學問に身を委ねたく候ふ」と對へしかば、孔子其の篤志なることを悅びて、當人の意に任せられけり、

【本義】此の章は、漆雕開の道に志すことの深きことを示されたるなり、

子曰、道不行、乘桴浮于海、從我者、其由與、子路聞之喜、子曰、由也好勇過我、無所取材、

【字義】桴……竹又は木を編みて、水に浮かべるものにして、其の大なるを筏といひ、小さきを桴といふ、○無所取材……桴の材料を手に入るゝ考へなしといふことにて、子路の分別なきことをあてこすりたるなり、一說には、材は、裁と通じて、無所取裁といふこと、卽ち唯ゝ己れを取りて餘人を取らざるかなといふことなりといひ、又一說には、材は、物事の道理を取り度ること能はざるなり、子路の分別なきことを直言したるなりといへり、

【本義】孔子のいはれけるは、「吾が道は、最早天下に行はるべき見込みなければ、桴に乘りて、大海に浮かび出でて、爽秋のはて〳〵迄かむと思ふなり、弟子の中にて、我れに從ひ往かむ者は、獨り仲由のみならむか」となり、其の意は、道の行はれざることも歎息せられたるまでにて、固より父母の國を去るべき心あるにはあらざるを、子路は、さりとも心付かず、全く己れを供にして、中國を立ち退かるべきこと、思ひて、喜び勇みければ、孔子は之れを打ち消して、「仲由は、勇氣を好むこと、我れに過ぎたり、さりながら、桴に用ゐる材料を手に入るゝ考へもなき者なれば、所詮供には連れ難し」といはれけり、是れ其の分別なきことを歎かれたるなり、

【字義】此の章は、道の行はれざることを歎かれたるなり、

孟武伯問子路仁乎、子曰、不知也、又問、子曰、由也、千乘之國、可使治其賦也、不知其仁也、

【字義】治其賦……賦は、兵賦なり、軍兵の賦課を取り扱ふなり、

【本義】魯の大夫の孟武伯、孔子に向ひて、「御弟子の子路は、仁德ある人なりや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「其の義は、分かり兼ぬるなり」となり、孟武伯重ねて、「御承知なきことはあるまじ」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「由は、勇氣を好む者なれば、事ある時には兵車千輛を出だすべき大諸侯の國にて、軍兵の賦課を取扱はするには、適當なれど、其の仁德ありや否やは、分かり兼ぬるなり」となり、

求也何如、子曰、求也、千室之邑、百乘之家、可使爲之宰也、不知其仁也、

【字義】求……冉有の名なり、○千室之邑……家數の千軒もある大邑なり、卿大夫の家を指す、○宰……邑の代官、家の執事の通稱なり、

【語釋】孟武伯言葉を轉じて、「然らば、御弟子の丹求は、仁德ある人なりや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「求は、多藝なる者なれば、卿大夫の邑の代官か、家の執事たらしむるには、適當なれども、其の仁德ありや否やは、分かり兼ぬるなり」となり、

赤也何如、子曰、赤也、束帶立於朝、可使與賓客言也、不知其仁也、

【語釋】赤……孔子の弟子なり、姓は公西、名は赤、字は子華といふ、魯の人なり、○束帶……禮服を著るなり、

【語釋】孟武伯又言葉を轉じて、「然らば、御弟子の公西赤は、仁德ある人なりや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「赤は、禮儀を心得たる者なれば、禮服を着せ、朝廷に立たせて、鄰國より賓客を應對せしむるには、適當なれども、其の仁德ありや否やは、分かり兼ぬるなり」となり、仁德は廣大なるものなるが故に、孔子は、かやうにいはれたるなり、

【意義】此の章は、仁德の廣大なることを示されたるなり、

子謂子貢曰、女與回也孰愈、對曰、賜也何敢望回、回也聞一以知十、賜也聞一以知二、子曰、弗如也、吾與女弗如也、

【語釋】愈……勝さるなり、○敢……押してなり、○望……比べ視るなり、肩を並ぶるなり、○吾與女弗如也……吾れも、汝も、及ばぬなりといふことなり、但し、孔子の眞實に判斷したる言葉にて、子貢を慰めたる言葉にはあらず、一說には、與は、許すなり、吾れ汝の及ばぬといひたることを許さむといふことなりといへり、

【意義】弟子の子貢は、人を批評することを好みければ、孔子、或る時、顏回を引合に出だして、子貢に物語りして、「汝と回とは、孰れか勝される」といはれしに、子貢大に閉口して、對へけるは、「私は、何とて押して回と肩を並べ候ふべき、回は、一つの道理を承れば、直ちに十の道理を心付き候へども、私は、之れを尤なりと同意して、いはれけるは、「如何にも、汝は、回に及ばぬなり、否々、汝のみならず、吾れも、汝も、回に及ばぬなり、吾れも、汝も、益々勉強すべきことよ」となり、

【意義】此の章は、聖賢の心の無我なることを示されたるなり、

宰予晝寢、子曰、朽木不可彫也、糞土之牆不可杇也、於予與何誅、

【語釋】朽木……腐れたる木なり、○彫……物の形を刻むなり、○糞土之牆……性のぬけたる粘り氣のなき土にて造りたる土塀なり、○杇……鏝にて塗るなり、○誅……責むるなり、小言をいふなり、

【意義】弟子の宰予、或る時、晝寢をして、學業を怠りければ、孔子のいはれけるは、「腐れたる木は、物の形を刻まれぬものなり、性のぬけたる粘り氣のなき土にて造りたる土塀は、上塗りの出來ぬものなり、予の如き、なまけものは、腐れたる木にあらざれば、性のぬけたる粘り氣のなき土にて造りたる土塀の如く、手のつけやうのなきものなれば、予に對して、何の小言をいふべき、張り合ひのなき男なり」となり、

子曰、始吾於人也、聽其言而信其行、今吾於人也、聽其言而觀其行、於予與改是、

【語釋】始……前方なり、

【意義】孔子言葉を改めて、いはれけるは、「前方には、吾れは、人に對して、其の言葉を聽けば、人の言葉は頼み難し、今より以後は、吾れは、人に對して、其の言葉を聽けば、其の行ひを能く見屆けて、始めて實否を定むること、せり、予の事より、是れを、かやうに改めたり」となり、

【意義】此の章は、深く宰予の怠りを警められたるなり、

子曰、吾未見剛者、或對曰、申棖、子曰、棖也慾焉得剛、

【語釋】剛……物に屈し撓まぬなり、○申棖……魯の人なり、多分孔子の弟子ならむとぞ、○慾……情慾多きなり、

【意義】孔子或る時、「吾れは、今まで、まだ物に屈し撓まぬ者を見當たらず」といはれしを、或る人聞きて、「申棖こそは、其の人ならめ」と對へしに、孔子のいはれけるは、「棖は、情慾多き者なれば、何とて物に屈し撓まぬことを得ず、是れ申棖の其の人ならぬ所以なり、むれば、物に屈し撓まぬことを得む」となり、情慾多き者は、必ず人に求むるなり、人に求

【意義】此の章は、剛者は、人に求むることなきことを示されたるなり、

子貢曰、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人、子曰、賜也、非爾所及也、

【語釋】我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人……加は、陵ぐなり、無理非道なることを仕掛くるなり、此方の心持ちにて、他人より此方に無理非道なることを仕掛けらるゝことを欲せざる以上は、自分も、亦他人に無理非道なることを仕掛くることなかちむと欲するなりといふことなり、此の子貢の言葉にて、我と吾との差別を知るべし、我の字は、人に對する言葉にて、此方といはむが如し、吾の字は、己れの上に即りたる言葉にて、自分といはむが如し、但し、一々我を此方、吾を自分とは解釋せざれども、其の心にて、前後を見るべし、

【意義】弟子の子貢のいひけるは、「此方の心持ちにて、他人より此方に無理非道なることを仕掛けらるゝことを欲せざる以上は、自分も、亦他人に無理非道なることを仕掛くることなかちむと欲し候ふ」となり、孔子聞きて、いはれけるは、「それは、何より善き事なり、さりながら、賜よ、世間の人は、我が思ふやうにゆかぬものなれば、此方より他人に無理非道なることを仕掛けぬだけは、汝の力に及ぶべけれども、他人より此方に無理非道なることを仕掛けさせぬことは、汝の力の及ぶ所にあらぬなり」となり、一說には、仁者の事なれば、汝の及ぶ所にあらぬなり、といはれたるなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【意義】此の章は、人を化するは、むづかしきものなることを示されたるなり、

子貢曰、夫子之文章、可得而聞也、夫子之言性與天道、不可得而聞也、

【字解】文章……禮儀作法の如き、文彩形質の著はれ見ゆるものをいふ、○性……人の天より授けられたるものにして、仁義禮智の總名なり、○天道……天然自然の道理にして、陰陽禍福の類なり、

【講義】弟子の子貢のいひけるは、「孔夫子の、禮儀作法の如き、文彩形質の著はれ見ゆるものは、常々見も聞きもして、己れの手本とすることを得らるれども、孔夫子の、人の天より授けられたる仁義禮智の性に就きての御物語りと、陰陽禍福の如き、天然自然の道理に就きての御物語りとは、容易く承ることを得られぬなり」となり、孔子は、常に日用に益ある事を語られて、實務に遠き事は、第二に置かれたれば、子貢の如き高弟にても、之れを聞くこと稀なりしものと見ゆ、

【通釋】此の章は、孔子の教への平實なることを示されたるなり、

子路有聞、未之能行、唯恐有聞、

【講義】弟子の子路は、進取の氣象に富める人なりければ、孔子の教へを聞けることありて、まだ其の事を身に行ふこと能はざれば、只管に後の教へを聞くことありて、前のと共に行ひおはせざりしことを示されたるなり、

【通釋】此の章は、子路の教へを等閑にせざりしことを示されたるなり、

子貢問曰、孔文子何以謂之文也、子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也、

【字解】孔文子……衛の大夫なり、姓は孔、名は圉といふ、文は、其の諡なり、○下問……目下に向ひて、物事を尋ぬるなり、

【講義】弟子の子貢、衛の大夫の孔圉といふ人の、死後に文と諡せられたるを疑ひて、孔子に向ひて、「孔文子は、何故に文と申し候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「孔文子は、知識銳敏にして、學問を好み、目下に向ひて、物事を尋ぬることを、面目なしと思はざりき、兎角知識の銳敏なる者は、己れの才氣を負みて、學問を疎かにし、身分の高き者は、目下に向ひて、物事を尋ぬることを嫌ふものなれど、孔文子は、此の如く、善き心掛けを持ちしが故に、文と諡せられたるなり」となり、

【通釋】此の章は、孔文子の諡に就きて、學を勤め、問ふことを好むべきことを示されたるなり、

子謂子產、有君子之道四焉、其行己也恭、其事上也敬、其養民也惠、其使民也義、

【字解】子產……鄭の大夫の公孫僑の字なり、

【講義】孔子鄭の大夫の子產の噂をして、いはれけるは、「子產の身には、君子として、德ある人の仕方を四つまで具へたり、其の己れを行ふには、恭順を主とし、其の上に事ふるには、敬愼を主とし、其の人民を養ふには、惠恩を主とし、其の人民を使ふには、義理を主とせり、實に得難き賢大夫なり」となり、

【通釋】此の章は、子產の德を譽められたるなり、

子曰、晏平仲善與人交、久而敬之、

【字解】晏平仲……齊の大夫なり、姓は晏、名は嬰といふ、平は、其の諡なり、

【講義】孔子のいはれけるは、「人の交はりは、久しくなれば、失禮勝ちになるものなれど、齊の大夫の晏平仲は、善く人と交はれり、そは、いつまでも立ちても、其の人を敬禮せしが故に、先方よりも敬禮を受けて、其の交はりを全くせしことなり」となり、

【通釋】此の章は、人の交はりは、敬を久しくすべきことを示されたるなり、

子曰、臧文仲居蔡、山節藻梲、何如其知也、

【字解】臧文仲……魯の大夫の臧孫氏、名は辰といふ者なり、文は、其の諡なり、○居蔡……居は、藏むるなり、貯へ置くなり、蔡は、一尺二寸の大龜なり、此の大龜は、蔡の地より出づるが故に、龜の名とす、之れを廟中に貯へ置きて、吉凶を卜するは、諸侯以上に限ることゝなり、○山節……節は、柱頭の斗拱にて、邦語の栟形なり、之れに水草の藻の模樣を畫くは、天子の廟に限ることなり、○藻梲……梲は、梁上の短柱にて邦語の束柱なり、之れに水草の藻の模樣を畫くは、天子の廟に限ることなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「世間の人は、臧文仲を知識ある人なりといへど、彼れは、大夫の身分にてありながら、諸侯を真似て、蔡の大龜を自分の家廟に貯へ置きて、吉凶を卜する用に供し、且つ天子の廟の飾りを真似て、家廟の栟形を山形に刻み、束柱に水草の藻の模樣を畫けり、此のやうに、身の分限を忘れたる者なれば、何とて知識ある者といはるべき、極めて思慮なき者といふべし」となり、

【通釋】此の章は、臧文仲の僭越を非難せられたるなり、

子張問曰、令尹子文、三仕爲令尹、無喜色、三已之、無慍色、舊令尹之政、必以告新令尹、何如、子曰、忠矣、曰、仁矣乎、曰、未知、焉得仁、

【字解】令尹……楚の家老の名目なり、○子文……姓は鬬、名は穀、字は於菟といふ、文は、其の諡なり、○已……罷めらるゝなり、○無慍色……不平がましき顏色をせぬなり、

【講義】弟子の子張、孔子に向ひて、「楚の家老職の子文といふ人は、三度まで宰公をして、其の度毎に、家老となりしかども、喜ばしき顏色をせしことなく、三度まで其の職を罷められしかども、不平がましき顏色をせしことなく、元の家老の取り扱ひたる政事、卽ち己れの在職中の件々は、屹度新規に拜命したる我が跡役の家老に告げて、事の始末を心得させて、退役せり、是れは、如何なる人物に候ふか」と尋ねしに、孔子の

いはれけるは、「それは、慥に忠義なる人なり」となり、子張又、「仁德ある人とはいはれまじく候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「まだ、そこまでは、分かちぬが、仁德は廣大なるものなれば、只今の事柄だけにては、何とて仁德ありとすることを得む」となり、

崔子弑齊君、陳文子有馬十乘、棄而違之、至於他邦、則曰、猶吾大夫崔子也、違之、之一邦、則又曰、猶吾大夫崔子也、違之、何如、子曰、清矣、曰、仁矣乎、曰、未知、焉得仁、

【語釋】崔子……齊の大夫なり、名は杼といふ、○弑……君父を殺害することなり、○齊君……齊の莊公なり、名は光といふ、○陳文子……齊の大夫なり、名は須無といふ、○馬十乘……車一乘に馬四匹なれば、十乘は、四十匹なり、○違之……其の國を去るなり、○之……指す方ありて往くことなり、

【大意】子張言葉を轉じて、「齊の大夫の崔子といふ者、主君の莊公を殺害せしに、同役の陳文子といふ者、不忠の家來の威勢を振ふ國に居ることを嫌ひて、家に四十匹の馬を飼ひたる程の大身代を振り棄て、其の國を立ち去りしが、他國に至れば、そこにも、同じく不忠の家來ありしかば、やはり吾が齊の大夫の崔子の通りなりといひて、其の國を立ち去りしが、又或る國を指して往けば、そこにも、同じく不忠の家來ありしかば、又やはり吾が齊の大夫の崔子の通りなりといひて、其の國を立ち去れり、是れは、如何なる人物に候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「それは、慥に清廉潔白なる人なり」となり、子張又、「仁德ある人とはいはれまじく候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「まだ、そこまでは、分かちぬが、仁德は廣大なるものなれば、只今の事柄だけにては、何とて仁德ありとすることを得む」となり、

【語釋】此の章は、仁德は、容易く得られぬものなることを示されたるなり、

季文子三思而後行、子聞之曰、再斯可矣、

【語釋】季文子……魯の大夫の季孫氏、名は行父といふ者なり、文は、其の諡なり、

【大意】魯の大夫の季文子は、物事に大事を取りて、何事も、三度程思ひ直して、而して後に、始めて之れを行ひけり、孔子之れを聞き及びて、いはれけるは、「思慮勘辨は、大切なれど、決斷も亦肝要なり、餘りに深く考ふるときは、處分に惑ふものなれば、二度程思ひ直せば宜し」となり、

【語釋】此の章は、物事を思慮する程度を示されたるなり、

子曰、甯武子、邦有道則知、邦無道則愚、其知可及也、其愚不可及也、

【語釋】甯武子……衛の大夫なり、姓は甯、名は俞といふ、武は、其の諡なり、

【大意】孔子のいはれけるは、「衛の大夫の甯武子は、國に道の行はるゝときは、智者となりて働き、國に道の行はれぬときは、愚者となりて、人目に付かぬやうにして、身を全くせり、其の智者といはるゝ方は、正道なれば、之れを學ぶべし、其の愚者といはるゝ方は、權道なれば、之れを學ぶとも、其の愚に及び屆くべからざるなり、甯武子は、衛に仕へて、文公、成公の時に當たれり、文公有道にして、武子、事の見るべきことなし、此れ其の智には及ぶべきなり、成公無道にして、國を失ふに至り、智慧ある者は、皆之れを避けて、敢て力を盡くさざりしが、武子其の間に周旋して、艱難を辭せず、遂に其の身を全くして、其の君を救へり、此れ其の愚には及ぶべからざるなりといへり、されども、道あると、道なきとは、時と事とに就きていへるにて、必ずしも一君一世に限らざることなれば、此の解釋は、穩ならぬやうなりといへり、

【語釋】此の章は、甯武子の能く其の身を處せしことを譽められたるなり、

子在陳曰、歸歟、歸歟、吾黨之小子、狂簡、斐然成章、不知所以裁之、

【語釋】吾黨之小子……魯に在る弟子を指す、黨は、鄕黨の黨にて、村里のことなり、○狂簡……狂は、進みて取るなり、簡は、大なる道なり、進みて道の大筋を取るなり、一說には、志大にして、行ふことの疎略なるなりといへり、○斐然成章……花やかに美しく文章を成就するなり、文章は、政事禮樂などを指す、○裁……切り盛りするなり、

【大意】孔子諸國を遍歷して、陳の國に滯在せられし時、道の行はれざることを歎きて、魯へ歸らむと決心して、いはれけるは、「是れまで諸國を遍歷したれども、吾が道の行はるべき見込みなれば、今より、國へ歸らむか、歸らむか、吾が村里に殘し置きたる弟子共は、皆進みて道の大筋を取りて、斐然として、花やかに美しく、政事禮樂などの如き文章を成就したれども、まだ之れを切り盛りして、其の程々を得ることを知らざれば、早く歸りて、教育せねばならぬなり、道の行はれぬことを知りながら、益もなく奔走せむよりは、將來有爲の少年子弟を養成して、後世に傳へむことを務むるに如かじ」となり、

【語釋】此の章は、道の行はれざることを歎きて、後世に傳へむことを思ひ立たれたるなり、

子曰、伯夷叔齊、不念舊惡、怨是用希、

【語釋】伯夷叔齊……孤竹の君の二子なり、伯夷は、兄なれども、妾腹の子なり、叔齊は、弟なれども、本妻の子なり、されば、伯夷は、弟に家督を讓らむとし、叔齊は、兄に家督を讓らむとして、就れも、跡目に立たずして、遂に首陽山に餓ゑ死にせり、○念……思ひ出すなり、○怨是用希……用は、以と同じ、希は、稀なり、人の怨みを多く受けぬなり、

【大意】孔子のいはれけるは、「昔し、首陽山に餓ゑ死にせし伯夷、叔齊の兄弟は、甚だ惡を惡みければ、心の狹き人ならむかといふに、其の惡を惡みて、其の人を惡まず、善からぬ者も、心を改めて、善き事をすれば、其の善を擧めて、其の舊惡を思ひ出ださぬが故に、人の怨みを多く受けたることなし」となり、

【語釋】此の章は、伯夷、叔齊の心の廣く正しきことを示されたるなり、

子曰、孰謂微生高直、或乞醯焉、乞諸其鄰而與之、

微生高……姓は微生、名は高といふ、魯の人なり、○醯……酢なり、

孔子のいはれけるは、「何者か、微生高といふ男は正直なりと聞せしならむ、或る人、彼れに酢を貰ひたしと乞ひたるに、之れを其の隣家より貰ひ受けて、己れの家に持ち合はせたる體にして、其の人に與へたり、是れにては、正直者といひ難し」となり、

此の章は、物事を僞り飾るまじきことを示されたるなり、

子曰、巧言令色足恭、左丘明恥之、丘亦恥之、匿怨而友其人、左丘明恥之、丘亦恥之、

巧言令色……解は、學而の篇に見えたり、○足恭　足踏みを氣取るなり、一說には、逆に讀みて、殊更に恭順にして、人を滿足せしむるなりといひ、又一說には、恭敬の度を過ごすなりといへり、今は、最初の解に從ふ、○左丘明……魯の大夫にして、春秋を孔子に受けし人なりともいひ、別人なりともいへり、○丘……孔子の名なり、自ら名乘るは、己れといはむが如し、

孔子のいはれけるは、「口の先にて上手をいひ、顏色を善くして、人の機嫌を取り、足踏みを氣取りて、いやらしき樣子をするは、左丘明の恥ぢ嫌ひたることなるが、己れも、亦恥ぢ嫌ふなり、心の内に人を怨みながら、其の情實を包み匿して、表面に其の人を友達として親むは、左丘明の恥ぢ嫌ひたることなるが、己れも、亦恥ぢ嫌ふなり、總べて言語、容貌、擧動の諸誤に類すること、内外表裏の相違することは、君子のせざる所なり」となり、

此の章は、人に對して、物事を僞り飾るは、賤むべきことなることを示されたるなり、

顏淵季路侍、子曰、盍各言爾志、子路曰、願車馬衣輕裘、與朋友共、敝之而無憾、顏淵曰、願無伐善、無施勞、

季路……子路と同じく、仲由の字なり、○車馬衣輕裘……衣は、衍文にして、車馬輕裘なり、輕裘は、輕く煖かなる獸の皮の着物なり、一說に、衣は、輕裘を着ることなりといへるは、從ひ難し、○敝……破損せらるゝなり、○無憾……憾は、恨むなり、殘念に思はぬなり、○無伐善……伐は、誇るなり、己れの善き事を自慢せぬなり、○無施……施は、移すなり、勞は、勞事なり、己れの骨折り仕事を人にかづけぬなり、一說には、施は、張大になるなり、勞は、功勞なり、己れの功勞を大げさに吹聽せぬなりといへり、今は、前の解に從ふ、

弟子の顏淵、季路の二人、孔子の側に侍座せし時、孔子二人を顧みて、「汝等は、何とて銘々に自分の目的を話さぬぞ」といはれしに、季路は、早速、「私は、何卒所持の車を、馬を、輕く煖かなる獸の皮の着物を、朋友と共々に用ゐて、此の品々を破損せらるゝことありとも、殘念に思はぬやうにしたしと心掛け候ふ」と對へたり、次ぎに、顏淵は、「私は、何卒己れに善き事ありとも、人に對して、自慢することなく、己れの骨折り仕事を人にかづくることなきやうにしたしと心掛け候ふ」と對へたり、

子路曰、願聞子之志、子曰、老者安之、朋友信之、少者懷之、

老者安之……老人に安心せしむるなりといへり、○朋友信之……朋友に信用せらるゝなり、一說には、朋友に交はるに信實を旨とするなりといへり、○少者懷之……子供に思ひ慕はるゝなり、一說には、「子供を手懷くるなりといへり、

顏淵の對への謂みたる時、子路のいひけるは、「私共の目的は、申し上げたる通りなれば、此の上は、何卒夫子の御目的を伺ひたし」となり、孔子聞きて、いはれけるは、「拙者は、目上の老人達には、安心せられて、少しも恐れらるゝことなく、同輩の朋友には、信用せられて、少しも疑はるゝことなく、目下の子供達には、思ひ慕はれて、少しも恐れらるゝことなからむやうにと心掛くるなり」となり、

此の章は、聖賢の氣象に大小の差別はあれど、皆美しきものなることを示されたるなり、

子曰、已矣乎、吾未見能見其過而内自訟者也、

已矣乎……最早見込みはなかるべしといふことなり、○訟……責め咎むるなり、

孔子のいはれけるは、「最早見込みはなかるべし、吾れは、まだ今まで能く己れの過ちを見付けて、内心に自ら責め咎むる者を見受けぬなり、後來とても、同樣ならむ、さても歎かはしきことよ」となり、

此の章は、己れの過失を悔い改むる者なきことを歎かれたるなり、

子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉、不如丘之好學也、

十室之邑……家數の十軒ばかりの小邑なり、

孔子のいはれけるは、「己れの誠を推して、人に深切を盡くし、信實にして、虛言を吐かぬは、人の持ち前なれば、家數の十軒ばかりの小邑にも、屹度己れのやうに、深切にして、信實なる者は、あるべけれども、己れのやうに、學問を好む者は、あらぬなり、己れとても、性質は、餘の人々と異はりたることなけれども、學問を好むが故に、鄕人たることを免れたり、餘の人々も、學問を好まば、何とて德を成さゞらむ、實に學問は肝要なるものなり」となり、

此の章は、孔子自ら謙遜して、人を誘ひ勵まされたるなり、

雍也第六

子曰、雍也可使南面、仲弓問子桑伯子、子曰、可也簡、仲弓曰、居敬而行簡、以臨其民、不亦可乎、居簡而行簡、無乃大簡乎、子曰、雍之言然、

南面……人君の地位なり、君臣の相對する禮、君は南に向ひ、臣は北に向ふ、故に君には南面といひ、臣には北面といふ、此の處にては、

諸侯となりて、國を治むることなり、○子桑伯子……孔子の時の人なりや、孔子より前の人なりや、詳ならず、魯の人なりといふ說も、覺束なし、○閒……大まかにして、こせつかぬなり、

【本章】孔子弟子の仲弓の器量を譽めて、いはれけるは、「雍は、諸侯に取り立てゝ、國を治めさするに、適當したる人物なり」となり、仲弓聞きて、其の譯を知りたく思ひて、己れの氣象に似寄りたる子桑伯子といふ人に事寄せて、「子桑伯子を諸侯とせば、如何のものに候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「子桑伯子も、先づ宜し、そは、大まかにして、こせつかぬ人物なればなり」となり、仲弓又、「先づ敬肅といふことに腰を据ゑて、大まかなる仕方を行ひて、其の人民に臨み對し候はゞ、外にも宜しき事も候はむが、是れも亦宜しからぬことはあるまじきかと存じ候ふ、若し初めより大まかといふことに腰を据ゑて、大まかなる仕方を行ひ候はゞ、餘り大まか過ぐることはなく候はむや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「如何にも、雍の言葉の通りなり」となり、

【本章】此の章は、人民を治むる者は、物事を大まかにすべきことを示されたるなり、

哀公問、弟子孰爲好學、孔子對曰、有顏回者、好學、不遷怒、不貳過、不幸短命死矣、今也則亡、未聞好學者也、

【本章】不遷怒……一事を怒りて、他事に及ぼさぬなり、○不貳過……同じ過失を二度とせぬなり、○今也則亡矣……今日は、弟子の中に、學問を好む者なきなり、○未聞好學者也……弟子の外にも、まだ學問を好む者は、誰れなるか」と尋ねられしに、孔子對へて、いはれけるは、「私の弟子の中に、顏回と申す者ありて、學問を好み候ひしが、此の者は、至極心掛けの善き男にて、腹立たしき事ありても、其の腹立つべき事を腹立つのみにて、決して外の事にまで其の腹立ちを遷し及ぼしたることなく、又身に過失あれば、直ちに之れを改めて、同じ過失を二度とせしことなく候ふ、然るに、此の者、不仕合はせにて、三十二歳の短命にて、死去せしは、如何にも惜しきことに候ふ、今日は、弟子の中に、顏回の如く、學問を好む者なく、弟子の外にも、まだ學問を好む者を聞き及び候はず」となり、

【本章】此の章は、學者の得難きことを歎かれたるなり、

子華使於齊、冉子爲其母請粟、子曰、與之釜、請益、曰、與之庾、冉子與之粟五秉、子曰、赤之適齊也、乘肥馬、衣輕裘、吾聞之也、君子周急、不繼富、

【本章】子華……公西赤の字なり、○冉子……冉有なり、○粟……粉米なり、○釜……六斗四升なり、我が五升七合餘に當たる、○益……增し米なり、○庾……十六斗なり、我が一斗四升餘に當たる、○五秉……秉は、十六斛なれば、五秉は、八十斛なり、我が七石一斗八升餘に當たる、○適……往くなり、○衣輕裘……此の衣は、着用するなり、○周急……困窮を救ふなり、○不繼富……內福なる者を見繼がずなり、

【本章】弟子の子華、孔子の用事にて、齊の國へ使ひに往きし時、相弟子の冉子、子華の母親の留守中の暮らしの爲めに、粉米を與へむことを申し請ひければ、孔子は、「母親に六斗四升を與へよ」といはれけり、然るに、冉子は、猶ほ不足なりと思ひて、增し米を申し請ひければ、孔子は、「さらば、母親に十六斗を與へよ」といはれけり、然るに、冉子は、餘り輕少なりと思ひて、自分一己の計らひにて、母親に十六斛の粉米を與へけり、孔子冉子の計らひを聞きて、いはれけるは、「赤の齊へ往きたる時の樣子を聞けば、肥え太りたる馬に乘り、輕く煖かなる皮衣を着用せりといふことなり、吾れの兼ねて聞き及びたる言葉に、君子として、德ある人は、困窮なる者を救へども、內福なる者を見繼がずとあり、赤のやうなる身代のよき者には、それ程までに仕送るには及ばぬことよ」となり、

原思爲之宰、與之粟九百、辭、子曰、毋、以與爾鄰里鄕黨乎、

【本章】原思……孔子の弟子なり、姓は原、名は憲、字は子思といふ、宋の人なりとも、魯の人なりともいへり、○爲之宰……孔子の知行の代官となりたるなり、此の時、孔子は、魯の司寇たり、○九百……九百斗なり、我が八石八升に當たる、之れを一月の高とすれば、一年に九十七石となる、一說には、單に九百とありて、其の量をいはざれば、考へ難しといへり、○毋……禁止の言葉にて、辭退することなかれなり、○鄰里鄕黨……五家を鄰といひ、二十五家を里といひ、一萬二千五百家を鄕といひ、五百家を黨といふ、村里のことなり、

【本章】孔子魯の司寇たりし時、弟子の原思、其の知行の代官となりければ、孔子は、原思に九百斗の月俸を與へられしに、原思は、寡欲の人なりければ、餘計に與へたるにあらず、若しそれ程の必用なくば、汝が村里の貧しき者に分け與へても宜しからむ」となり、

【本章】此の章は、君子の財を用ゐるには、與ふるにも、與へざるにも、當然の道あることを示されたるなり、

子謂仲弓曰、犂牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其舍諸、

【本章】犂牛……まだら牛とて、毛色の雜りたる牛なり、一說には、耕作に用ふる牛なりといへり、○騂……赤きなり、周の世には、赤き色を貴びたれば、神に供ふる犧牲にも、赤き牛を用ゐたり、○角……二本の角の善く揃ひたるなり、○用……祭りに用ゐるなり、○山川……山川の神々なり、○舍諸……諸は、之乎の二義を兼ぬ、捨ゝ之乎と同じ、之れを棄て置かぬなり、

【本章】弟子の仲弓は、上章に見えたる如く、雍は南面せしむべしと擧められたる程の人物なれど、其の父は、身分も賤しく、行ひも惡しき者なりければ、之れを嫌ひて、世話をする者なかりけり、孔子之れを氣の毒に思ひて、人に向ひて、仲弓の噂をして、いはれけるは、「今の世は、赤色の牛を神に供ふる例なれば、毛色の雜りたる牛は、祭りの用に立たねども、其の子は、毛色の赤きが上に、角も揃ひて、纖然に適當ならむには、世間の人は、親牛の惡しきが爲めに、用ゐるまじと思ふとも、山川の神々は、何とて之れを棄て置きたまふべき、必ず之れを見出だして、快く受納ましまさむ、人も、之れと同じく、父は善からぬ者なりとも、子に、それだけの器量あらば、用ゐられねばならぬ筈なり」となり、

【本章】此の章は、人を用ゐるには、周圍の事情に拘はるまじきことを示されたるなり、

子曰、回也、其心三月不違仁、其餘則日月至焉已矣、

【本章】回也……顏回の名を呼び掛けて、語りたるなり、陰にて譽せるはあらず、○三月……一年は四季にして、四季は三月づつなれば、其の一季

を擧げて、時日の長きを示したるなり、三箇月と限りたるにはあらず、○其餘……仁の外の諸德を指す、一說には、政事文學の如き餘業なりといひ、又一說には、餘人、卽ち他の弟子達のことなりといへり、今は、最初の解に從ふ、○日月至焉已矣……月日の立つ儘に、自然に手に入るべしといふことなり、

【解】孔子弟子の顏回に學問の仕方を語りて、いはれけるは、「汎よ、人たる者の心掛けは、仁德を修むるが、何よりも肝要なるぞ、若し其の心、三月が程の長き間も、仁德に違ひ離るゝことなくば、其の餘の諸德は、月日の立つ儘に、自然に手に入るやうになるべし」となり、

【評】此の章は、仁は、諸德の本なることを示されたるなり、

季康子問、仲由可使從政也與、子曰、由也果、於從政乎何有、

【語】仲由……子路なり、○從政……政事を執るなり、○果……決斷のよきなり、○何有……何のむづかしきことあるべきなり、

【解】魯の大夫の季康子、孔子に向ひて、「御弟子の仲由は、政事を執らせらるべき人なりや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「由は、決斷のよき者なれば、政事を執るに、何のむづかしきことかあるべき、政事を執るは、いと易きことなり」となり、

曰、賜也可使從政也與、曰、賜也達、於從政乎何有、

【語】達……物事の道理に行き渡るなり、

【解】季康子又、「然らば、御弟子の端木賜は、政事を執らせらるべき人なりや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「賜は、物事の道理に行き渡りたる者なれば、政事を執るに、何のむづかしきことかあるべき、政事を執るは、いと易きことなり」となり、

曰、求也可使從政也與、曰、求也藝、於從政乎何有、

【語】藝……才能の多きなり、

【解】季康子又、「然らば、御弟子の冉求は、政事を執らせらるべき人なりや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「求は、才能の多き者なれば、政事を執るに何のむづかしきことかあるべき、政事を執るは、いと易きことなり」となり、

【評】此の章は、人々の長所を取れば、用ゐられざる者なきことを示されたるなり、

季氏使閔子騫爲費宰、閔子騫曰、善爲我辭焉、如有復我者、則吾必在汶上矣、

【語】閔子騫……孔子の弟子なり、姓は閔、名は損といふ、子騫は、其の字なり、魯の人なり、○費……季氏の邑なり、○復我……重ねて我れを召すなり、○在汶上……汶は、水の名にして、齊の南、魯の北に在り、上は、其の邊を指す、汶水の邊に在らむとは、魯を去りて、齊へ往かむとの意なり、

【解】魯の大夫の季氏、君を蔑にせしかば、上を學ぶ下の習ひとて、季氏の知行の費といふ土地の代官も、度々主人に叛きければ、季氏は、甚だ

當惑して、孔子の弟子にて、德行の聞えある、閔子騫を其の代官たらしめむと思ひて、使ひを遣りて、其の意を通ぜしめしに、閔子騫使者に向ひて、いひけるは、「善く我が爲めに御主人の氣に障はらぬやうに辭退してたまはるべし、若し此の上にも、重ねて我れを召さるゝことあらば、此の土地に居て、大夫の命を聽かぬ譯には參らねば、君れは屹度齊、魯の境の汶水の邊まで立ち退き候はむ」となり、

【評】此の章は、君子は、利祿を苟もせざることを示されたるなり、

伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰、亡之、命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人而有斯疾也、

【語】伯牛……孔子の弟子なり、姓は冉、名は耕といふ、伯牛は、其の字なり、魯の人ならむ、○有疾……癩病ならむとの說なり、○問……見舞ふなり、○自牖執其手……牖は、南向きの窓なり、病人は、北向きの窓下に居り、主君の見舞はるゝときは、南向きの窓下に移りて、主君を向面して、己れに對せしむるは、昔の禮式なり、伯牛孔子を敬ひて、此の禮を行ひたるに、孔子辭退して、其の室に入らず、窓の外より其の手を執りて、親愛の意を表したるなり、一說には、伯牛己れの惡疾を恥ぢて、人に面會することを厭ひたれば、孔子其の意を斟酌して、窓の外より斯くしたるなりといへり、○亡之……亡は、無と同じ、此のやうなる疾ひはなかるべき筈なりといふことなり、一說には、亡は、死なり、最早助かるまじといふことなりといへり、然れども、病人に向ひて、かゝる言葉を發せらるべくもあらざれば、今は、前の解に從ふ、○命……天命なり、

【解】弟子の伯牛、惡しき疾ひに罹かりて、容態重くなりたれば、孔子之れを見舞はれしに、伯牛孔子を敬ひて、南向きの窓下に寢牀を遷して、主君に對する禮をもて、孔子を迎へ入れむとせしに、孔子之れを辭退して、其の室に入らず、窓の外より手を差し延べて、伯牛の手を執りて、親愛の意を表して、いはれけるは、「汝が如き行ひの善き者に、此のやうなる惡ひはなかるべき筈なるを、天命にてもあるべきか、此のやうなる善人にして、此のやうなる疾ひあることは、此のやうなる善人にして、此のやうなる疾ひあることは、さても殘念なることよ」となり、

【評】此の章は、孔子の師弟の情に篤きことを示されたるなり、

子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也、

【語】一簞食……簞は、竹器なり、食は、飯なり、○一瓢飲……瓢は、瓠簞なり、飲は、飲み物なり、○陋巷……見苦しき小路なり、

【解】孔子顏回の賢きことを樂めて、いはれけるは、「さても賢きことよ、回は、彼れの平素の生活を觀るに、一つの竹器の飯を食ひ、一つの瓠簞の飲み物を飲みて、見苦しき小路に住まり、餘の者ならば、其の物足らぬ心配に堪へ兼ねて、何事も手につかざるべきを、回は、泰然として、道を學びて、貧苦の爲めに、其の快樂を改め變へて、外に心を移すことなし、返すがゝも賢きことよ、回は」となり、

【評】此の章は、顏回の賢きことを樂められたるなり、

冉求曰、非不說子之道、力不足也、子曰、力不足者、中道而廢、今女

畫、

語釋 中道而廢……中途にて止むるなり、○畫……地面に筋を引きて、仕切りをするやうに、自分より見切りをつけて仕舞ふことなり、

語釋 冉求、或る時、學問に退屈して、孔子に向ひて、いひけるは、「私は、夫子の道を喜悅して、行ひたしと思はざるにはあらねども、之れを行ひおほせざるは、力の足らぬ故に候ふ」となり、孔子聞きて、いはれけるは、「力の足らぬ者は、何事も、中途にて止むるなり、是れは、力のあらむ限りを盡くしたる上のことなるが、今、汝は、力の足らぬにはあらず、不勉強にて、自分より見切りをつけて仕舞ひたるなり、それにては、賴ましからず」となり、

語釋 此の章は、學者の自ら棄つることを戒められたるなり、

子謂子夏曰、女爲君子儒、無爲小人儒、

語釋 儒……濡すなり、學問を久しくすれば、水の物を濡す如く、自然に其の身を潤して、德を成すなり、孔子の道を儒道といひ、孔子の道を學ぶ者を儒者といへるも、此の義より出づ、

語釋 孔子弟子の子夏に物語りして、いはれけるは、「一口に儒といへば、常人に立ち勝さりたるやうなれど、其の中にも、君子の儒とて、人の上に立ちて、己れを善くし、兼ねて人をも善くする者と、小人の儒とて、人の下に立ちて、獨り其の身を善くする者との二樣あり、汝は、君子の儒となりて、小人の儒とならぬやうにせよ」となり、是れは、子夏は、文學に長じたれども、政事家としては、器量の狹き人なれば、徒らに末技を事として、國を治むる大體に疎せざらむことを氣遣ひて、之れを引き立てられたるなり、一說には、君子と小人とは、德の上にていふことにて、君子の儒とは、道を明かにして、己れを修する人、小人の儒とは、學問を鼻に掛けて、其の名に誇る者なりといへり、然れども、子夏に教ふる言葉としては、前の如くに、身分の上より見るかた、然るべしとなり、さもあるべし、

語釋 此の章は、學者は、己れを善くすべきのみならず、兼ねて人をも善くすべきことを示されたるなり、

子游爲武城宰、子曰、女得人焉耳乎、曰、有澹臺滅明者、行不由徑、非公事、未嘗至於偃之室也、

語釋 武城……魯の下邑なり、下邑とは、直轄の邑にして、大夫の知行にあらず、○得人焉耳乎……善き人物を手に入れつちむと思ふが、如何のものぞといふことなり、焉耳乎は、矣乎といはむが如く、然りと思ひながら、決定せざる言葉なり、但し、矣乎よりは、稍〻輕し、耳を賀として、是の如しと訓みたるは、誤まりなり、○澹臺滅明……姓は澹臺、名は滅明、字は子羽といふ、○徑……近き細道なり、○偃……子游の名なり、

語釋 弟子の子游、魯の直轄の武城といふ邑の代官となりければ、孔子子游に向ひて、「汝は、自分の支配內にて、善き人物を手に入れつちむと思ふが、如何のものぞ」と尋ねられしに、子游對へて、いひけるは、「さればに候ふ、私の支配內に、澹臺滅明と申す者あり、此の者は、道を行くにも、定まれる大道を往來して、近き細道に由りたることなく、公用の事柄にあらざれば、今まで、一度も、私の部屋に參りたることなし、此の二つにて察するに、彼れは、正しき人物なるべし、私の手に入れたるは、此の者一人にて候ふ」となり、

語釋 此の章は、子游の人を知ることの明かなることを示されたるなり、

子曰、孟之反不伐、奔而殿、將入門、策其馬、曰、非敢後也、馬不進也、

語釋 孟之反……魯の大夫なり、名は側といふ、○不伐……己れの手柄に誇らぬなり、○奔而殿……軍に負けて、逃げるときに、後殿をせしなり、後殿は、勇者ならねば、出來ぬことなり、○策……鞭つなり、

語釋 孔子のいはれけるは、「吾が魯の大夫の孟之反は、己れの手柄に誇らぬ人なり、或る時、齊と戰ひて、軍に負けて、逃げるとき、孟之反は、其の軍勢の後殿をして、寄せ來る敵を喰ひ止めながら、引き揚げしが、魯の城門に入らむとするとき、自分の乘りたる馬車の馬に一鞭あて、、勢をつけて、いひけるやう、拙者は、強ひて後殿をして、人々の跡になりたるにてはなく、乘りたる馬の痛く疲れて、進まぬが故に、餘儀なく、遲くなりたるなりと吹聽せり、實に奥床しき言葉なり」となり、

語釋 此の章は、孟之反の功に誇らぬことを譽められたるなり、

子曰、不有祝鮀之佞、而有宋朝之美、難乎免於今之世矣、

語釋 祝鮀……祝は、宗廟の事を掌る官なり、鮀は、其の名なり、衛の大夫にして、字は子魚といふ、孔子嘗て其の能く宗廟を治むることを譽められき、事は、憲問の篇に見えたり、○佞……辯才なり、○宋朝……宋の公子にして、名は朝といふ、衛の靈公の夫人の南子といふ人の男妾なり、○美……美貌なり、○免……危害を免るゝなり、

語釋 孔子のいはれけるは、「若し衛に大夫の祝鮀の辯才ありて、靈公を輔佐することなくして、獨り宋朝の美貌のみありて、夫人の南子に寵愛せられたらむには、今の世の如き、弑逆の多き時節には、南子は、必ず權を竊み、姦を逞めて、靈公の身は、危害を免れ難かりしならむ、幸ひに祝鮀の辯才ありて、靈公を輔佐せしかば、靈公は、其の災難を逃れられき」となり、是れは、不の字を佞の字まで掛けて、本文の如くに讀みたる解釋なるが、一說には、不の字を美の字まで掛けて、祝鮀の如き辯口と、宋朝の如き美色とを身に持たざれば、諂諛を好み、淫邪を悅ぶ、今の世の人々に憎まれて、其の災害を免るゝことは、むづかしからむ、正人君子は、身の置き處なき時節となりぬと慨歎せられたるなりといへり、前說にては、佞は、善き事となり、後說にては、佞は、惡しき事となる、然れども、孔子は、嘗て祝鮀の事を譽められしことあり、且つは、不の字を美の字まで掛くるは、文の上にも穩ならぬことなれば、前說に從はむかた宜しかるべし、

語釋 此の章は、衛の靈公の事を論ぜられたるなり、

子曰、誰能出不由戶、何莫由斯道也、

語釋 戶……家の出入り口なり、戶障子のことにはあらず、○斯道……先王の道なり、

語釋 孔子のいはれけるは、「人の身を立て功を成すには、先王の道に由るべきこと、さながら家を出づるには、其の出入り口に由るべきが如し、何人か能く家を出づるに其の出入り口に由らざらむ、必ず出入り口に由るべし、然るに、事を行ふには、何とて之れと同樣なる、先王の道に由ることなきか、心得難き事なり」となり、

語釋 此の章は、先王の道に由らざれば、身を立て功を成し難きことを示されたるなり、

子曰、質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子、

【訓】質……忠信誠實の如き實質なり、○文……禮儀文辭の如き文飾なり、○野……田舍者なり、○史……記錄役なり、○彬彬……實質と文飾との相半するさまなり、

【講】孔子のいはれけるは、「忠信誠實の如き實質の、禮儀文辭の如き文飾に勝ちたるときは、行儀作法を心得ぬ田舍者のやうになるなり、之れに反して、禮儀文辭の如き文飾の、忠信誠實の如き實質に勝ちたるときは、物は知れども行ひはそれ程ならぬ記錄役のやうになるなり、實質も必要なれば、文飾も必要なり、文飾と實質との彬彬として相半せる上にて、始めて成德の君子となるなり」となり、

【評】此の章は、質と文とは、平均せざるべからざることを示されたるなり、

子曰、人之生也直、罔之生也、幸而免、

【訓】直……正直なり、○罔之……正直の道を誣ひて、邪曲なることを行ふなり、一說に、罔は、無なり、正直の德なきなりといへるは、穩ならず、○幸而免……仕合はせに刑罰を免る、なり、

【講】孔子のいはれけるは、「人の此の世に生活せるは、正直の道を行へばなり、然るに、正直の道を誣ひて、邪曲なることを行ひながら、生活せるは、仕合はせに刑罰を免れたるなり、橫着者の法網に洩れたるを見て、其の眞似をすべきことにあらず」となり、

【評】此の章は、人は正直ならざるべからざることを示されたるなり、

子曰、知之者、不如好之者、好之者、不如樂之者、

【訓】知之……學問をせねばならぬといふことを知り覺ゆるなり、

【講】孔子のいはれけるは、「學問をせねばならぬといふことを知り覺えたる者は、學問をせねばならぬといふことを知り覺えぬ者よりは增しなれども、まだ學問を悅び樂む者には及ばぬなり、學問を好み嗜む者は、學問をせねばならぬといふことを知り覺えたる者よりは增しなれども、まだ學問を好み嗜む者には及ばぬなり、知るといふは、其の必要に迫られて勉强すること、好むといふは、嫌はぬこと、樂むといふは、而白く思ふことなり、學問の順序は、此の如く、知るより好み、好むより樂みて、始めて佳境に達すべし」となり、

【評】此の章は、學者の心に三段の階級あることを示されたるなり、

子曰、中人以上、可以語上也、中人以下、不可以語上也、

【訓】語上……高き道理を語るなり、

【講】孔子のいはれけるは、「人の性質には、上、中、下の三等ありて、中人以上の者、卽ち上等の人物は、聰明なれば、高き道理を語ることを得れども、中人以下の者、卽ち下等の人物は、暗愚なれば、高き道理を語り難し、上等と下等との間に在る中人、卽ち中等の人物は、聰明といふ程にもあらず、暗愚といふ程にもあらざれば、其の人々の心掛け次第にて、高き道理を語ることも語られぬこともあるなり」となり、

【評】此の章は、人を敎ふるには、其人物の次第によりて、相應の道理を聽すべきことを示されたるなり、

樊遲問知、子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣、問仁、曰、仁者先難而後獲、可謂仁矣、

【訓】知……智と同じ、○務民之義……民は、人なり、義は、事を行ひて、其の宜しきを得ることなり、故に、民之義は、人たる者の當然に行ふべきことにして、之れを務むるは、怠ちぬことなり、此の處、鬼神に對するが故に、人といはずして、民といひたるにて、平民のことにはあらず、○遠之……近づき諛はぬなり、○先難……骨折り仕事を先にするなり、○後獲……利益を得ることを後にするなり、

【講】弟子の樊遲、孔子に向ひて、「智とは、如何なることに候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「孝弟忠信の如き、人たる者の當然に行ふべきことを務めて、怠ることなく、天神人鬼を敬ひ尊びて、之れに近づき諛はぬやうにすることを、智といひて、然るべし、人たる者の當然に行ふべきことをなげやりにして、鬼神に近づき諛ひて、決して福を授けられぬものなれば、是れは、愚人の仕業にて、益もなきことなり」となり、樊遲又、「仁とは、如何なることに候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「仁者は、心に私欲なきが故に、骨折り仕事を先にして、利益を得ることを後にするなり、之れを仁といひて、然るべし、骨折り仕事を後にして、利益を先に得むとするは、不仁者の仕業にして、取るべきことにあらず」となり、

【評】此の章は、智者も、仁者も、實を務むるものなることを示されたるなり、

子曰、知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽、

【訓】樂……三字ながら樂むなり、一說には、上の二字は、好むなり、下の一字は、樂むなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【講】孔子のいはれけるは、「智者と、仁者とは、性質も、作用も、效果も、相違するものなり、其の性質の上に於ては、智者は、快活なる水を見ることを樂み、仁者は、安閑なる山を見ることを樂むなり、其の作用の上に於ては、智者は、活潑に動き、仁者は、落ち着きて靜なり、其の效果の上に於ては、智者は、何事も、思ふ通りになるが故に、樂みて、憂ふることなく、仁者は、無欲にして、煩惱せざるが故に、無病長命なり」となり、

【評】此の章は、智者と仁者との差を示されたるなり、

子曰、齊一變至於魯、魯一變至於道、

【訓】齊は、太公望の封ぜられし國にして、魯は、周公旦の子の伯禽の封ぜられし國なり、太公望は、大賢にして、周公旦は、聖人なれば、人民は、其の政敎に化せられて、善き風俗を成せり、其の後、齊は、桓公の霸業によりて、功利權詐を尙ぶやうになりぬ、魯は、衰へたれども、猶ほ先王の遺風あり、されば、孔子は、此の二國を評して、いはれけるは、「齊は、今日の有樣を一たび變改せば、魯の如く、禮儀を重んじ、信義を守る國となるべし、魯は、今日の有樣を一たび變改せば、先王の道の行はるゝ時となるべし」となり、

【講】此の章は、齊、魯の風俗を改良する難易を論ぜられたるなり、

子曰、觚不觚、觚哉、觚哉、

【語釋】觚……禮式の時に用ゐる酒器にして、一升を爵といひ、二升を觚といふ、我が國の樹目にすれば、爵は、一合足らず、觚は、二合足らずを受くるものなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「觚といふ酒器は、禮式の時に、分量を過ごさぬ爲めに、用ゐるものなれど、當今は、主人も、客も、醉ひ倒るゝまで、飲むが故に、觚ありといへども、觚の實なきなり、觚にして、觚の實なからむには、觚といはるべしや、決して觚とはいはれざるべし、禮儀作法は、有名無實となりぬ」となり、一說には、「觚は、稜ある酒器なるに、今は、稜なきものを觚と呼べり、觚にして、觚の形なくば、觚といはるべしや、決して觚とはいはれざるべし、君として、君の道を失ひ、臣として、臣の職を失ひたるも、之れと同じく、有名無實なることなりと、現今の有樣を觚に事寄せて、歎かれたるなり、

【講義】此の章は、世の禮法を失ひて、飲酒に耽るを歎かれたるなり、

宰我問曰、仁者雖告之曰、井有仁焉、其從之也、子曰、何爲其然也、君子可逝也、不可陷也、可欺也、不可罔也、

【語釋】井有仁……井の中に仁君ありといふことなり、或は仁人と解し、或は仁者と解す、孰れも、仁君のことなり、下文に、從之とあるは、其の仁君のお供をすることなり、一說には、仁は、人に作るべし、井の中に人ありといふことなりといひ、又一說には、仁は、仁の仕事なり、井の中に仁の仕事ありとは、危險なる場合にも、仁を行ふべき事あることの譬へなりといへり、今は、最初の解に從ふ、○可逝……往きて視さすることの出來るなり、○可欺……あり得べき道理をもて欺くことの出來るなり、○不可罔……道理に叶はぬ事を無理にせさすることの出來ぬなり、

【講義】弟子の宰我、仁者は如何に其の身を苦むとも、人の艱難を救はねばならぬものかと疑ひて、孔子に向ひて、「茲に一人の仁者ありとせむに、或る人、其の者に向ひて、かしこの井の中に、某といふ仁君溺れたまへりと詐り告ぐることありといふとも、日頃仁をもて自ら任ずる者なれば、一も二もなく、其の井の中に飛び入りて、仁君の御供をすべく候ふや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「何とて左樣の事をすべき、仁者は、德ある君子なり、德ある君子は、其の處まで往きて視さすることは出來れども、分別もなく井の中に落とし込ますることは出來ぬなり、總べて、君子は、あり得べき道理を以て欺くことは出來れども、道理に叶はざる事を無理にせさすることは出來ぬなり」となり、

【講義】此の章は、理のある所に道を行ふべきことを示されたるなり、

子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫、

【語釋】博學於文……廣く六經の文を學びて、先王の道を明らむるなり、○約之以禮……六經の文の大要を締め括りて、現今の禮法に合ふやうにするなり、約は、博に對す、○弗畔……道理に違ひ背かぬなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「六經の文に見えたる先王の道は、昔も、今も、同じことなれども、禮儀作法は、世に連れて、變はるものなれば、君子

として、德ある人は、廣く六經の文を學びて、先王の道を明らめて、其の德を積み蓄へ、其の大要を締め括りて、現今の禮法に合ふやうにして、之れを其の身に行ふべし、外にも道理に違ひ背かぬ仕方はあれど、かやうにすれば、一方に固まらずして、やはり道理に違ひ背かぬことを得べし」となり、

【講義】此の章は、先王の道に由り、現今の禮に從ふべきことを示されたるなり、

子見南子、子路不說、夫子矢之曰、予所否者、天厭之、天厭之、

【語釋】南子……衛の靈公の夫人にして、身持ちの惡しき女なり、○矢之……矢は、誓ふなり、子路に誓ふなり、○予所否者……否は、然の反對にして、然らざるなり、然らざるは、是ならざるなり、予れの南子に見えたること是ならずばといふことなり、○天厭之……天は予れを厭ひ棄てらる、ならむといふことなり、

【講義】孔子衛に仕へて、靈公に謁見せられし後、夫人の南子より面會を求められしかば、一旦は辭退せられしかど、强ひて請はるゝ儘に、已むことを得ずして、謁見せられけり、南子は、前にも擧げたる如く、宋朝に私せし程の身持ちの惡しき女なれば、弟子の子路は、孔子の謁見せられしを怪ばずして、面白からず思ひけり、孔子其の體を見て、子路に誓ひて、いはれけるは、「若し予れの南子に謁見したること、是ならずして、禮にも合はず、道にも叶はざらむには、天は予れを厭ひ棄てたまふべし、天は予れを厭ひ棄てたまふべし、汝は天意の向背を窺ひて、予れの是非を判斷せよ」となり、孔子の南子に謁見せられたることに就きては、種々の說あれども、之れを要するに、其の國に仕へて、其の君の奧方に謁見するは、當然の禮なれば、たとひ善からぬ人なりとも、飽くまで拒絕すべきにあらず、是れ孔子の遂に謁見せられたる所以なるべし、

【講義】此の章は、孔子の南子に見えられたるは、道理に妨げなきことを示されたるなり、

子曰、中庸之爲德也、其至矣乎、民鮮久矣、

【語釋】中庸……中は、過不及なきなり、庸は、恆久にして變はらざるなり、○至……至極結構なるなり、○民鮮久矣……世間の人の之れを行ふことの少なきは、久しき以前よりなりといふことなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「中とて、過不及なく、庸とて、恆久にして變はらざる、中庸の德は、至極結構なるものよ、さりながら、世間の人の之れを行ふことの少なきは、昨今の事にてはなく、久しき以前よりなり」となり、此の語は、中庸の書にも引用せられて、之爲德也の四字なく、鮮の下に能の字あり、合はせ看るべし、

【講義】此の章は、中庸の德を讚して、世の衰へたるを歎かれたるなり、

子貢曰、如有博施於民、而能濟衆、何如、可謂仁乎、子曰、何事於仁、必也聖乎、堯舜其猶病諸、夫仁者、己欲立而立人、己欲達而達人、能近取譬、可謂仁之方也已、

【字義】博施……廣く恩惠を施すなり、○濟衆……大勢の難儀を救ふなり、○何事ニ於仁……仁の仕事に止まらぬなり、○必也聖乎……屹度聖人の仕事ならむといふことなり、○堯舜……帝堯、帝舜なり、○病諸……其の事を苦勞するなり、○立……仕へて朝廷に立つなり、一說には、身を立つるなりといへり、○遠……前途の達にて、身分の發達するなり、一說には、志を遂ぐるなりといへり、○近取ニ譬……手近く我が身に比例を取るなり、

【講義】弟子の子貢、孔子に向ひて、「若し世の中に、廣く恩惠を人民に施して、大勢の難儀を救ふ者あらば、如何なるものに候ふか、仁の仕事といはるべく候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「左樣なる大事は、何とて仁の仕事に止まるべき、是れは、屹度聖人の仕事ならむか、さりながら、帝堯、帝舜の如き聖人すら、やはり廣く恩惠を人民に施して、大勢の難儀を救はむことのむづかしきことを苦勞したまひし程なれば、左樣の大事は、容易く及ばぬことゝして、單に仁の仕方に說きて一言せむ、仁者は、己れ仕へて朝廷に立たむと欲すれば、先づ人を薦めて、朝廷に立たしめ、己れ身分の發達せむことを欲すれば、先づ人を世話して、發達せしむるなり、能く手近く我が身に比例を取りて、他人の上を推し量り、他人の欲し願ふ所を、我が身と異ならざることを知りて、我が身の欲し願ふ所を他人に及ぼすを、仁の仕方といふべし、仁の仕方は、此の外に出でざるなり」となり、

【言義】此の章は、仁の仕方は、恕に在ることを示されたるなり、

述而第七

子曰、述而不ル作、信而好ル古、竊比ニ於我老彭、

【字義】述而不ル作……昔の人のいひたる事を取り次ぎて、語り傳ふることを述といひ、昔の人のいはざる事を新たに設き出だすことを作といふ、述べて、作らざるは、先王の舊章を述べ傳へて、新たに禮樂を制作せざることなり、○竊比ニ於我老彭ニ……竊は、內々にてといふことにて、謙遜の言葉なり、我は、愚む言葉なり、內々にて我が老彭に引き比べて、其の眞似をするまでのことなりといふことなり、老彭は、殷の世の賢大夫にて、好みて古の事を述べ傳へたる人なりと云、大義禮に此の人の事あり、

【講義】孔子のいはれけるは、「世間の人は、己れの事を作者のやうに思へども、作者といへば、帝堯、帝舜、夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王の如く、德あり位ありて、新たに禮樂を制作したまひし方々のことにて、己れの知き者の企て及ぶべき所にあらず、己れは、是れまで、先王の舊章を述べ傳へたるまでにて、新たに禮樂を制作せしことなし、己れは、深く古代の事を信仰して、飽くまで之れを好む者なり、昔し、殷の世に、老彭といふ賢大夫ありて、好みて古の事を述べ傳へき、己れの平素の心掛けは、內々にて、我が老彭に引き比べて、其の眞似をするまでのことなり、孔子の詩書を刪り、禮樂を定め、周易を賛し、春秋を脩められしは、蓋先王の舊章を述べ傳へたるものなれど、其の功勞は、新たに作るよりも多し、然るを、啻に作者の地位に當たらざるのみならず、前の世の賢人に比するをだにも憚りて、敢て明言せられざるは、孔子の孔子たる所以なり、

【言義】此の章は、孔子の謙德を示されたるなり、

子曰、默而識ル之、學而不ル厭、誨ル人不ル倦、何有ニ於我ニ哉、

【字義】默而識ル之……先王の道を知り覺ゆるなり、○誨……敎ふるなり、○何有ニ於我ニ哉……何とて我れに道德あるべき、我れには道德あることなしといふことなり、一說には、默而識ル之と、學而不ル厭と、誨ル人不ル倦との三つの者、孰れか我れにあるべき、我れには一つもあることなしといふことなりといへり、

【講義】孔子のいはれけるは、「我れは、沈默して、能く考へて、先王の道を知り覺え、物事を學び習ひて、厭ひ嫌ふことなく、人を敎へ導きて、倦みも怠ちぬばかりなり、我れの長所は、此の如きに過ぎず、然るに、世人は、誤まりて我れを道德ある者と思ひて、尊敬せらるれども、何とて、我れに道德あるべき、我れには道德あることなし、我れは、左樣に尊敬せらるべき者にあらず」となり、

【言義】此の章も、前章と同じ、

子曰、德之不ル脩、學之不ル講、聞ル義不ル能ル徙、不善不ル能ル改、是吾憂也、

【講義】孔子のいはれけるは、「我れ身の德を棄て物にして、手を入れざること、學問を怠りて、講究せざること、事々物々に然るべき善理あることを聞き及びながら、それに從ひ從ふことのならぬこと、身に善からぬことありと知りつゝ、改め直すことのならぬこと、此の四箇條は、吾れ常に掛念することなり」となり、

【言義】此の章は、孔子の掛念せられたることを示されたるなり、

子之燕居、申申如ル也、夭夭如ル也、

【字義】燕居……閒暇無事の時なり、○申申如……心の和らぎやかなるさまなり、一說には、顏色の愉ばしきさまなりといへり、

【講義】孔子の朝廷より退きて、己れの居間に閒暇無事にて居らるゝ時の樣子はといふに、申申如として、心和らぎ、夭夭如として、顏舒びやかに見受けられけり、

【言義】此の章は、孔子の氣象の中和なるさまを示されたるなり、

子曰、甚矣吾衰也、久矣吾不ル復夢見ニ周公ニ、

【字義】復……再びなり、○周公……文王の子、武王の弟にして、名は旦といふ、周の制度を定めたる人なり、

【講義】孔子のいはれけるは、「吾れの老衰せることは、實に甚だしきことよ、氣力の盛んなる頃には、周公の道を慕ひ行ひて、世の有樣を立て直さむと心掛けたれば、黑惑の餘りに、周公の面影を屢ゝ夢に見ることありけるが、吾が志遂げずして、道を行ふ望みも絕えたれば、二度と再び周公の面影を夢に見ぬこと、非今にあらず、久しき以前よりの事なり、年はとりたくなきものぞ」となり、

【言義】此の章は、道の行はれざることを暗に歎かれたるなり、

子曰、志ニ於道、據ニ於德、依ニ於仁、游ニ於藝、

【講義】據……根據とするなり、○依……離れぬなり、○游……心を寄するなり、○藝……禮、樂、射、御、書、數とて、禮儀、音樂、弓術、馬術、書法、

算數の六藝なり、

【講義】孔子のいはれけるは、「人の學問をするは、道を行はむが爲めなれば、第一に、先王の道を慕ひて、之れを己れに得むことを志すべし、さて其の道は、人々の身に具はりたる德によりて、行はるゝものなれば、德を根據とせざるべかず、而して、其の道も、德も、仁を離るゝときは、人情に戻るが故に、仁を離れぬやうにすべし、さて、此の如く、仁に依りて、道を修め、德を養ひながら、人として缺くべからざる禮、樂、射、御書、數の六藝に心を寄せて、其の學問を完成すべし」となり、

【要義】此の章は、學問の目的仕方を示されたるなり、

子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉、

【字義】束脩……束は、十束なり、脩は、乾したる肉なり、昔の人は、始めて人に面會するときに、必ず贄（に（）とて、身分相應の手土產を持參せり、十束の乾したる肉は、其の手土產の至りて輕きものなり、○以上……それより上の品々なり、

【講義】孔子のいはれけるは、「來りて教へを求めぬ者は、引き立てやうもなけれども、自身に手土產の至りて輕き十束の乾したる肉を始めとし、それより上の品々を持參して、入門の禮を行へば、其の進物の厚薄に拘はらず、其の志の篤きを愛して、吾れは、今まで、一度も教へざることなく、必ず之れを懇ろに教へたり」となり、

【要義】此の章は、人を教へて倦まざることを示されたるなり、

子曰、不憤不啓、不悱不發、舉一隅、不以三隅反、則不復也、

【字義】憤……心の中に其の譯を考へ思ひて、まだ胸に落ちずして、憤然として、腹立つことなり、○啓……其の譯を開き通ずるなり、○悱……口の先にて、其の譯をいはむとすれど、まだ分明にいひ兼ねて、悱然として、もどかしく思ふことなり、○發……其の譯を發明するなり、○舉一隅……譬へば、四角なる物の一方の隅を擧げ示すが如きなり、○反……打ち反して證明するなり、○不復……同じ事を二度と話さぬなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「吾れは、人々を教育するに、當人自ら其の譯を考へ思ひて、まだ胸に落ちずして、憤然として、腹立つ程に、熱心にならねば、此方より其の譯を開き通じて遣らぬなり、又口の先にて、其の譯をいはむとすれど、まだ分明にいひ兼ねて、悱然として、もどかしく思ふ程に、熱心にならねば、此方より其の譯を發明して遣らぬなり、又譬へば、四角なる物の一方の隅を擧げ示せば、他の三方の隅々も、同じことも、先方より打ち反して證明するが如き程の覺語ある者にあらざれば、〻どと告げても、其の甲斐なければ、同じ事を二度と話さず、先方の心付くまで、之れを待つなり、此方の教授の仕方は、此の如くなれば、人々宜しく自ら勵み勉むべし」となり、

【要義】此の章は、教へを受くる者は、自ら心を用ゐざるべからざることを示されたるなり、

子食於有喪者之側、未嘗飽也、子於是日哭、則不歌、

【字義】○飽……腹一杯に食ふなり、○是日……悔みに往きたる日なり、○哭……聲を放ちて泣くなり、

【講義】孔子は、凶事ある人の家へ手傳ひに往きて、其の人の側にて食事をすれば、先方の悲傷を思ひ遣りて、今まで、一度も、腹一杯に物を食ひたることなく、只〻空腹を腹がるゝのみなりき、孔子は、又悔みに往きたる日に、先方の家にて、哭禮として、聲を放ちて泣く禮を行へば、歸宅の後も、先方の心を酌み取りて、歌など歌ひて樂まるゝことなかりき、

【要義】此の章は、孔子の情の厚きことを示されたるなり、

子謂顏淵曰、用之則行、舍之則藏、惟我與爾有是夫、

【字義】舍……棄てゝ用ゐぬなり、○藏……退き隱るゝなり、

【講義】孔子弟子の顏淵に物語りして、いはれけるは、「世の人、己れを擧げ用ゐれば、進みて道を行ひ、世の人、己れを棄てゝ用ゐざれば、退き隱れて、心靜かに今日を送る、出づる也處る也、時に隨ひて、其の遇ふ所に安んずるは、唯〻我れと汝とのみならむか、餘の人々には、多分出來ざることならむ」となり、

子路曰、子行三軍、則誰與、子曰、暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也、必也臨事而懼、好謀而成者也、

【字義】行三軍……三軍の大將となりて、其の軍政を行ふなり、天子は六軍、大國は三軍、小國は一軍にして、軍は、一萬二千五百人なり、○誰與……何人と共に事を謀るべきかといふことなり、○暴虎……素手にて虎を搏つなり、○馮河……舟なくして大河を涉るなり、馮は、陵なり、渡を切りて渡るなり、河は、黃河なり、○懼……油斷せぬなり、○成……失敗をせぬなり、

【講義】弟子の子路、孔子の飯淵を譽められたるを見て、心の中に、己れは孔門唯一の勇者なれば、武事に於ては、必ず我れに許さるゝならむと思ひて、孔子に向ひて、「若し夫子にして、三軍の大將となりて、其の軍政を行ひたまふことあらば、夫子は、何人と共に事を謀りたまはむか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「血氣の勇を鼻に掛けて、素手にて虎を搏ち、舟なくして、黃河の如き大水を涉りて、身を失ひても、其の非を悔ゆることなき者とは、吾れは事を謀らぬなり、若し三軍の兵馬を左右せむ場合もあらば、是非共、事に臨みて油斷せず、謀計を好みて、失敗をせぬ者を相談相手とすべきぞ」となり、

【要義】此の章は、聖賢の出處進退の時に隨ふことゝ、眞の勇者は、深謀遠慮に在ることゝを示されたるなり、

子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之、如不可求、從吾所好、

【字義】富而可求也……富貴にして求めて得らるゝものならばといふことなりとも、字の通りにて、分かるべし、○執鞭之士……周禮に、條狼氏といふ職ありて、手に鞭を執りて、通行人を避けしむることを掌る、王の出入りには、八人道を夾む、公には六人、侯、伯には四人、子、男には二人なり、賤しき役目なり、○吾所好……古人の道なり、

【講義】孔子のいはれけるは、「貴賤貧富は、天命なるに、世間の人は、人力をもて求め得らるゝものならむには、王侯の出入りの時に、其の通り路の兩側に立ちて、手に鞭を執りて、往來の人を避けしむる條狼氏の如き賤しき役目なりとも、世間の人の希望する如く、吾れも亦之れを勤めて、立身出世の緣口にありつかむ、然

れども、若し富貴にして、人力をもて求め得られぬものならむには、心をあせり、身をあがくは、益もなきことなれば、吾が好む所の古人の道を修め學びて、樂しく此の世を送るべし」となり、

【要義】此の章は、苟も富貴を求むべからざることを示されたるなり、

子之所慎、齊戰疾、

【語釋】齊……祭りの前に物忌みをして、心身を清むることなり、

【要義】孔子の常に氣を付けらるゝ事は、祭りの前の物忌みと、戰爭と、病氣との三つなり、物忌みをして、心身を清めざるは、神に接する道にあらず、戰爭は、國の興敗、人の存亡に關することなり、病氣は、我が身の生死に關することなるに、當時の人は、此の三つを左程大事と思はざりしが、孔子は、獨り之れに心を用ゐられけり、

【要義】此の章は、孔子の殊に謹慎を加へられたる事柄を示されたるなり、

子在齊、聞韶、三月不知肉味、曰、不圖爲樂之至於斯也、

【語釋】韶……帝舜の音樂にして、至極善美なるものなり、帝舜の子孫は、周の武王の時、陳の國に封ぜられければ、此の音樂も、齊に傳はれり、○不圖爲樂之至於斯也……齊にて韶の音樂を奏ずるを聞きて、陳の公子の完といふ者、齊に奔りて、桓公に事へしかば、此の音樂も、齊にて之れを奏することとなり、一說には、韶の音樂の斯くまで美なりとは思ひ寄らざりきといふことなり、となりといへり、

【要義】孔子、齊の國に滯在せられし時、韶といふ帝舜の音樂を聞きて、三月の間學ばれしが、其の所白さに堪へずして、食事の時も、肉の味ひの美惡を心付かれぬ程なりき、斯くて、大に歎息して、いはれけるは、「韶の音樂は、兼ねゝ陳に在りと聞きつるが、齊にて之れを奏することの斯くまで上手ならむとは思ひ寄らざりきといふことよ」となり、

【要義】此の章は、孔子の深く音樂を好まれしことを示されたるなり、

冉有曰、夫子爲衛君乎、子貢曰、諾、吾將問之、入曰、伯夷叔齊何人也、曰、古之賢人也、曰、怨乎、曰、求仁而得仁、又何怨、出曰、夫子不爲也、

【語釋】爲衛君乎……衛の君の爲めに助力せられむかといふことなり、衛の君は、靈公の孫の輒を指す、○諾……委細承知せりといふことなり、

【要義】衛の靈公、太子の蒯聵を逐ひ出だしければ、靈公薨じて、國人蒯聵の子の輒を立て、君となせり、然るに、晉人蒯聵を衛に納れむとせしかば、輒之れを拒みて、父子の爭ひとなりぬ、折りから、孔子は、衛に在りて、輒の客分たりしが、弟子の冉有も、衛に仕へてありければ、孔子の意見次第にて、其の身の去就を決せむと思ひしが、直接に自ら問ふも如何ならむと遠慮して、相弟子の子貢に向ひて、「孔子は、衛の君の爲めに助力して、其の父親を拒ぎたまはむか、若し左樣ならば、吾れも、自ら決すべし、貴意は何如」と尋ねしに、子貢答へて、「御尋ねの趣き、委細承知せり、實は吾れも此の事を承ちむと思ひたる所なり、嘗て御待ち候へ」といひて、やがて、孔子の居間に入りて、「伯夷、叔齊は、如何なる人に候ふか」と尋ねたり、此の兄弟は、現在父を拒げる衛の君に反對して、國を讓りて、遠く去りたる人なれば、此の兄弟の批判を聽かば、輒の賢愚は知らるべく、輒の人物次第にて、孔子の見込みも分かるべしとて、かやうの問ひを發せしに、孔子のいはれけるは、「汝の尋ぬる伯夷、叔齊は、吹めていふまでもなく、昔の賢人なり」となり、子貢重ねて、「さりながら、浪人の身となりしが爲めに、食ふ物もなくて、首陽山に餓死せしことなれば、自ら怨み悔いつらむと察せられ候ふが、是れは如何に候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「彼の兄弟は、國を讓るを仁道なりと心得て、之れを其の身に行はむことを願ひ求めて、思ふ通りに行ひ得たることなれば、其の上に又何事をか怨み悔ゆべき、いと滿足に果てつらむ」となり、子貢は、是れにて、孔子の輒に左袒せられざることを悟りて、其の席を退き出でて、冉有に向ひて、いひけるは、「孔夫子は、衛の君の爲めに助力せられぬなり」となり、

【要義】此の章は、孔子の不仁に與せざることを示されたるなり、

子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴、於我如浮雲、

【語釋】飯……食ふなり、○疏食……玄米の飯なり、○肱……臂なり、

【要義】孔子のいはれけるは、「玄米の飯を食ひ、冷水を飲みて、僅に其の日の飢渴を凌ぎ、肱を曲げて、枕に代へて、夜毎の夢を結ぶ程に、極めて貧しき生活をすれば、何の樂むべき事もなきやうなれど、仰ぎて天に愧ぢず、俯して人に恥ぢず、先王の道を學びて、其の德を養ふの關係もなく、更に心を動かすに足らぬなり」となり、

【要義】此の章は、聖人の心には無限の樂趣あることを示されたるなり、

子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣、

【語釋】加我數年……加は、假なり、天より我れに四五年の壽命を貸し與へらるゝなり、○五十……五十歲なり、此の時、孔子四十五六歲なりしが故に、斯くいへるなり、一說には、五十は、卒の字の誤まりて分かれたるにて、「易を學ぶことを遂げ卒ふるなり」といへり、今は、前の解に從ふ、

【要義】孔子のいはれけるは、「我れ此の年まで易を學びたれど、其の理極めて妙にして、まだなかなかに盡くし難し、今より更に四五年の壽命を天より貸し與へられて、五十歲になるまで、易を學ばゞ、我が身を處するに、大なる過失なかるべし」となり、易は、天の陰陽消長の理、人の進退存亡の理を具へたるものなれば、其の面白きことを感歎せられたるなり、

【要義】此の章は、易の理の廣大なることを示されたるなり、

子所雅言、詩書執禮、皆雅言也、

雅言……雅は、正しきなりとも、常なりともいへり、正しきなりとすれば、正しき語音を用ゐること、なり、常なりとすれば、常に語ることなる、今は、前の解に從ふ、○詩書執禮……詩は、詩經なり、書は、書經なり、執禮は、先王の禮儀作法を執り行ふなり、執は、掌るといはむが如し、

人は、其の國々の方言俗語を用ゐざれば、日用を辨じ難きものなれば、孔子の聖といへども、通例の談話には、其の生國なる魯の語音を使はれたれど、詩經を誦し、書經を讀み、禮儀作法を執り行はるゝときは、皆正しき語音を用ゐられたり、こは、先王の訓典を重んじて、其の義を誤まちざらしめむとてなり、

此の章は、孔子の古典を重んぜられたることを示されたるなり、

葉公問孔子於子路、子路不對、子曰、女奚不曰其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾、

葉公……姓は沈、名は諸梁といふ、楚の大夫にして、知行を葉縣に受く、其の分限を乘り越えて、自ら公と稱せり、○云爾……是の如くいふなり、

楚の大夫の葉公は、當時、此の國第一等の人物なれど、己れの名望地位を恃みて、孔子を輕んじ侮る意ありて、殊更に、「孔子は、如何なる人物ぞ」と弟子の子路に尋ねしかば、子路は、益なき事なりと思ひて、何とも返辭をせざりけり、然るに、孔子は、之れを聞きて、子路に向ひていはれけるは、「汝は、何とて我が師の人柄は、物事の道理を研究して、心に會得せぬ中は、殘念なりと憤りを發して、空腹になりても、物を食ふことを忘れて、之れを考案し、心に會得せしときは、深く悅び樂みて、外に心配事ありても、之れを忘れて、又其の次ぎを研究し、憤りては樂み、樂みては憤りて、年の寄るにも心付かぬなり、我が師の學を好めることは、かやうなりといはざりしぞ」となり、

此の章は、孔子の學びて厭はざることを示されたるなり、

子曰、我非生而知之者、好古敏以求之者也、

敏……怠らず敏捷に工夫するなり、

孔子のいはれけるは、「我れとても、親の腹より生まれ出でたる儘にして、物事の道理を心得たる者にてはなく、昔の人の道を好みて、怠らず敏捷に工夫して、物事の道理を尋ね求めて、自得發明したる者なり」となり、

此の章は、何人も、學問せざれば、物事の道理を知ること能はざることを示されたるなり、

子不語怪力亂神、

怪……奇怪なり、○力……腕力なり、○亂……亂逆なり、○神……鬼神なり、

天變地異の如き奇怪非常の事を語れば、人の心を惑はするものなり、勇氣を恃み、腕力に誇る事を語れば、人の心に爭ひを生ずるものなり、主殺し親殺しの如き亂逆なる事を語れば、人をして倫理を破壞せしむるものなり、曖昧にして知るべからざる天神人鬼の事を語れば、人をして空想に馳せしむるものなり、故に孔子は、是等の事を人に問はるゝことありても、決して語り聞かせられざりき、

此の章は、孔子は、有害無益の事を語られざりしことを示されたるなり、

子曰、三人行、必有我師焉、擇其善者而從之、其不善者而改之、

三人……當人と他の二人との三人なり、

孔子のいはれけるは、「何人にても、當人と他の二人との三人にて、同じく事を行へば、其の間に、屹度我が師匠とし手本とすべき者あるなり、其の二人共、善き事をする者ならば、勿論のことなれど、若し一人は善からぬ事をする者ならば、其の善き者を撰び取りて、之れに從ひ、其の善からぬ者に對しては、己れにもさる行ひありやと省みて、若しありたらば、之れを改め直すべし、此の如くすれば、善きも、惡しきも、皆我れの利益となるなり」となり、

此の章は、人を手本とすべきことを示されたるなり、

子曰、天生德於予、桓魋其如予何、

桓魋……宋の司馬といふ役を勤むる、姓は向、名は魋といふ者なり、其の先祖は、宋の桓公より出でしが故に、桓氏とも稱す、○天生德於予……天より德を予れに授けられたるなり、德を直ちに聖性と解せしは、穩ならず、善德、美德などの意とせば、宜しからむ、一說には、德は、德ある人なり、天孔子に命じて、英才を教育せしめらるゝ、故に、德ある人、孔子に由りて生ずといふことなりといへり、是れは、餘りに穿ち過ぎたる解といふべし、

孔子宋に在りて、大樹の下にて、禮儀作法を教へられし時、宋の司馬の桓魋といふ者、孔子を殺さむと欲して、其の樹を倒して、壓し潰さむとせしかば、孔子其の場を立ち退かれけり、弟子逃捕く掛念して、急ぎたまへと勸めしに、孔子のいはれけるは、「天より予れに善美の德を授けられたれば、天は必ず我が身を保護せらるゝならむ、さらば、桓魋害心ありとも、天意に逆ひて、予れを如何とすること能はざらむ」となり、

此の章は、孔子の自信の堅固なることを示されたるなり、

子曰、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾、吾無行而不與二三子者、是丘也、

二三子……弟子達を指す、汝等といはむが如し、○隱……物事を包み匿すなり、

孔子の弟子達、孔子の智德の廣大なるを見て、之れを學びて、及ばざるは、物事を包み匿して、敎へられぬに由るならむと疑ふ者もありければ、孔子のいはれけるは、「汝等は、我れは、物事を包み匿して、敎へぬと思ふにや、吾れは、汝に物事を包み匿したることなし、吾れは、今まで、何事を行ふにも、汝等と共にせずして、獨り露に行ひたることなし、己れは、斯くの通りなれば、能く氣を付けて見よ」となり、

此の章は、孔子の常に行はるゝ事は、皆其の敎へなること、示されたるなり、

子以四教、文行忠信、

【解釋】孔子の人を教へらるゝ仕方には、四つの要件あり、其の一つは文、其の二つは行、其の三つは忠、其の四つは信なり、文は、文學にして、知識を開くに必要なるものなり、行は、德行にして、其の修め得たる知識を實行することなり、忠は、己れの誠を盡くすこと、信は、信實にして、虚言を吐かぬことにして、文學と德行との二つを結ぶべきものなり、孔子は、必ず此の四箇條を一人毎に授けられけり、

【要義】此の章は、孔子の人を教ふる法を示されたるなり、

子曰、聖人吾不得而見之矣、得見君子者斯可矣、

【解釋】孔子のいはれけるは、「今日の世の中にては、堯・舜・禹・湯・文・武・周公の如き聖人は、吾れ其の人を何程見たく思ひても、見ることを得られねば、賞めては、衆人よりも才德の勝れたる君子を見ることを得ば、それだけにても、先づ宜し、君子をだにも容易くは見ることを得ぬ時節なれば、賞めては、衆人よりも才德の勝れたる君子を見ることを得ば、それだけにても、先づ宜し、君子をだにも容易くは見ることを得ぬ時節なれば」となり、

【要義】此の章は、世に明君なきことを歎かれたるなり、

子曰、善人吾不得而見之矣、得見有恆者斯可矣、亡而爲有、虛而爲盈、約而爲泰、難乎有恆矣、

【解釋】孔子のいはれけるは、「心に恥ぢなき善人は、吾れ其の人を何程見たく思ひても、見ることを得られねば、賞めては、其の心を二つにせずして、いつも變はらぬ人を見ることを得ば、それだけにても、先づ宜し、今日の世の中は、學問にても、事業にても、無きものを有るやうにいひふらし、空虛なるものを充滿せるやうにいひふらし、貧乏にして、贅澤の眞似をして、己れを欺き、人を欺く風習なれば、其の心を二つにせずして、いつも變はらぬやうにすることは、むつかしきことなり」となり、

【要義】此の章は、世に正直の者なきことを歎かれたるなり、但し、善人以下は、前章の續きにて、子曰の二字は、餘計なりともいひ、彼れと此れとは、別時の言葉なれば、斷じて二章に分かつべしともいへり、今は、後の說に從ふ、

○虛而爲盈……空虛なるものを充滿せるやうにいひふらすなり、○約而爲泰……約は、簡約なり、泰は、奢侈なり、貧乏にして、贅澤の眞似をするなり、

【解釋】有恆者……其の心を二つにせずして、いつも變はらぬ人なり、○亡而爲有……亡は、無なり、無きものを有るやうに、いひふらすなり、

子釣而不綱、弋不射宿、

【解釋】綱……大綱を網に屬けて、流れを絕ちて、魚を捕ることなり、○弋……絲を矢に結びて、空飛ぶ鳥を射ることなり、是れは、射をるみと稱して、絲を羽根に結ませむが爲めなり、○宿……宿鳥にて、寢鳥のことなり、一說には、宿は、止まるなり、木に止まりたる鳥なり、空飛ぶ鳥に對するといへり、

【解釋】孔子若年にして、貧賤なりし時、父母の養ひと、祖先の祭りとの爲めに、魚鳥を捕らるゝことありしかど、物を愛する心深ければ、竿にて魚を釣ることはせられたれども、大網を網に屬けて、流れを絕ちて、魚を捕ることは、せられず、絲を矢に結びて、空飛ぶ鳥を射ることは、せられたれども、時に棲める寢鳥を射ることは、せられざりけり、是れは、物を一度に取り盡くし、又は其の不意に出づることを、不憫に思はれたればなり、

【要義】此の章は、孔子の仁の物に及ぼしたることを示されたるなり、

子曰、蓋有不知而作之者、我無是也、多聞、擇其善者而從之、多見而識之、知之次也、

【解釋】蓋……推し量る言葉にして、多分、大方などといはむが如し、○不知而作之……先王の道を知らずして、妄に禮樂制度を作爲するなり、○識……書き留むるなり、○知之次……道を知りたる者の次ぎにて、上の知の字と同義なり、生知の知なりと解きたるは、穩ならず、

【解釋】孔子のいはれけるは、「世間には、大方先王の道を知らずして、妄に禮樂制度を作爲する者もあらむ、我れは、決してさることなし、我れは、人々の說話を澤山に聞きて、其の善き者を擇び取りて、之れに從ひ、樣々の書物を澤山に見て、善惡共に之れを書き留めて、他日の參考に供ふるまでなり、かやうにするは、まだ先王の道を知りたる者には及ばざれども、其の次ぎをうるの處には居ることを得て、知らずに作る者よりは勝さるならむと思ふなり」となり、

【要義】此の章は、孔子自ら謙遜して、知らずして作る者を戒められたるなり、

互鄕難與言、童子見、門人惑、子曰、與其進也、不與其退也、唯何甚、人潔己以進、與其潔也、不保其往也、

【解釋】互鄕難與言……互は、鄕の名なり、其の鄕の人、不善に習ひたれば、一所に善き事を語り合ひ難きなり、一說には、此の五字に下の童子見の三字を連ねて、一句として、此の鄕に一所に善き事を語り合ひ難き一人の童子ありて、孔子の許へ面會に來りたるなりといへり、今は、本文の如く、此の五字だけを一句として、前の解に從ふ、○門人惑……孔子の弟子の孔子の童子に逢ひたるを怪みたるなり、○與其進也……其の進み來りて面會を求むるに同意するなり、下の三つの與の字も、之れと同じく、同意するなり、一說には、與は、許すなり、其の進み來りて面會を求むることを許すなり、下の三つの與の字も、之れと同じく、許すなりといへり、○唯何甚……惡を惡むこと、一に何ぞ甚だしきといふことなり、○潔己……其の心身を清潔にするなり、○不保其往也……保は、受け合ふなり、往は、退き去るなり、其の退き去りたる後の行ひを受け合はぬなり、一說には、往は、既往の往にて、過去に屬す、前日の行ひをいふなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【解釋】互鄕といへる土地の人々は、不善に習ひたれば、一所に善き事を語り合ひ難かりけり、然るに、或る時、其の鄕の一人の童子來りて、孔子に面會せしかば、弟子達は、何故に、かやうの者を相手にして、一所に善き事を語り合ひ難きかと怪みけり、然るに、孔子のいはれけるは、「我れは、彼の童子の進み來りて、面會を求めて、教へを乞ふに同意せるなり、其の退き去りて、不善をするには、同意せぬなり、汝等は、惡を惡むこと

と、一に何ぞ甚しき、惡を惡むも、程のあるものなり、若し人ありて、其の心身を清潔にして、進み來らば、其の心身を清潔にせる心掛けの殊勝なるに同意すべし、其の退き去りたる後の行ひの善惡は、受け合はるべきことにあらず、往く者は追はず、來る者は拒まざるが、人を教ふる道なり」となり、一說には、此の章は、鄕黨篇文あらむといへり、然れども、此の通りにて、よく分かるべし、

解義 此の章は、孔子の人を待つことの寬大なることを示されたるなり、

子曰、仁遠乎哉、吾欲仁、斯仁至矣、

解義 孔子のいはれけるは、世の中の人は、仁を行ふことを、手遠くして、容易かちぬことに思ひて、之れを行ふことを憚れども、仁道は、左樣に手遠きものにあらず、何人にても、其の人自身に仁を行はむと欲すれば、卽座に仁の德は來り至りて、我が思ふ儘になるものなり」となり、

字釋 此の章は、仁を行ふは、我れに由ることを示されたるなり、

陳司敗問、昭公知禮乎、孔子曰、知禮、

字釋 司敗……陳と楚との二箇國にては、司寇の役を司敗といへり、其の樣式は、大夫なり、○昭公……魯の君なり、名は稠といふ、

解義 陳の司敗の役を勤むる某といふ者、孔子に向ひて、「貴國の君の昭公は、禮儀を知られたる人なりや」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「如何にも、禮儀を知られたる人なり」となり、是れは、其の頃、昭公は禮儀を知れる人なりといふ評判高かりしが、司敗は、心に疑ひて、實否を聞かむとしたるなり、然るに、孔子は、思ふ所あるをもて、然りとは斷言せずして、先方の言葉通りに挾援せられたり、

孔子退、揖巫馬期而進之曰、吾聞君子不黨、君子亦黨乎、君取於吳、爲同姓、謂之吳孟子、君而知禮、孰不知禮、

字釋 揖……手を拱き、頭を垂れて、會釋することなり、○巫馬期……孔子の弟子なり、姓は巫馬、名は施、字は子期といふ、魯の人なり、○黨……己れの仲間と助け合ひて、善からぬ事を掩ひ匿すなり、○取……妻を娶るなり、○同姓……魯も、吳も、同じく姬姓なり、○吳孟子……孟は、長なり、吳の長子といふことなり、禮に、同姓は婚せずとあり、然るに、昭公は、吳に娶りたるが故に、本來は、其の國の名と、其の姓とを合はせて、吳姬と稱すべきを、世間の聞えを憚りて、其の奧方を吳孟子と呼べり、

解義 孔子の退き去られたる後に、司敗は、跡に殘りたる孔子の弟子の巫馬期に對して、揖禮を行ひ、己れの前に近く進めて、さて、いひけるは、「吾れは、兼ねて、德ある君子は、己れの仲間と助け合ひて、善からぬ事を掩ひ匿さぬものなりと聞き及びしが、今の孔子の對へによりて察するに、德ある君子も、德なき小人のやうに、己れの仲間と助け合ひて、善からぬ事を掩ひ匿すにや、禮に、同姓は婚せずとあるに、魯の君は、其の奧方を吳の國より娶られたり、魯と吳とは、同じく姬姓なれば、本來は、其の國の名と其の姓とを合はせて、吳姬と稱すべきを、世間の聞えを憚りて、其の奧方を吳孟子と呼ばれたり、此のやうに禮儀を知られぬ君にても、禮儀を知られたりとして、不都合なくば、世の中に、誰れか禮儀を知らぬ者あらむ、孔子のかゝる不都合を知りながら、禮儀を知られたる人なりと返答せられたるを見ても、己れの仲間と助け合ひて、善からぬ事を掩ひ匿すは、君子といへども、免るべからざることを知るに足れり」となり、

巫馬期以告、子曰、丘也幸、苟有過、人必知之、

解義 巫馬期、司敗の非難せしことを孔子に告げ知らせしに、孔子のいはれけるは、「己れは誠に幸福なる者なり、假り初めにも身に過失あれば、他人は吃度其の過失を知りて、注意を與へらるゝなり」となり、孔子は、固より、昭公の非禮を知られたりといへども、臣として、君の非禮を明言するは、心に忍び難きことなれば、此の如く、答を己れの失言に歸して、其の善惡を辯明せられざりき、

解義 此の章は、孔子の國恥を諱まれしことを示されたるなり、

子與人歌而善、必使反之、而後和之、

字釋 歌……詩を歌ふなり、○善……善く音律に叶ふなり、○反……二度歌はするなり、○和……跡を附けて歌ふなり、

解義 孔子は、人と詩を歌ひて、先方の歌ひ方、善く音律に叶ふときは、吃度其の歌を二度歌はせて、能く聽き取りて、而して後に、其の跡を附けて、己れも、之れを歌ひ習はれけり、與人歌は、共に歌ふなり、反之は、彼れ獨り歌ふなり、和之は、我れ自ら歌ふなり、

解義 此の章は、孔子の人の善を取ることを樂まれしことを示されたるなり、

子曰、文莫吾猶人也、躬行君子、則吾未之有得、

字釋 文莫は、忽模の假借字なり、忽は、强なり、模は、勉なり、勉强して仁義を行ふことは、吾れも、やはり人々と同樣なりといふことなり、一說には、文は、文學なり、莫は、疑ふ言葉なり、文學は、吾れも、やはり人々と同樣なることなからむや、同樣ならむといふことなりといへり、○躬行君子……自ら君子となりて、仁義に由りて行ふなり、

解義 孔子のいはれけるは、「勉强して仁義を行ふことは、不肖ながら、吾れも、やはり人々と同樣なる積りなれど、自ら德ある君子となりて、仁義に由りて行ふことは、吾れまだ之れを手に入るゝことあらぬなり」となり、

解義 此の章は、孔子自ら謙遜して、實行の困難なることを示されたるなり、

子曰、若聖與仁、則吾豈敢抑爲之不厭、誨人不倦、則可謂云爾已矣、公西華曰、正唯弟子不能學也、

字釋 豈敢……いかで押し切りて當たるべきといふことなり、○抑……但しなり、さりながらなり、○爲之……聖人と仁者との仕方を學ぶなり、○云爾……上の樂公の章のと同じく、是の如くいふなり、○公西華……公西赤なり、○正唯……正は、如何にもなり、唯は、然りなり、如何にも仰せの通りなり、

解義 孔子のいはれけるは、「世間の人は、吾れを聖人、仁者などといふ由なれど、聖人と仁者との如き廣大なる名目には、吾れは、いかで押し切りて當たるべき、さりながら、聖人と仁者との仕方を學びて、厭ひ嫌はぬことゝ、其の仕方を人に敎へて、倦み怠らぬことゝの二箇條を能くすることは、かやうなりといふべきまでのことなり」となり、弟子の公西華之れを聞きて、感心して、いひけるは、「夫子の平素の御行狀は、如

何にも、仰せの通りにて候ふ、其の厭ひたまはざる二箇條こそ、私共の如き御弟子の學びて能〳〵離きことに候へ、是れ夫子の聖人たり仁者たる細事ならむと存ぜられ候ふ」となり、

講義 此の章は、孔子の聖と仁との名を辭せらるれども、其の實あることを示されたるなり、

子疾病、子路請禱、子曰、有諸、子路曰、有之、誄曰、禱爾于上下神祇、

子曰、丘之禱久矣、

字解 疾病……疾は、病氣なり、病は、病氣の危篤なるなり、○禱……過ちを悔い、善に遷りて、神の祐けを願ふなり、○誄……古は、讄に作れり、讄は、禱るなり、功德を累ねて、福を求むるなり、一說に、誄は、死を哀みて、其の行ひを述ぶる詞なりといへるは、誤まりなり、子路孔子の爲めに病氣の平癒を禱らむとするに、死を哀む詞を引くは、甚だちがふなり、○爾……爾は、詞に作るべし、周禮に、禱二爾子上下神祇一とあり、福を求むるを禱といひ、求めを得たるを詞といふ、詞は、報賽なり、上下は、天地なり、神祇は、神々なり、天の神を神といひ、地の神を祇といふ、

講義 孔子の病氣危篤になりし時、弟子の子路心配に堪へ兼ねて、神に平癒を禱らむと請ひたるに、孔子は、重き枕を、擡げて、「汝の深切は、有り難けれど、病氣の平癒を禱りたる先例ありや」と尋ねられたれば、子路のいひけるは「如何にも先例あることに候ふ、其の證據には、周禮に見えたる誄の辭に、天地上下の神々に禱祠するといふことの候ふ」となり、是れは、天子の天地を祭ることにして、個人の福利を禱ることにはあらざるを、子路間違へて、斯く對へたるなり、されども、孔子は、其の誤まりを正されず、只と子路の懇情に對して、神に禱るに及ばぬことを知らせむとて、いはれけるは「汝は、禱るといふことをいふが、禱るとは、過ちを悔い、善に遷りて、神の祐けを願ふことなり、已れは、常に身の行ひを慎みて、神の心に叶はむやうに心掛けたれば、取りも直さず、久しく神に禱れるなり、されば、今更、改めて神に禱らむ必要もなし」となり、

講義 此の章は、孔子の命に安んじて、神に諂はざることを示されたるなり、

子曰、奢則不孫、儉則固、與其不孫也、寧固、

字解 不孫……孫は、遜と同じ、物事を控へ目にせぬなり、○固……固陋なり、

講義 孔子のいはれけるは、「物事の禮に過ぐるを奢侈といひ、禮に及ばざるを儉約といふ、奢侈なるときは、身の程を忘れて、物事を控へ目にせぬやうになり、儉約なるときは、義理人情を缺きて、固陋になるなり、此の二つは、孰れも中を得ざることなれど、其の奢侈にして物事を控へ目にせざらむよりは、寧ろ儉約にして、固陋になるかた、増しならむ」となり、

講義 此の章は、奢侈を戒められたるなり、

子曰、君子坦蕩蕩、小人長戚戚、

字解 坦……心の平かなるなり、○蕩蕩……樣子の寛やかなるさまなり、○長戚戚……年中苦勞の絶え間なきさまなり、

講義 孔子のいはれけるは「君子として、德ある人は、正しき道を行ひて、命を知り、分に安んずるが故に、其の心平かにして、樣子も寛やかに見ゆるものなり、之れに反して、小人として、德なき人は、正しき道を踏まずして、名利に汲々たるが故に、年中苦勞の絶え間なきものなり」となり、

講義 此の章は、君子と小人との心の相違することを示されたるなり、

子温而厲、威而不猛、恭而安、

字解 温……顏色の温和なるなり、○厲……言語の嚴正なるなり、○威……威光あるなり、○猛……いかつきなり、○恭……容態の引き締まりたるなり、○安……容態の舒びゝとしたるなり、

講義 孔子は、常に顏色は温和なれども、言語は嚴正なり、之れを望めば、犯すべからざる威光あれども、猛烈ならず、其の容態は、恭しく引き締まりながら、又舒びゝとして、安らけく見受けられけり、

講義 此の章は、孔子の言語容貌を目に見るやうに記されたるなり、

泰伯第八

子曰、泰伯其可謂至德也已矣、三以天下讓、民無得而稱焉、

字解 泰伯……周の大王の長子なり、次ぎを仲雍といひ、次ぎを季歷といふ、季歷の子は、昌にして、卽ち文王なり、○三以天下讓……季歷は、賢德ある上に、又聖德ある昌を生みたれば、泰伯は、其の父大王の季歷を立てゝ、昌に傳へむと欲することを知れり、且つ其の頃は、殷の政事も衰へたれば、泰伯心に思ふやう、今父の意に從ひて、季歷に讓りて、昌に及ぼさば、天下亂るゝことありとも、必ず之れを救ふことを得むと、されども、未だ相續の極まらざる內に、大王病ひに罹かりたれば、泰伯は、吳越に藥を採りに往きて、父の末期に逢はざりしは、是れ其の讓れる一つなり、さて、季歷より不幸の知らせを受けたれど、其の喪に參り合はせざりしは、是れ其の讓れる二つなり、それより、遂に髮を斷ち、身に彫り物をして、全く歸國の望みなきことを示しゝは、是れ其の讓れる三つなり、斯くして、國を讓りしは、畢竟天下の爲めなれば、天下の故をもて讓るといへるなり、

講義 孔子のいはれけるは、「泰伯は、此の上もなき至極の德を具へられたる御方と申すべし、何故ならば、泰伯は、大王の嫡子にて、其の國を受けらるべき筈なるを、天下の爲めに、季歷を立てゝ、昌に傳へむとて、三度まで天下の故をもて讓られけり、其の御蔭にて、萬民は文、武の澤を被りたれど、泰伯の德を譽められたるなり、

講義 此の章は、泰伯の德を稱讚する者あらざるは、殘念なることなり」となり、

子曰、恭而無禮則勞、愼而無禮則葸、勇而無禮則亂、直而無禮則絞、

字解 葸……畏れ縮むなり、○絞……絞死の絞の如し、急なりと訓ず、人を責むるに急にして、少しもゆとりなきことなり、

【解説】孔子のいはれけるは「人は、己れを薄し〳〵して、人に謹るは、善けれども、唯〻恭し〳〵して謙るのみにて、禮儀といふものなきときは、益まなく、其の身體を勞するなり、又物事を用心するは、善けれども、用心するのみにて、禮儀といふものなきときは、葱とて、畏れ縮みて、手も足も出ぬやうになるなり、又事に臨みて、勇敢なるは、善けれども、只〻勇敢なるのみにて、禮儀といふものなきときは、亂暴になるなり、又何事も、正直なるは、善けれども、只〻正直なるのみにて、禮儀といふものなきときは、絞とて、人を責むるに急にして、少しもゆとりなきやうになるなり、總べて禮儀は、此の邊を程よくするに缺くべからざる尺度なり」となり、

君子篤於親、則民興於仁、故舊不遺、則民不偷、

【語釋】篤……一家親類に手厚くするなり、○興於仁……仁の仕方を慕ひ倣ふなり、○故舊不忘……舊く交はる人々を疎遠にせぬなり、○不偷……輕薄にならぬなり、

【解説】君子とて、上に立つ人は、人民の手本となるべきものなれば、己れ先づ其の一家親類に手厚くして、身内の者には斯くすべきものぞといふことを見せ示すときは、人民は、仁の仕方を慕ひ倣ひて、銘々に其の親類を大切にするなり、又己れ先づ其の徳〳〵交はる人々を疎遠にせずして、朋友其の他の知人には斯くすべきものぞといふことを見せ示すときは、人民は、其の仕向け方を眞似て、銘々の昔馴染に對するに輕薄ならぬやうになるなり」となり、

【解説】此の章は、禮儀の必要なることを示されたるものにして、上の半節は、禮なき弊害を論じ、下の半節は、禮ある效果を述べられたるなり、されば、一説に、君子より以下を別章として、曾子の言葉と看做したるは、從ひ難し、

曾子有疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手、詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰、而今而後、吾知免夫、小子、

【語釋】啓……開くなり、○詩……詩經の小雅の部の小旻の篇なり、○戰戰……恐慎するさまなり、○淵……水の深き處なり、○而今而後……今日より後なり、○免……不孝の罪を免るゝなり、○小子……己れの弟子を呼びたるなり、汝等よといはむが如し、

【解説】弟子の曾子は、常に此の身は父母の賜物なれば、決して毀ひ傷るまじと心掛けたれば、病氣の重くなりたる時に、己れの弟子達を枕邊に召し寄せて、いひけるは、「吾が足を開きて、能く改めて見よ、吾が手を開きて、能く改めて見よ、少しも疵の痕はあるまじ、詩經の小旻の篇に、戰戰として恐慎し、彷徨として戒慎すること、深き淵に臨みて、墜ちむことを恐れ、薄き冰を履みて、陷ちむことを恐るゝが如しと見えたるが、此の身に怪我のなからむやうにと、日頃用心せしこと、此の如し、其の御蔭にて、幸ひに天命を全くして、世を去ることゝなりたれば、今日より後は、吾れ不孝の罪を免れて、心安しと思ふなり、汝等も、能く吾が言葉を記憶して、各〻其の身を大切にせよ」となり、

曾子有疾、孟敬子問之、曾子言曰、鳥之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善、君子所貴乎道者三、動容貌、斯遠暴慢矣、正顏色、斯近信矣、出辭氣、斯遠鄙倍矣、籩豆之事、則有司存、

【語釋】孟敬子……魯の大夫なり、仲孫氏、名は捷といふ、敬は、其の謚なり、上に見えたる孟武伯の子なり、○問……見舞ふなり、○言……敬子の發言を待たずして、曾子自ら告ぐるなり、○動容貌……一身の動作を謹めていふ、○遠暴慢……粗暴怠慢なる仕向けに遠ざかるなり、○近信……信實なる仕向けに近寄るなり、○出辭氣……言語音聲を出だすなり、○鄙倍……倍は、背くなり、野鄙にして、道理に背く言葉なり、○籩豆……食物を盛る器なり、竹にて造りたるを籩といひ、木にて造りたるを豆といふ、籩には、菓物を盛り、豆には、菹（ひたしもの）、醢（ひしほ）を盛るなり、○有司存……それ〴〵の役人あるなり、

【解説】弟子の曾子の病氣重くなりたる時、魯の大夫の孟敬子、病氣見舞ひに來りて、態と談話を控へたるに、曾子敬子の發言を待たずして、自ら告げて、いひけるは、「鳥の死なむとするときは、其の鳴き聲の哀しきものなり、人の死なむとするときは、其の言ふことの善きものなり、其の鳴き聲の哀しきは、必死の場合なればなり、此の二つは、屹度間違ひなきものなれば、今はの際の吾が一言を能く聽きたまへ、抑〻人の上に立つ君子の仕方の貴び重んずべきことは、三箇條あり、人に對して、先づ先方の目に着くものは、此方の容儀なれば、行坐進退、一切の擧動を嚴肅にすべし、さすれば、自然に先方の目に着くものは、此方の顏色なれば、顏色を正しくして、莊重にすべし、さすれば、自然に先方の信實なる仕向けに近寄りて、人に欺き詐らるゝことなし、次ぎに先方の耳に入るものは、此方の言語なれば、言語音聲を出だすに溫順なるべし、さすれば、自然に先方の野鄙にして道理に背く言葉に遠ざかりて、人に罵り辱めらるゝことなし、宗廟に供ふる籩豆の如き食器を取り扱ふことなどは、それ〴〵に主任の役人もあることなれば、深く立ち入らざるもよし、御身の如き上に立つ人は、今申したる三箇條に心を用ゐたまへ」となり、是れは、敬子の些事に屈託せることを戒めたるなり、但し、一説には、遠暴慢と、近信と、遠鄙倍とは、自ら修むることなりといへり、然れども、今は、己れに對する人の仕向けと見たる説に從ふ、

【解説】此の章は、人の上に立つ者は、大體を重んずべきことを示されたるなり、

曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校、昔者吾友嘗從事於斯矣、

【語釋】能……才能なり、○多……多く物事の道理を知るなり、○有若無……有無は、道の有無なり、○實若虛……虛實は、德の虛實なり、○犯而不校……他人より無理難題を持ち掛けられても、其の仕返しをせぬなり、校は、自他の曲直を計り較ぶるなり、○吾友……顏淵を指す、○從事……其の事を心掛けて行ふなり、

【解説】弟子の曾子のいひけるは、「己れに才能ありながら、猶は不十分に思ひて、才能なき人に物事の計らひ方を尋ね問ひ、己れは多く物事の道理を知りながら、猶は不滿足に思ひて、物事の道理を知ること少なき人に尋ね問ひ、己れに道はありながら、ありとも思はで、益〻道を手に入れむことを勵み、己れに德は充實しながら、空虛なるやうに思ひて、益〻德を蓄へむことを勉め、他人より無理難題を持ち掛けられても、

是非曲直を較べて其の仕返しをすることなきは、世にも稀れなる君子の行ひなり、昔し、吾が友人の某は、以前より、此の事を心に掛けて行ひしが、今は、古人となりたれば、復た此の如き人を見ず」となり、

要義 此の章は、曾子の暗に顏回を惜みたるなり、

曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪、君子人與、君子人也、

字釋 託六尺之孤……先君の臨終に、幼君の保護を依賴するなり、六尺は、我が四尺程にて、十二三歲の身の長なり、孤は、早く父に離れたる者なり、○寄百里之命……諸侯の領地の下知命令を委任するなり、百里は、百里四方にて、公侯の如き大國をいふ、但し、一里は、凡そ我が六町なり、○大節……國家を安んじ、社稷を定むる大事の場合なり、一說には、死生の際に守る所の節操なりとなり、○不可奪……其の志を奪はれぬなり、

講義 曾子のいひけるは、「此に人あらむに、先君の臨終に、幼君の保護を依賴せらるゝ器量あり、其の遺言を引き受けて、國家を安んじ、社稷を定むる大事の場合に踏みかゝりて、利害の爲めに、其の志を奪はれず、君の爲め、國の爲めに、飽くまで力を盡くす者ならむには、德ある君子たる人といはるべきか、斯くありてこそ、實に德ある君子たる人なれ」となり、

要義 此の章は、君子の人にあらざれば、國の大事に任じ難きことを示されたるなり、

曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎、

字釋 士……學者なり、○弘毅……弘は、器量の廣きなり、毅は、決斷の善きなり、一說には、毅は、辛抱強きなりといへり、○任……負擔なり、

講義 弟子の曾子のいひけるは、「學者は、器量廣くして、決斷善からざるべからず、其の身の負擔は重くして、其の道中は長ければなり、何故に其の身の負擔は重きかといはむに、仁を行ふことを己れの負擔とすればなり、外にも負擔の重きことはあるべけれども、此の一事も、亦重からざらむや、思ふに是れ程重きことはあるまじ、何故に其の道中は長きかといはむに、死にたる後に、始めて之れを行ふことを已むればなり、外に道中の長きことはあるべけれども、此の一事も、亦長からざらむや、思ふに是れ程長きことはあるまじ、學者は、かやうに重荷を負ひて遠路を往くものなれば、器量狹く、決斷惡しくしては、其の志を遂げ、其の業を成すこと能はざるなり」となり、

要義 此の章は、學者は、器量を廣くして、決斷を善くせねばならぬことを示されたるなり、

子曰、興於詩、立於禮、成於樂、

字釋 興……志を起こすなり、○立……身を立つるなり、○成……德を成すなり、

講義 孔子のいはれけるは、「學者の道を修むるには、一定の順序あり、先づ詩經を學びて、其の志を起こし、次ぎに禮儀を學びて、其の身を立て、次ぎに、音樂を學びて、其の德を成すなり、詩は、人情に本づきて、善きを褒め、惡しきを譏りたるものなれば、之れを學べば、其の志の振興するものなり、禮儀は、人の日常に缺くべからざるものなれば、之れを學べば、其の身の立つものなり、音樂は、人の心を和らぐるものなれば、之れを學べば、其の德の成るものなり、されば、詩經に始まり、禮儀に中し、音樂に終はるが、道を修むる順序なり」となり、

要義 此の章は、道を修むる三段を示されたるなり、

子曰、民可使由之、不可使知之、

字釋 由……從ふなり、○之……政教を指す、○知……本末を知るなり、

講義 孔子のいはれけるは、「人民は、上の政教に從ふべきものなれど、若し一々に其の本末を知るときは、愚なる者は、之れを輕んじて、命令通りに行はぬことなしとも限らざれば、人民には、務めて之れに從はしむべくして、其の本末を知らしむるには及ばず」となり、

要義 此の章は、政教を施す法を示されたるなり、

子曰、好勇疾貧、亂也、人而不仁、疾之已甚、亂也、

字釋 疾……惡み嫌ふなり、○已甚……手ひどきなり、

講義 孔子のいはれけるは、「勇氣を好むは、惡しき事にはあらねども、勇氣を好む性分にて、已れの貧賤なることを惡み嫌へば、其の身の不滿に堪へ兼ねて、亂暴を働くやうになるなり、又人として不仁なる者を惡み嫌ふは、尤なることなれど、之れを惡み嫌ふこと、餘りに手ひどきときは、其の惡み嫌はるゝ者をして、怨み怒りて、亂暴を働かしむるやうになるなり」となり、

要義 此の章は、己れの分に安んずることゝ人を容るゝことゝの肝要なることを示されたるなり、

子曰、如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀也已、

字釋 驕……人に高ぶるなり、○吝……物を惜むなり、○其餘……周公の如き才能を指す、

講義 孔子のいはれけるは、「世の人に、若し昔の周公且の如き美しき才能ありとも、其の才能を鼻に掛けて、人に高ぶり、且つは、己れの物を惜みて、義理人情を缺かむには、其の餘の周公の如き才能は、氣を留めて觀るに足らぬなり、邪竟周公の天下に及ぶ者なきは、才能ありて、驕慢ならず、客嗇ならざるに由るなり」となり、

要義 此の章は、驕と吝との二つを戒められたるなり、

子曰、三年學、不至於穀、不易得也、

字釋 三年……長き月日をいふ、三箇年と限りたるにはあらず、○不至於穀……穀は、祿なり、祿を求むるに至らぬなり、一說には、至は、志に作るべし、祿を求むることを志さぬなりといひ、又一說には、穀は、善なり、善に至らぬなりといへり、今は、最初の解に從ふ、○不易得……得難きなり、

講義 孔子のいはれけるは、「學業の成らざる中に、早く官途に就かむことを望むは、今日の人情なり、されば、三年四年の長き月日を學問に費

やして、まだ食祿を求むるに至らずして、尚は引き續きて勉強する者は、多く得難き人物なり」となり、是れ濂洛間の未だ信ずること能はず といひたるときに、孔子の悅ばれたると、同樣の食味なり、

【考證】此の章は、篤志なる學者の得難きことを歎かれたるなり、

子曰、篤信好學、守死善道、危邦不入、亂邦不居、天下有道則見、無道則隱、邦有道、貧且賤焉恥也、邦無道、富且貴焉恥也、

【字訓】守死善道……命に換へても、道を違へぬなり、○危邦……亂れむとする國なり、○亂邦……亂れたる國なり、○見……出でて働くなり、○隱……退き隱るゝなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「君子たるべき者は、先王の道を篤く信仰して、學問を好み、命に換へても、道を違へぬやうにすべし、さて、學問も成就して、仕へを求むる場合には、其の國柄を擇ばざるべからず、將に亂れむとする危き國には、入らざるがよし、既に亂れたる邦に居合はせたらば、立ち退くがよし、國に道の行はるゝときは、出でて働くべし、國に道の行はれぬときは、退き隱るべし、國に道の行はるゝときに、用ゐられずして、貧賤なるは、其の身の恥辱なり、國に道の行はれぬときに、不義の富貴を貪るも、其の身の恥辱なり」となり、

【考證】此の章は、學者の本分を示されたるなり、

子曰、不在其位、不謀其政、

【字訓】謀……議議するなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「總べて、官職ある者は、銘々に其の職掌を專一に執るべし、職掌以外の政事を謀議すべきものにあらず」となり、

【考證】此の章は、己れの職務を棄て置きて、人の職務に喙を容るまじきことを示されたるなり、

子曰、師摯之始、關雎之亂、洋洋乎盈耳哉、

【字訓】師摯……師は、樂の大師なり、摯は、其の名なり、○始……亂……始と亂とは、音樂の中の名目なり、詩經の關雎と、鵲巢と、騶虞とを四始といふ、此の事に就きては、種々の說あれども、今は、此の解に從ふ、○洋洋乎……美しく盛んなるさまなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「吾れ衞より魯に還りて、音樂の事を取り調べたる時、樂人の長の摯といふ者の四始を奏するを聞きたるが、其の關雎の亂の調子は、最も洋洋乎として、美しく盛んにして、耳に盈ち溢るゝばかりなりき、今は、其の人在らざれば、復た聞くことを得ざるなり」となり、

【考證】此の章は、師摯の妙技を追慕せられたるなり、

子曰、狂而不直、侗而不愿、悾悾而不信、吾不知之矣、

【字訓】狂……進取の氣象に富みて、常度に拘はらぬなり、○侗……知識なくして、まだ一人前にならぬなり、○愿……謹厚なるなり、○悾悾……才能なくして、虛僞ならねば、取り所あるものなり、然るに、若し狂にして正直ならず、侗にして謹厚ならず、悾悾として信實ならざらむには、吾れは、之れを教育すべき仕方を知らず、先づ世の中の廢物なり」となり、

【講義】孔子のいはれけるは、「狂とて、進取の氣象に富みて、常度に拘はらざる者も、正直にして、邪曲ならねば、取り所あるものなり、又侗とて、知識なくして、まだ一人前にならぬ者も、謹厚にして、輕薄ならねば、取り所あるものなり、又悾悾として、才能なくして、朴野なる者も、實直にして、虛僞ならねば、取り所あるものなり、然るに、若し狂にして正直ならず、侗にして謹厚ならず、悾悾として信實ならざらむには、吾れは、之れを教育すべき仕方を知らず、先づ世の中の廢物なり」となり、

【考證】此の章は、中人以下の人物を勵ましされたるなり、

子曰、學如不及、猶恐失之、

【字訓】失之……學びそこなふなり、之の字は、學の字を承く、

【講義】孔子のいはれけるは、「學問といふものは、己れの力の及ばぬ如く心配して、一心不亂に勉強し、其の上にも、まだ學びそこなふことありもやせむと心配すべし、片時も油斷するときは、學びそこなふものなればなり」となり、此の語を人を追ひ掛くることに譬ふれば、如不及は、追ひ掛くることの急なるなり、恐失之は、追ひ附かぬ間に其の人を見失はむことを氣遣ふなり、

【考證】此の章は、學問は、少しも怠るまじきことを示されたるなり、

子曰、巍巍乎、舜禹之有天下也、而不與焉、

【字訓】巍巍乎……高く大なるさまなり、○禹……夏の禹王なり、○不與……其の政を賢人能者に打ち任せて、自身に手出しをせざるなり、一說に、己れより異かり求めずして、天下を得たるなりといへるは、宜しからず、

【講義】孔子のいはれけるは、「帝舜の帝堯に受け、夏の禹王の帝舜に受けて、天下を有ち治めたまひし功業は、巍巍乎として、高く大なり、而して其の政は、賢人能者に打ち任せて、自身に手出しをしたまはざりき、其の己れを舍てゝ人に從ふ盛德は、古今に及ぶ者なし」となり、

【考證】此の章は、舜、禹の德を譽められたるなり、

子曰、大哉堯之爲君也、巍巍乎、唯天爲大、唯堯則之、蕩蕩乎、民無能名焉、巍巍乎其有成功也、煥乎其有文章、

【字訓】則之……此の天道を手本とするなり、○蕩蕩乎……廣く遠きさまなり、○民無能名……人民の其の大さを形容せられぬなり、○煥乎……光り輝くさまなり、○文章……禮樂制度なり、

【講義】孔子のいはれけるは、「さても大なることよ、帝堯の天下に君となりたまへる功業は、巍巍乎として、高く大なり、凡そ形ある者の中にては、唯と獨り天を大なりとす、萬物生じ、四時行はるゝは、是れ天道の自然なり、凡そ古今の君の中にて、唯と獨り帝堯のみ、此の天道を手本として、其の化を行ひ、其の德を布きたまへり、其の德化は、蕩蕩乎として、廣く遠きが故に、人民は其の大さを何とも形容せられぬなり、其の成就せる功業は、巍巍乎として、高く大に、其の禮樂制度の文章は、煥乎として、光り輝けり、世に類ひなき明君なるかな」となり、

【意義】此の章は、堯の德を譽められたるなり、

舜有臣五人、而天下治、武王曰、予有亂臣十人、

【字釋】臣五人……禹、稷、契、皐陶、伯益の五人なり、○武王……周の武王なり、○亂臣十人……亂は、治むるなり、官事を治むるなり、十人は、周公旦、召公奭、大公望、畢公、榮公、大顚、閎夭、散宜生、南宮适と、一人の女性となり、其の女性は、文母の稱ある文王の妃の大姒ならむとも、大公望の女にして武王の妃なる邑姜ならむともいへり、子として母を臣とする道理なければ、邑姜と看るかた、然るべきやうなれども、亂臣の臣は、後に加へたる文字にて、本は亂十人とありたるなれば、文母としても、妨げなしとぞ、

【本義】帝舜の時には、禹、稷、契、皐陶、伯益といふ五人の官事を治むる名臣ありて、帝舜を輔佐せしかば、天下治まりきとぞ、又周の武王は、予れには、內外の官事を始むる者十人あれば、安心なりと仰せられきとぞ、其の十人は、周公旦、召公奭、大公望、畢公、榮公、大顚、閎夭、散宜生、南宮适と、母君の文母とにして、文母は、內を治めたまひ、周公旦以下の九人は、外を治めけるなり、但し、以上の二つは、孰れも古語なり、

孔子曰、才難、不其然乎、唐虞之際、於斯爲盛、有婦人焉、九人而已、

【字釋】孔子曰……子曰とせずして、孔子曰としたるは、上に武王の語を出だせるが故に、敬意を表したるなり、○才難……人才は得難きなり、○唐虞之際、於斯爲盛……唐は、帝堯の天下を有てる號なり、虞は、帝舜の天下を有てる號なり、際は、二帝の交會の間なり、於斯は、此の周に於てなり、唐堯と虞舜との交會の間には、人才皆て盛んなりしが、夏となり、殷となりては、皆及ぶこと能はざりき、然るに、此の周に於て、復た盛んなりといふことなり、盛の字は、唐、虞と周との二代を統ぶ、一說には、周の人才は、唐虞よりも盛んなりといふことなりといひ、又一說には、唐、虞の人才は、周よりも盛んなりといふことなりといへり、然れども、此の章の主意は、人才の得難きことに在りて、二代の優劣を比較せるにはあらぬなり、

【本義】さて、改めて、孔子のいはれけるは、「帝舜の時と武王の時との人才の事は、前に引きたる古語の通りなるが、それに就けても、又一つの古語に、人才は得難しといふことあり、是れは、尤ならざらむや、尤なりと思はるゝなり、何となれば、唐堯と虞舜との交會の間には、人才皆て盛んなりしが、夏となり、殷となりては、皆及ぶこと能はざりき、然るに、此の周に於て、復た盛んなり、然れども、帝舜の時には、只々五人のみなりけり、武王の時には、十人ありといへども、一人は婦人なれば、其の餘は九人のみなりけり、是れにて、人才は得難しといふ古語の宜なることを知らるべし、

三分天下、有其二、以服事殷、周之德、其可謂至德也已矣、

【字釋】三分天下、有其二……荊、梁、雍、豫、徐、楊の六州は、文王に歸服したれば、紂に屬するものは、青、兗、冀の三州のみなり、

【本義】武王の事に關聯して、文王の事を申さむに、殷の紂王淫亂にして、文王聖德ありければ、天下の人心、追ひ〳〵に紂王に離れ畔きて、文王に歸服せり、されば、當時の文王の勢は、天下の土地を三つに分けて、其の二つ程を持たれたれど、君臣の義を堅く守りて、飽くまで殷に服從して、之れに臣とし事へたまひき、之れを思へば、周の德は、實に至極の德なりと申すべし」となり、

【意義】此の章は、人才の得難きことを歎かれて、文王の聖德に論及せられたるなり、

子曰、禹、吾無間然矣、菲飲食、而致孝乎鬼神、惡衣服、而致美乎黻冕、卑宮室、而盡力乎溝洫、禹、吾無間然矣、

【字釋】無間然……非難をすべき透き間なきなり、○菲……手薄くするなり、○致孝乎鬼神……宗廟の祭りに、清潔なる供物を澤山に薦めて、鬼神の靈に孝行をするなり、○致美乎黻冕……黻は、なめし皮にて拵へたる膝蔽ひなり、冕は、上に板の附きたる冠なり、祭禮の衣冠を立派にするなり、○溝洫……田地の間の水道にして、經界を正し、日照の時には水を引き、長雨の時には水を拔く爲めに設く、溝は、小さく、洫は、大なり、

【本義】孔子のいはれけるは、「夏の禹王に對しては、吾れ一點の非難をすべき透き間なし、何となれば、禹王は、常の飲食物を手薄くしたまへども、宗廟の祭りには、清潔なる供物を澤山に薦めて、鬼神の靈に孝行をしたまへり、又平日の衣服を粗末にしたまへども、黻冕の如き祭禮の衣冠を立派にして、神明に奉ずる儀式を嚴かにしたまへり、又其の宮殿居室を卑陋にしたまへども、力を田地の水道に盡くし、水損旱損の豫防を十分にして、百姓の便利を謀りたまへり、禹王は、此の如く、衣食住には、儉約を旨として、神を敬ひ、民を安んずる事には、深く心を用ゐたまへり、されば、禹王に對しては、吾れ一點の非難をすべき透き間なし」となり、

【意義】此の章は、禹の德を譽められたるなり、

子罕第九

子罕言利、與命與仁、

【字釋】罕……稀れなり、○命……天命なり、

【本義】孔子は、利欲に關する事を語らるゝこと稀れなれば、弟子達も、多く聞かざる所なるが、若し之れを語らるゝときは、必ず天命に關することゝ、一所にせらるゝか、又は仁に關することゝ、一所にせられけり、例へば、富みにして求むべくば、執鞭の士といふとも、吾れも亦之れをせむ、如し求むべからずば、吾が好む所に從はむといはれたるが如きは、天命と一所にせられたるなり、又己れ立たむと欲すれば、人を立て、己れ達せむと欲すれば、人を達すといはれたるが如きは、仁と一所にせられたるなり、されば、此の章を一說に利と命と仁とを言ふこと罕れなりといふ意味に解釋せるは、從ひ難し、

【意義】此の章は、利欲の談を慎まれたることを示されたるなり、

達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名、子聞之、謂門弟子曰、吾何執、執御乎、執射乎、吾執御矣、

【字釋】達巷黨……達巷は、黨の名なり、五百家を黨といふ、○執……仕事とするなり、○御……馬車の御者なり、

【本文】達巷黨に住める某といふ者、孔子の事を譽して、いひけるは、「孔子は、實に大なる人よ、博く學びて、何事にも通ぜざることなくして、世間普通の學者の如く、一藝一能をもて名を成されぬは、其の大なる所なり」となり、孔子之れを聞きて、弟子達に向ひて、いはれけるは、「彼の某は、吾が事を何事にも通ぜしやうに譽められたれど、吾れは、何を仕事とせば宜しからむ、人の家僕となりて、車に乘りて、馬を御することを仕事とせむか、或は弓を射ることを仕事とせむか、射術は未だ熟せざれば、吾れは、最も下等なる御者の役目を仕事とせむ、吾れは、御者と呼ばるゝが、身に叶ひたる名なり」となり、是れは、謙遜せられたる言葉なり、

【意義】此の章は、孔子の堯を譽めて、天の大なるに比せられたるが如く、孔子の門人、達巷黨の人の言葉を引き來りて、其の學問の大なることを讃したるなり、

子曰麻冕禮也、今也純儉、吾從衆、拜下禮也、今拜乎上泰也、雖違衆、吾從下、

【本文】麻冕……麻を績みて、布に織りて、黑く染めて拵へたる冕なり、之れを緇布冠といふ、○純……絲なり、○拜下……堂の下より君を拜するなり、○泰……驕るなり、

【本文】孔子のいはれけるは、「麻を績みて、布に織りて、黑く染めて拵へたる冕を冠るは、古代の禮なれど、今は、手數を省きて、絲にて拵へたるものを用ゐること、なりぬ、是れは、單竟儉約より起こりたることにて、經濟上に便利なれば、吾れは、衆人の風に從ひて、絲を用ゐるべし、又臣下は、君を拜するに、堂の下より拜するが、古代の禮なれど、今は、作法を失ひて、堂の上にて拜することゝなりぬ、是れは、單竟驕慢より起こりたることにて、上に對して濟まぬことなれば、衆人の風に違ふといへども、吾れは、堂の下より拜する禮に從ふべし」となり、

【意義】此の章は、時俗に從ふべきこと、從ふべからざること、を辨別せられたるなり、

子絶四、毋意、毋必、毋固、毋我、

【本文】毋……無と通ず、○意……思慮勘辨なく、妄意に事を推斷することなり、○必……事の善惡に拘はらず、是非とも成就せむことを期することなり、○固……何事に限らず、一方に凝り固まりて、片意地になることなり、○我……己れの私見を主張して、人の善事を打ち消すことなり、

【本文】孔子は、下の四箇條を絶ち切りて、決して其の身に持たれたることなし、第一に、意とて、思慮勘辨なく、妄意に事を推斷せられたることなし、第二に、必とて、事の善惡に拘はらず、是非とも成就せむことを期せられたることなし、第三に、固とて、何事に限らず、一方に凝り固まりて、片意地になられたることなし、第四に、我とて、己れの私見を主張して、人の善事を打ち消されたることなし、

【意義】此の章は、孔子の心の公平なることを約言せるなり、

子畏於匡、曰、文王既沒、文不在茲乎、天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也、匡人其如予何、

【本文】宋の領分の匡といふ邑の人の孔子を圍みたることをいへるなり、畏るは、弟子達の恐懼せし事情によりて書きたる言葉なり、○文不在茲乎……文は、禮樂制度なり、茲は、孔子自身を指す、○喪斯文……此の禮樂制度を世になきものにするなり、○後死者……文王より後れて死すべき者といふことにて、孔子自身を指す、

【本文】宋の領分の匡といふ邑あり、魯の陽虎といふ者、嘗て此の邑に暴行を加へしが、其の時、孔子の弟子の顏刻といふ者、陽虎と共に此の邑に往きけり、其の後、孔子衛を去りて、陳へ往かむとて、此の邑を通行せられし時、顏刻孔子の馬車の[illegible]者たりしかば、所の人々、之れを見知りたるが上に、孔子の容貌、陽虎に似たれば、人違ひとは知らずして、之れを圍みたり、斯くと見て、弟子達は、之れを畏れて、心配せしに、孔子は、泰然自若として、いはれけるは、「吾が周室の御先祖の文王は、既に此の世を去りたまひつれど、其の定めたまひし禮樂制度の文物は、恐れ多くも、只今此の身に存在せざらむや、慥に此の身に存在せり、若し天意にして、遠からず此の文物を世になきものにせられむとならば、文王より後れて死すべき拙者に於て、此の文物を與かり知ることを得ざるべし、若し文天意にして、まだ此の文物を世になきものにせられざらむとならば、匡人如何に聯立つとも、天に逆ひて、此の身を害することを能はざるべし、現に拙者は、文王より間接に傳はりたる此の文物を後々に傳ふべき役目を持てる者なれば、いはれなく害を被る筈なし」となり、程なく、孔子は、無疵に此の地を立ち退かれけり、

【意義】此の章は、孔子の自信の堅固なることを示されたるなり、

大宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也、子貢曰、固天縱之將聖、又多能也、

【本文】大宰……吳・宋との大夫の官名なり、此の處は、吳の大宰の氏といふ者の事なりと見て然るべし　○縱……鑒量一杯に働かするなり、○將聖……既聖の反對にして、遠からず聖人にせられむとするなり、是れは、己れの師匠の事なれば、謙遜して、斷言せざるなり、一說には、將は、大なり、將聖は、大聖人なりといひ、又一說には、將は、殆となり、殆ど聖ならしむるものゝ如しといふことなりといへり、將ねたるなり、

【本文】吳の大宰の氏といふ者、孔子の弟子の子貢に向ひて、「孔夫子は、聖人といふべき人ならむか、さもなかりむには、何故に斯くまで藝能多きぞ」と尋ねしに、子貢のいひけるは、「我が師は、本來、天より器量一杯に働かせて、遠からず聖人にせられむとするものなれば、何事にも通ぜざることなし、されば、又其の餘事として、藝能多きを聖人と心得たるによりて、藝能は、聖人の餘事なることを示したる答辭なり、

子聞之曰、大宰知我乎、吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不多也、

【本文】子畏於匡……宋の領分の匡といふ邑の人の孔子を圍みたることをいへるなり、畏るは、弟子達の恐懼せし事情によりて書きたる言葉にて、孔子は、泰然自若たりしなり、一說には、畏るは、孔子の用心せられたることにて、恐懼の義にはあらずといへり、○文王……周の文王なり、○文不在茲乎……文は、禮樂制度なり、茲は、孔子自身を指す、○喪斯文……此の禮樂制度を世になきものにするなり、○後死者……文王より後れて死すべき者といふことにて、孔子自身を指す、

【本文】宋の領分の匡といふ邑あり、魯の陽虎といふ者、嘗て此の邑に暴行を加へしが、其の時、孔子の弟子の顏刻といふ者、陽虎と共に此の邑に往きけり、其の後、孔子衛を去りて、陳へ往かむとて、此の邑を通行せられし時、顏刻孔子の馬車の[illegible]者たりしかば、所の人々、之れを見知りたるが上に、孔子の容貌、陽虎に似たれば、人違ひとは知らずして、之れを圍みたり、斯くと見て、弟子達は、之れを畏れて、心配せしに、孔子は、泰然自若として、いはれけるは、「吾が周室の御先祖の文王は、既に此の世を去りたまひつれど、其の定めたまひし禮樂制度の文物は、恐れ多くも、只今此の身に存在せざらむや、慥に此の身に存在せり、若し天意にして、遠からず此の文物を世になきものにせられむとならば、文王より後れて死すべき拙者に於て、此の文物を與かり知ることを得ざるべし、若し文天意にして、まだ此の文物を世になきものにせられざらむとならば、匡人如何に聯立つとも、天に逆ひて、此の身を害することを能はざるべし、現に拙者は、文王より間接に傳はりたる此の文物を後々に傳ふべき役目を持てる者なれば、いはれなく害を被る筈なし」となり、程なく、孔子は、無疵に此の地を立ち退かれけり、

【意義】此の章は、孔子の自信の堅固なることを示されたるなり、

大宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也、子貢曰、固天縱之將聖、又多能也、

【本文】大宰……吳・宋との大夫の官名なり、此の處は、吳の大宰の氏といふ者の事なりと見て然るべし　○縱……鑒量一杯に働かするなり、○將聖……既聖の反對にして、遠からず聖人にせられむとするなり、是れは、己れの師匠の事なれば、謙遜して、斷言せざるなり、一說には、將は、大なり、將聖は、大聖人なりといひ、又一說には、將は、殆となり、殆ど聖ならしむるものゝ如しといふことなりといへり、將ねたるなり、

【本文】吳の大宰の氏といふ者、孔子の弟子の子貢に向ひて、「孔夫子は、聖人といふべき人ならむか、さもなかりむには、何故に斯くまで藝能多きぞ」と尋ねしに、子貢のいひけるは、「我が師は、本來、天より器量一杯に働かせて、遠からず聖人にせられむとするものなれば、何事にも通ぜざることなし、されば、又其の餘事として、藝能多きを聖人と心得たるによりて、藝能は、聖人の餘事なることを示したる答辭なり、

子聞之曰、大宰知我乎、吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不多也、

講義 孔子二人の問答を聞きて、謙遜して、いはれけるは、「大宰の我れを藝能多しといひたるは、能く我れを知りたるものといふべし、吾れは、若年の頃に、賤しき身分なりしが故に、餘儀なく、種々の事に手を出して、藝能多くなりたれども、軟れも鄙しき仕事なり、聖人を學ぶ君子は、藝能多きものならむや、決して多藝多能にはあちぬなり」となり、

牢曰、子云、吾不レ試、故藝、

字釈 牢……孔子の弟子の名なり、但し、子張の名なりといへるは、非なり、○不レ試……用ゐられぬなり、

講義 弟子の牢といふ者のいひけるは、「孔夫子の御言葉に、吾れは、人に用ゐられずして、立身出世をせざりしが故に、己むことを得ず、樣々の事を習ひて、藝能多くなりつるなりと仰せられたることあり」となり、是れは、弟子達、前の孔子の言葉を記したる時に、牢といふ者、己れも、嘗てかやうなることを承りぬといひたるによりて、併はせて之れを記したるなり、

講義 此の章は、道德を先にして、技藝を後にすべきことを示されたるなり、

子曰、吾有レ知乎哉、無レ知也、有レ鄙夫、問レ於我、空空如也、我叩レ其兩端而竭焉、

字釈 鄙夫……無智文盲の田舍者なり、○空空如……悾悾如と同じ、誠實なるさまなり、○叩……問ひ返すなり、○兩端……甲たり乙たる兩方の端緒なり、或は終始本末と解するもよし、○竭……殘らず話すなり、

講義 孔子のいはれけるは、「世間の人は、吾れを物知りなりと思へども、吾れは、物を知れることあらむや、決して物を知れることなし、されば士君子に物を教ふる力はなけれども、無智文盲の田舍者ありて、我れに向ひて、分からぬ事を空空如として誠實に尋ぬれば、我れは、當人の決し、兼ねたる甲乙の兩方の端緒を問ひ返して、其の是非利害を殘らず話し聞かするなり」となり、

講義 此の章は、孔子の謙遜にして、且つ深切なることを示されたるなり、

子曰、鳳鳥不レ至、河不レ出圖、我已矣夫、

字釈 鳳鳥……鳳凰なり、○河……黄河なり、○圖……八卦の文なり、○已……止むなり、

講義 孔子のいはれけるは、「帝舜の時、文王の時には、鳳凰といふ靈鳥の來りしことあり、伏羲の時には、龍馬とて、馬の身にして、龍の鱗ある、八尺以上の奇獣ありて、背に八卦の文を負ひて、黄河の中より出でしことあり、こは、聖王の祥瑞なりといひ傳へたり、然るに、今は、鳳凰も來ず、黄河の中より八卦の文をも出ださねば、世に聖王の興こらぬことを知られたり、されば、吾れも、用ゐらるべき見込みなければ、此の儘にして止みなむかな、さてもぞ殘念なることよ」となり、

講義 此の章は、時に明君なくして、道の行はれざることを歎かれたるなり、

子見レ齊衰者、冕衣裳者、與瞽者、見レ之、雖レ少必作、過レ之必趨、

字釈 齊衰……喪服を着たる者なり、○冕衣裳者……冕は、冠なり、衣は、腰より上の服なり、裳は、腰より下の服なり、冕衣裳者は、衣冠正しき貴人なり、○瞽者……盲人なり、○雖少必作……少は、年若きなり、作は、座を起つなり、一説には、雖少は、雖座の誤まりなりといへり、然れども、作つとあれば、坐といはずとも、坐したることに極まりたれば、本文の儘にて、妨げなかるべし、○過之必趨……過は、其の前を通り越すなり、趨は、足早に歩むなり、人の前を通るには、足早に歩むを禮とせり、

講義 孔子は、喪服を着たる者に出逢はれたるときと、衣冠正しき貴人、又は盲人に出逢はれたるときとには、其の人、老年なれば、勿論のこと、若年にても、吃度座を起ち、容を改めて、禮を行ひ、又其の前を通り越すときには、吃度足早に歩みて、禮を行はれけり、是れは、喪に居る者は哀むべく、正服したる貴人は貴ぶべく、不具なる者は憐むべきが故に、取り分けて、敬意を表せられたるなり、

講義 此の章は、孔子の敬愛の心の自然に外に見はるゝことを示されたるなり、

顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後、

字釈 喟然……歎息するさまなり、○鑽……錐にて物を鑿つなり、○瞻……遠く離れて、望み見るなり、○忽焉……いつの間にかといふ樣のことなり、

講義 弟子の顔淵、孔子の道を學びて、其の廣大なるに感じて、我れ知らず、喟然として、歎息の聲を漏らして、いひけるは、「山嶽は、高しといへども、其の高さには限りあり、孔夫子の德は、之れを仰ぎて見上ぐれば、高きが上にも、彌々高くして、其の高きこと限りなし、金石は、堅しといへども、其の堅きには限りあり、孔夫子の德は、之れを鑿ちて、突き破らむとすれば、堅きが上にも、彌々堅くして、其の堅きこと限りなし、孔夫子の言行は、遠く離れて、之れを望み見て、我が眼前に在るかと思へば、いつの間にか、我が背後に在りて、常に意外に出づるなり、實に企て及ぶべきことにあらず、

夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮、

字釈 循循然……順序あるさまなり、○誘……引き進むるなり、○博……推し廣むるなり、○約……纏め括るなり、

講義 さりながら、孔夫子は、循循然として、順序を逐ひて、善く人を引き進めたまひて、我が見聞を推し廣むるには、詩書の文をもてせられ、我が言行を纏め括るには、禮儀をもてせられたり、

欲罷不能、既竭我才、如有所立卓爾、雖欲從之、末由也已、

字釈 罷……學問を止むるなり、○卓爾……立てるさまなり、○末由……手掛かりのなきなり、

講義 斯く懇切に教へ導かるゝが故に、學問を止めたく思ひても、止め兼ねて、最早、我が身にありたけの才力を傾け盡くしたる樣に、不思議にも、前日までは、彌々高く、彌々堅く、眼前に在り、背後に在りて、企て及ばざりしものが、今は、まさしく卓爾として、立ち見はれて、見留めのつきたるものゝ如し、さらばとて、之れを目當てに、從ひ寄らむと思へども、やはり廣大無邊にして、之れに取り附く手掛かりなきに苦めるのみなり」となり、

講義 此の章は、顔淵學問の功を積みて、孔子の道の廣大なることを深く感歎したるなり、

子疾病、子路使門人爲臣、病閒曰、久矣哉由之行詐也、無臣而爲有臣、吾誰欺、欺天乎、且予與其死於臣之手也、無寧死於二三子之手乎、且予縱不得大葬、予死於道路乎、

【字義】病閒……病苦の少し怠りたる時なり、○無寧……寧ろなり、○二三子……弟子達なり、○大葬……君臣の禮葬なり、大夫死すれば、家臣葬儀を掌る、之れを大葬といふ、

【大意】孔子の病氣危篤なりし時、弟子の子路の計らひにて、孔子の弟子を其の家來分として、孔子を主人の扱ひにせしめけり、是れは、孔子は、無役の身なれども、以前は魯國の大夫なれば、萬一の際に、此の家來分の人々に葬儀の事を掌らせて、立派に儀式を營まむと思ひてのことなり、孔子は、重き病を行ふことは、久しきものよ、吾れには、家來なきものを、汝は、家來ありとせり、吾れは、此の詐りをもて、何人を欺くべきか、天下由の詐りを行ふことは、久しきものよ、吾れには、家來なきものを、汝は、家來ありとせり、吾れは、此の詐りをもて、何人を欺くべきか、天下の人は、坐吾が家來なきことを知りたれば、人は欺き難し、然らば、天を欺くべきか、天は勿論欺き難し、しかのみならず、男子は、婦人の手に死なず、臣ある者は、臣の手に死ぬるが、禮なれば、吾れとても、臣あらば、其の手に死ぬるを嫌はねど、今は、左樣の身分ならねば、汝が假りに設けたる家來の世話になりて死なむよりは、寧ろ眞實の弟子達の世話になりて死にたく思ふなり、しかのみならず、予れは、たとひ不相應なる君臣の禮をもて葬らるゝことを得ずとも、予れは、道路に行き倒れになりて死にたく思ふなり」となり、

【字義】此の章は、孔子の身分相應の事を望まれたることを示されたるなり、

子貢曰、有美玉於斯、韞匵而藏諸、求善賈而沽諸、子曰、沽之哉、沽之哉、我待賈者也、

【字義】韞……皮にて包むなり、○匵……木箱なり、○賈……價なりとも、買ひ手なりともいへり、買ひ手とすれば、聖人を知りて用ゐる明君に比することゝなり、價とすれば、善き爵祿に比することゝなる、孰れにしても、通ずれども、今は、買ひ手の方に從ふ、○沽……賣るなり、

【大意】弟子の子貢、孔子の進退を窺はむとて、孔子の德を玉に譬へて、「今此の處に結構なる美しき玉ありとせむに、其の玉を皮に包みて、木箱に入れて、大切に仕舞ひ置き候はむか、善き買ひ手を搜し求めて、賣り渡し候はむか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「手元に仕舞ひ置くときは、實の持ち腐れとなりて、何の役にも立たざれば、それは、勿論賣り渡すべきことよ、さりながら、天下の賓は、天下の爲めに惜むべきものなれば、あせりて買ひ手を搜し求むまじきなり、我れなども、若し左樣なる玉を持ちたらむには、落ち着きて、自然に買ひ手の來るを待たむと思ふなり」となり、是れにて、孔子の正しき道を踐み行ひて、天下の爲めに力を盡くさむ志あることを知られけり、

【大意】此の章は、君子の進みて仕ふべき道を示されたるなり、

子欲居九夷、或曰、陋、如之何、子曰、君子居之、何陋之有、

【字義】九夷……東方の夷に九種ありといへり、されども、其の名は、定かならず、○陋……風俗の惡しきなり、○君子居之……德ある人其の地に居らばといふことなり、一說には、九夷の國にも、嘗て德ある人の居りしことありといふことなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【大意】孔子四方を周遊して、道の行はれざるを見て、遠く東方九夷の國へ往きて、其の地に居らむと思ひたまひけり、是れは、實際移住の心ありしにはあらず、只々世のさまを歎かれて、其の意を寓せられしなり、然るに、或る人、眞に受けて「九夷は、風俗惡しくして、先生などの居らゝ所にあらず、此の說は、如何に候ふぞ」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「德ある君子、其の地に居らば、人心自然に化するものなれば、何の風俗惡しきことかあるべき、其の義は、更に心配なし」となり、

【字義】此の章は、桴に乘りて海に浮かばむといはれし如く、道の行はれざることを歎かれたるなり、

子曰、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所、

【字義】反……立ち戻るなり、○雅頌……雅も、頌も、詩の體にして、雅は、朝廷の音樂に用ゐ、頌は、宗廟の音樂に用ゐるものなり、

【大意】孔子のいはれけるは、「周の音樂は、魯に備はりたれど、年久しくして、道ひ〳〵に亂れたれば、吾れ諸國を遍歷する間に、彼れ此れを參考して、其の得失を取り調べたり、斯くて、衛より魯へ立ち戻りたる後に、之れを改め直したれば、音樂は、昔の如く、正しくなりて、朝廷に用ゐる雅の體の詩も、宗廟に用ゐる頌の體の詩も、それ〴〵に、其のあてはまる所を得て、善く音律に叶ふやうになりぬ」となり、孔子の衛より還られたるは、哀公の十一年なり、是れより道の行はれざることを明らめて、詩書禮樂の訂正に專ら心を用ゐられしなり、

【字義】此の章は、孔子自ら音樂を正しくせられたることを述べられたるなり、

子曰、出則事公卿、入則事父兄、喪事不敢不勉、不爲酒困、何有於我哉、

【字義】不爲酒困……酒の爲めに取り亂さぬなり

【大意】孔子のいはれけるは、「外に出でては、公卿の貴官に事へ、內に入りては、父兄の尊族に事へ、人の死にたる時は、喪の事を取り行ひて、決して怠ることをせず、酒は飲めども、それが爲めに、吾が本心を取り亂すことをせず、我れは、只々能く此の四箇條を行ふのみなり、外に何等の長所もなし」となり、

【字義】此の章は、孔子自ら謙遜して、卽近の事を忽せにすべからざることを示されたるなり、

子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜、

【字義】川上……川端なり、○逝……往くなり、○舍……止むるなり、

【補説】孔子、或る時、川端に立ちて、歎息して、いはれけるは、「世の中の過ぎ往く者は、皆此の川の流れの如くなるか、晝夜少しの間斷もなく、一たび去りて、復た返ることなし、光陰に關守りなくて、吾れも、はや老いぬ、實に口惜しきことなり」となり、一說には、往く者は過ぎ、來る者は續くこと、此の川の流れの如く、晝夜間斷あらざれば、學者は、自ら省みて、片時も油斷すべからずとの意なりといへり、此の說は、穩ならぬ所あれば、前の解に從ふべし、

【言義】此の章は、道の行はれずして、時の去りぬることを歎かれたるなり、

子曰、吾未見好德如好色者也、

【補説】孔子のいはれけるは、「今日の風俗は、色を好むに厚くして、德を好むに薄ければ、まだ容色のよき人を好むやうに、德ある人を好む者を見當たらぬなり」となり、

【言義】此の章は、世に德を好む者なきことを歎かれたるなり、

子曰、譬如爲山、未成一簣、止、吾止也、譬如平地、雖覆一簣、進、吾往也、

【補説】爲山……山を作るなり、○一簣……簣は、土を盛る籠なり、一簣は、一荷の土をいふ、○平地……凸凹の地面をならすなり、一說に、平地の上に山を作るなりといへるは、宜しからず、○覆……凹き處にあくるなり、

【補説】孔子のいはれけるは、「人の道德に進むことは、譬へば、山を作るが如し、段々に土を盛り上げて、今一息といふ處まで積み付けても、殘る一荷の土に惜みて、山の形を成さゞれば、仕事を止むるものにして、人に妨げらるゝにはあらず、己れ自ら止むるなり、之れに反して、譬へば、凸凹の地面をならすが如し、僅に一荷の土を凹き處に打ちあげても、仕事に進むものにして、人に促さるゝにはあらず、己れ自ら進むなり、此の如く、止むも、進むも、我が料簡に在ることにて、少し止めても、成功せず、少し進みても、成功の見込みあり、道德を修むることも、是れと同じき譯なれば、始めより終はりまで、唯ゝ進むといふ一方に傾きて、其の成功を期すべし」となり、

【言義】此の章は、學者は、勉めて、怠るまじきことを示されたるなり、

子曰、語之而不惰者、其回也與、

【補説】孔子弟子の顏回の勉强なることを譽めて、いはれけるは、「道を語り聞かするに、能く心得て、身に行ひて、倦み怠らぬ者は、獨り回のみならむか、回は、敎へ甲斐ある者なり」となり、

【言義】此の章は、顏回の行ひを力めたることを譽めて、餘の人々を勵まされたるなり、

子謂顏淵曰、惜乎、吾見其進也、未見其止也、

【補説】孔子顏淵の早世せしを痛まれて、其の生前の事をして、いはれけるは、「回の世を早くせしは、誠に殘念なることよ、吾れは、其の學問道德の進みゝて已まざるこゝを見るのみにして、未だ其の止まりて、前途を限りたることを見ざりき、若し長命せば、必ず大に成す所あらむ」となり

【言義】此の章は、顏淵の死を痛まれたるなり、

子曰、苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫、

【補説】苗……穀物の芽生えなり、○秀……花の咲きたるなり、○實……實のなりたるなり、

【補説】孔子のいはれけるは、「穀物の芽生えは、成長して、花の咲くべき筈なるに、病ひのつきて、花の咲かぬ者もあるなり、又花の咲きたる者は、成熟して、實のなるべき筈なるに、病ひのつきて、實のならぬ者もあるなり、人も亦此の如く、生まれても、育たぬ者あり、育ちても、長命せざる者あるは、是非もなきことなり」となり、

【言義】此の章は、何となく、人生の常なきことを歎かれたるなり、一說には、顏回を痛まれて、發せられたる譬へなりといひ、又一說には、學問をしても、發達せず、發達しても、成就せぬ者あることに喩へて、學者を勵まされたるなりといへり、

子曰、後生可畏、焉知來者之不如今也、四十五十而無聞焉、斯亦不足畏也已矣、

【補説】後生……我れより後に生まれたる者なり、年若き人を指す、○來者……將來なり、來日といはむが如し、○今……今日なり、○無聞……德業の聞ゆることなきなり、專ら名譽のみにあらず、一說には、其の身自ら道を聞くことなきなりといへり、

【補説】孔子のいはれけるは、「我れより後に生まれたる年若き人々は、春秋に富み、氣力も强ければ、畏るべくして、侮るべからず、何とて此の人々の將來の德業の我が今日に及ばぬことを知らるべき、此の人々にして、勉め勵みて、已まざらむには、我れより遙に勝さりたる人物とならむ、さりながら、若し倦み怠りて、四十五十の老境に至るまで、德業の聞ゆることなかちむには、只今畏るべき者も、亦畏るゝに足らざる者となり果てむのみなり」となり、

【言義】此の章は、時に及びて、學を勉むべきことを示されたるなり、

子曰、法語之言、能無從乎、改之爲貴、巽與之言、能無說乎、繹之爲貴、說而不繹、從而不改、吾末如之何也已矣、

【補説】法語之言……道理正しく、的切に忠告する言葉なり、○從……口の先にて從ひ服するなり、○巽與之言……物和らかく、遠廻はしに忠告する言葉なり、○說……面白さうに悅びて聽くなり、○繹……其の意味を尋ね味はふなり、○末……無と同じ、

【補説】孔子のいはれけるは、「法語とて、道理正しく、的切に忠告せらるゝ言葉には、逆らひ難きものなれば、何人も、口の先にて、如何にも然り

といひて、其の理に從ひ服せざるはなし、されども、口の先にて從ひ服するは、貴ぶべきことにあらず、其の忠告を取り用ゐて、身の過ちを改め直すを貴しとするなり、又巽與とて、物和らかく、遜順はしに忠告せらるゝ言葉は、耳に障らぬものなれば、何人も、面白さうに悅びて聽かざるはなし、されども、面白さうに悅びて聽くは、賞ぶべきことにあらず、其の忠告の意味を尋ね味はひて、或る程と發明するを貴しとするなり、若し遠廻はしに忠告せられたるとき、面白さうに悅びて聽くのみにして、其の意味を尋ね味はゝず、的切に忠告せられたるとき、口の先にて從ひ服するのみにして、身の過ちを改め直さざらむには、吾れは、其の人物を教導すべき手段なし」となり、

子曰、主忠信、毋友不如己者、過則勿憚改、

子曰、主忠信、毋友不如己者、過則勿憚改、

此の章は、此の語は、學而の篇に見えたるを、再び此に擧げたるは、孔子の重ねていはれたる教訓を重んじてなるべし、

子曰、三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也、

子曰、三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也、

帥……將帥なり、○**匹夫**……士大夫以上は、妾媵あれども、庶人は、賤しければ、夫婦相匹配するのみなり、故に匹夫匹婦といふともいへり、又匹夫は、一人といはむが如し、上の賈素にして、衣服短狹なれば、二人の衣裳、唯一共に一匹を用ゐたり、故に匹夫匹婦といふともいへり、又匹夫は、一人といはむが如し、上の三軍の多人數に對せるなり、微賤の謂ひにはあらずといへる說もあれども、今は、人君の爲めにいひたる言葉と看て、下人の稱の方に從ふ、

孔子のいはれけるは、「三萬七千五百人といふ多人數の三軍にても、人心一致せざるときは、其の將帥を奪ひ取ることを得べし、之れに反して、匹夫下人は、微賤なりといへども、自ら守ること堅固ならば、人君たりとも、其の志を奪ひ去ることを得べからざらむ」となり、

此の章は、人君の爲めに、匹夫下人の侮るべからざることを示されたるなり、

子曰、衣敝縕袍、與衣狐貉者立、而不恥者、其由也與、

子曰、衣敝縕袍、與衣狐貉者立、而不恥者、其由也與、

敝縕袍……破れたる布子なり、委しくいへば、縕は、古綿なりとも、綿の代はりに用ゐる麻屑なりともいへり、袍は、綿を入れたる着物なり、○**狐貉**……狐又はむじなの皮にて製したる着物なり、

孔子弟子の子路の見識を譽めて、いはれけるは、「破れたる下等の布子を着て、狐又はむじなの皮にて製したる上等の着物を着たる者と立ち並びて、他の幸福を羨まず、我が貧乏を恥ぢざる者は、獨り由のみならむか、餘の人々には出來ぬことなり、

不忮不求、何用不臧、

不忮不求、何用不臧、

忮……害ふなり、○**求**……貪るなり、○**用**……以と同じ、○**臧**……善きなり、

他の幸福を羨みて、人を害ふ心なく、我が貧乏を恥ぢて、物を貪る心なからむには、何をもて、善からぬことあらむ、善きことなりと見えたるが、是れ由の行ひに比すべし」となり、

子路終身誦之、子曰、是道也、何足以臧、

誦……暗誦するなり、

子路は、かやうに譽められしかば、殊の外喜びて、此の詩を生涯暗誦せむと思ひしに、孔子は、更に子路を勵まして、いはれけるは、「他の幸福を羨みて、人を害ふ心なく、我が貧乏を恥ぢて、物を貪る心なきは、聽しきことにはあらねども、是れだけにては、十分に善しとするに足らぬなり、君子の學ぶべき事は、まだ此の上に幾段もあれば、其の心得にて、勉强せよ」となり、以上は、衣敝縕袍と不忮不求とを過じて一章としたる解釋なるが、一說には、孔子自ら何用不臧の句を引きて、子路を譽められながら、更に何足以臧と抑へられたるべき筈なければ、不忮不求以下は、別章たるべし、而して、此の八字の詩句を子路の常々暗誦せしを見て、其の取る所の小なるを孔子の抑へられたるものと解釋すべしといへり、此の說も亦大に理あり、

子曰、歲寒、然後知松柏之後彫也、

子曰、歲寒、然後知松柏之後彫也、

柏……かやの木なり、冬も葉の落ちぬものなり、○**彫**……凋に作るべし、枯れ凋まざる木もあれど、寒氣の殊に烈しき歲は、衆木は、皆枯れ凋みて、全く生氣を失ふに至るなり、かゝる歲に逢ひたる後に、始めて松柏の如き强き木の、衆木の跡に殘りて、纔に凋み傷むことを知らるゝなり」となり、是れ、常人も、治世には、さまで君子と違ひたることなけれども、亂世に逢ひたる後に、獨り君子の常人と異なりて、容易く物に動かされざるを知らるゝことに譬へられたるなり、

此の章は、變に臨みて、君子の節操を見るべきことを示されたるなり、

子曰、知者不惑、仁者不憂、勇者不懼、

子曰、知者不惑、仁者不憂、勇者不懼、

孔子のいはれけるは、「智者は、物事を辨別するが故に、疑ひ惑はぬなり、仁者は、心の内に疚しきことなきが故に、憂へ悶えぬなり、勇者は、義を見て跡へ引くことなきが故に、阻み懼れぬなり」となり、

此の章は、智者、仁者、勇者の氣象を示されたるなり、

子曰、可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、可與立、未可與權、

子曰、可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、可與立、未可與權、

適道……道に往き向ふなり、○**立**……朝廷に立つなり、一說には、事業を立つるなりといひ、又一說には、志を篤くして、固く執りて、變へざるなりといへり、今は、最初の解に從ふ、○**權**……物事の輕重を量りて、非常の際に、非常の處置を行ひて、能く常道に叶ふことなり、

孔子のいはれけるは、「何人にも、學問に志あれば、一所に學びて、互に切磋することは、出來れども、道を信ずるに厚薄あれば、一所に道に往き向ふことは出來ぬなり、更に一歩を進むれば、彼れも、我れも、道を信ずること厚ければ、一所に道に往き向ふことは出來れども、銘々

に目的意見を異にすれば、一所に朝廷に立ちて、國事を謀ることは出來ぬなり、更に一歩を進むれば、彼れも、我れも、目的意見を同じくすれば、一所に朝廷に立ちて、國事を謀ることは出來れども、物事の輕重を量りて、非常の際に、非常の處置を行ひて、能く常道に叶ふことは、學問の絶頂にして、其の人々の器量次第のものなれば、決して之れを一所に行ふことは出來ぬなり」となり、

【評】此の章は、學問の階級を示されたるなり、

唐棣之華、偏其反而、豈不爾思、室是遠而、子曰、未之思也、夫何遠之有、

【字】唐棣……一名を移といふ、和名は、さはちすなりといふ、未だ詳ならず、○偏其反而……偏は、靡なり、ひら〳〵とするさまなり、反は、そりかへるなり、而は、助語なり、下の而も、同じ、

【解】逸詩として、今の詩經に漏れたる詩の辭に、唐棣の花、ひら〳〵とそりかへりて、今を盛りに咲き亂れたり、此の心なき花を見るに就けても、吾れは、何とて汝が事を思はざるべき、思ひながらに尋ねぬは、汝が家の遠ければなりとあり、孔子此の詩を評して、いはれけるは、「汝が家の遠きが故といひたるは、まだ思ふことの深からぬなり、若し眞實に其の人を思はむには、何の遠きことかあらむ、如何にともして尋ね訪ふべき筈なり」となり、是れは、當時の君德の孔子を探く思ひ慕ひて用ゐる者のなきことを、此の詩の評に事寄せて、明かされたるなり、此の章、古くは、前章に連ねたれど、今は、別章とせる方に從ふ、

【評】此の章は、孔子の時に達はざるを歎かれたるなり、

鄉黨第十

孔子於鄉黨、恂恂如也、似不能言者、

【字】鄉黨……村里なり、委しくは、前に見えたり、○恂恂如……溫恭なるさまなり、

【解】孔子は、一家親類の集まり居る村里に於ては、何事も、目上の人に推し讓りて、恂恂如として、溫恭にして、十分に物をもいはれぬ如くなりき、

其在宗廟朝廷、便便言、唯謹爾、

【字】便便……明かに辯ずるさまなり、

【解】さらば、全く口無調法なるかといふに、其の宗廟に在りて、禮を行はれ、朝廷に在りて、政を議せらるゝときは、便便として、物事の筋道を明かに辯じ、少しも慮せられざりき、さりながら、其の間にも、唯こ謹愼を旨として、失禮なる言葉を出ださるゝことなかりき、

朝與下大夫言、侃侃如也、與上大夫言、誾誾如也、

【解】下大夫……大夫に上下の階級あり、上大夫は、卿なり、大國は、卿三人、下大夫五人なり、此の時、孔子は、魯の下大夫なり、○侃侃如……和ちぎ樂むさまなり、○誾誾如……中正なるさまなり、

【解】朝廷にて、同役の下大夫と物をいはるゝときは、侃侃如として、和ちぎ樂まれき、又上役の上大夫と物をいはるゝときは、誾誾如として、中正にして、阿り諛はるゝことなかりき、

君在、踧踖如也、與與如也、

【字】君在……君の朝廷に出座するなり、○踧踖如……恭敬なるさまなり、○與與如……威儀の稚に叶ひたるさまなり、

【解】君の朝廷に出座せられたるときは、踧踖如として、恭敬せらるれども、亦與與如として、威儀稚に叶ひて、安徐なる風情ありき、

【評】此の一章は、孔子の家に居らるゝ時と、朝廷に居らるゝ時との樣子を記されたるなり、

君召使、擯、色勃如也、足躩如也、

【字】擯……客を接待する役目なり、○勃如……顏色を變ふるさまなり、○躩如……速に歩むさまなり、

【解】昔は、他國の君、來訪すれば、主國の君、大門の外に出で迎ふ、其の時、雙方の間に、數人の接伴役ありて、主國の君より出だせる者を、擯者といひ、賓君の召し連れたる者を、介者といふ、擯者も、介者も、上中下の次第あり、上席の者は、其の君に接近し、次席の者は、先方の接伴役の末席に接近して、兩君の言葉を取り次ぐなり、孔子魯の君より召されて、擯者の役目を命ぜられし時、心に立ち、末席の者は、兩君の言葉を取り次ぐなり、○與與如……威儀の稚に叶ひたるさまなり、に大事を取りて、勃如として、顏色を變へ、足は躩如として、速に歩みて、敢て怠慢せられざりき、

揖、所與立、左右手、衣前後襜如也、

【字】揖所與立……一所に立ち並びたる同役に對して、手を拱き、頭を垂れて、會釋するなり、○左右手……左の人に會釋するときは、其の手を移して、左へ向け、右の人に會釋するときは、其の手を移して、右へ向くるなり、○襜如……裳の垂れ下りたらむやうに、整ひて亂れぬさまなり、

【解】さて、大門の外に於て、兩君始めて相見ゆるときに、孔子は、次席の擯者なりければ、上席の同役より主國の君の言葉を承りて、末席の同役に傳ふるにも、末席の同役より賓君の言葉を承りて、上席の同役に傳ふるにも、一々一所に立ち並びたる同役に對して、揖禮せらるゝことなれば、左の人に會釋するときは、其の手を左の方へ向け、右の人に會釋するときは、其の手を右の方へ向けらるれども、衣とて、腰より上に着用したる靖物の前後は、さながら裳の垂れ下がりたらむやうに、襜如として整ひて、少しも動き亂るゝことなかりき、

趨進翼如也、

【字】翼如……鳥の羽根を廣げたらむやうに見ゆるさまなり、

【解】さて、一應の挨拶濟みて、主國の君、賓君を延きて、門内に入れば、擯者も、君に隨ひて入るなり、此の時、孔子は、貴人に對する禮として、足早に進まれしかど、さながら鳥の羽根を廣げたらむやうに、翼如として、肩を張り、手を拱きて、少しも威儀を崩されざりき、一說には、賓

君を送りて、門を出づる時の事なりといへり、

賓退、必復命曰、賓不顧矣、

【訓】復命……君に受けたる命令の返事をするなり、

【説】さて、會見の禮も濟みて、賓君辭して退けば、主國の君、門外に送り出でて、佇立す、此の時、賓君跡を振り向けば、心殘りのあるやうに當たりて、失禮なれば、振り向かずして去るを禮とす、されども、萬一左樣の事もあらむかと氣遣ひて、主國の君は、揖者に之れ　注意せよと命ぜらるゝなり、されば、孔子も、其の心得にて、賓君の後姿の見えずなるまで、見送りて、さて、賓君は、跡を振り向きたまはざりきといふことを屹度復命して、君の心を安んぜられき、一説には、賓君を送るは、上席の揖者の役目にして、次席の揖者の役目にあらざれば、此の一條は、前と同時の事にあらず、總べて孔子の揖者になられし時の作法を併はせて記したるものなり、上席の役目と次席の役目とを同時に兼帶せられしものと解釋せるは、宜しからずといへり、

【考】此の一節は、孔子の揖者となられたる時の樣子を記されたるなり、

入公門、鞠躬如也、如不容、

【訓】公門……朱門なり、諸侯には三門あり、朱門、雉門、路門是れなり、一門の上にて、餘の同じきことは、推して知るべし、○鞠躬如……身を縮むるさまなり、○不容……身を容れられぬなり、

【説】孔子朝廷に參られむとて、公門に入らるゝときは、鞠躬如として、身を縮めて、其の門の高大なるも、身を容れられぬものゝ如くに見受けられき、

立不中門、行不履閾、

【訓】立……門の前に立ちて、門の開く時刻を待つなり、○不中門……門の真中に立たぬなり、○行……門を通り越すなり、○不履閾……閾は、敷居なり、門の敷居を踏み越えぬなり、

【説】門の前に立ちて、門の開く時刻を待たるゝときは、其の真中に立たるゝことなく、門を通り越さるゝときは、其の敷居を踏み越えらるゝことなかりき、

過位、色勃如也、足躩如也、其言似不足者、

【訓】位……君の外朝を覲るときの座所なり、音は、門の内に屏あり、屏の前に此の座所あり、此の時は、君内朝を覲て、堂上に在るが故に、此の座所は、虛位なり、

【説】門の内に設けたる君の御座所の前を通り過ぎらるゝときは、物如として、顏色を變へ、足は躩如として、速に歩みて、敢て怠慢せらるゝことなく、其の同行者と物をいはるゝにも、控へ目にして、十分にいひ足らぬ者のやうに見受けられき、

攝齊升堂、鞠躬如也、屏氣似不息者、

【訓】攝……搔き上ぐるなり、○齊……腰より下に着用する裳の裾の縫ひ目なり、○堂……政事堂なり、○屏氣……屏は、藏むるなり、氣は、鼻息なり、鼻息を殺すことなり、

【説】裳の前を踏みて躓かぬやうに、裾の縫ひ目を搔き上げて、政事堂に升らるゝときは、鞠躬如として、身を縮められ、鼻息を殺して、呼吸をせぬ者のやうに見受けられき、是れ君の御前に近づくによりて、愈〻敬慎せられたるなり、

出降一等、逞顏色、怡怡如也、

【訓】出降一等……政事堂を出でて、階段を一段下るなり、○逞……放つなり、開くなり、○怡怡如……喜ばしげなるさまなり、

【説】君の御前を退き、政事堂を出でて、階段を一段下らるゝときは、始めて安心せられたるものゝ如く、顏色を放ち開きて、怡怡如として、さも喜ばしげに見受けられき、

沒階趨翼如也、

【訓】沒階……階段を下り盡くすなり、

【説】階段を下り盡くして、足早に退出せらるゝときは、さながら、鳥の羽根を廣げたらむやうに、翼如として、肩を張り、手を拱きて、少しも威儀を崩されざりき、

復其位、踧踖如也、

【訓】復其位……前に通り過ぎたる君の座所の前に立ち戻るなり、

【説】それより、前に通り過ぎられたる君の御座所の前に立ち戻らるれば、踧踖如として、恭敬せられき、

【考】此の一節は、孔子の朝廷に出入せらるゝ時の樣子を記されたるなり、

執圭、鞠躬如也、如不勝、上如揖、下如授、勃如戰色、足蹜蹜如有循、

【訓】執圭……圭は、諸侯の始めて國に封ぜらるゝ時に、天子より賜はる玉なり、大夫を見聘ひの使者として、鄰國へ遣はすときは、之れを執り持たせて、證據とするなり、○如不勝……重くして持ちこたへぬやうにするなり、○戰色……懼れをのゝく氣色あるなり、○蹜蹜……小股に歩むなり、○如有循……踵を曳きて、地を離れず、物に寄り添ふやうにするなり、

【説】孔子君命を受けて、見聘ひの使者として、鄰國へ往かるゝときは、使者の證據として、君より貸し渡されたる圭の玉を手に執り持たるゝに、目方は輕きものなれど、大事を取りて、重くして持ちこたへぬやうにせられ、之れを高く上ぐるときは、揖禮を行ふやうにせられ、之れを卑く下ぐるときは、人に物を授くるやうにせられ、上ぐるにも、下ぐるにも、粗卒なることなく、勃如として、顏色を變へて、懼れをのゝく氣色あり、足の運びは、蹜蹜として、小股に歩み、踵を曳きて、地を離れず、物に寄り添ふやうにせられて、決して高く足を擧げらるゝこと

なかりき、

享禮有容色、

享禮……享は、獻なり、君の進物を鄰國の君に獻ずる作法なり、○容色……伸び〳〵として、和らぎたる顏色なり、

既に見揖ひの口上を述べ終はりて、君の進物を鄰國の君に獻ずる作法を行はるゝときは、伸び〳〵として、和らぎたる顏色ありき、

私覿愉愉如也、

私覿……自分一己の資格にて、鄰國の君に謁見するなり○愉愉如……愈〻和らぎたるさまなり、

それより、自分一己の資格にて、鄰國の君に謁見せらるゝときは、愉愉如として、愈〻和らぎたる顏色ありき、是れは、段々役目の濟むに隨ひて、自然に氣分のくつろがるゝに由りてなり、

此一節は、孔子の君命を奉じて、鄰國に聘禮せられたる時の樣子を記されたるなり、

君子不以紺緅飾、

君子……孔子を指す、或は衍文ならむともいへり、○紺緅……紺は、紺色にして、物忌みの服に用ゐるもの、緅は、鳶色にして、喪服の襟の緣に用ゐるものなり、○飾……襟の緣なり、

孔子は、紺色と鳶色とをもて、常の着物の襟の緣にもせられざりき、紺色は、物忌みの服に用ゐ、鳶色は、喪服の襟の緣に用ゐるものなればなり、

紅紫不以爲褻服、

紅紫……青、黃、赤、白、黑を正色といひ、其の他の色を間色といふ、紅と紫とは、間色なり、○褻服……私宅に居る時の着物なり、

紅色と紫色とは、私宅に居らるゝ時の着物にも用ゐられざりき、こは、間色とて、正しからざる色なればなり、

當暑袗絺綌、必表而出之、

袗……單物なり、○絺綌……絺は、細き葛布なり、綌は、太き葛布なり、○表而出之……上着にして、外に出だすなり、

暑熱の頃に當たりては、細き葛布、太き葛布の單物を用ゐらるゝが故に、肌の見え透かざらむやうに、屹度下着を着たる上に、之れを上着にして、外に出だされき、

緇衣羔裘、素衣麑裘、黃衣狐裘、

緇衣……黑き着物なり、○羔裘……黑き羊の皮の着物なり、○素衣……白き着物なり、○麑裘……鹿の子の皮の着物なり、

冬になりて、黑き着物を着らるゝときは、其の下に黑き羊の皮の着物を用ゐられ、白き着物を着らるゝときは、其の下に鹿の子の皮の着物を用ゐられ、黃なる着物を着らるゝときは、其の下に狐の皮の着物を用ゐられたるなり、

褻裘長、短右袂、

褻裘……寢巻きなり、○一身有半……有は、又なり、身の長一杯の上に、又半分の長さあるなり、

寢ねらるゝときは、屹度寢巻きの用意あり、其の仕立て方は、身の長一杯の上に、又半分の長さありて、足を覆はれき、但し、是れは、下文の齊必有明衣、布の下に在るべし、物忌みは、敬を主とすれば、衣を解きて寢ぬべからず、又明衣卽ち沐浴の衣を着て寢ぬべからざるが故に、別に物忌みの時の寢衣を設けられたるなりといへり、從ふべし、

やうに、右の袂を短くせられき、

必有寢衣、長一身有半、

狐貉之厚以居、

私宅に居らるゝときは、溫燠なるを主とするが故に、狐又はむじなの皮にて厚く仕立てたる着物を着られき、

去喪無所不佩、

去喪……喪に在る時を除きたる外なり、○佩……君子は、玉を德に比して、常に其の身に佩ぶるなり、此の外、種々の雜品を佩ぶることにも及ぼしたる說あれど、此の處は、玉だけにて、宜しかるべし、

昔の君子は、玉を德に比して、常に其の身に佩ぶるものなれば、喪に在りて、飾りを避くる時を除きたる外は、何時にても、之れを佩ばれぬことなかりき、

非帷裳、必殺之、

帷裳……裳の仕立て方の丸幅を用ゐて、帷の如くなるを、帷裳といふ、帷は、垂れ布なり、○殺……裁ち切るなり、

朝服又は祭服に用ゐる帷裳は、丸幅を用ゐて、垂れ布のやうに仕立てられたれど、其の餘の着物は、屹度裁ち切りて縫ひたるものを用ゐられき、

羔裘玄冠、不以弔、

玄冠……黑き冠なり、

黑き羊の皮の着物、黑き冠は、吉事の時の服にして、凶事の時は、白を用ゐるなり、されば、吉事の服裝をして、人の喪を弔ふことをせられざりき、

吉月、必朝服而朝、

吉月……毎月の朔日なり、

無役の人となられたる後も、毎月の朔日には、屹度出仕の衣服を着て出仕して、君の君の御機嫌を伺はれき、

齊必有明衣、布、

齊……鬼神を祭る前に物忌みをするなり、○明衣……物忌みをするには、沐浴とて、髪を洗ひ、身を清むるなり、然る上にて、著るものを明衣といふ、明衣は、卽ち沐浴の衣にして、其の身體を明潔にする義なり、

鬼神を祭る前には、物忌みをせらるゝことなるが、其の時は、髪を洗ひ、身を清めたる上にて、屹度明衣といふ沐浴の衣を著らるゝなり、

其の切れ地は、淸潔を主として、布を用ゐられき、

此の一節は、孔子の衣服の事を記されたるなり、

齊必變食、居必遷坐、

物忌みをせらるゝときは、屹度平生の食事を改め變へて、酒を飲まれず、葱薤の如き臭氣ある野菜を食はれず、居處も、屹度平日の坐を遷し易へて、謹慎せられき、

食不厭精、膾不厭細、

食……飯なり、○精……よく搗き上げたるなり、○膾……細く切りたる生肉にして、我が國のなますなり、

飲食は、身を養ふ第一の物なれば、飯は、必ずしもよく搗き上げたるものを望まるゝにはあらねど、能く搗き上げたるものを厭ひ嫌はれざりき、又細く切りたる生肉は、必ずしも其の細きものを求めらるゝにはあらねども、細きものを厭ひ嫌はれざりき、

食饐而餲、魚餒而肉敗、不食、色惡不食、臭惡不食、失飪、不食、不時不食、割不正不食、不得其醬不食、

饐……日數を經て、臭氣のつきたるなり、○餲……日數を經て、味の變はりたるなり、○餒……魚肉の壞れたるなり、○肉……獸肉なり、○敗……獸肉の爛れたるなり、○色惡……總べての食物の色の惡しきなり、○臭惡……總べての食物の臭氣の惡しきなり、○失飪……烹燒、

きの不出來なるなり、○不時……穀物、野菜、果實などの時候外れのものなり、一說には、食事の時刻にあらざるなりといへり、今は、前の解に從ふ、○割……肉の切り目なり、○醬……肉に味を着くるものにて、我が味噌、醬油の類なり、但し、其の製法は、同じからず、又肉の種類によりて、色々の醬を用ゐるなり、

飯の日數を經て、臭氣のつきて、味の變はりたるは、食はれず、魚肉の壞れ、獸肉の爛れたるは、食はれず、總べて、食物の色の惡しきは、食はれず、臭氣の惡しきは、食はれず、烹燒きの不出來なるは、食はれず、穀物、野菜、果實などの時候外れのものは、食はれず、肉の切り目の正しからずして、亂脈なるは、食はれず、肉類は、それ〴〵の醬を用ゐて、味を著けて、食ふべきものなれば、其の物に適當したる醬を得ざれば、食はれざりき、

肉雖多、不使勝食氣、惟酒無量、不及亂、

食事は、飯を主とするが故に、膳に上りたる肉の品數多き時にても、飯の氣に勝たするまでに、過食せられざりき、惟酒ばかりは、何程といふ分量はなけれども、程よく飲まれて、禮儀作法を取り亂すまで醉はるゝことなかりき、

沽酒市脯不食、

沽……賣るなり、買ふと訓みても通ず、○市……買ふなり、○脯……乾したる肉なり、

町にて賣れる酒、町より買へる乾し肉は、淸潔ならぬが故に、食はれずして、皆手造りのものを用ゐられき、但し、食ふといへば、飲むことをも兼ぬるが故に、酒をも通じて、不食と書けるなり、

不撤薑食、不多食、

撤……棄て去るなり、○薑……生姜なり、

生姜は、膳部の附き物にて、口中を淸涼にする功能あり、且つは、孔子の嚙まれたるものと見えて、外の膳部は、悉く下げても、生姜だけは、留め置きて、食はれき、されども、やはり程よくせられて、餘り多くは食はれざりき、一說には、不多食の三字は、總べての食物にかゝるといへど、生姜の上に限るかた、宜しかるべし、

祭於公、不宿肉、祭肉不出三日、出三日、不食之矣、

祭於公……君の祭りを手傳ふなり、○不宿肉……神に供へたる肉の餘りを君より賜はれば、一夜を越えず、人々に配分するなり、○祭肉……己れの家の祭りの肉なり、

君の祭りを手傳はれて、神に供へたる肉の御下りを君より頂戴すれば、一夜を越えず、人々に配分して、神の惠みを留め置かぬやうにせられき、又己れの家の祭りの肉は、三日以內に親類中に配分せられき、四日以上になるときは、其の肉腐れて、人も食はず、神の餘されたるものを祿末にするに當たればなり、

食不語、寢不言、

語……語……人に返辭をするなり、○言……自ら物をいひ掛くるなり、

食……食事の時は、氣を落ち着くべきものなれば、物を食ひながら、人に返辭をせられざりき、又寢ぬる時には、心を靜にすべきものなれば、脉に就きながら、自ら物をいひ掛けられざりき、

雖蔬食菜羹瓜、祭必齊如也、

蔬食……蔬食と同じ、玄米の飯なり、○菜羹……野菜ばかりにて、肉なき汁物なり、○瓜……字の如し、一說には、瓜は、必なり、瓜祭は、屹度祭ることなりといへり、今は、前の解に從ふ、○祭……昔の人は、食事の都度に、其の食物を少しづつ取り分けて、始めて飲食を作り出でたる人を祭るなり、○齊如……嚴かに敬めるさまなり、

昔の人は、食事の都度に、其の食物を少しづつ取り分けて、始めて飲食を作り出でたる人を祭る習慣なるが、孔子は、殊に此の習慣を重んぜられて、玄米の飯、野菜ばかりにて肉なき汁物、瓜などの如き、有り合ひの品にても、之れを祭らるゝときは、屹度齊如として、嚴かに敬はれて、少しも懈怠せられざりき、

此の一節は、孔子の飲食の事を記されたるなり、但し、居必遷坐と、寢不言とは、飲食の事にあらざれども、記事の便宜によりて、併はせて記入せられたるなり、

席不正、不坐、

表立ちたる場合には、敷物の員數は、諸侯は三重、大夫は二重といふやうなる極まりあり、其の敷き方の方向にも、亦それ〴〵の極まりあり、されば、若し敷物の員數の過分なるか、其の方向の規則外れになりたるときは、孰れも、正しからぬことなれば、或は之れを辭退せらるゝか、或は之れを改め直さしめざれば、其の上に坐せられざりき、但し、上節の食不語の下に寢不言を連ねたる如く、此の句も、上節の割不正不食の下に在るべしといへる說あり、さもあるべし、

鄉人飲酒、杖者出斯出矣、

鄉人……鄉黨の人なり、○杖者……老人なり、昔は、五十歲になれば、家の內にて杖をつき、六十歲になれば、鄉の內にて杖をつく定めなり、

村里の人々、打ち寄りて、酒を飲む禮を行ふときは、老人を主とするが故に、老人其の禮を畢はりて、會場を出づれば、孔子も、之れに從ひて出でられて、決して先立たるゝこともなく、跡に居殘らるゝこともなかりき、

此の一節は、孔子の鄉飲酒の時の樣子を記されたるなり、

鄉人儺、朝服而立於阼階、

儺……疫病神を追ひ拂ふ祭りなり、三月は、民間にて行ひ、八月と十二月とは、朝廷にて行ふ、是れは、三月の事なり、○朝服……出仕の時の服を着るなり、○阼階……家廟の東階なり、東階は、主人の昇降する所にして、西階は、客の昇降する所なり、

毎年三月に行ふ村里の人の疫病神を追ひ拂ふ祭りの時は、孔子は、人々の爲る祭の騷がしきが爲めに、祖先の靈を驚かざむことを氣遣はれて、出仕の時の服を着て、家廟の東階に立ちて、祭りの濟むまで、祖先の靈を守護せられき、

此の一節は、孔子の鄉人の儺の時の樣子を記されたるなり、

問人於他邦、再拜而送之、

孔子は、人を他國の知人の許へ遣はして、安否を問はしめらるゝときは、使者の出で向く際に、再拜の禮を行ひて、之れを見送りて、先方の人に親しく見ゆる如く、敬意を表せられき、其の使者を拜するは、先方の人を拜する心持ちにてせられたるなり、

此の一節は、孔子の他國の知人を訪問せしむる時の樣子を記されたるなり、

康子饋藥、拜而受之、曰、丘未達、不敢嘗、

饋……贈るなり、○未達……貴人は、藥を賜ふべきものか、賜ふべからざるものか、貴人より賜はりたる藥は、嘗むべきものか、嘗むべからざるものか、まだ其の故實を辨へぬなり、一說には、賜はりたる藥は、何の疾ひにきくものか、まだ辨へぬなりといひ、又一說には、賜はりたる藥は、我が疾ひに合ふか、合はぬか、まだ辨へぬなりといへり、今は、最初の解に從ふ、○嘗……少しばかり味ふなり、飲むにはあらず、

孔子の頃はれし時に、魯の大夫の季康子、使者を差し向けて、孔子に藥を贈りけり、藥は妄に贈るべきものにあらざるを、孔子の頃には、貴人は、人に造詣なく藥を贈り、之れを賞ひたる者は、直ちに嘗むる習慣になりたるが、是れは、孰れも、宜しからぬことなり、されば、孔子は、季康子の藥を贈られたるを、非禮なりとは思はれたれど、無下に返すも、失敬なれば、先づ之れを拜して受けて、さて、いはれけるは、「貴人は、藥を賜ふべきものか、賜ふべからざるものか、貴人より賜はりたる藥は、嘗むべきものか、己れは、まだ其の故實を辨へざれば、強ひて之れを嘗め候はぬなり、此の旨を然るべく御披露あれ」とて、己れの不學を謙遜して、先方の厚意を破らぬやうに、斷られけり、

此の一節は、孔子の貴人より藥を贈られたる時の事を記されたるなり、

廐焚、子退朝曰、傷人乎、不問馬、

廐……馬小屋なり、○焚……燒失するなり、

孔子の家の馬小屋の燒失せし時、孔子魯の朝廷より退出して、家に歸りて、取り敢へず、「人には怪我はなかりしか」と尋ねられて、馬の事をば問はれざりき、是れ馬を愛せられざるにはあらねども、人を愛する心深くして、馬を問はるゝ暇なかりしなり、但し、此の解に就きては、馬を問はぬは、不仁なりとして、不の字を上の句に屬して、否の字の義なれども、問はれたるなりと看做したる說あり、又同じく否の字の義なれども、問はれたる者の孔子に對して、否と對へたるなりと看做したる說あり、されども、是等は鑿ち過ぎたる說なれば、前の如くに解すべし、

講義 此一節は、孔子の家に火災ありたる時の事を記されたるなり、

君賜食、必正席先嘗之、

講義 孔子の家に君より調理したる食物を賜はれば、屹度君の御前に在る如く、正しく座席に居直りて、先づ少しばかり味はひて、風味を賞玩したる上にて、他の人々にも頒かち與へられき、之れを祖先の靈前に供へざるは、君の餘食ならむかを知るべからざればなり、

君賜腥、必熟而薦之、

講義 腥……生の肉なり、○熟……烹燒きをするなり、○薦……祖先の靈前に供ふるなり、

講義 又君より生の肉を賜はれば、屹度烹燒きをして、之れを祖先の靈前に供へられき、

君賜生、必畜之、

講義 生……生き物なり、○畜……飼ふなり、

講義 又君より牛羊などの生き物を賜はれば、屹度之れを飼ひ置きて、妄に屠り殺さるゝことなく、祭りの時の犧牲の用に充てられき、

侍食於君、君祭先飯、

講義 侍食……食事の相伴をするなり、○祭……上の祭必齊如也の祭と同じ、○飯……箸を執るなり、

講義 君の食事の相伴をせらるゝとき、君食物を少しづつ取り分けて、始めて飲食を作り出でたる人を祭らるゝときは、屹度君に先立ちて箸を執られき、陪食の時は、君より客分として取り扱はるゝなり、食物を取り分けて祭るは、客たる者の行ふ禮なり、君に先立ちて箸を執るは、御膳番の毒見をする事なり、されば、孔子は、客の禮を避けて、御膳番のする事をせられたるなり、

講義 此の一節は、孔子の君より物を賜はりたる時の作法を記されたるなり、

疾、君視之、東首加朝服、拖紳、

講義 視……見舞ふなり、○東首……東枕になるなり、東は、陽氣の發する所なれば、病人の東枕になるは、陽氣を受けむ爲めなり、されども、常に此の理のみならず、家の入り口は、東に在るが故に、君の出入りせらるゝ方に足を向けざる爲めなりといへり、○加二朝服一……出仕の服を掛けて、又其の上に大帶を引き渡すなり、紳は、出仕の服の上に纏むる大帶なり、

講義 孔子の煩はれし時に、君の親しく見舞はれたるときは、君の出入りに失禮のなきやうに、東枕になりて、出仕の服を常の着物の上に纏せ掛けて、又其の上に大帶を引き渡して、拜謁せられき、是れは、病氣の爲めに、出仕の服を着ること能はず、さればとて、常の着物の儘にては、不敬なれば、臥したる儘にて、かやうにせられたるなり、

講義 此の一節は、孔子の病氣を君の見舞はれたる時の作法を記されたるなり、

君命召、不俟駕而行矣、

講義 不レ俟レ駕……馬車の支度を待たぬなり、

講義 孔子は、君より仰せありて、召さるゝときは、馬車の支度を待たずして、即刻歩みて參られき、

講義 此の一節は、孔子の君に召されたる時の樣子を記されたるなり、

入大廟、每事問、

講義 廟は、太廟の事に見えたり、

講義 此の一節は、孔子の大廟に入られたる時の作法を記されたるなり、

朋友死、無所歸、曰、於我殯、

講義 無所歸　たよるべき親族なきなり、○殯……棺に入れて、家に置きて、供養するなり、昔は、三日にして殯し、三月にして葬るなり、殯といひて、葬といはざるは、昔の人は、必ず故郷に葬ることなれば、故郷に知らするまでの間の世話をせしなり、勿論故郷に引き取る者なきときは、相當の手續きをもて、葬式までも營みしなるべし、

講義 孔子は、遠方より來りたる朋友の病死して、たよるべき親族なきときは、「我が家にて、入棺の式を行へ」と、家内の者に申し付けられて、身内のやうに、深切に世話をせられき、

朋友之饋、雖車馬、非祭肉不拜、

講義 朋友より贈られたる品物は、車或は馬の如き高價なるものにても、其の人の祖先の祭りに供へたる肉の外は、直ちに之れを受け納めて、拜する禮を行はれざりき、朋友は、財を通じて、助け合ふべき義務あるが故に、是等の物を遣り取りするは、當然のことにて、之れを拜する必要なれども、祭りの肉は、己れの祖先を敬ふやうに、其の人の祖先を敬ふべきものなれば、必ず之れを拜せられしなり、

寢不尸、居不容、

講義 尸……死人の如く偃臥して、手足を伸ばすなり、○居……家に居るなり、○容……威儀を取り締ふなり、

講義 孔子は、寢ねちるゝときは、死人の如く偃臥して、手足を伸ばされざりき、是れは、死人を忌まれてのことにてはなく、情弱の姿勢を避けられたるなり、又家に居らるゝときは、祭りに臨み、客に對するやうに、威儀を取り繕はれず、自然の儘にくつろがれたる風情なりき、

講義 此の一節は、孔子の平生の樣子を記されたるなり、

見齊衰者、雖狎必變、見冕者與瞽者、雖褻必以貌、

【字解】卿……素より親しき間柄なり、○褻……度々面會するなり、一說には、私に面會するなりといへり、今は、前の解に從ふ、○以貌……禮儀正しき容貌をもて接待するなり、

【大意】子罕の篇にも見えたる如く、孔子は、喪服を著たる者に出逢はれたるときは、素より親しき間柄の人にても、屹度常の容を改め變へて、悼み哀まれ、衣冠正しき貴人と盲人とに出逢はれたるときは、度々面會せられたる人にても、屹度禮儀正しき容貌をもて接待して、此の貴ぶべく憐むべき人に、それ〴〵敬意を表せられき、

凶服者式之、式負版者、

【字解】凶服者……葬式の服を著たる者なり、○式……車の前の横木に手を掛けて、うつむくなり、○負版者……國の地圖、戶籍を持ちたる者なり、版は、板なり、昔は、紙なき故に、板に書きたるなり、

【大意】又馬車にて他行せられて、葬式の服を著たる者に出逢はれたるときは、車の前の横木に手を掛けて、うつむきて、其の人に敬禮せられ、國の地圖、戶籍を持ちたる者に出逢はれたるときも、同樣の容態をもて、敬禮せられき、是れ、甲は、最も哀むべき者、乙は、國家の貴重なる書類を持ちたる者なればなり、

有盛饌、必變色而作、

【字解】盛饌……立派なる馳走なり、○作……座を起つなり、

【大意】人の家に招かれて、立派なる馳走に逢へば、屹度顏色を改め變へて、其の座を起ちて、會釋せられき、是れは、膳部の手厚きが爲めにてはなく、主人の厚意を謝せられたるなり、

迅雷風烈必變、

【字解】迅雷……大雷なり、○風烈……烈風なり、

【大意】大雷又は烈風の時には、屹度常の容を改め變へられき、是れは、天の怒りを敬せらるゝが爲めのみならず、不慮の災變あらむことを氣遣ひて、豫め其の用心をせられたるなり、

【大意】此の一節は、孔子の容貌の、事に應じて變はることを記されたるなり、

升車必正立執綏、車中不內顧、不疾言、不親指、

【字解】綏……車に升る時に手を掛けて引く繩なり、○內顧……左右に振り返るなり、○疾言……口早に物をいふなり、○親指……自身に物を指すなり、

【大意】孔子は、車に升らるゝときは、威嚴を崩さぬやうに、且つは、顚倒せぬやうに、車の側に眞直に立ちて、車の引き繩にしかと手を掛けて升られき、車の中にては、左右に振り返られず、口早に物をいはれず、自身に物を指さゝれざりき、かゝる擧動は、己れの威嚴を失ふのみならず、人を驚かし惑はすこともあればなり、

【大意】此の章は、孔子の車に乘らるゝ時の作法を記されたるなり、

色斯擧矣、翔而後集、

【字解】色斯擧矣……人の顏色を見て、己れを捕へむとする樣子あるときは、飛び去るなり、○翔而後集……空中を飛び廻はりて、人に捕へらるゝ掛念なきことを見定めたる上にて、下り止まるなり、

【大意】雉といふ鳥は、用心深きものにて、人の顏色を見て、己れを捕へむとする樣子あるときは、飛び去りて、さて、空中を飛び廻はりながら、能く〳〵地下を瞰ひて、全く人に捕へらるゝ掛念なきことを見定めたる上にて、再び下り止まるなり、

曰、山梁雌雉、時哉時哉、

【字解】山梁……山中の谷間に掛け渡したる橋なり、

【大意】孔子、或る時、山中を過ぎて、「羽の雌の雉を見て、歎息して、いはれけるは、「彼の谷間の橋に止まりたる雌の雉は、能く其の時を得たるものよ、能く其の時を得たるものよ」となり、是れは、人の亂世に遭ひて、進退去就の宜しきを得ざるは、其の時を失へるなり、雉の安心の地に立ちて、飲啄せるは、其の時を得たるなり、人は反りて彼の雉に及ばざるなりとの意なり、

子路共之、三嗅而作、

【字解】共之……持ち合はせたる餌を雉に投げ與へたるなり、一說には、孔子の時哉時哉といひたるを、時節相應の食物なりといひたることゝ心得て、雉の料理を孔子の膳に供へたるなりといひ、又一說には、共は、向ふなり、孔子の言葉を聞きて、雉に向ひて、進みたるなりといへり、今は、最初の解に從ふ、○三嗅而作……雉の、三度程、其の餌を嗅ぎて、飛び去りたるなり、一說には、孔子の子路の供へたる雉の料理を食ふことを欲せず、さりながら、其の志を空しくするも、氣の毒なれば、三度程、雉の料理を嗅ぎて、其の座を起ちたるなりといひ、又一說には、嗅は、憂なり、雉の鳴きて、飛び去りたるなりといひ、又一說には、嗅は、臭なり、雉の羽根を廣げて、飛び去りたるなりといへり、今は、最初の解に從ふ、

【大意】弟子の子路、孔子の歎息せられたる言葉を聞きて、雉の擧動を見むと思ひて、持ち合はせたる餌を投げ與へしに、雉は、三度程、其の餌を嗅ぎて、不安心とや思ひけむ、一粒も啄まずして、飛び去りけり、是れも、君子の利祿の爲めに留まらざるに似て、感心すべきことなりとなり、

【大意】此の一節は、孔子の雉を觀て感ぜられたることを附記せられたるなり、

先進第十一

子曰、先進於禮樂野人也、後進於禮樂君子也、如用之、則吾從先

進、

字解　先進……仕ふる者の先輩なり、或は單に前輩なりともいへり、其の時代は、五帝以上を指すともいひ、殷より以前を指すともいひ、周の初めを指すともいへり、今は、周の初めに從ふ、○野人……田舍者なり、○後進……仕ふる者の後輩なり、或は單に後輩なりともいへり、其の時代は、三王以下を指すともいひ、周より以後を指すともいひ、孔子の時を指すともいへり、今は、孔子の時に從ふ、○君子……士大夫なり、野人に對して、位ある者をいふ、

講義　孔子のいはれけるは、「周の初めに仕官せし先輩の人々の、禮儀音樂に於ける仕方は、質朴にして、田舍者の風あり、之れに反して、現今仕官せる後輩の人々の、禮儀音樂に於ける仕方は、華美にして、士大夫の風あり、若し禮樂を用ゐむとならば、吾れは、質朴なる周の初めに仕官せし先輩の仕方に從はむ」となり、

講義　此の章は、時俗の虛飾に流れたることを歎かれて、周初の美風に反さむことを思はれたるなり、

子曰、從我於陳蔡者、皆不及門也、

字解　陳蔡……二國の名なり、孔子衛を去りて、陳に往きし時、此の二國の間にて、餓儀せしことあり、○不及門……孔子の門に至らぬなり、一說に、仕進の門に及ばずして、其の所を失へるなりといへるは、從ひ難し、

講義　孔子のいはれけるは、「往年、我れの供をして、共々に陳、蔡二國の間に餓儀せし人々は、或は死去し、或は諸方に離散して、今日は、一人も吾が門に至る者なし」となり、是れ、晩年に昔の弟子を思ひ出だして、歎かれたるなり、

講義　此の章は、孔子の師弟の情に厚きことを示されたるなり、

德行、顏淵閔子騫冉伯牛仲弓、言語、宰我子貢、政事、冉有季路、文學、子游子夏、

講義　孔子の弟子の中にて、踐履篤實にして、德行に長じたる者には、顏淵と閔子騫と冉伯牛と仲弓との四人あり、應對明晰にして、言語に長じたる者には、宰我と子貢との二人あり、才智敏捷にして、政事に長じたる者には、冉有と季路との二人あり、聞見博洽にして、文學に長じたる者には、子游と子夏との二人あり、此の十人は、三千人の弟子中より選り拔きたる七十二人の高弟中にて、最も勝れたる者なり、但し、此の十人は、皆陳、蔡に從ひし者なるかといふに、冉求の如きは、慥に從はざりし證據もあれば、前の事には關係なく、孔子の昔の弟子を思ひ出だして、歎かれたる言葉に次ぎて、弟子中の俊秀なる者を四科に分かちて、數へ擧げたるなり、是れ別章にして、記者の筆なるが故に、子曰の字なし、

講義　此の章は、孔門の最も勝れたる者を記されたるなり、

子曰、回也非助我者也、於吾言無所不說、

字解　助……益するなり、

講義　孔子顏回の鋭敏なるを譽めて、いはれけるは、「回は、我れを助けて益する者にあらず、何となれば、回は、吾が言葉を聞けば、卽座に理會して、悅ばぬことなければなり、學問は、互に議論すればこそ、互に知識を長ずるなれ、只々悅びて感歎せらるゝのみにては、少しも我れの利益にはならぬなり」となり、

講義　此の章は、孔子自ら謙遜して、顏回の道を悟ることの妙を譽められたるなり、

子曰、孝哉閔子騫、人不間於其父母昆弟之言、

字解　閔子騫……孔子の弟子を指すときは、屹度名を書く例なるに、閔損とせずして、閔子騫とせるは、其の至孝なることを譽めて、特別にせるなり、○人不間於其父母昆弟之言……間は、間然の間と同じく、非難することなり、言は、他人の言葉なり、世間の人の閔子騫の父母兄弟の事を非難する言葉を發したることなきなり、一說には、不間於其父母昆弟之言と讀みて、言は、父母兄弟の言葉なり、世間の人の閔子騫の父母兄弟の閔子騫を譽むる言葉を非難せぬなりといへれど、今は、前の解に從ふ、

講義　孔子のいはれけるは、「實に孝行なることよ、閔子騫は、世間の人は、閔子騫の父母兄弟の事を非難する言葉を發したることなし、是れ閔子騫の孝行なるに由りてなり」となり、閔子騫は、早く母に別かれしに、其の父、後妻を娶りて、二人の子を生めり、繼母己れの子を愛して、閔子騫を憎み、己れの子には、煖かなる著物を著せて、閔子騫には、薄き著物を著せけり、されども、父は、之れを心付かざりけり、然るに、或る冬の日に、其の父、閔子騫をして、己れの馬車の御者たらしめしに、閔子騫寒さに堪へ兼ねて、手綱を取り落としけり、其の後、父又二人の子を御者とせしに、さることなかりければ、始めて之れを心付きて、後妻を離緣せむと思ひしに、閔子騫諫めて、「母上家に居たまへば、己れ一人寒きまでなれど、母上去りたまはゞ、三人共に寒からむ」といひけれども、父其の言葉に感じて、離緣を思ひ止まりけり、其の後、繼母も、二人の弟も、此の諫言を聞き及びて、心を改めければ、一家殘らず善人となりけるとぞ、繼母の閔子騫を虐待せしも、二弟の煖かなる著物を著て、兄の寒さを顧みざりしも、父の之れを心付かざりしも、世間の非難を受くべきことなるに、閔子騫一たび父を諫めて、全家を感化せしめて、世間の非難を免れしめけり、親兄弟を善き者にするは、孝行の至りなり、

講義　此の章は、閔子騫の孝行を譽められたるなり、

南容三復白圭、孔子以其兄之子妻之、

字解　三復……毎日度々繰り返して、口に唱ふるなり、○白圭……詩經の大雅の部の抑の篇の辭に、白圭之玷、尙可磨也、斯言之玷、不可爲也とあり、周の厲王を諷りたる詩なり、其の心は、白圭とて、上の三角になりたる白き玉の缺け損じたるは、まだ磨き直さるゝものなれど、人の言葉の言ひ損じたるは、取り返されぬものなりといふことなり、

講義　弟子の南容は、毎日、度々、詩經の抑の篇の白圭の句を繰り返して、口に唱へて、言葉は妄に發すまじきものなりと、自ら氣を付けたれば、孔子其の心掛けを賞美して、己れの兄の子を嫁に遣られけり、此の本文に、孔子と改めて書きたるは、先方は、魯の大夫の孟懿子の兄なれば、敬意を含みてのことなり、

講義　此の章は、南容の篤實なることを示されたるなり、

季康子問弟子孰爲好學、孔子對曰、有顏回者、好學、不幸短命死矣、今也則亡、

【本意】此の問答は、雍也の篇の哀公との問答と同じ、但し其の對へに詳略の差あるは、哀公は、君なれば、委しく申さねばならず、季康子は、大夫なれば、問ひに應じて、相當の挨拶をせられたるなり、孔子對曰と改めて書きたるは、やはり先方の身分に對して、敬意を含みたるなり、

顏淵死、顏路請子之車以爲之椁、子曰、才不才、亦各言其子也、鯉也死、有棺而無椁、吾不徒行以爲之椁、以吾從大夫之後、不可徒行也、

【字解】顏路……顏淵の父なり、姓は顏、名は無繇、字は季路といふ、○椁……二重の棺の外側の棺なり、○鯉……孔子の子の名なり、字は伯魚といふ、○棺……二重の棺の內側の棺なり、○從大夫之後……大夫の次席に列なるなり、此の時、孔子衞より魯に反りて、復た仕へざりしかど、猶ほ國老の待遇を受けて、其の格式、大夫に次ぎたるなり、現に大夫の官職に在るにはあらず、○徒行……步行なり、

【本意】弟子の顏淵、死去せし時、家貧しくして、外側の棺を買ふこと能はざりしかば、父の季路、本意なく思ひて、孔子の乘らるゝ車を賣り拂ひて、其の代金にて、顏淵の外側の棺を拵へたき由、申し請ひしに、孔子のいはれけるは、「我れ人共に、子を持てば、其の子の才器あると才器なきとに拘はらず、銘々に其の子の事を口に出だしていふは、自然の愛情といふものなり、我が子の鯉の器量は、回に及ぶべくもあらねども、佞れの死去せし時に、やはり貧しくして、內側の棺のみありて、外側の棺なかりければ、吾れも、本意なく思ひたれども、吾れ步行して、車を賣りて、其の代金にて、鯉の外側の棺を拵へざりき、そは、吾が大夫の次席に列なりたるをもて、步行して出入せられぬが故なり、吾れは、常に回を我が子のやうに愛すれば、折角の所望を叶へたしとは思へども、今日とても、同樣の身分なれば、其の義ばかりは、承け引き難し」となり、

【本意】此の章は、私事をもて、公事を廢すべからざることを示されたるなり、

顏淵死、子曰、噫、天喪予、天喪予、

【字解】噫……力を落として發する聲なり、

【本意】弟子の顏淵、死去せし時、孔子大に力を落として、いはれけるは、「あゝ、是非もなきことよ、天は此の身を滅ぼされぬ、天は此の身を滅ぼされぬ」となり、其の意は、孔子既に老いて、政事に關係せらるゝことなく、唯ゝ顏淵を賴みにして、天下後世に先王の道を傳へむものをと思はれしに、それすら今は叶はぬことゝなりしかば、恰も己れの生命を天より奪ひ去られしやうに歎かれたるなり、

【本意】此の章は、顏回の死を悼まれたるなり、

顏淵死、子哭之慟、從者曰、子慟矣、曰、有慟乎、非夫人之爲慟、而誰爲、

【字解】哭……聲を揚げて泣くなり、○慟……泣き入るなり、○夫人……顏淵を指す、

【本意】弟子の顏淵、死去せし時、孔子悔みに往かれて、聲を揚げて、泣き哀みて、前後を忘却する程に、泣き入られければ、附き從ひたる人々、餘りの事に思ひて、「夫子は泣き入りたまへり」といへり、孔子始めて心付きて、「吾れは、左樣に泣き入りたることありや、彼の人の爲めに泣き入るにあらずして、何人の爲めに泣き入るべき、さても哀しきことなり」となり、

【本意】此の章も、前章と同じ、

顏淵死、門人欲厚葬之、子曰、不可、門人厚葬之、子曰、回也視予猶父、予不得視猶子也、非我也、夫二三子也、

【字解】門人……孔子は、常に己れの弟子達を稱して、二三子といへり、下文に二三子とあれば、此の門人は、孔子の弟子なり、一說に、顏回の弟子をいふといへるは、宜しからず、○視……取り扱ふなり、○非我也、夫二三子也……我れの所爲にはあらず、彼の弟子達の所爲なりといふことなり、一說には、非我也夫にて一句、二三子也にて一句なり、我れの强ひて止めざりしことを非難するならむか、他國に在る弟子達よ、と罪を己れに歸して、人を咎めぬなりといへり、

【本意】弟子の顏淵、死去せし時、孔子の弟子達、手厚くこれを葬らむと思ひしに、孔子のいはれけるは、「葬禮は、身分相應にすべきものなり、回の家は、貧しければ、殊更に手厚くするは、宜しからず」となり、されども、弟子達打ち寄りて、手厚くこれを葬りしかば、孔子のいはれけるは、「回は、常に予れを父のやうに取り扱ひて、鯉の死去せし時に、內側の棺ばかりにて見送りし如くにせむと思ひしかど、其のやうに取り扱ふことを得ざりけり、こは、我れの所爲にはあらず、彼の弟子達の所爲なり」となり、

【本意】此の章は、師弟の間といへども、情に流れて、理を枉ぐべからざることを示されたるなり、

季路問事鬼神、子曰、未能事人、焉能事鬼、敢問死、曰、未知生、焉能知死、

【字解】鬼神……對稱すれば、天には神といひ、人には鬼といふ、混稱すれば、人にも神といふ、故に下文には、鬼とのみあり、

【本意】弟子の季路、孔子に向ひて、鬼神に事へて、鬼神の心に通ずる仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「汝は、まだ人に事へて、忠孝を行ふこと能はざるに、何とて鬼神に事ふることを能くせらるべき、先づ能く人に事ふる仕方を學ぶべし」となり、季路又强ひて、人の死去せし後

の事を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「汝は、まだ生存中の事を知らざるに、何とて死去せし後の事を知らるべき、先づ能く人は如何にして生存すべきものなるかを學ぶべし」となり、是れは、季路の初めて孔子に見えたる頃の問答なるべし、

【言語】此の章は、孔子の教への平實なることを示されたるなり、

閔子侍側、誾誾如也、子路行行如也、冉有子貢侃侃如也、子樂、若由也、不得其死然、

【言語】閔子……閔子騫なり、○行行如……剛強なるさまなり、○子樂……孔子弟子達の各〻其の才を成せるを見て、悅び樂みたるなり、一說には、樂は、曰の字の誤まりならむといへり、されども、今は、本文の儘に從ふ、一本には、樂の字の下に曰の字あり、○不得其死然……然は、焉の如し、常命をもて終はることを得ざらむといふこゝなり、一說には、不得其死然と讀みて、然を推測の言葉とし、常命をもて終はることを得ざること然らむといふことなりといへり、

【説文】弟子の閔子は、孔子の側に侍座して、誾誾如として、中正なるさまなり、子路は、行行如として、剛強なるさまなり、冉有と子貢とは、侃侃如として、和ちぎ樂めるさまなりければ、孔子は、弟子達の各〻其の才を成せるを見て、悅び樂まれけり、さりながら、子路の勇敢なる氣象に就きては、他日我は禍に遇ふことをあらむかと氣遣はれて、「由の如き人物は、常命をもて終はることを得ざらむ」といはれて、穩め之れを戒められけり、

【言語】此の章は、孔子の人才を得られたることの盛んなることゝ、徒男の害あることゝを示されたるなり、

魯人爲長府、閔子騫曰、仍舊貫如之何、何必改作、子曰、夫人不言、言必有中、

【言語】魯長府……藏の名なり、貨財を藏むるを府といふ、寶藏を拵へ直したるなり、○仍舊貫……仍は、因るなり、貫は、事なり、舊事に因るは、有形の儘に手入れするなり、○夫人……閔子騫を指す、○中……道理に中たるなり、

【説文】魯の役人、長府といふ寶藏を拵へ直しけるに、弟子の閔子騫のいひけるは、「總べて拵へ直すといふことは、餘儀なき場合に限るなり、長府の如きは、有形の儘に手入れをせば、如何あるべき、多分それにて宜しかるむ、何とて是非とも改め作りて、民を役し、財を費やすことをせむ」となり、孔子此の言葉を聞きて、いはれけるは、「彼の人は、容易く物をいはねども、一たびいへば、屹度道理に中たるなり、如何にも長府は改め作るに及ばず、手入れだけにて然るべし」となり、

【言語】此の章は、閔子騫の卓見を譽められたるなり、

子曰、由之瑟、奚爲於丘之門、門人不敬子路、子曰、由也升堂矣、未入於室也、

【言語】瑟……琴に似たる樂器にして、二十五絃なり、○堂……表座敷なり、○室……奥座敷なり、

【説文】弟子の子路、瑟を彈ずること、殺伐にして、中和を得ざりければ、孔子のいはれけるは、「由の瑟の調子は、野鄙なれば、何とて己れの門下にて、彈ずまじきなり」となり、是れ其の勇氣の過ぎたることを戒められたるなり、孔子の弟子達、其の意を解せずして、子路を賤まれたるなりと思ひて、それより子路を敬はざりしかば、孔子は、更に子路を誉めて、いはれけるは、「由は、人の家に入りたる者に喩へむには、既に表座敷に升りて、其の表向きを知りたれども、まだ奥座敷に入ちずして、其の奥向きを知らぬ者といふべし、卽ち禮樂の極意には、まだ達せざれども、政事の仕方は、既に心得たる者なり、決して侮るべきにあらず」となり、

【言語】此の章は、子路を戒め、且つ子路の學問の進みたる程度を示されたるなり、

子貢問師與商也孰賢、子曰、師也過、商也不及、曰、然則師愈與、子曰、過猶不及、

【言語】師……子張の名なり、○愈……勝さるなり、

【説文】弟子の子貢、孔子に向ひて、「相弟子の師と商とは、孰れか賢く候ふ」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「師は、過ぎたり、商は、及ばず」となり、是れ、子張は、才氣に任せて、物事をやり過ごし、子夏は、謹み深くして、物事を控へ目にするが故に、孰れも道の中庸を得ざるなり、子貢は、之れを取り違へて、子張は子夏に過ぎたること、子夏は子張に及ばぬこと、合點して、「然らば、師は商に勝さり候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「さにあらず、道は、中庸を得ることを肝要とす、中庸を過り過ぎたるは、やはり中庸に屆き及ばぬやうなるものなり」となり、

【言語】此の章は、道は中庸を得るに在ることを示されたるなり、

季氏富於周公、而求也爲之聚斂而附益之、子曰、非吾徒也、小子鳴鼓而攻之可也、

【言語】周公……周公旦の子孫にして、時の天子の大臣なり、周公旦の事にはあらず、○聚斂……租稅を多く取り立つるなり、○附益之……富めるが上にも、之れを富ますなり、以上、季氏云々の十七字は、孔子の言葉なり、後の句の意味を強くせむが爲めに、子曰の字を其の下に廻はしたるなり、其の孔子の言葉たる證は、求也と名前を呼び棄てたるにても明かなり、記者の言葉と見るべからず、○吾徒……吾が仲間なり、○鳴鼓而攻之……攻め太鼓を鳴らして、冉求の罪を責め咎むるなり、

【説文】孔子、冉求を非難して、いはれけるは、「我が魯の大夫の季氏は、陪臣の身分にてありながら、天朝の大臣の周公よりも富みたるを、求は、其の執事となりて、人民を苦め、租稅を多く取り立て、富めるが上にも、之れを富ましたり、斯く不心得なる男は、最早我が仲間にあらざれ

は、汝等弟子達、攻め太鼓を鳴らして、求の罪を責め咎むるが宜しからむ」となり、

【字義】此の章は、冉求の過失を深く咎められたるなり、

柴也愚、參也魯、師也辟、由也喭、

【字義】柴……孔子の弟子なり、姓は高、名は柴、字は子羔といふ、衛の人なり、○愚……愚直なり、○魯……魯鈍なり、○辟……心の僻みたるなり、○喭……物事の殺伐なるなり、

【講義】孔子子羔と曾子と子張と子路との四人の弟子を評して、いはれけるは、「柴は、愚直にして、氣の利かぬ男なり、參は、魯鈍にして、物事の悟りの遲き男なり、師は、心の僻みて、素直ならぬ男なり、由は、物事の殺伐なる男なり」となり、是れは、孔子の内話にて、銘々の短處を直させむとの言葉なり、外に向ひて、惡しくいはれたるにはあらず、

子曰、回也其庶乎、屢空、賜不受命、而貨殖焉、億則屢中、

【字義】庶……道を得たるに近きなり、○屢空……毎度衣食の缺乏するなり、一說に、常に心を空虛にして、道を思ふなりといへるは、從ひ難し、○不受命……命を受けぬなり、即ち官祿を貪まぬなり、一說に、孔子の教命を受けぬなりといへるは、從ひ難し、○貨殖……身代をふやすなり、○億則屢中……物事の成敗を思ひ量れば、毎度見込みの中たるなり、一說に、經濟上の見込みの中たるなりといへるは、從ひ難し、貨殖の事を離れて解くべし、

【講義】孔子又顏回と子貢との二人を評して、いはれけるは、「回は、道を得たるに近からむか、爵命を受け、官祿を貪まぬが故に、毎度衣食の缺乏することあれど、樂めること、其の中に在りて、貧苦の爲めに、心を動かすことなし、賜も、回と同じく、爵命を受け、官祿を貪まねども、自ら上手に身代をふやすなり、且つ物事の成敗を思ひ量れば、毎度見込みの中たることあり、賜の富みを求むるは、回の道を樂むには及ばざれども、やはり賢き男なり」となり、前の四人の簡單なる評には、子曰の二字なけれども、人々の名を指されたるにて、孔子の言葉なることは、論なし、後の二人は、議論に涉りたるをもて、子曰を加へたり、彼れと此れとは、別時の言葉なれど、其の事柄の似寄りたるに因りて、結び合はせて一章とせるなり、

【字義】此の章は、弟子達の短處長處を評せられたるなり、

子張問善人之道、子曰、不踐迹、亦不入於室、

【字義】善人……管仲などの如き豪傑の士を指す、性質の善き人のことにはあらず、○不踐迹……先王の眞似をせぬなり、○不入於室……聖人の奧座敷には這入れぬなり、

【講義】弟子の子張、孔子に向ひて、善人の仕方を尋ねけり、善人とは、管仲などの如き豪傑の士を指せるなり、されば、孔子のいはれけるは、善人は、古先聖王の天下を經營せられたる眞似をせず、己れの器量を働かして、事業を創始することもあれば、其の腕前は、拔群なるには相違なけれども、古を師として道を行ふ聖人の奧座敷には這入れぬなり」となり、

【講義】此の章は、善人の仕方を論斷せられたるなり、

子曰、論篤是與、君子者乎、色莊者乎、

【字義】論篤是與……言論の篤實なる者に一味するなり、○色莊者……顏色の莊重なる者なり、

【講義】孔子のいはれけるは、「言論の篤實なるをもて、其の人を信じて、一味せむには、其の人、果たして言行一致の君子なるか、心と口と相違して、顏色ばり莊重なる者なるか、分からざるべし、言論の上のみにては、人を取られぬものなり」となり、此の章は、前章と共に一章となりたるを、後に分かちて、別章とせるなり、

【字義】此の章は、言說をもて、人を取るべからざることを示されたるなり、

子路問聞斯行諸、子曰、有父兄在、如之何、其聞斯行之、

【講義】弟子の子路、孔子に向ひて、「行ひて宜しきことゝ聞きたらば、何事にても、聞きたる儘に、之れを行ひ候はむか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「父も兄も居らるゝことなれば、一應相談せざるべからず、何とて自分一存にて、聞きたる儘に、之れを行ふべき」となり、

冉有問聞斯行諸、子曰、聞斯行之、

【字義】冉有、孔子に向ひて、「行ひて宜しきこと、聞きたらば、何事にても、聞きたる儘に、之れを行ひ候はむか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「其の通り、聞きたる儘に、之れを行ひ候へ」となり、

公西華曰、由也問、聞斯行諸、子曰、有父兄在、求也問、聞斯行諸、子曰、聞斯行之、赤也惑、敢問、

【講義】弟子の公西華、此の問答を聞きて、孔子に向ひて、いひけるは、「先頃、仲由は、行ひて宜しきこと、聞きたらば、何事にても、聞きたる儘に、之れを行ひ候はむか、と伺ひしに、父も兄も居らるゝことなれば、と仰せられき、然るに、其の後、冉求も、行ひて宜しきこと、聞きたらば、何事にても、聞きたる儘に、之れを行ひ候はむか、と伺ひしに、其の通り、聞きたる儘に、之れを行ひ候へ、と仰せられき、二人の伺ひたる事は、一つにて、御答へは、別々なれば、私は、不審に存じ候ふ、憚りながら、其の譯を押して伺ひ候ふ」となり、

子曰、求也退、故進之、由也兼人、故退之、

【字義】兼人……人に勝つなり、一人にて二人の勇氣を兼ぬる意味なり、

【講義】孔子のいはれけるは、「されば、求は、大事を取りて、二の足を踏む性分なれば、之れを引き立てゝ、進めたるなり、由は、人に勝つことを好む性分なれば、之れを抑へて、退けたるなり、由に求の謙遜を加味し、求に由の勇敢を加味せば、孰れも稍よき人物となるべし」となり、

子畏於匡、顔淵後、子曰、吾以女爲死矣、曰、子在、回何敢死、

【字釈】子畏於匡……事は、子罕の篇に見えたり、○後……後れて駈け付けたるなり、

【講義】孔子の匡人に圍まれし時、弟子の顔淵、後れて駈け付けたれば、孔子大に喜びて、「吾れは、汝が來らざるをもて、匡人と戰ひて、落命せりと思ひたるに、無事にて何より安心せり」といはれしに、顔淵のいひけるは、「萬一、夫子の御危難の場合もあらば、私は、必死になりて働き申すべけれども、夫子の御無事なる間は、私は、何とて強ひて一命を落とし候ふべき」となり、

【講義】此の章は、師弟の情の厚きことを示されたるなり、

季子然問、仲由冉求可謂大臣與、子曰、吾以子爲異之問、曾由與求之問、所謂大臣者、以道事君、不可則止、今由與求、可謂具臣矣、

【字釈】季子然……季氏の一族にして、季桓子の弟なり、○曾……乃なり、反りての意あり、○不可……道を行ふべからざるなり、○具臣……家來の數に備はるなり、

【講義】魯の大夫の季氏の一族の子然といふ者、仲由と冉求とを家來にしたるを恭に掛けて、孔子に向ひて、「此の兩人は、一國の大臣といはるゝ程の器量ありや」と尋ねけり、大夫の家來を大臣とは、不相應なることなれば、孔子のいはれけるは、「吾れは、御身を奇異なる事を尋ねらるゝ人なりと思ふなり、今少し尤らしき事を尋ねらるゝかと思ひしに、さはなくて、由と求とを大臣の器量ありやと尋ねられたるは、如何にも其の意を得ざるなり、世にいふ所の大臣とは、正しき道をもて、君に事へて、君を堯・舜たらしむる者なれば、君其の言葉を用ゐられずして、道を行ふべからざれば、祿位を辭して、其の職を止むるなり、今申されたる、由と求との如きは、家來の數に備はりたるまでにて、大臣たるべき者にあらざれば、只々銘々の役目を勤むるなり」となり、

曰、然則從之者與、子曰、弑父與君、亦不從也、

【字釈】從之……主人の命に從ふなり、

【講義】子然大に失望して、「然らば、二人は、何事にても、主人の命に從ひて、少しも背かざるべき者なるか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「二人は、大臣ならざれば、只々銘々の役目を勤むるのみなれど、若し季氏にして、君を弑し、父を弑する如き、惡事を企てられむには、やはり從はざるべし」となり、

【講義】此の章は、陰に季氏の不臣を責めて、仲由と冉求との志操を勵まされたるなり、

子路使子羔爲費宰、子曰、賊夫人之子、

【字釈】子羔……高柴の字なり、○費宰……季氏の領地の費といふ邑の代官なり、○賊……害ふなり、瑕物にするなり、○夫人之子……子羔を指す、

【講義】子路相弟子の子羔を取り持ちて、己れの主人の季氏の領地の費といふ邑の代官とならしめしに、孔子のいはれけるは、「由は、彼の人の子を瑕物にするならむ」となり、其の意は、子羔は、若輩にして、學問も未熟なれば、まだ役人になるには早し、若し失策せば、身に災を及ぼさむと氣遣はれたるなり、

子路曰、有民人焉、有社稷焉、何必讀書然後爲學、子曰、是故惡夫佞者、

【字釈】社稷……社は、土地の神、稷は、五穀の神なり、國を建つるには、必ず此の二柱の神を祭る、是れ人民の爲めに國土安穩、米穀豐穣を祈らむとてなり、故に社稷といへば、國家のことゝなる、○佞者……上手に物をいひ廻はす者なり、

【講義】子路孔子の言葉を聞きて、「夫子の御意は、子羔の學問未熟なる故と存じ候ふが、費の邑には、人民もあり、土地の神を祭りたる社も、五穀の神を祭りたる稷もあれば、民を治め、神に事ふることを、實地に習ふも、學問なりと存じ候ふ、何とて是非共書物を讀みたる上にて學問をすることゝ申すべき、學問は、書物を讀むに限りたるものとは覺え候はず」といひて、己れの子羔を取り持ちたるを辯護せしに、孔子のいはれけるは、「左樣なる事を申すが故に、吾れは平生彼の上手に物をいひ廻はす者を惡み嫌ふなり」となり、季氏は、大夫の身分にて、諸侯の如く社稷ありとすれば、是れ僭上なり、孔子の子路の言葉を悅ばれざるは、是れにても知らるべし、

【講義】此の章は、學問の未熟なる者の官途に就くは、宜しからぬことを示されたるなり、

子路曾晳冉有公西華侍坐、子曰、以吾一日長乎爾、毋吾以也、居則曰、不吾知也、如或知爾、則何以哉、

【字釈】曾晳……曾參の父なり、名は點といふ、晳は、其の字なり、○毋吾以也……吾が長じたる故をもて、對へ難しとすることなかれといふことなり、○居……常に居る時なり、○何以哉……如何なる心得をもて、國を治めむかといふことなり、

【講義】子路と曾晳と冉有と公西華との四人、孔子の側に侍座せしに、孔子のいはれけるは、「吾が年齢の、一日たりとも、汝等より長じたるをもて、遠慮することもあらむが、吾が長じたる故をもて、對へ難しとすることなかれ、さて、汝等は、常に居るときは、世間の人は、吾を知らぬと不平を唱ふるやうなるが、若し汝等を知れる人ありて、政事を執らすることあらば、汝等は、如何なる心得をもて、國を治めむか、銘々に思ふ所を遠慮なく述べて見よ」となり、

子路率爾而對曰、千乘之國、攝乎大國之間、加之以師旅、因之以饑饉、由也爲之、比及三年、可使有勇且知方也、夫子哂之、

【字釈】率爾……輕率なるさまなり、○千乘之國……千乘は、大國なれども、孔子の時に當たりては、齊・楚・晉・秦の如きは、更に數倍の大さあり、

故に下に大國の字あり、○攝……國と國との間に挾まりて、手足を抑へらるゝなり、○饑饉……饑は、米穀の出來ぬなり、饉は、野菜の出來ぬなり、○爲之……其の字にて、軍勢のことなり、○因……仍るなり、かさなるなり、○饑饉……饑は、米穀の出來ぬなり、饉は、野菜の出來ぬなり、○爲之……其の國を治むるなり、○比……頃と同じ、○方……義に向ふなり、○哂……微笑するなり、

【講】子路は、孔子の言葉を聞きて、他の三人を差し置きて、輕率に對へて、いひけるは、「今、事ある時には、兵車千乘を出だすべき、一諸侯の國ありて、更に之れより大なる國と國との間に挾まりて、師旅の軍勢を驅り催し、安き日とてはあらざるに、重ねて米穀も野菜も出來ぬ饑饉に遭ひて、上下一同、困難疲弊しつちむ時、若し其の君より私に政事を委任せられむには、私は、其の國を治めて、善政を行ひて、三年に及ばむ頃には、國民をして、勇氣あり、且つ義に向ふことを知らしめて、君の爲め、國の爲めには、一歩も跡へ退かず、戰へば勝ち、攻むれば取りて、今まで我れを苦めたる比鄰の國を辟易せしめむと存じ候ふ」といひければ、孔子之れを微笑せられけり、

求爾何如、對曰、方六七十、如五六十、求也爲之、比及三年、可使足民、如其禮樂、以俟君子、

【字】方六七十……六十里四方、又は七十里四方の小國なり、○如……或はなり、○五六十……五十里四方、又は六十里四方の最も小國なり、○足……衣食の足るなり、○俟君子……後の君子の手を待つなり、

【講】次ぎに孔子は、冉求に向ひて、「求よ、汝の見込みは如何」と尋ねられしに、冉有對へて、いひけるは、「私は、由のやうなる大望は、持ち候はず、僅かに地方の六七十里か、或は五六十里の小國の政事を委任せられたりむには、私は、其の國を治めて、三年に及ばむ頃には、人民の衣食を足らしめて、父母妻子を安穩に養はしめむと存じ候ふ、其の國の禮儀音樂などの如きは、私の及ばぬことに候へば、後の德ある君子の手を待ちて、之れを制作せしむべき積りにて候ふ」となり、

赤爾何如、對曰、非曰能之、願學焉、宗廟之事、如會同、端章甫、願爲小相焉、

【字】宗廟之事……諸侯の祖先の祭りの事なり、○會同……會は、諸侯の王化に從はざる者ある時、天子より之れを征伐せむが爲めに、多くの諸侯を召さるゝによりて、來朝して、勤を受くることなり、同は、天子は、十二年毎に、一たび四方の國々を巡らるゝ定めなるが、若し巡られぬ時は、天下の諸侯、悉く來朝することなり、○端章甫……端は、玄端の服にて、昔の禮服なり、章甫は、禮冠なり、諸侯の日々に朝廷を覲る時の冠服なり、○小相……君の禮を行ふ時に手助けをする者に大相、小相あり、小相といへるは、謙遜の言葉なり、

【講】次ぎに孔子は、公西華に向ひて、「赤よ、汝の見込みは何如」と尋ねられしに、公西華對へて、いひけるは、「私は、斯く申さばとて、自分に出來ることなりと申す譯には候はず、積古ながらに、勤めて見たき事の候ふ、そは、若し諸侯方にて、宗廟の御祭りの事あるか、或は諸侯の天子に見え奉る會同の事あらむ時、私を召し出ださるゝ諸侯あらば、身に玄端の禮服を着、頭に章甫の禮冠を戴きて、其の君の禮式を行はるゝ、大なる手助けとはならずとも、實めては、小さき手助けとなりて、君の身に無作法のなからむやうに注意したしゝ願ひ居り候ふ」となり、

點爾何如、鼓瑟希、鏗爾舍瑟而作、對曰、異乎三子者之撰、子曰、何傷乎、亦各言其志也、

【字】鼓……彈ずるなり、○希……對への仕方を考へて、瑟の音色のとぎれ〳〵になるなり、○鏗爾……瑟を手放したる音のからりと鳴ることなり、○舍……差し置くなり、○作……座を起つなり、長者に對する時は、座を起つが禮なり、此に作つとあれば、前の三人も、同樣にせしことを知るべし、○撰……具へなり、政をする膳立てなり、○何傷乎……何も遠慮に及ばぬなり、

【講】次ぎに孔子は、曾晳に向ひて、「點よ、汝の見込みは何如」と尋ねられしに、曾晳は、對への仕方を考へて、瑟を彈ずる音色もとぎれ〳〵になりしが、いつか思案の定まりたるものと見えて、からりと瑟を手放して、側に差し置きて、其の座を起ちて、敬禮して、「私の見込みは、只今御對へ申したる三人の政をする膳立てとは、全く違ひ候へば、申すも如何候はむ」と對へしに、孔子のいはれけるは、「何も遠慮に及ばぬなり、汝が對へも、亦銘々に其の志をいふまでのことなれば、思ふ通りに述べて見よ」となり、

曰、暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸、夫子喟然歎曰、吾與點也、

【字】暮春……三月の末なり、○春服……袷の著物なり、○冠者……二十歲以上の男子なり、男子は、二十歲にして、元服をして、冠を加ふ、○童子……十四五歲の男子なり、○浴乎沂……魯の城南の沂といふ川の流れにて、手足を洗ふなり、全身浴にはあらず、此の川は、孔子の宅に近し、○風乎舞雩……舞雩は、沂水の上に在る雨乞ひをする壇の名なり、壇の上には、樹木ありて、涼しければ、其の處にて、風に當たるなり、○詠……先王の道を吟詠するなり、

【講】曾晳孔子の催促を受けて、「然らば、愚意を申し述べ候はむ、三月の末にもならば、袷の支度も調ひて、そゝろ歩きの好時節となるべし、此頃に、五六人の若手と、六七人の子供とを誘ひ合はせて、城の南の沂水の邊に運動して、清き流れに手足を洗ひ、舞雩の壇に登り、樹木の蔭に休息して、風に當たりて、稍ゝ汗ばみたる熱氣をさまし、此の一日を餘念なく遊び暮らして、夕方に打ち連れ立ちて、先土の道を吟詠しつゝ、家路を指して歸りたし、是れ私の願ひにて候ふ」と對へければ、孔子喟然として、歎息して、いはれけるは、「それこそ何より結構なる望みなれ、吾れは、汝の仲間に入るべし」となり、是れ曾晳の他の人々のやうに、仕へを求むる心なく、靜かに德を養ひて、時を待てるを、嘉みせられたるなり、

三子者出、曾晳後、曾晳曰、夫三子者之言何如、子曰、亦各言其志也已矣、

【講義】是れにて、一順濟みければ、子路と冉有と公西華との三人は、其の座を退出せしが、曾晳だけは、跡に殘りたり、さて曾晳は、孔子に向ひて、「彼の三人の口上は、如何樣に思し召され候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「彼の三人も、亦銘々に其の志をいひたるまでにて、別に仔細はなきことなり」となり、

曰、夫子何哂由也、曰、爲國以禮、其言不讓、是故哂之、

【講義】曾晳又、「然らば、夫子は、何故に、由の言葉を笑ひたまひしか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「國を治むるには、禮儀を本とす、禮儀は、己れを謙りて、人に讓るを貴べり、然るに、由は、至難の國事を處することを、いと無雜作に言ひ放ちて、少しも謙讓する意なし、それ故に之れを笑ひたり」となり、

唯求則非邦也與、安見方六七十如五六十、而非邦也者、

【講義】唯求則非邦也與……唯は、獨なり、獨り冉求の口上のみは、國を治むることにあらざるかといふことなり、唯の字は、仲由を承けたる語勢なり、

【講義】曾晳孔子の由を笑はれたるは、國を治むることを遠慮なくいひたる故なりと誤解して、「然らば、獨り求の口上のみは、國を治むることにはあらざるか、求の口上とても、國を治むることなるべきを、由の方を笑ひたまひて、求の方を笑ひたまはぬは、合點のゆかぬことに候ふ」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「國には、大小の差こそあれ、何とて地方六七十里、或は五六十里もありて、國にあらざる者を見む、小國にても、國は國なり、されば、求の口上とても、勿論國を治むることなり」となり、

唯赤則非邦也與、宗廟會同、非諸侯而何、赤也爲之小、孰能爲之大、

【講義】小……小相なり、○大……大相なり、

【講義】曾晳は、まだ其の意を解せずして、「然らば、獨り赤の口上のみは、國を治むることにはあらざるか、赤の口上とても、國を治むることなるべきを、由の方を笑ひたまひて、赤の方を笑ひたまはぬは、合點のゆかぬことに候ふ」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「宗廟の祭りの事、天子に見え奉る會同の事は、諸侯の仕事にあらずして、何かあらむ、是れ皆諸侯の仕事なり、されば、赤の口上とても、勿論國を治むることなりさりながら、赤は、謙遜して、其の禮式の小さき手助けとなりたしといひけるは、感心なることなり、若し赤にして之れが小さき手助けとなりたらむには、何人か能く之れが大なる手助けとならむ、赤の右に出づべき者にはあらざるを」となり、斯く公西華の謙遜したる口上を譽められたるにて、丹有の小國の政事の對への無難なることは、知らるべく、隨ひて、子路の孔子に笑はれたるは、國を治むることにてはなく、其の口上の餘りに誇大なることなることも、說明を俟たずして、自然に解釋せられけり、

【講義】此の章は、四人の弟子の志を觀られたるなり、

顏淵第十二

顏淵問仁、子曰、克己復禮、爲仁、一日克己復禮、天下歸仁焉、爲仁由己、而由人乎哉、

【講義】克己復禮……克己は、身を約やかにするなり、復禮は、禮に反るなり、其の身を抑損檢束して、先王の禮法に立ち戻るなり、是れ古語なり、此の解釋に就きては、種々の說あり、中に就きて、最も黃く通じたるは、克己を己れに勝つと訓じ、身に嗜慾あれば、禮義をもて、之れを齊ふべし、嗜慾禮義と戰ふとき、禮義をして、其の嗜慾に勝たしむれば、身は禮に立ち戻ることを得といへる說より一轉して、禮は、人の本心に具はりたる者なれど、人欲の爲めに、破壞せらるゝことあれば、身の私欲に勝ちて、其の本心の禮に立ち戻るべきことなりといへり、然れども、此の如く、己の一字を身の私欲なりとするときは、下文の由己の己に至りて、窮せざることを得ず、故に今は、最初の解に從ふ、○爲仁……仁を行ふなり、下文の爲仁も同じ、○一日……一朝又は一旦といはむが如し、一說に、僅かに一日間たりともといふことなりといへるは、宜しからず、○由己……己れに在るなり、

【講義】弟子の顏淵、孔子に向ひて、仁を行ふ仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「古語に、克己復禮とて、其の身を抑損檢束して、先王の禮法に立ち戻るといふことあり、是れ仁を行ふことなり、此の行ひを缺きたる者も、一旦奮然として、志を改めて、能く其の身を抑損檢束して、先王の禮法に立ち戻るときは、天下の人々、過去の過失を咎めずして、皆其の仁に歸服するものなり、されば、仁を行ふことは、己れ一人の上に在るべし、他人の之れを行ふと行はざるとに拘はるべきことならむや」となり、

顏淵曰、請問其目、子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、

顏淵曰、回雖不敏、請事斯語矣、

【講義】目……箇條なり、○動……行ふなり、○不敏……行き屆かぬなり、○事斯語……事は、仕事とするなり、斯語は、克己復禮の古語を指す、

【講義】顏淵之れを會得して、「何卒之れを實行する箇條を伺ひたく候ふ」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「先王の禮法に叶はぬ事は、決して目に視ぬやうにせよ、先王の禮法に叶はぬ事は、決して耳に聽かぬやうにせよ、先王の禮法に叶はぬ事は、決して口にいはぬやうにせよ、先王の禮法に叶はぬことは、決して身に行はぬやうにせよ、其の身を抑損檢束して、先王の禮法に立ち戻る手段は、此の如し」となり、顏淵聞きて、いひけるは、「私は、行き屆かぬ者に候へども、何卒只今仰せられたる克己復禮の古語を平生の仕事として、實行したしと存じ候ふ」となり、

【講義】此の章は、仁の仕方は、克己復禮に在ることを示されたるなり、

仲弓問仁、子曰、出門如見大賓、使民如承大祭、己所不欲、勿施於

人、在邦無怨、在家無怨、仲弓曰、雍雖不敏、請事斯語矣、

【字解】出門……己れの家の門を出でて、公卿に事ふるなり、○大賓……公侯の大客なり、○承大祭……天神地祇の大祭を奉行するなり、○在邦……諸侯に仕ふるなり、○在家……卿大夫に仕ふるなり、○施……仕向くるなり、○斯語……出門以下の十二字と己所不欲以下の八字との二つの古語を指す、

【大意】弟子の仲弓、孔子に向ひて、仁を行ふ仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「古語に、己れの家の門を出でて、公卿の人々に事ふるには、公侯の大客に面會するやうにし、人民を使役するには、天神地祇の大祭を奉行するやうにすべしといふことあり、是れ敬なり、又古語に、己れの人より仕向けらるゝことを欲せざる事柄は、人に仕向けぬやうにせよといふことあり、是れ恕なり、敬は、仁を行ふ本にして、恕は、仁を行ふ要なり、敬恕の二つを體すれば、邦に在りて、諸侯に仕へても、人の怨みを受くることなし、家に在りて、卿大夫に仕へても、人の怨みを受くることなし、是れ仁を行ふ結果なり」となり、仲弓聞きて、いひけるは、「私は、行き屆かぬ者に候へども、何卒只今仰せられたる此の二つの古語を平生の仕事として、實行いたしと存じ候ふ」となり、

【要義】此の章は、仁の仕方は、敬、恕に在ることを示されたるなり、

司馬牛問仁、子曰、仁者其言也訒、曰、其言也訒、斯謂之仁矣乎、子曰、爲之難、言之得無訒乎、

【字解】司馬牛……孔子の弟子なり、姓は犂、字は子牛といふ、宋の人なり、輕躁にして、多言なる男なりとぞ、○訒……言葉の澁るなり、

【大意】弟子の司馬牛、孔子に向ひて、仁を行ふ仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「仁を行ふ者は、其の口上の澁るものなり」となり、是れ其の輕躁にして、多言なるを戒められむとの意なり、司馬牛之れを合點せずして、「其の口上の澁るを、仁を行ふ仕方といはるべく候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「仁を行ふことは、むづかしきものなれば、仁をいふことも、澁ることなきことを得むや、之れを行ふことのむづかしきことを思はゞ、容易く口外せらるまじきなり」となり、

【要義】此の章は、仁の仕方は、訒に在ることを示されたるなり、以上三人に對する答への同じからざるは、其の人々に相應したる教訓を施されたるなり、

司馬牛問君子、子曰、君子不憂不懼、曰、不憂不懼、斯謂之君子矣乎、子曰、內省不疚、夫何憂何懼、

【字解】內省不疚……內に自ら省み察して、氣に懸かることなきなり、內は、外に對していふ、

【大意】弟子の司馬牛の兄の桓魋といふ者、亂を宋に作さむとせしかば、司馬に魯に在りて、孔子の門に學びながら、常に罪過の己れに及ばむことを心配せり、されば、孔子に、君子とて、德ある人の心得方を尋ねし時、孔子は、之れを慰め解かむとて、いはれけるは、「君子は、物事を憂へ

悶えず、沮み懼れぬものなり」となり、司馬牛之れを合點せずして、「物事を憂へ悶えず、沮み懼れざるのみにて、之れを君子といはるべく候ふか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「我が身の行ひ正しくして、內に自ら振り返り見て、氣に懸かることなからむには、何をか憂へ悶ゆることあらむ、何をか沮み懼るゝことあらむ」となり、

【要義】此の章は、君子は無用の心配をせざるものなることを示されたるなり、

司馬牛憂曰、人皆有兄弟、我獨亡、子夏曰、商聞之矣、死生有命、富貴在天、君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之內、皆兄弟也、君子何患乎無兄弟也、

【字解】亡……無と同じ、○死生有命、富貴在天……命と天とは、互文なり、通じていへば、死生も、富貴も、天命なり、但し、命といへば、有りといひ、天といへば、在りといふ、用語の差別あるを見るべし、○敬而無失……身を慎みて、過失なきなり、○四海之內……漢土の全國を指す、天下といふに同じ、國の四方は、海なるが故に、天下のことを、四海之內とも、海內ともいふ、

【大意】弟子の司馬牛、孔子の教訓を受けしかど、猶ほ其の兄の遠からず身を喪はむことを憂へて、「世間の人は、皆兄弟を持ちたれど、唯だ我れのみは、兄弟なきも同樣なり」とかこちければ、相弟子の子夏、又之れを慰めて、いひけるは、「己れの德に聞き及びたる古語に、死ぬるも、生くるも、天命なり、富貴になるも、天命なりといふことあり、されば、其の身の死生富貴は、天命次第と明らめて、己れは、己れの務むべき事を勉むべし、君子とて、德ある人は、身を慎みて、過失なく、人と交はるに、恭しくして、禮あらば、四海の內の人々は、皆兄弟の如く、親しくなるべし、さらば、君子は、何とて兄弟なきことを悲ふべき」となり、

【要義】此の章は、君子は敬なるときは、人に親まるゝことを示されたるなり、

子張問明、子曰、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂明也已矣、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂遠也已矣、

【字解】明……知識の明かなるなり、○浸潤之譖……浸潤は、水の物にいつとなく浸み込むやうに、そろ〳〵と人の行ひを毀るは、惡口の巧みなるものなり、○膚受之愬……膚受は、身の上皮に害を受くることなり、愬は、己れの無實を訴ふることなり、身の上皮に害を受けたる如き己れの無實を訴ふるは、不平の淺きものなり、一說には、膚受は、利害の我が身に迫るやうに火急なることなりといへり、されども、膚の字は、淺薄の意味に解するかた、然るべし、○遠……思慮の遠きなり、德行の高遠なること、解せるは、的切ならず、

【大意】弟子の子張、孔子に向ひて、人の上に立ちて、知識の明かなることを尋ねしに、孔子のいはれけるは、「上たる人は、其の輩下より、或は他人の行ひを毀り、或は自己の無實を訴ふることを聞くものなり、他人の行ひを毀ることを取り上ぐまじきは、何人も知れることなれど、水の

物にいつとなく浸み込むやうに、そろ〳〵と持ち掛けらるゝ惡口には、うかと乘るものなり、又自己の無實を訴ふること〳〵は、取り上げぬといふ譬にはゆかねども、身の上皮に害を受けたる如き手薄なる不平までを取り上ぐるときは、際限もなきものなり、されば、聖下の上手なる惡口、些細なる不平の取り上げられずして、物にならぬが、上たる人の知識の明かなるものといふべし、實に知識の明かなるのみならず、思慮の遠きものといふべし」となり、

評論 此の章は、人の上たる者は、物に敵はるまじきことを示されたるなり、

子貢問政、子曰、足食足兵、民信之矣、

講義 弟子の子貢、孔子に向ひて、政事の仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「衣食は、民の本なれば、租稅を輕くし、桑を勸めて、衣食を滿足せしむべし、兵備は、國の固めなれば、武具を審へ、士卒を練りて、兵備を滿足せしむべし、さて、此の如くにして、命令を確實にして、人民を足せしむべし、兵備は、國の固めなれば、武具を審へ、士卒を練りて、兵備を滿足せしむべし、さて、此の如くにして、命令を確實にして、人民をして、上を信ぜしむるが、政事の仕方の大要なり」となり、

子貢曰、必不得已而去、於斯三者何先、曰、去兵、子貢曰、必不得已而去、於斯二者何先、曰、去食、自古皆有死、民無信不立、

講義 子貢又、「衣食を滿足せしむること〳〵、兵備を滿足せしむること〳〵、人民をして、上を信ぜしむること〳〵は、皆大切の事なるべけれども、若し是非共、餘儀なき事情ありて、此の三箇條の一つを除き去らむ場合には、何を真先に除き去るべし」となり、子貢又、「其の上にも、若し餘儀なき事情ありて、此の三箇條の一つを除き去らむ場合には、「さる場合には、兵備を除き去るべし」となり、孔子のいはれけるは、「さる場合には、衣食を除き去るべし、衣食なければ、命を保ち難けれど、昔何を真先に除き去り候はむか」と尋ねしに、孔子のいはれけるは、「さる場合には、何人も、生あれば、死あるに極まりたるものなれば、死は慣るゝに足らぬなり、唯一命令確實ならずして、上たる者に信なきときは、人民は、一日も立ち行き難きものなれば、信は、最後に至るまで、除き去られぬものなり」となり、

評論 此の章は、政事は、信を第一とすべきことを示されたるなり、

棘子成曰、君子質而已矣、何以文爲、子貢曰、惜乎夫子之說君子也、駟不及舌、文猶質也、質猶文也、虎豹之鞟、猶犬羊之鞟、

講義 棘子成……衛の大夫なり、○質……孝弟忠信の如き實質なり、○文……詩書禮樂の如きか飾なり、○夫子之說君子也……棘子成は、大夫なれば、指して夫子と呼べり、先生の君子の事を說かれたるはといふことなり、一說に、夫子之說を一句とし、君子也を一句として、先生の言葉は、君子の意なりといふことなりといへるは、非なり、○駟不及舌……四匹立ちの馬車にて、追ひ掛けても、一たび舌の先より出でたる言葉には、追ひ付かれぬなり、○文猶質也……文飾の必要なることは、實質のみを存せむには、君子と小人との差別なきこと、虎又は豹は、文飾の必要なるが如きなり、○質猶文也……實質の必要なることは、實質の必要なるが如きなり、○虎豹之鞟、猶犬羊之鞟……鞟は、毛を去りたる皮なり、虎又は豹の毛を去りたる皮なり、犬又は羊の毛を去りたる皮の如きなり、○衛の大夫の棘子成、當時の人の文飾に勝ちたるを疾みて、孔子の弟子の子貢に向ひて、いひけるは、「君子とて、德ある人は、孝弟忠信の如き實質あるのみなり、何とて詩書禮樂の如き文飾を用ゐることをせむ、文飾は、無用のものなり」となり、子貢之れを非難して、いひけるは、「さても殘念なることよ、先生の君子の事を說かれたるは、四匹立ちの馬車にて追ひ掛けても、一たび舌の先より出でたる言葉には、追ひ付かれぬものなれば、今更先生の失言を取り返し難し、先生は、文飾の用なしといはれたれど、文飾の必要なることは、實質の必要なるが如く、實質の必要なることは、文飾の必要なるが如し、若し盡く文飾を去りて、實質のみを存せむには、君子と小人との差別なきこと、虎又は豹の毛を去りたる皮の、犬又は羊の毛を去りたる皮の如くに見ゆると同じからむ、毛色の文采は、虎豹の貴き所以なることを推して知らるべし」となり、

評論 此の章は、文と質との等しく必要なることを示されたるなり、

哀公問於有若曰、年饑用不足、如之何、有若對曰、盍徹乎、曰、二吾猶不足、如之何其徹也、對曰、百姓足、君孰與不足、百姓不足、君孰與足、

講義 有若……有子なり、此に有若といへるは、哀公は君、有若は臣なれば、尊卑の分を表したるなり、○盍……何不の二義を兼ぬ、○徹……田地の物成りの十分の一を取る稅法なり、徹は、取るなりとも、通ずるなりとも解せり、取るなりといへば、物を取ることなり、通ずるなりとへば、天下の通法のことゝもなり、人民の力を借りて、上の田地を耕さしむること、もなるなり、委しき事は、孟子の條の文公の上篇に見えたり、○二……十分の二を取るなり、○百姓……人民なり、天下の民は、皆族姓あるが故に、百姓といふ、百は、大數なり、

講義 魯の哀公、孔子の弟子の有若に向ひて、「近年饑饉打ち續きて、人民の租稅も、思ふやうに納まらざれば、國用に不足を生じたり、如何樣にせば、宜しからむ」となり、哀公の意は、手元の費用の足らざることなるを、有若は、人民を救ふ費用の足らざること、心得て、對へけるは、「左樣に候はゞ、何故に、昔の徹法の如く、田地の物成りの十分の一を取りたまひて、人民の負擔を輕くしたまはざるか」となり、哀公案に相違して、いはれけるは、「今日は、昔と違ひて、物入りも多ければ、十分の二を取りてすら、吾れは猶ほ不足なるを、何とて昔の徹法の如く、十分の一に減ぜらるべき」となり、有若始めて其の意を悟りて、對へけるは、「君と民とは、一體のものに候ふ、百姓の衣食滿足せむには、君は何人と共に滿足したまはぬことあるべき、之れに反して、百姓の衣食滿足せざるときは、卽ち君の貧しきなり、民の富めるは、卽ち君の富めるなり、稅を薄くし、民を富ますは、今日の急務にて候ふ」となり、

評論 此の章は、民は國の本なれば、君たる者は、民を愛すべきことを示されたるなり、

子張問崇德辨惑、子曰、主忠信、徙義、崇德也、愛之欲其生、惡之欲其死、既欲其生、又欲其死、是誠不以富、亦祇以異、

其死既欲其生又欲其死是惑也

【字解】崇德……己れの德を段々に高く積み上ゞるなり、卽ち德を明かにすることなり、○辨惑……心の惑ひを見分くる仕方とを尋ねしに、孔子のいはれけるは、「忠を見れば、勇みて従ひ從ふなり、

【講義】弟子の子張、孔子に向ひて、己れの德を段々に高く積み上ゞる仕方と、心の惑ひを見分くる仕方とを尋ねしに、孔子のいはれけるは、「忠と、己れの誠を推して、人に深切を盡くすこと、信とて、信實にして、虛言を吐かぬこと、を主眼として、義を見れば、勇みて従ひ從ふが、己れの德を段々に高く積み上ゞる仕方なり、又己れの心に叶ひたる時は、之れを愛して、其の人の長生きせむことを欲し、己れの氣に入らぬ時は、之れを憎みて、其の人の早死にせむことを欲す、既に其の人の長生きせむことを欲しながら、又其の人の早死にせむことを欲するは、是れ心の惑ひといふものなり、人に定見なきときは、一時の愛憎によりて、心の惑ふものなれば、能く其の場合を勘考するが、惑ひを見分くる仕方なり」となり、

誠不以富亦祇以異

【講義】此の二句は、季氏の篇の齊景公有二馬千駟一の章に在るべきを、誤まりて此に入りたるものなれば、其の條に至りて說明すべし、

【講義】此の章は、「己れの德を段々に高く積み上ゞる仕方と、心の惑ひを見分くる仕方とを示されたるなり、

齊景公問政於孔子孔子對曰君君臣臣父父子子公曰善哉信若君不君臣不臣父不父子不子雖有粟吾得而食諸

【字解】景公……名は杵臼といふ、景は、其の諡なり、

【講義】孔子の齊へ往かれし時、其の君景公、政事の仕方を孔子に尋ねられしに、孔子對へて、いはれけるは、「政は、君臣の間より出づるものなれば、君は君たる道を盡くし、臣は臣たる道を盡くすべきことに候ふ、政といふ中には、教へも補もりて、教へは家より起こるものなれば、父は父たる道を盡くし、子は子たる道を盡くすべきことに候ふ、此の如く、君も、臣も、父も、子も、能く其の道を盡くすときは、國の治まるものなれば、政事の仕方は、此の外に出づることなく候ふ」となり、是れ齊國の時弊に就きて、對へられたる言葉なり、景公大に感服して、いはれけるは、「さても、善き言葉なるよ、實際に若し君は君たる道を盡くさず、臣は臣たる道を盡くさず、父は父たる道を盡くさず、子は子たる道を盡くさずんらむには、國は必ず亂るべければ、たとひ食ふべき米粟ありといふとも、吾れ安心して之れを食ふことを得むや、決して之れを食ふことを得ざるべし」となり、されども、景公孔子の言葉を用ゐられざりければ、其の後、果たして陳氏に國を奪はれき、

【講義】此の章は、政事の仕方は、人倫を正しくするに在ることを示されたるなり、

子曰片言可以折獄者其由也與

【字解】片言可以折獄……片言は、一言なり、折は、決定するなり、獄は、訴訟なり、原告も、被告も、子路の一言を聽きて、訴訟の是非を決定することとなり、原告又は被告の中の一方の陳述を聽きて、其の曲直を子路の判斷せしことにはあらず、一說には、片言は、半言なり、子路の言葉のまだ畢はらぬ中に、服從することなりといへり、

【講義】孔子のいはれけるは、「訴訟の事は、互に勝負を爭ひて、容易く落着せざるものなるが、原告も、被告も、唯だ一言の裁判を聽きて、其の理に服して、訴訟の是非を決定するは、獨り由の裁判官たる場合のみならむか、他の人々の裁判にては、決してさることあらざるべし」となり、是れ子路の正直にして、私なきこと、世に知られたるをもて、其の一言に甘んじて、皆滿足して、引き下がりたることを譽められたるなり、

子路無宿諾

【字解】無宿諾……宿は、躊躇といはむが如し、諾は、受け合ふなり、大事を取りて、前方に物を受け合ふことなきなり、一說には、宿は、留むるなり、言葉を躊躇に急にして、引き受けたる事を留め置かぬなりといへり、今は、前の解に從ふ、

【講義】弟子の子路は、自ら信ずること篤くして、一旦引き受けたる事は、必ず果たす氣象なれば、常に大事を取りて、前方に物を受け合ひたることとなし、是れ、其の時に臨みて、意外の故障あらむことを氣遣ひてなり、此の一節は、前節に孔子の子路の言葉の誠實なることを譽められたるに因みて、記者其の平生の人となりを併はせて記したるなり、故に、上には、由といひ、此には、子路といへり、

【講義】此の章は、子路の思信なることを示されたるなり、

子曰聽訟吾猶人也必也使無訟乎

【字解】聽訟……人民の訴訟を裁判するなり、○猶人……人と同じやうなるなり、○必也使無訟乎……屹度訴訟を起こすことなからしめむかといふことなり、上に必とありながら、下に乎の字を置きて、不定の意味を含めるは、謙遜したる言葉にて、實は起こさせざることを斷言せるなり、

【講義】孔子のいはれけるは、「人民の訴訟を聽きて、其の曲直を裁判するは、吾れとても、人の如くに、十人並の仕事をするまでにて、變はりたる手段はなけれども、吾れ若し民を治むる地位に立たむには、己れの誠を衆人に推し及ぼして、屹度訴訟を起こすことなからしめむか」となり、

【講義】此の章は、政事の根本を示されたるなり、

子張問政子曰居之無倦行之以忠

【字解】居之……政事を行ふ地位に居るなり、

【講義】弟子の子張、孔子に向ひて、政事の仕方を尋ねしに、孔子のいはれけるは、「政事を行ふ地位に居て、倦み懈ることなく、政事を施し行ふには、己れの誠を推して、人に深切を盡くすことを、眼目とすべし」となり、

【講義】此の章は、政事の仕方は、勉强と深切とに在ることを示されたるなり、

子曰博學於文約之以禮亦可以弗畔矣夫